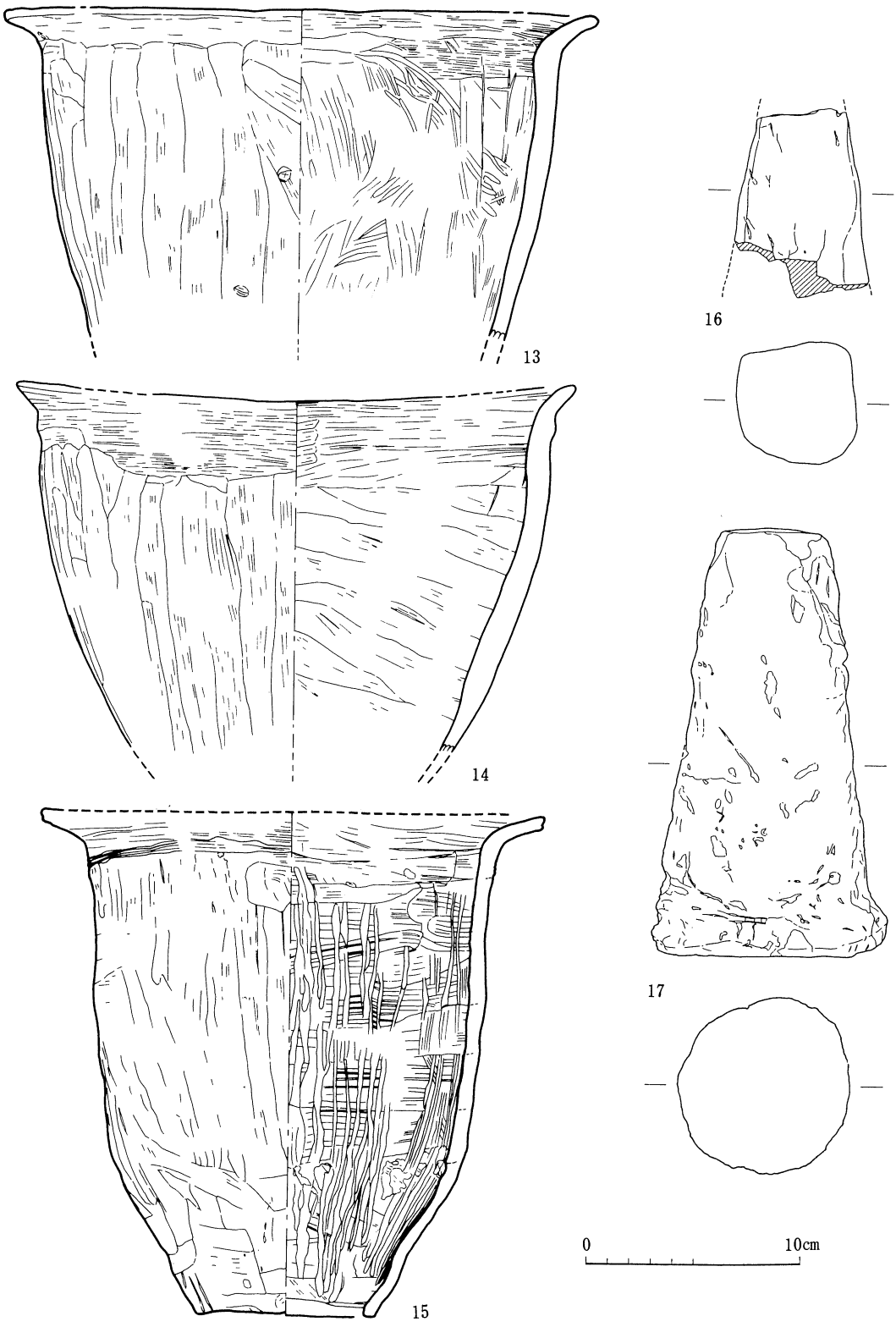
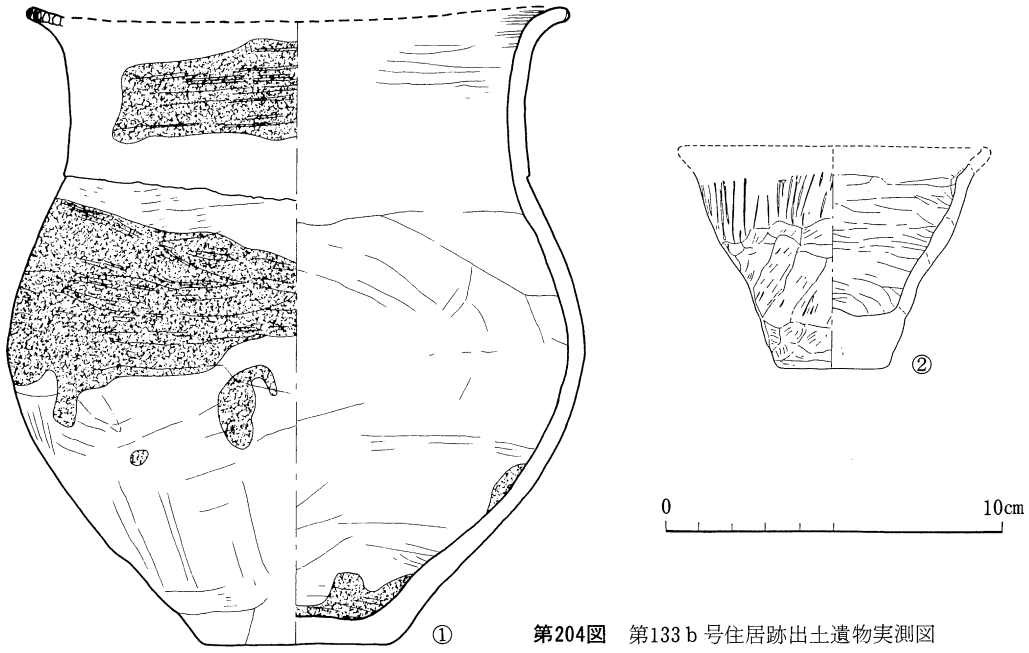


第203図　第133ａ号住居跡出土遺物実測図(13～17)

第93表　第133ａ号住居跡出土遺物観察表（２）

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図2014	a.(高坏) b.カマド左側床面 c.脚部のみ	脚小径(4.9)	d.小礫２㎜以下を多く含む e.少し不良	柱状を呈する脚部。	脚下位＝横ナデ少し有る。 脚部＝ヘラケズリ 〈色調〉暗褐色	脚下位＝横方向のヘラナデ 脚部＝ヘラケズリダシ 〈色調〉淡褐色
図2015	a.(鉢) b.P３付近 c.全体の１/４	口径(14.35) 体部最大径13.4 器高10.4	d.緻密 e.少し不良	丸底で、体部は、椀状を呈する。口縁部は、直立し、上位でわずかに外反する。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 〈色調〉淡褐色、一部黒褐色	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラミガキ 〈色調〉淡褐色
図2016	a.鉢 b.P２付近床 c.口縁部を10%欠損	口径12.4 体部最大径13.3 底径5.8 器高9.2	d.緻密 e.少し不良	平底で、体部は、球状にちかい形を呈し口縁部は、やや内傾する。	全体に少し摩耗する。 口縁部＝横ナデ 体部上位＝縦方向ヘラケズリ 下位＝横方向ヘラケズリ 〈色調〉淡褐色、一部黒褐色	口縁部＝横ナデ、剝離が多い 体部＝ヘラナデ 〈色調〉黒褐色、一部淡褐色
図2017	a.須恵器坏身 b.カマド付近 c.口唇部を30%欠損	口径10.4 口縁部稜径12.8 器高4.7	d.砂粒を極少量含む e.普通	丸底で、小型の、椀状を呈し、口縁部に稜をもち、高さ７㎜のかえりが有る。	底部に回転ヘラケズリが４段なされる 〈色調〉両面とも灰褐色	
図2018	a.(鉢) b.P３付近床 c.全体の１/３	口径(18.0) 底径(7.4) 器高(7.1)	d.緻密 e.普通	平底で、体部は、椀状に大きく立ち上がる。	口縁部＝横ナデ一部は斜め 体部＝ヘラナデとヘラミガキ 底部＝ヘラケズリ 〈色調〉黒褐色、茶褐色	全面＝横方向のヘラミガキ 〈色調〉淡褐色
図2019	a.(甕) b.カマド前面床直 c.底部付近のみ１/４	孔径(9.6)	d.小礫２㎜以下を少量含む e.少し良好	孔は、大きめで、体下位は、弧を描いて開いて立ち上がる。	胴下位＝縦及び横方向のヘラケズリ 〈色調〉黒褐色、淡褐色	胴下部＝ミガキにちかいヘラナデ 胴下位＝ヘラケズリ 〈色調〉茶褐色一部淡褐色
図2020	a.(高坏) b.カマド付近 c.坏部のみ90%残存	口径21.7	d.小礫２㎜以下を少量含む e.普通	体部は、大きく開き口縁部は、稜をもち、開く。 やや大型である。	口縁部＝横方向のヘラナデ 体部＝ミガキにちかいヘラナデ 〈色調〉暗褐色、一部淡茶褐色	口縁部＝横ナデの後、横方向のヘラナデ 体部＝各方向のヘラミガキ 全体に少し摩耗 〈色調〉暗褐色、一部淡褐色
図2021	a.(高坏) b.カマド付近 c.脚部のみ70%残存	脚下端径14.5 脚小径6.0	d.砂粒を少量含む e.少し不良	器高の高い脚部で、八の字状に下方は開いている。	脚上位＝縦方向のヘラナデ 脚部＝縦方向のヘラミガキ 脚下位＝横ナデ 〈色調〉両面とも暗褐色、一部黒褐色、淡褐色	脚部＝ヘラケズリダシの後指ナデ 脚下位＝横ナデ
図2022	a.甕 b.カマド内 c.全体の90%の残存	口径14.8 体部最大径13.35 底径5.2 器高15.4	d.緻密 e. 少し不良	平底で、体部最大径は、中位にあり、体上位は、直立し、口縁部は、外反する。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 摩耗が多い 〈色調〉暗褐色、一部淡褐色	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラナデ 〈色調〉黒褐色、暗褐色、一部茶褐色
図2023	a.(甕) b.カマド内 c.全体の１/２底部欠損	口径(27.6)	d.砂粒を少量含む e.普通	胴部は、少し丸みをもって開き、口縁部は、小さく横方向に外反する。	口縁部＝ヘラ横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 粘土紐痕が２ヶ所認められる 〈色調〉淡褐色、一部黒褐色	口縁部＝横ナデ及びヘラナデ 胴部＝横方向ヘラナデの後指ナデの後、ヘラミガキ 〈色調〉黒褐色、一部淡褐色
図2024	a.(甕) b.カマド左側床面 c.胴下半を欠損70%	口径(26.0)	d.小礫２㎜以下を少量含む e.やや良好	胴部は、やや丸みをもって開きぎみに立ち上がり、口縁部は部分的にふくらみをもち、直立する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラケズリ 〈色調〉淡褐色、暗褐色、一部黒褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝横方向のヘラナデ 〈色調〉茶褐色、一部黒褐色
図2025	a.(甕) b.カマド付近 c.全体の70%の残存	口径(23.5) 孔径(8.4)	d.砂粒を少量含む e.やや良好	大きめの孔をもち、胴部は、逆八の字状に開いた後、上位は丸みをもって立ち上がり、口縁部は、横方向に屈曲する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 摩耗が多い 〈色調〉は、14と同様	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデの後、縦方向のヘラミガキ 〈色調〉14と同様

No.16は土製支脚で、上端ほど細くなる方柱状で、中位のみの残存である。色調は褐色である。No.17の土製支脚も、上端ほど細くなる円柱状で、完形である。大きさは、長さ23cm、上端径4.5cm、下端径11.0cmを計る。色調は淡橙褐色である。両者とも胎土は、細砂粒を含む。



第204図　第133ｂ号住居跡出土遺物実測図

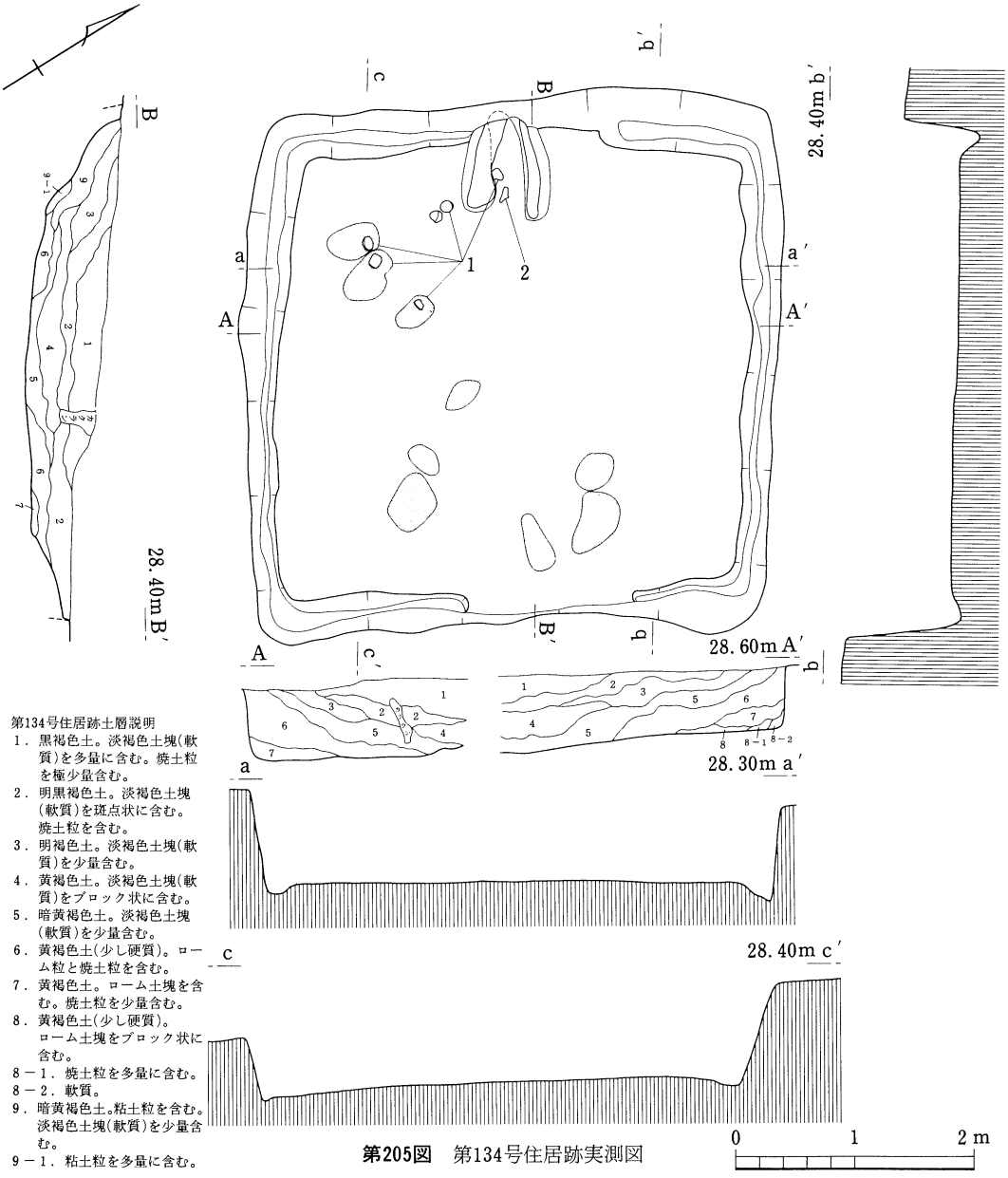
（36）第133ｂ号住居跡

第133ａ号住居跡にプランの北側大半を切られており、南側の一部が残存するのみである。平面形体は、胴張りの隅円長方形と推定され、規模は、短軸4.20ｍ以上、長軸は、1.20ｍの長さのみ残っている。主軸方位は、第133ａ号住居跡と同様でＮ－12°－Ｗを示すと考えられる。壁の立ち上がりは、最大で65㎝を測る。床面は、第133ａ号住居跡の床面レベルとほとんど同じレベルである。壁溝は、認められない。床面内のピットは、２本検出され、P_6は、不整長円形を呈し、南側壁近くの床面に存在し、P_7は、隅円方形を呈し、南東側壁近くの床面に存在し、いわゆる貯蔵穴とも推定される。竪穴の覆土は、褐色土が主体で、中にローム土塊を多く含んでおり、人為的な埋めもどしがうかがえる。また、炉跡なども検出されていない。出土遺物は、南側床面より、甕と鉢が検出されている。

第94表　第133ｂ号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図204 1	a.(甕) b.南側床面 c.全体の 2/3	口径21.5 頸部径18.2 胴部最大径 22.9 底径7.4 器高24.35	d.緻密 e.少し不良	平底で、胴部最大径は、中位に有り、頸部は直立し、粘土紐接合痕が一条存在する。口縁部は、上位で外反し、口唇部は波状口縁である。	口唇部＝竹管状工具による押圧による波状 口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデ 下位＝横方向ヘラケズリ一部に煤が付着する 〈色調〉淡褐色、黒褐色	口縁部＝指横ナデ 胴部＝ヘラナデの後、指ナデ 〈色調〉褐色、一部暗褐色
図204 2	a.(鉢) b.南側床面 c.全体の 1/3	口径(12.5) 底径4.4 器高8.8	d.砂粒を少量含む e.普通	平底で、器厚が有り、体部は、逆ハの字状に直線的に開いて立ち上がる。	ヘラ状工具による条線が有り、全面ともヘラナデの後指オサエ痕が認められる 〈色調〉褐色、黒褐色	全面＝横方向のヘラナデ 〈色調〉淡茶褐色、一部暗褐色

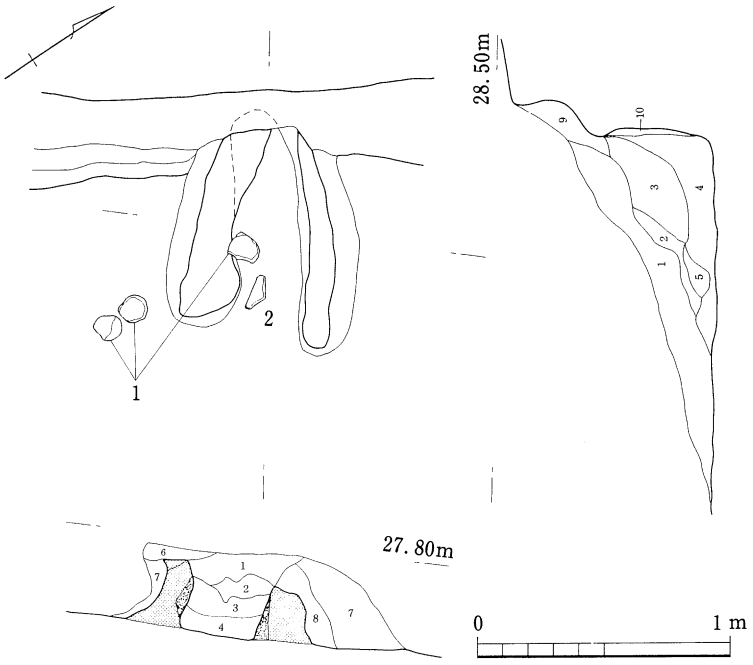
（37）第134号住居跡



第134号住居跡土層説明
1．黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)を多量に含む。焼土粒を極少量含む。
2．明黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)を斑点状に含む。焼土粒を含む。
3．明褐色土。淡褐色土塊(軟質)を少量含む。
4．黄褐色土。淡褐色土塊(軟質)をブロック状に含む。
5．暗黄褐色土。淡褐色土塊(軟質)を少量含む。
6．黄褐色土(少し硬質)。ローム粒と焼土粒を含む。
7．黄褐色土。ローム土塊を含む。焼土粒を少量含む。
8．黄褐色土(少し硬質)。ローム土塊をブロック状に含む。
8－1．焼土粒を多量に含む。
8－2．軟質。
9．暗黄褐色土。粘土粒を含む。淡褐色土塊(軟質)を少量含む。
9－1．粘土粒を多量に含む。

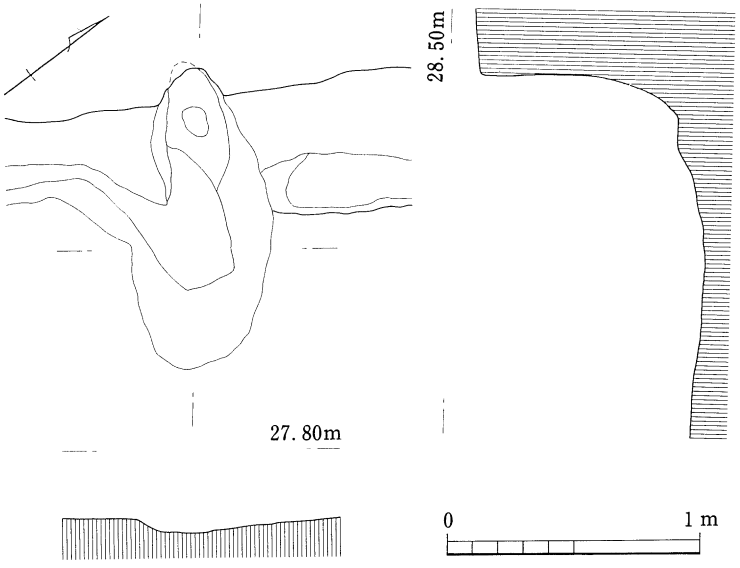
第205図　第134号住居跡実測図

調査地区の北東側に位置し、南東約８ｍで小谷への傾斜部となる地点である。第133ｂ号住居跡が北へ約1.5ｍに存在する。平面形体は、隅円方形でやや胴張りである。規模は、長軸4.50ｍ、短軸4.40ｍを測る。主軸方位は、短軸方向をはかり、Ｎ－60°－Ｗを示す。壁の立ち上がりは、最大で85㎝である。床面は、平担で、踏み固められた面は、不明確である。床面積は、約16.61㎡である。壁溝は、カマドの右側とカマドの反対側で途切れている。床面内のピットは、検出されない。焼土は、床面中央に存在し、南側方向からの流れ込みがうかがえる。



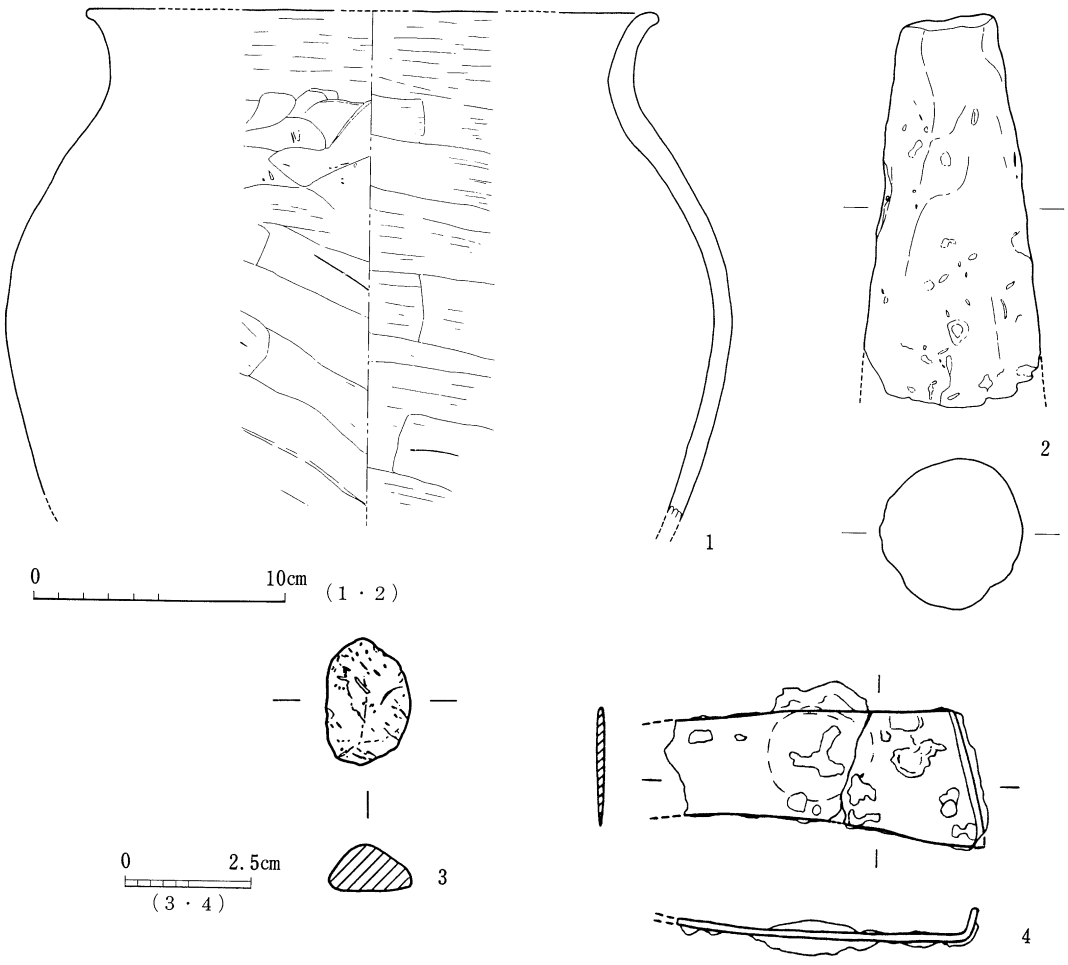
第134号住居跡カマド土層説明
1．暗灰褐色土(少し硬質)。粘土を多量に含む。
2．暗灰褐色土。粘土を多量に含む。焼土粒を少量含む。
3．暗赤褐色土(少し軟質)。焼土粒を多量に含む。粘土と灰を少量含む。
4．暗灰色土(軟質)。灰を多量に含む。焼土粒と粘土塊を少量含む。
5．焼土化した粘土。
6．暗灰褐色土。粘土と暗褐色土がブロック状に混入。
7．暗褐色土。粘土を含む。
8．暗褐色土。粘土を多量に含む。炭化物を極少量含む。
9．暗褐色土(少し硬質)。粘土を多量に含む。焼土粒と炭粒を少量含む。
10．少し軟質の粘土。ローム粒を少量含む。

第206図　第134号住居跡カマド実測図



第207図　第134号住居跡カマド掘り方実測図

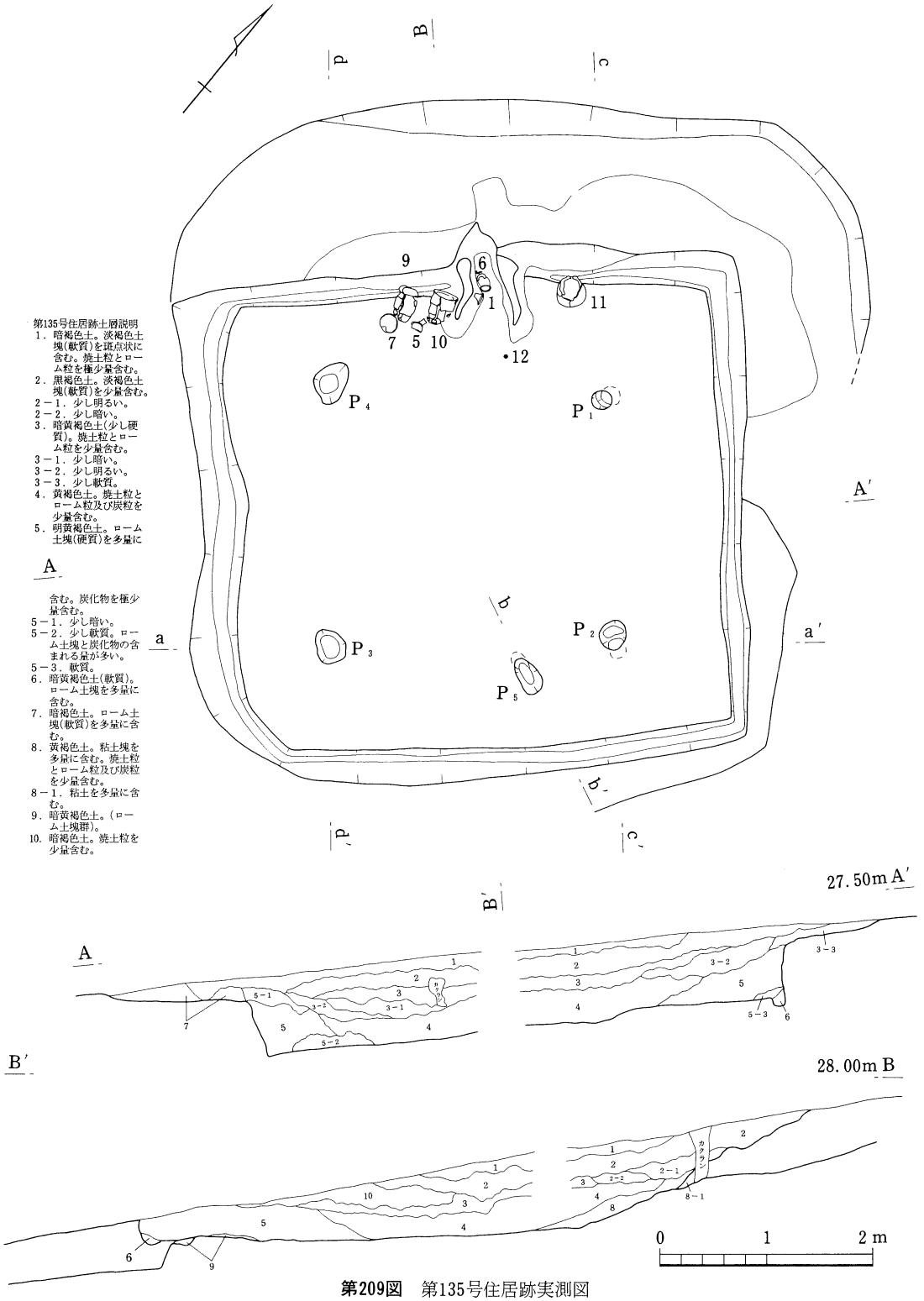
竪穴の覆土は、自然堆積とみられ、明黒褐色土と明褐色土が主体を占めている。カマドは、北西側壁のほぼ中央に設置され、保存状況は悪い。煙道部は、竪穴壁を約10cm掘り込み、立ち上がりは、急傾斜であり、約80cmの高さを測る。出土遺物は、カマド付近より、No.1甕、No.2土製支脚、覆土中より、軽石と角礫が検出されている。このうち、No.2の土製支脚は、上端ほど細くなる円柱形を呈し、下端を欠損する。上端径は、3.7cmを計り、色調は、暗褐色、胎土は、砂質粘土と考えられ、緻密である。No.3は、軽石で、白褐色を呈し、長さ2.5cm、幅1.6cm、厚さ1.4cmと小型である。No.4は、鉄製の鎌である。この他、鉄滓も1点出土している。No.1の甕は、球状の胴部をもち、弧状をもって小さく外反する。口径22.7cm、胴最大径28.9cmである。両口縁部は、横ナデ、外面の胴部は、斜め方向のヘラケズリ、内面は、ヘラナデがなされる。



第208図　第134号住居跡出土遺物実測図

（38）第135号住居跡

第135号住居跡は、調査地区の北東側に位置し、北西から南東方向に向って傾斜をはじめる地点である。第132号住居跡は、西に約８ｍ、第138号住居跡は、南東に約６ｍの距離に所在する。平面形体は、やや胴張りの不整方形で、北西側壁がわずかに内湾ぎみに張っている。規模は、長軸5.20ｍ、短軸4.95ｍを測る。主軸方位は、短軸をはかり、Ｎ－40°－Ｗを示す。壁の立ち上がりは、傾斜面に占地されているため、北西側壁は、上部が削平され、数段を呈して、傾斜しており、東南側の壁は低い残存である。高さは、最大で、52cmである。床面は、ほぼ平担であり、踏み固められた面は、やや不明確であるが、カマド前面から床面中央付近に認められている。床面積は、約22.18㎡である。壁溝は、四周し、幅は、３～19cm、深さは、２～14cmを測る。床面内のピットは、５本検出され、P_1～P_4の４本は、主柱穴と考えられる。各

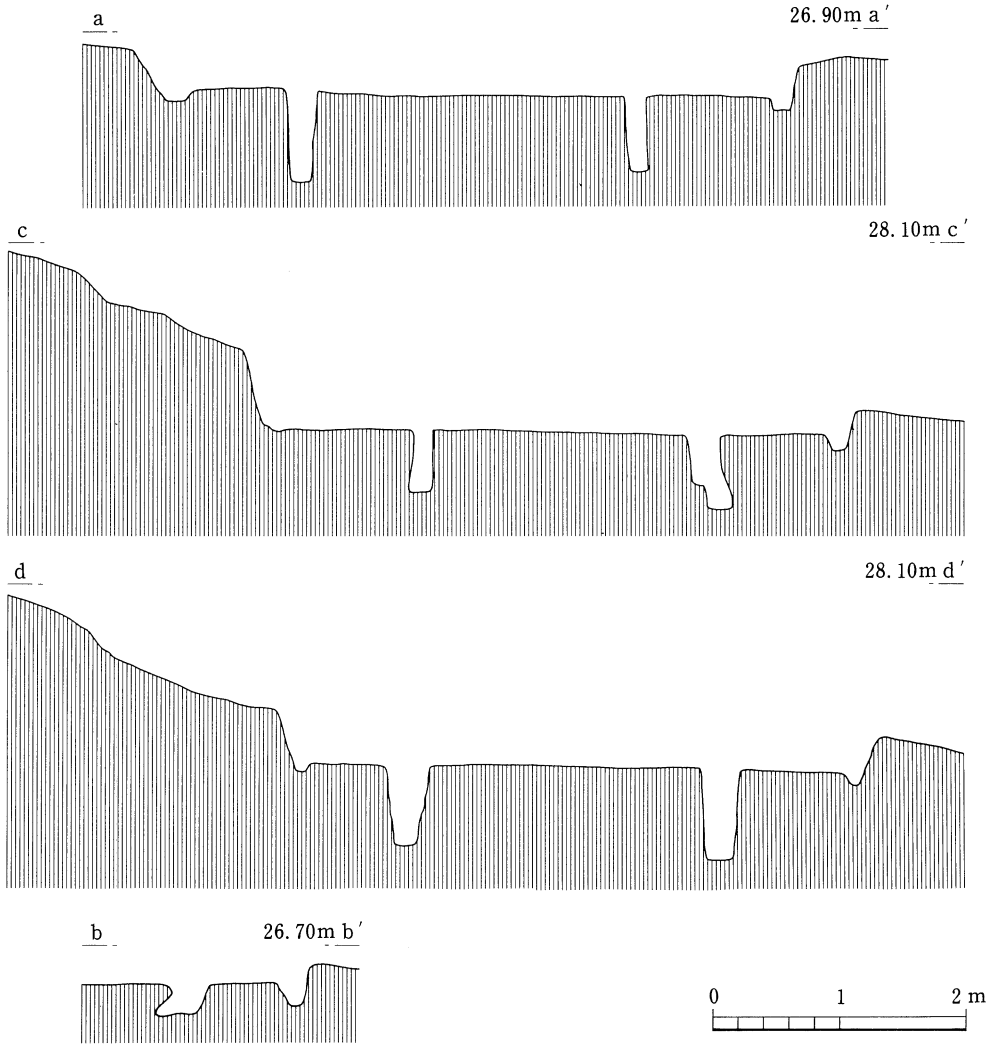


第209図　第135号住居跡実測図

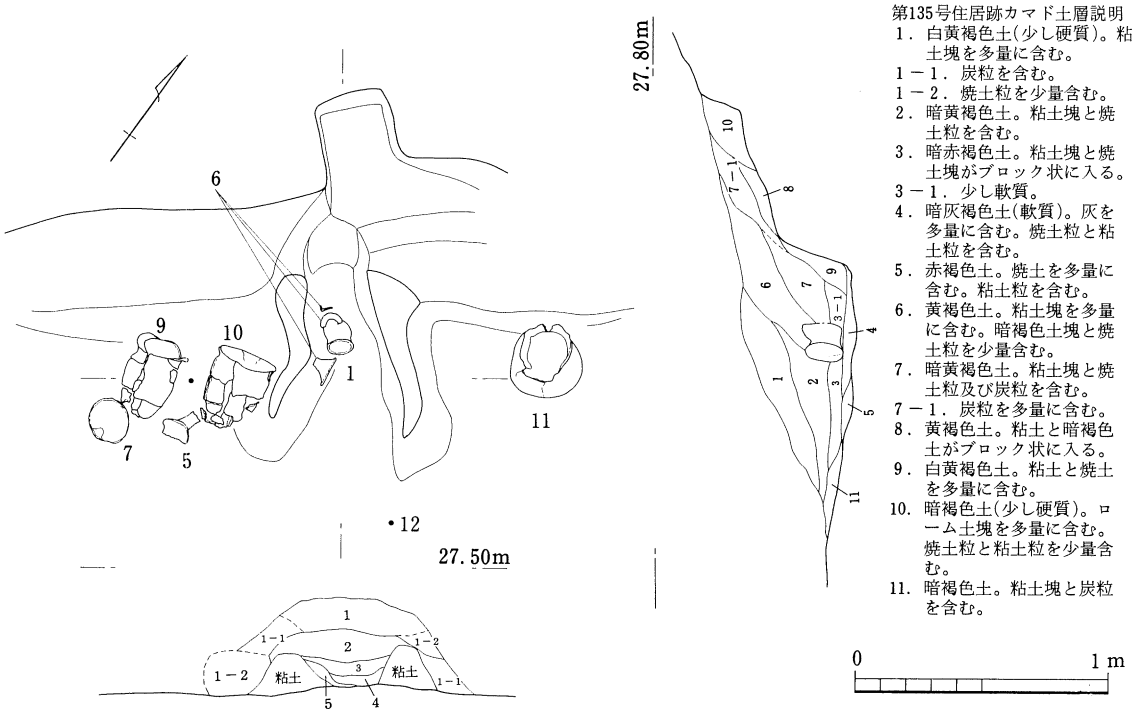
ピット間の距離は、P_1～P_2が2.40m、P_2～P_3が2.70m、P_3～P_4が2.50m、P_4～P_1が2.65mである。P_2は、立ち上がりが2段を呈する。また、各柱穴は、径が狭く、いわゆる柱の貫き取りは、行っていない模様である。P_5は、カマドの反対側の床面に存在し、床中央方向にオーバーハングし、底及び立ち上がりがやや硬く、出入口相当施設用ピットと推定される(いわゆる梯子ピット)。竪穴の覆土は、暗黄褐色を主体とし、自然堆積とみられる。カマドは、北西側壁の中央に設置され、煙道部は、立ち上がりが2段を呈し、高さは60cm、竪穴の壁を65cm掘り込んでいる。出土遺物は、特にカマド周辺から多く検出されている。

第95表　第135号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P_1	19×18	17×17	50
P_2	28×26	18×15	59
P_3	34×28	23×16	73
P_4	42×30	19×17	52
P_5	36×19	34×12	26



第210図　第135号住居跡断面図(a－a′，c－c′，d－d′，b－b′)

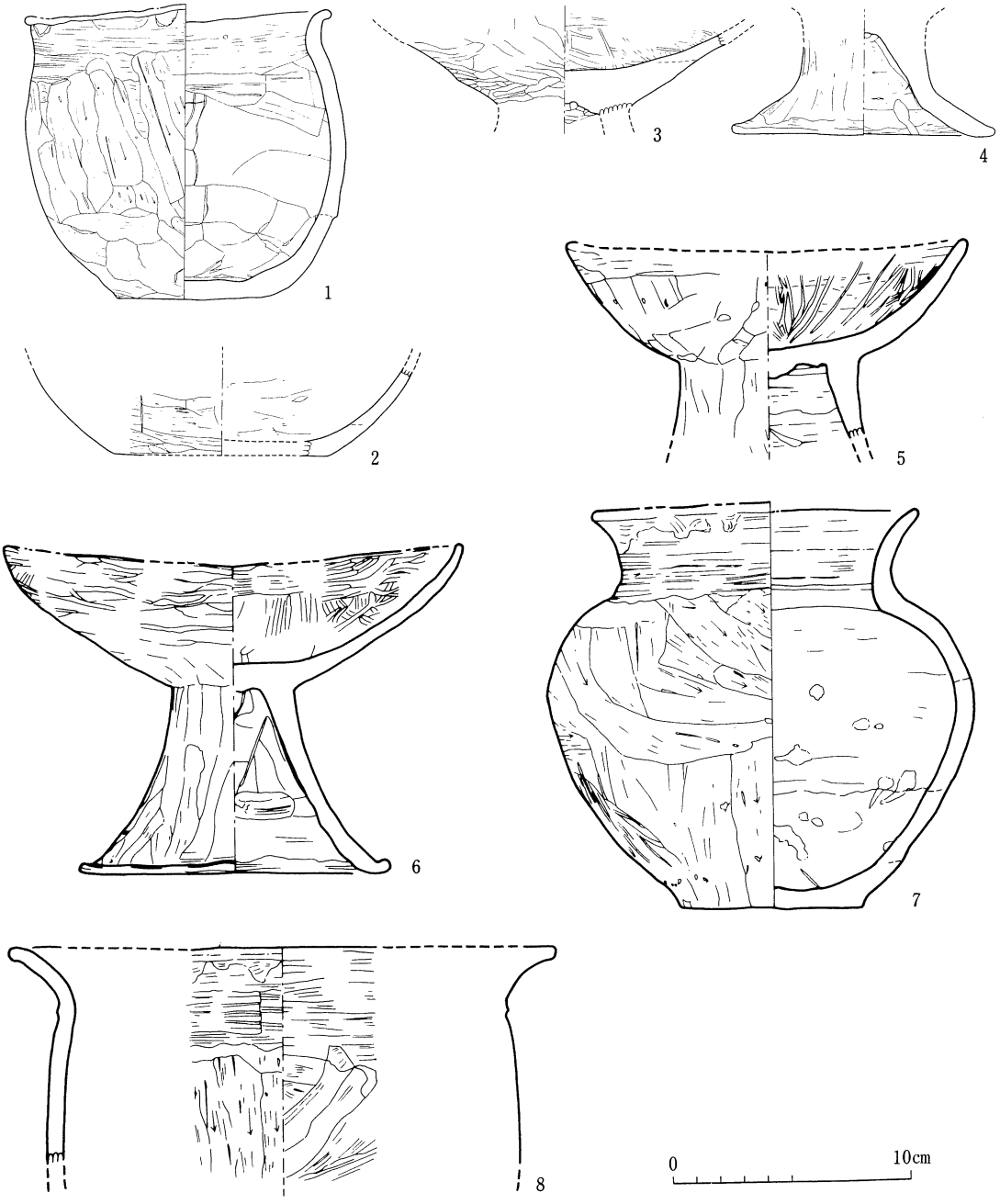


第211図　第135号住居跡カマド実測図

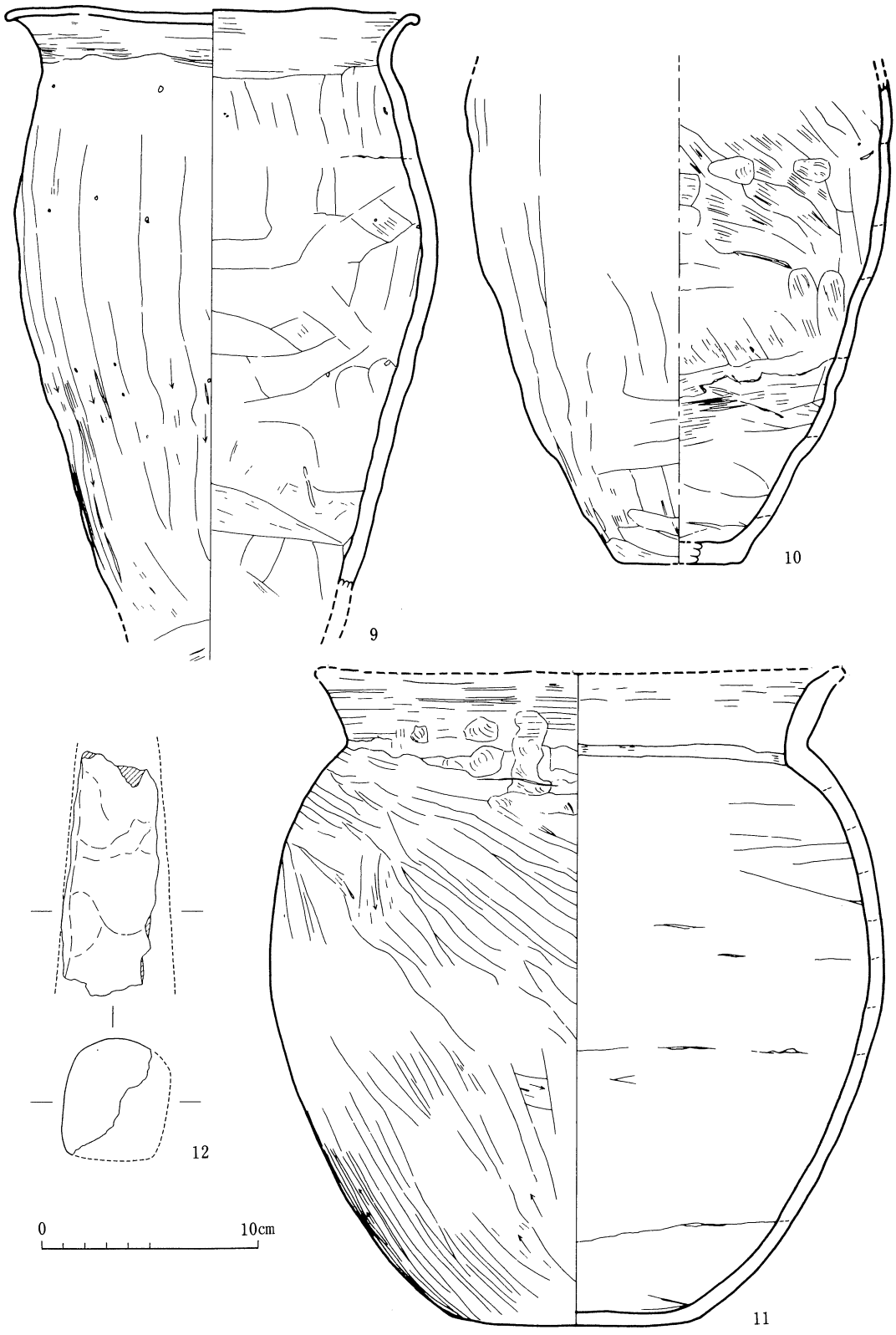
第96表　第135号住居跡出土遺物観察表(１)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図212 1	a.(甕) b.カマド内 c.５％欠損	口径13.25 体部最大径13.4 底径6.6 器高12.8	d.小礫２mm以下を少量含む。 e.普通	平底で、体部は、球状を呈し、最大径は中位、口縁部は、直立し、先端で曲げられ、口唇部は、厚い。	口縁部＝横ナデ 体部＝縦方向のヘラケズリ 下位＝横方向 〈色調〉淡褐色、一部暗褐色 黒褐色	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラナデの後指ナデ 下位＝ヘラナデツケ 一部に粘土紐接合痕が残る 〈色調〉淡褐色、暗褐色
図212 2	a.(甕) b.覆土内 c.底部のみ	底径(9.2)	１と同様	平底で、胴部は、球状を呈し、底部中央は、欠損する。	胴下位＝横方向のヘラケズリ 〈色調〉淡褐色、一部暗褐色 黒褐色	胴部＝ヘラナデ 〈色調〉淡褐色、暗褐色、一部明茶褐色
図212 3	a.(高坏) b.覆土内 c.坏部のみ 口縁部を欠損する。		d.緻密 e.普通	坏部は、直線的に開く。	ヘラナデとヘラミガキ 〈色調〉明褐色	ヘラミガキ 〈色調〉暗褐色
図212 4	a.(高坏) b.覆土内 c.脚部のみ 1/3残存	脚裾部(11.4)	d.緻密 e.わずかに不良	裾部は、ハの字状に開き、柱状部は、直立ぎみに立ち上がる。	裾部＝横ナデ 脚部＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉淡褐色、一部暗褐色	裾部＝横ナデ 脚部＝ヘラケズリダシ 〈色調〉淡褐色

No.12は、土製支脚で、上端ほど細くなる方柱形と考えられる。上部と下部を欠損し、中位のみの残存である。色調は、淡褐色で、胎土は、砂質粘土で緻密である。カマドの右前面の床面直上からの出土である。



第212図　第135号住居跡出土遺物実測図（１～８）



第213図　第135号住居跡出土遺物実測図（９～12）

第97表　第135号住居跡出土遺物観察表(２)

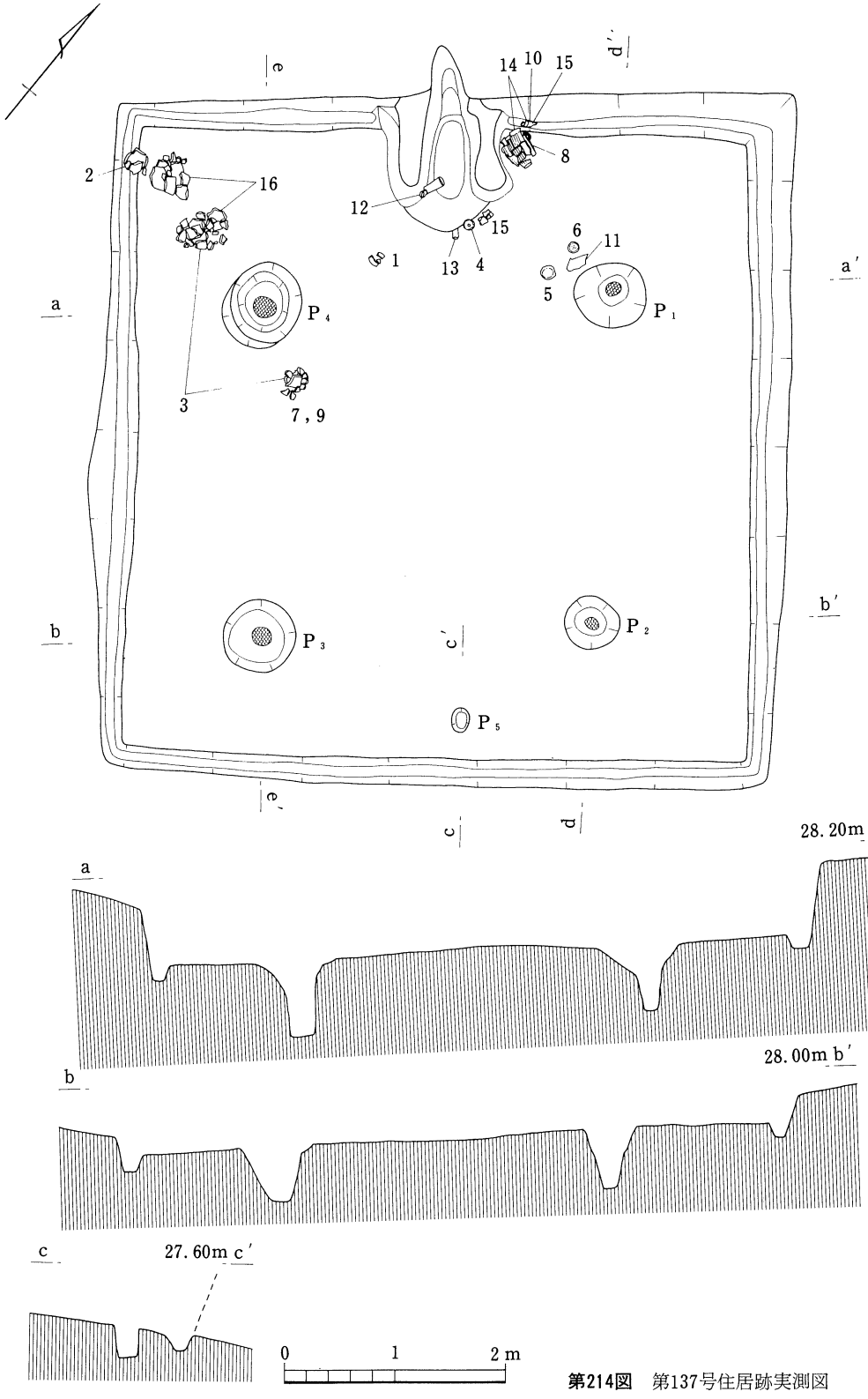
挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図212 5	a.(高坏) b.カマド左側床面 c.全体の70%の残存	口径(17.35) 脚小径(7.7)	d.小礫２mm以下を少し含む e.普通	脚は、太めで丸みをもって直立し、坏部は、椀状で、脚に比して小型である。	坏部口縁部＝横ナデ 体部＝縦方向ヘラケズリの後、横ヘラナデ 脚部＝縦方向ヘラケズリ 〈色調〉淡褐色、一部黒褐色	坏部＝横方向のヘラナデの後、縦方向のヘラミガキ 脚部＝ヘラケズリダシ 〈色調〉茶褐色、淡茶褐色
図212 6	a.(高坏) b.カマド内 c.全体の50%の残存	口径(19.9) 脚小径(5.2) 脚裾径(13.4) 器高13.3	d.緻密 鉄分を含む e.普通	脚端は、丸みを帯び、脚部は、弧状を描いて立ち上がり、坏部は、椀状を呈する。	坏部口縁部＝ヘラナデ 体部＝ヘラケズリ 脚部＝ヘラケズリ 脚下位＝横ナデ 〈色調〉褐色、淡褐色	坏部＝ヘラミガキ 脚部＝ヘラケズリダシ 脚裾部＝横ナデ 〈色調〉褐色、淡褐色
図212 7	a.壺 b.カマド左側床面 c.全体の５%欠損	口径14.1 頸部径11.6 最大径18.5 底径17.8 器高17.6	d.小礫３mm以下を含む e.普通	平底で、胴部は、球状を呈し、最大径は中位わずか上に有り、口縁部は、大きく外反する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラケズリ一部ヘラミガキ 〈色調〉淡褐色、暗褐色、一部黒褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデ? の後、ていねいな指ナデ 〈色調〉淡褐色、黒褐色、一部暗褐色
図212 8	a.(甕) b.覆土内 c.口縁部のみ1/8残存	口径(23.55) 頸部径(19.2)	d.小礫２mm以下を多く含む e.普通	胴部は、長胴で、直立ぎみに開いて立ち上がり、口縁部で外反する。	口縁部＝横ナデ 口頸部＝ヘラケズリによる段がいくつかみられる 胴上位＝ヘラケズリ	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラケズリ 〈色調〉両面褐色、一部暗褐色
図213 9	a.(甕) b.カマド左側床面 c.底部欠損	口径19.7 頸部16.6 胴部最大径19.9	d.小礫５mm以下を含む e.普通	胴部は、長胴で、胴部最大径は、上部に有り、口縁部は、外反し、器厚は厚い。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 下端＝横方向 〈色調〉淡褐色、暗褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデの後、指ナデ、一部に粘土接合痕がみられる 〈色調〉黒色、黒褐色
図213 10	a.(甕) b.カマド右 c.胴下半底部のみ3/5	底径6.0 胴部最大径23.0	d.小礫を多く含む e.普通	長胴を呈する。下半のみの残存。	胴部＝縦方向のヘラケズリ 下端＝横方向 〈色調〉両面とも黒褐色、一部淡褐色	胴部＝ヘラナデの後、指ナデ、一部に粘土接合痕がみられる
図213 11	a.(甕) b.覆土内 c.全体の70%の残存	口径24.8 胴大径28.5 底径11.5 器高30.9	d.砂粒を極少量含む e.少し不良	平底で、胴部は、球状を呈し、最大径は胴中位に有り、口縁部は、直線的外反。	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデ 摩耗が多い 〈色調〉褐色、淡茶褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデ 粘土接合痕がみられる 〈色調〉褐色、淡褐色

(39) 第137号住居跡

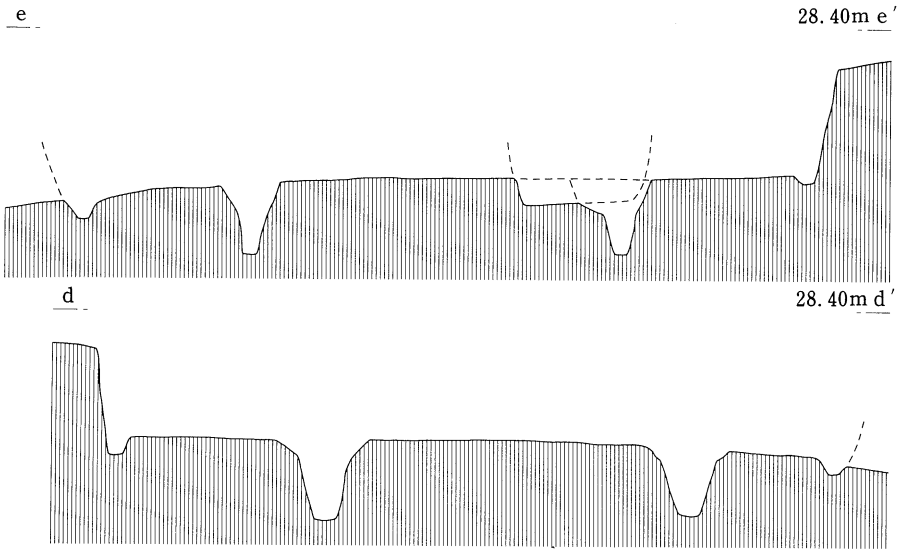
調査地区の東側に位置し、東側の小谷に向って傾斜している地点に所在する。また、第129号住居跡が南西約８m、第101号方形周溝状遺構が北側３mに離れて存在する。平面形体は、方形を呈し、長軸6.30m、短軸6.22mを測る。主軸方位は、短軸方向をはかり、N－38°－Wを示す。壁の立ち上がりは、東南に向って傾斜している地点に占地しているため、北西側壁が高く、南東側壁が低く残存している。深さは、最大で88cmを測る。床面は、傾斜面の占地のため、北西側から南東側に約15cm程低くなっている。踏み固められた面は、やや不明瞭であるが、カマド前面から床面中央及びP_5付近まで認められる。床面積は、約35.17㎡である。壁溝は、四周し、幅５～17cm、深さ７～15cmを測る。床面内のピットは、５本検出され、そのうちP_1～P_4は、主柱穴とみられ、各々柱のあたり痕跡が認められる。各ピット間の間隔は、P_1～P_2が3.03m、P_2～P_3が2.98m、P_3～P_4が2.97m、P_4～P_1が3.15mである。P_5は、カマドの反対側床面に存在し、いわゆる出入口相当施設用のピットと考えられる。柱のあたり痕跡は、認められない。竪穴の覆土は、自然堆積である。カマドは、北西側壁の中央に設置されている。右袖は、破損して、残存状況は、不良である。煙道部は、立ち上がりが急傾斜で、竪穴の壁を約45cm掘り込んでいる。出土遺物は、カマド周辺より、1・4・8・10・12・13・14・15が、西側床面より、2・3・7・9・16が各々検出されている。

第98表　第137号住居跡ピット計測表(cm)

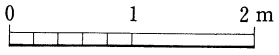
ピット名	上端	下端	深さ
P_1	65×48	27×24	49
P_2	49×49	29×25	68
P_3	65×65	51×48	50
P_4	76×66	40×34	56
P_5	23×17	14×９	30

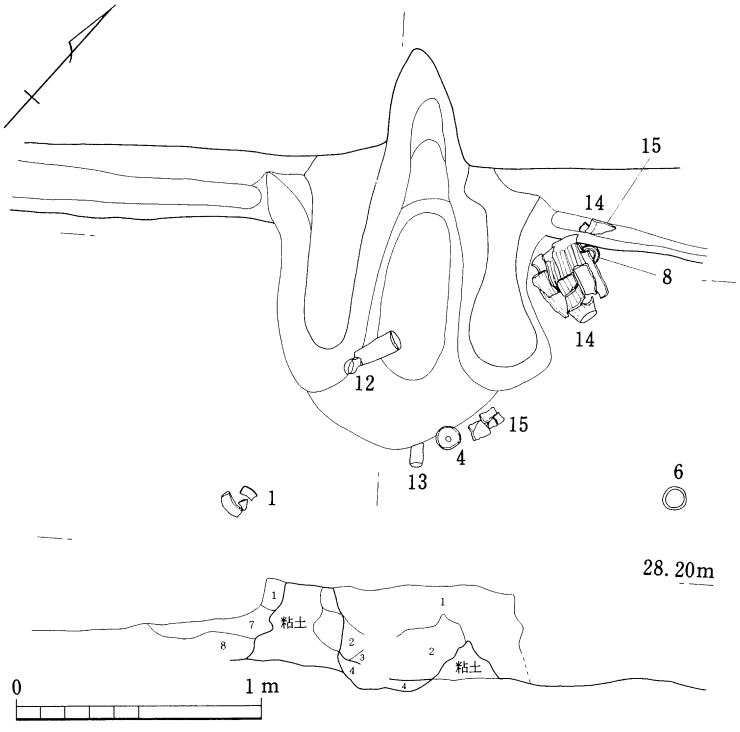


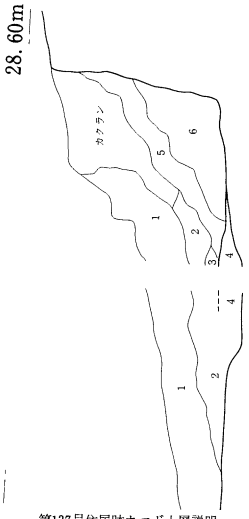
第214図　第137号住居跡実測図



第215図　第137号住居跡断面図(d－d′，e－e′)





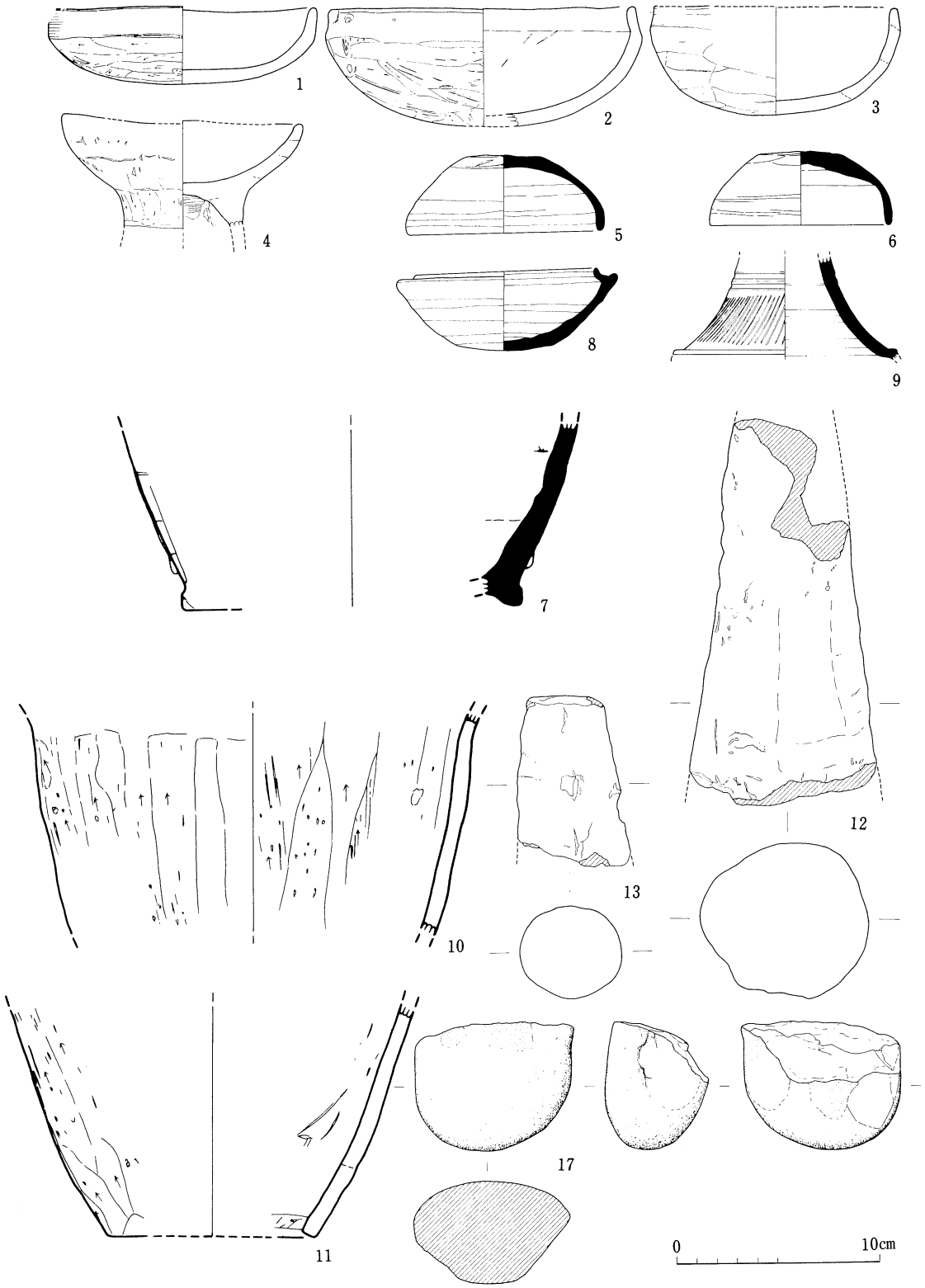


第137号住居跡カマド土層説明
1. 暗灰褐色土の混合土。焼土粒を少量含む。
2. 暗赤褐色土(軟質)。焼土と粘土塊をブロック状に含む。
3. 暗灰褐色土(軟質)。灰を多量に含む。焼土粒と粘土粒を少量含む。
4. 褐色土。ローム土塊を多量に含む。焼土粒を少量含む。粘土粒を極少量含む。
5. 暗灰褐色土。粘土を多量に含む。炭粒と焼土粒を少量含む。
6. 灰褐色土。粘土を多量に含む。ローム土塊と焼土を少量含む。
7. 暗褐色土。粘土粒を少量含む。
8. ローム土塊がブロック状に混入する。

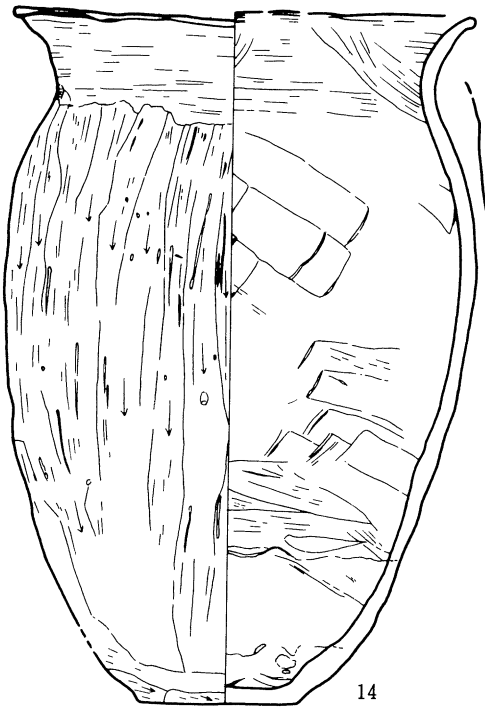
第216図　第137号住居跡カマド実測図

第99表　第137号住居跡出土遺物観察表(1)

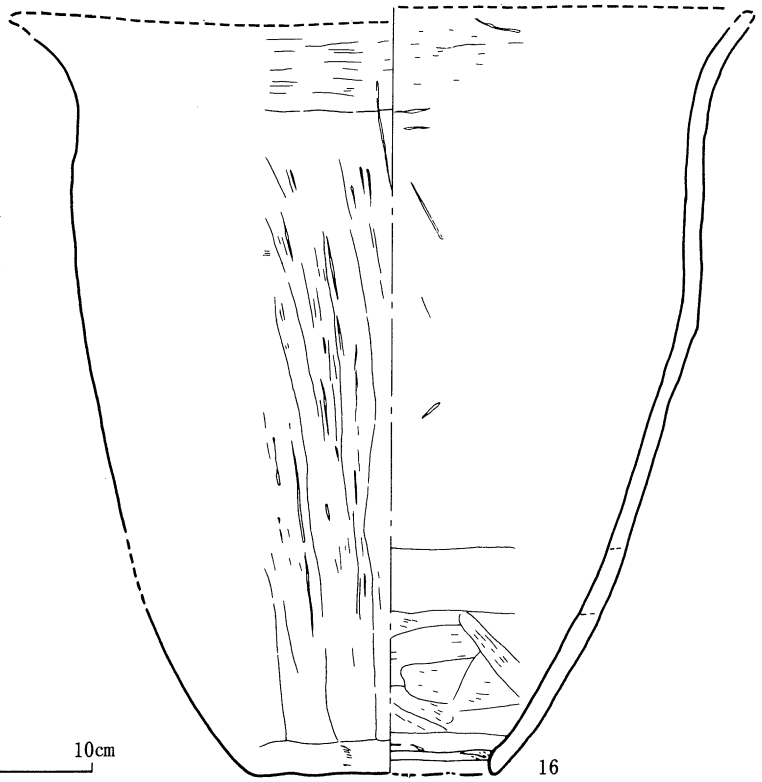
挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図217 1	a.坏 b.カマド付近 c.5％欠損	口径13.2 器高3.8	d.緻密 e.普通	丸底で、浅い椀状を呈し、口縁部は、直立する。	口縁部＝横ナデ 体部＝横方向のヘラケズリ 〈色調〉褐色	全面ヘラミガキ 〈色調〉淡褐色
図217 2	a.(鉢) b.西側床面 c.全体の1/2の残存	口径(15.0) 体部最大径(15.5) 器高(5.8)	d.砂粒を含む e.普通	丸底で、浅い椀状を呈し、口縁部は、稜をもち、やや内傾ぎみに立ち上がる。	1と同様	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラミガキ 〈色調〉暗褐色



第217図　第137号住居跡出土遺物実測図(１～13･17)







No.12は、土製支脚で、上端ほど細くなる円柱状を呈し、上端と下端を欠損する。色調は、淡褐色を呈し、胎土は、砂質粘土で緻密である。No.13は、12と同様の形体を呈し、上端部付近のみの残存である。上端径は、3.8cmで、色調は淡褐色、胎土も、12と同様に緻密である。

0 10cm

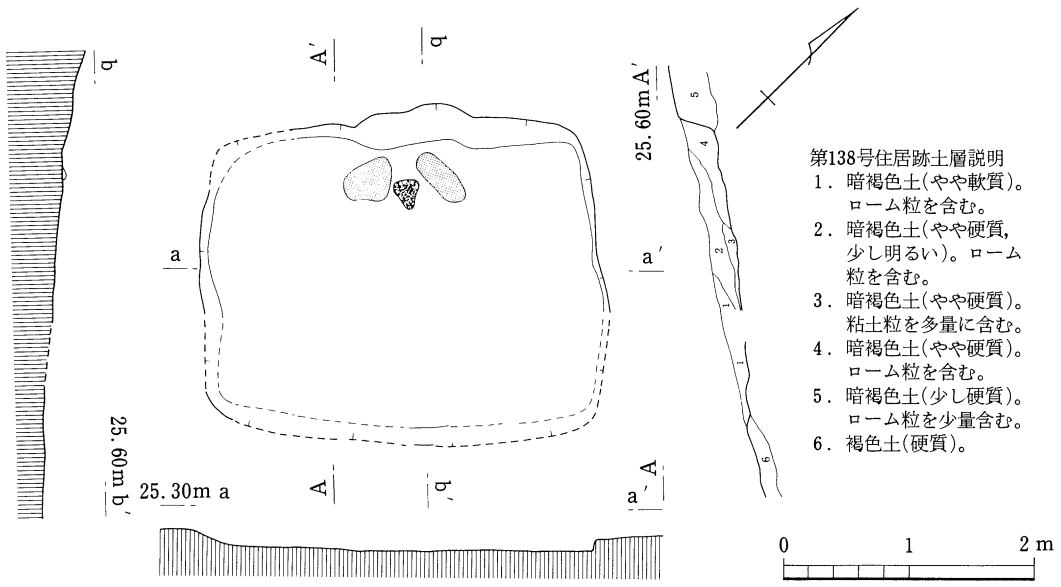
第218図　第137号住居跡出土遺物実測図(14～16)

第100表　第137号住居跡出土遺物観察表(２)

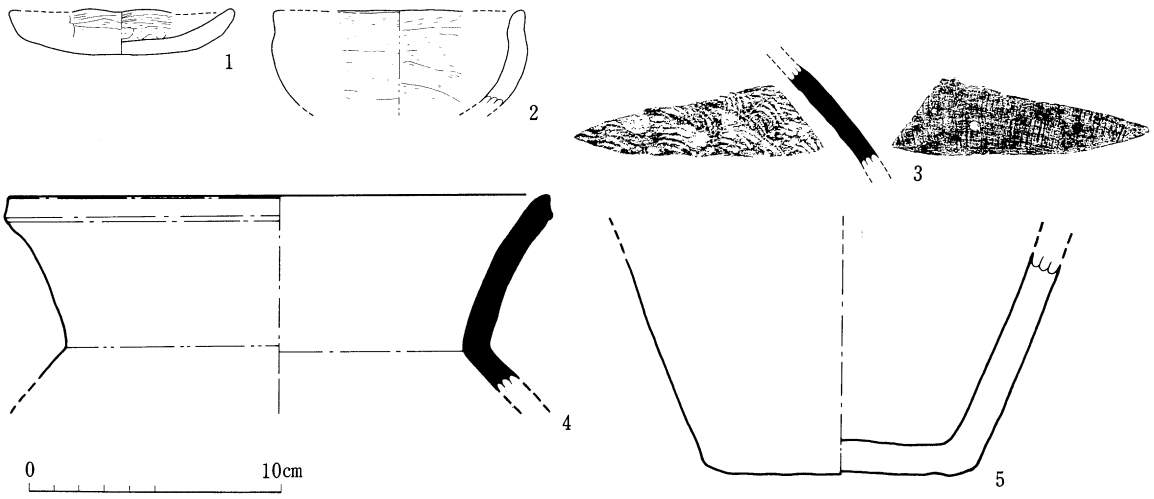
挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図217 3	a.(鉢) b.西側床面 c.10%欠損	口径12.0 体部径12.3 器高5.35	d.緻密 e.普通	丸底で、浅い椀状を呈し、口縁部は、稜をもち、内傾ぎみ。	口縁部＝横ナデ 体部＝横方向のヘラケズリ 〈色調〉暗褐色	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラミガキ 〈色調〉黒褐色
図217 4	a.高坏 b.カマド付近 c.脚部を多く欠損	口径11.9 脚小径(5.8)	d.緻密 e.普通	脚部は、柱状で太めとみられ、坏部は、やや小型で椀状。	坏口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 脚部＝縦方向のヘラケズリ 坏部に粘土接合痕を一部残す 〈色調〉褐色	坏部全面＝ヘラミガキ 脚部＝ヘラケズリダシ 〈色調〉暗褐色・褐色
図217 5	a.須恵器蓋坏 b.覆土内 c.完形	口径9.5 器高3.85	d.緻密 e.普通	小型で椀状を呈する。	天井部は、２段の回転ヘラケズリがなされ、やや平担ぎみである。 〈色調〉暗灰色	〈色調〉灰白色
図217 6	a.須恵器蓋坏 b.覆土内 c.完形	口径8.9 器高3.9	5と同様	5と同様	5と同様	5と同様
図217 7	a.須恵器平瓶 b.西側床面 c.体下部付近を欠損	底径(16.2)	5と同様	断面三角形の高台が付き、やや丸みをもって、急角度で立ち上がる。	〈色調〉両面とも淡灰色	
図217 8	a.須恵器坏身 b.カマド右側床面 c.口縁部の1/4を欠損	口径9.1 口縁部稜径10.95 器高3.85	5と同様	小型で、体部は椀状を呈し、口縁部に稜とかえりをもつ。かえりは、高さ３㎜である。	底部に２段の回転ヘラケズリ 〈色調〉暗灰色	〈色調〉暗灰色
図217 9	a.須恵器(高坏) b.西側床面 c.脚部のみ1/5残存	下端径(11.05)	d.緻密 e.良好	脚部で、下位に斜行条線、中位に平行沈線がみられる。	〈色調〉灰色	〈色調〉淡灰色
図217 10	a.(甕) b.カマド右側床面 c.胴下部のみ1/5残存		d.小礫３㎜以下を多く含む e.普通	直線的に急角度で立ち上がる胴部である。	胴下位＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉茶褐色、褐色	胴下位＝縦方向のヘラナデ 〈色調〉明褐色
図217 11	a.(甕) b.覆土下位 c.胴下部70%残存	孔径10.1	d.小礫３㎜以下を多く含む e.普通	広めの孔をもち、胴部は、わずかに丸みをもって、急角度で立ち上がる。	10と同様 10と同個体か。	10と同様
図218 14	a.甕 b.カマド右側床面 c.全体の90%の残存	口径18.3 頸部径15.0 胴大径18.7 底径6.4 器高27.5	11と同様	平底で、胴部最大径を上位にもち、頸部は、直立しながら、口縁部は、外反し、口唇部は丸みを呈す。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 下端＝横方向へラケズリ 〈色調〉褐色・暗褐色	口縁部＝横ナデ一部斜め方向 胴部＝横方向へラナデの後指ナデ 〈色調〉褐色
図218 15	a.(甕) b.カマド右側床面 c.口縁部を欠損(1/4)	孔径9.9	11と同様	大きめの孔をもち、やや丸みをもって、急角度で立ち上がる。	胴部＝縦方向のヘラケズリ 下位＝横方向へラケズリ 〈色調〉淡褐色・暗褐色	胴部＝縦方向のヘラケズリ 下位に粘土接合痕を残す。 下端は、横方向のヘラケズリ(横１段) 〈色調〉褐色・暗褐色
図218 16	a.(甕) b.西側床面 c.全体の1/4	孔径9.8 口径29.7 器高30.6	d.砂粒を少量含む e.やや不良	15に似る。口縁部は外反する。	15と同様 〈色調〉褐色、一部暗褐色、黒褐色	15と同様 〈色調〉淡茶褐色、一部暗褐色

(40) 第138号住居跡

調査地区の東側に位置し、東側の小谷に傾斜している地点である。第139号住居跡が、南東約７ｍ、第146号住居跡が南西約７ｍ、第135号住居跡が北西約５ｍに所在する。保存状況は、不良であり、傾斜部に占地されているためか、かなり削平されており、不明な点が多い。平面形体は、隅円の不整方形と推定され、規模は、長軸3.25m、短軸2.72mと考えられる。主軸方位は、短軸方向をはかり、Ｎ－47°－Ｗを示す。壁の立ち上がりは、北西側壁で最大32cmを測



第219図　第138号住居跡実測図



第220図　第138号住居跡出土遺物実測図

り、南東側壁などは、削平されて、ほとんど残存していない。床面も南東側は削平されており、一部は平担であるが、全体的に南東方向へ傾斜している。また、踏み固められた面も不明確であり、わずかに北西側中央部(床面中央部)に認められるのみである。床面積は、推定で約6.52㎡を測る。壁溝及び床面内のピットは、検出されていない。竪穴の覆土は、暗褐色土を主体とし、自然堆積である。また、カマドと推定される部分が北西側壁付近に存在し、粘土と焼土が床面に存在するが、カマドとは断定できない。出土遺物は少なく、5点すべて覆土内出土。

第101表　第138号住居跡出土遺物観察表

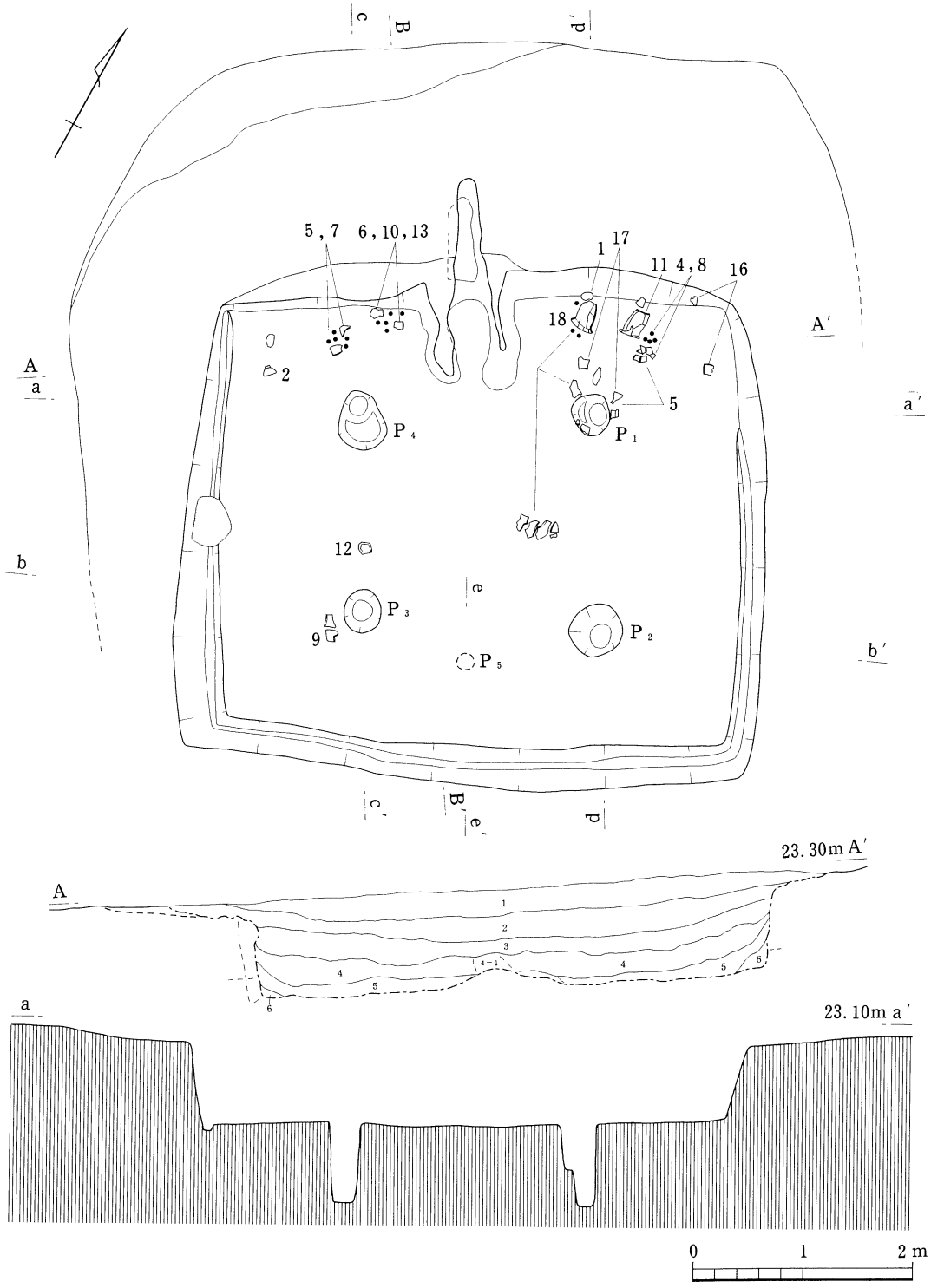
挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図220 1	a.(坏) b.覆土中 c.全体の1/8	口径(9.0) 器高(10.8)	d.砂粒を含む e.普通	丸底で、浅い皿状の小さな坏である。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラナデ 〈色調〉暗褐色、一部黒褐色	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラナデ 〈色調〉淡褐色
図220 2	a.(鉢) b.覆土中 c.全体の1/4	口径(10.0) 体部最大径(10.2)	d.緻密 e.わずかに不良	体部は、球状にちかく、口縁部は、直立ぎみで、底部を欠損。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 〈色調〉淡褐色、一部暗褐色	ミガキにちかいヘラナデ 〈色調〉暗褐色、一部淡褐色
図220 3	a.須恵器甕破片 b.覆土中	器厚7㎜	d.小礫3㎜以下を含む e.少し不良		平行タタキ目 〈色調〉両面とも白灰色	アテ目(青海波文)
図220 4	a.須恵器甕 b.覆土中 c.口縁部 1/8	口径(21.2) 頸部径(16.75)	3と同様	胴部は球状と推定され、口縁部はくの字状に屈曲し、口唇部は断面三角状である。	少し摩耗している 口縁部は、6～7条単位の流水文を2段に配する 〈色調〉両面とも白灰色	剝離が多い 口縁部に稜をもつ
図220 5	a.(甕) b.覆土中 c.底部のみ	底径10.7	d.小礫2㎜以下を含む e.やや不良	平底で胴部は直線的に急角度で立ち上がる。長胴である。	両面とも摩耗が多く、不明 〈色調〉暗茶褐色	〈色調〉黒褐色、暗褐色

(41) 第139号住居跡

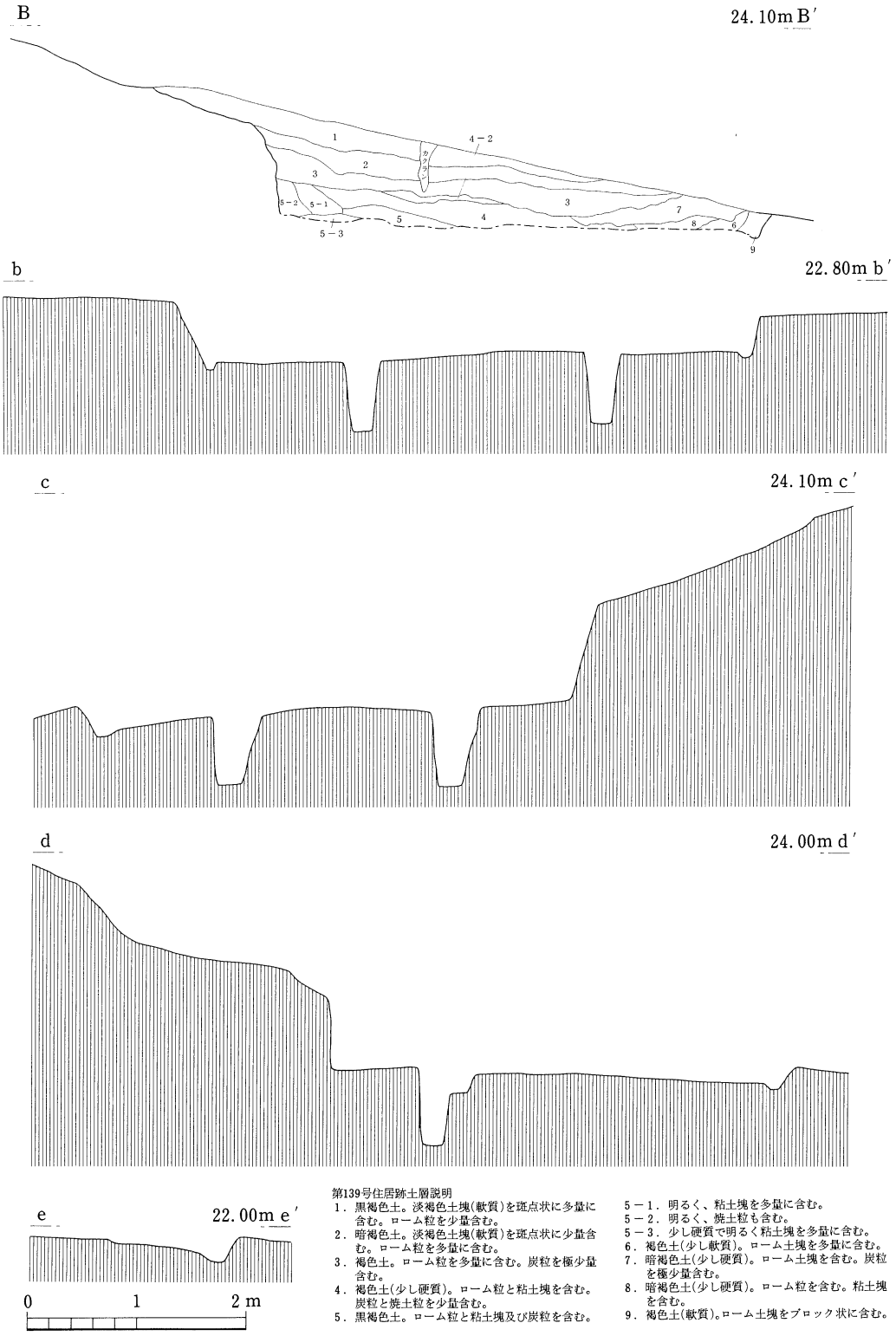
調査地区の東側に位置し、今回の調査で最も東の地点である。東側の小谷に傾斜する斜面部に占地され、かなり小谷に近く低い部分である。第138号住居跡より南東に約7m離れている。平面形体は、方形の胴張りを呈する。規模は、長軸5.35m、短軸4.75mを測り、主軸方向は、短軸方向をはかり、N－30°－Wを示す。壁の立ち上がりは、斜面部のため、北西側壁は高く、南東側壁は低い残存である。また、北西側は、立ち上がりが数段の変換点をもち、本来の竪穴壁より約1.80m離れて落ち込みがはじまっている。深さは、89～15cmを測る。床面は、北西側から南東側にかけて約20cmの差が認められる。踏み固められた面は、床面中央に少し存在している。床面積は、約20.43㎡である。壁溝は、北西側とカマドの両側が途切れている。幅は2～6cm、深さは2～5cmを測る。床面内のピットは、5本検出され、P_1～P_4の4本は主柱穴と考えられ、不整方形に組み合わさり、各ピット間の距離は、P_1～P_2が2.30m、P_2～P_3が2.20m、P_3～P_4が1.65m、P_4～P_1が2.15mを測る。P_4とP_1は立ち上がりが2段を呈する。P_5は、カマドの向い側の壁近くの床面に位置し、深さは浅い。竪穴内への焼土の流れ込みは、西側より1ヶ所認められる。竪穴の覆土は、黒褐色土と暗褐色土を主体とし、自然堆積の状況を呈する。カマドは、北西側床面中央やや西寄りに位置し、保存状況は、あまり良くなく、粘土が床面中央付近に多くカマドから流れ出た様な形態をしているため、カマドを壊して前面にかき出した状況が推定される。煙道部は、約70cm竪穴壁を細長く掘り込み、立ち上がりは、2段である。出土遺物は、多く、特にカマドの周辺に集中する。2・5・6・7・10・13がカマド左側床面より、1・4・8・11・16・17・18がカマド右側床面より、9・12が南側床面より、14は、中央床面、15がP_1付近より出土。No.19は、土製支脚で、上端ほど細くなる方柱形を呈し、上端部のみの破片である。上端の一辺の長さは、2.7cm、色調は淡褐色、胎土は、砂質粘土で、緻密である。

第102表　第139号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P_1	38×35	20×16	75
P_2	50×50	55×45	73
P_3	40×34	19×18	65
P_4	56×45	33×18	64
P_5	15×16		4



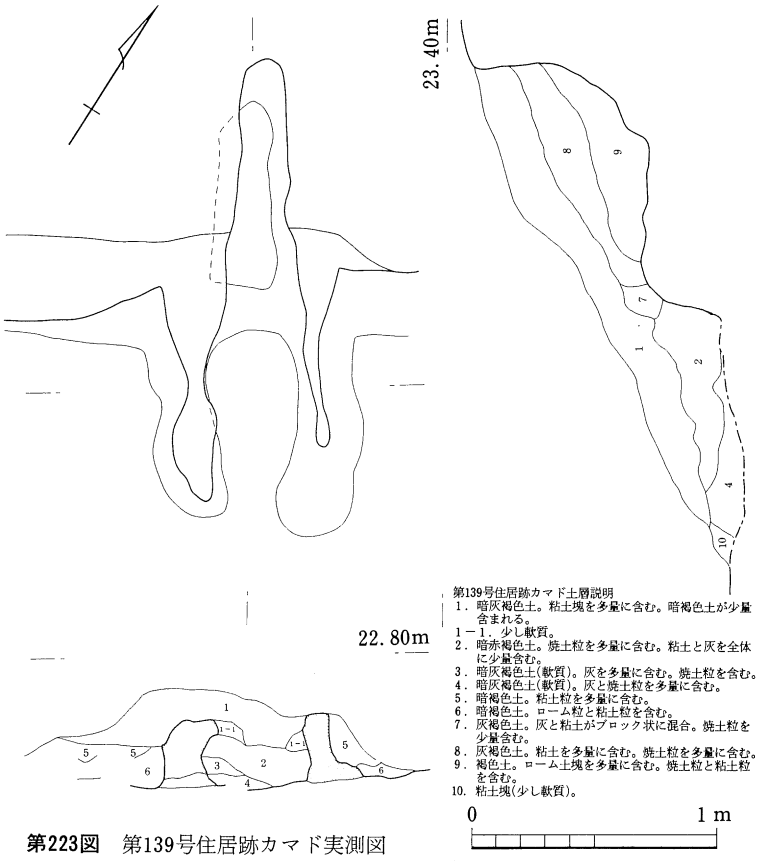
第221図　第139号住居跡実測図



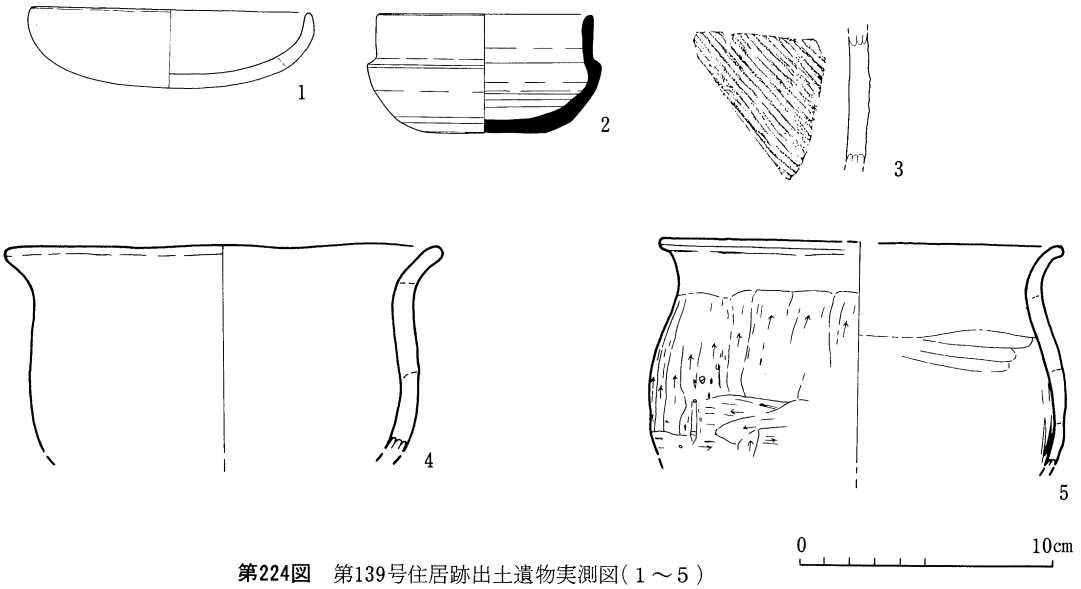
第139号住居跡土層説明

1．黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)を斑点状に多量に含む。ローム粒を少量含む。
2．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を斑点状に少量含む。ローム粒を多量に含む。
3．褐色土。ローム粒を多量に含む。炭粒を極少量含む。
4．褐色土(少し硬質)。ローム粒と粘土塊を含む。炭粒と焼土粒を少量含む。
5．黒褐色土。ローム粒と粘土塊及び炭粒を含む。
5－1．明るく、粘土塊を多量に含む。
5－2．明るく、焼土粒も含む。
5－3．少し硬質で明るく粘土塊を多量に含む。
6．褐色土(少し軟質)。ローム土塊を多量に含む。
7．暗褐色土(少し硬質)。ローム土塊を含む。炭粒を極少量含む。
8．暗褐色土(少し硬質)。ローム粒を含む。粘土塊を含む。
9．褐色土(軟質)。ローム土塊をブロック状に含む。

第222図　第139号住居跡土層図(B－B′)及び断面図(b－b′，c－c′，d－d′，e－e′)



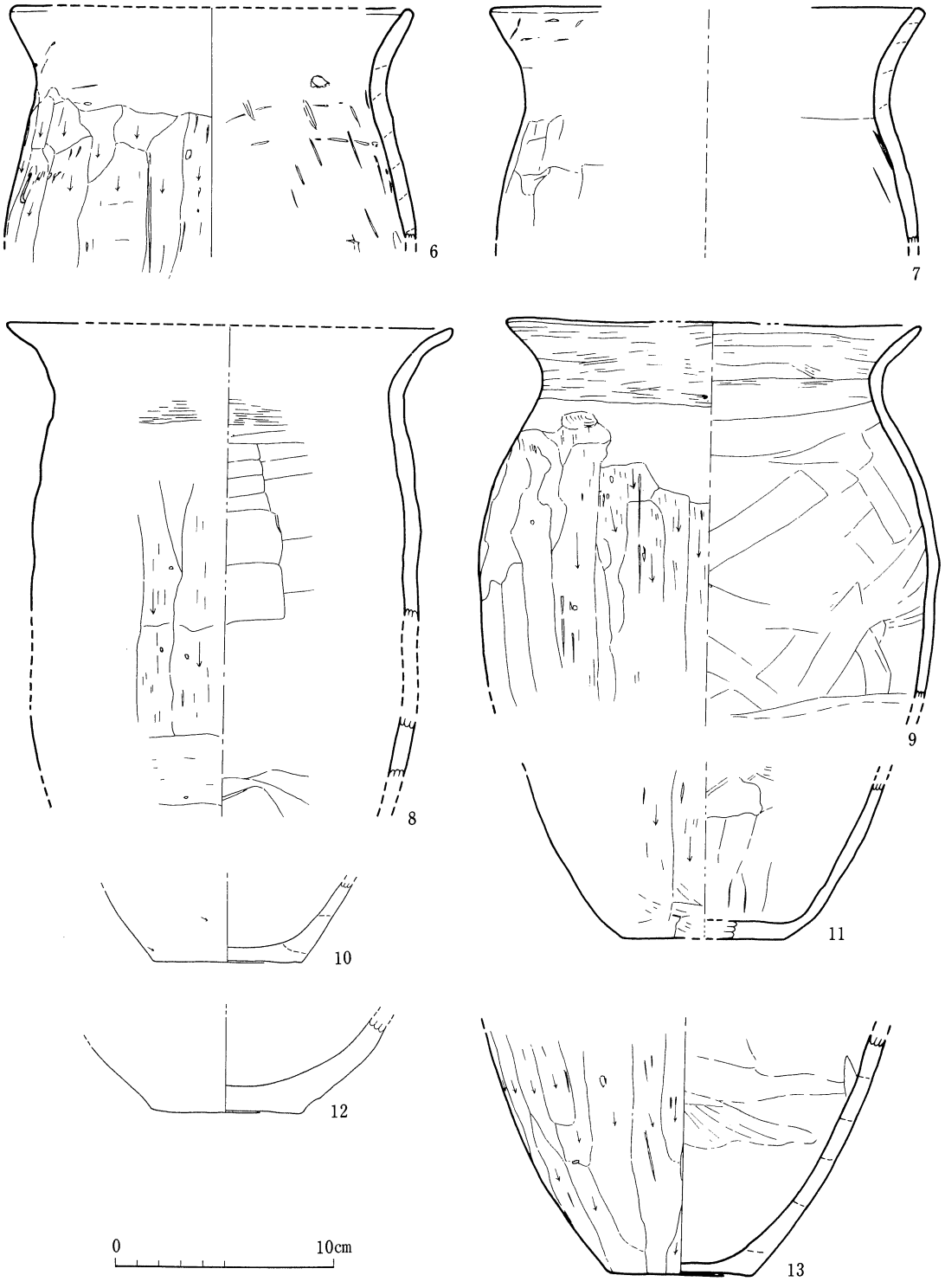
第223図　第139号住居跡カマド実測図



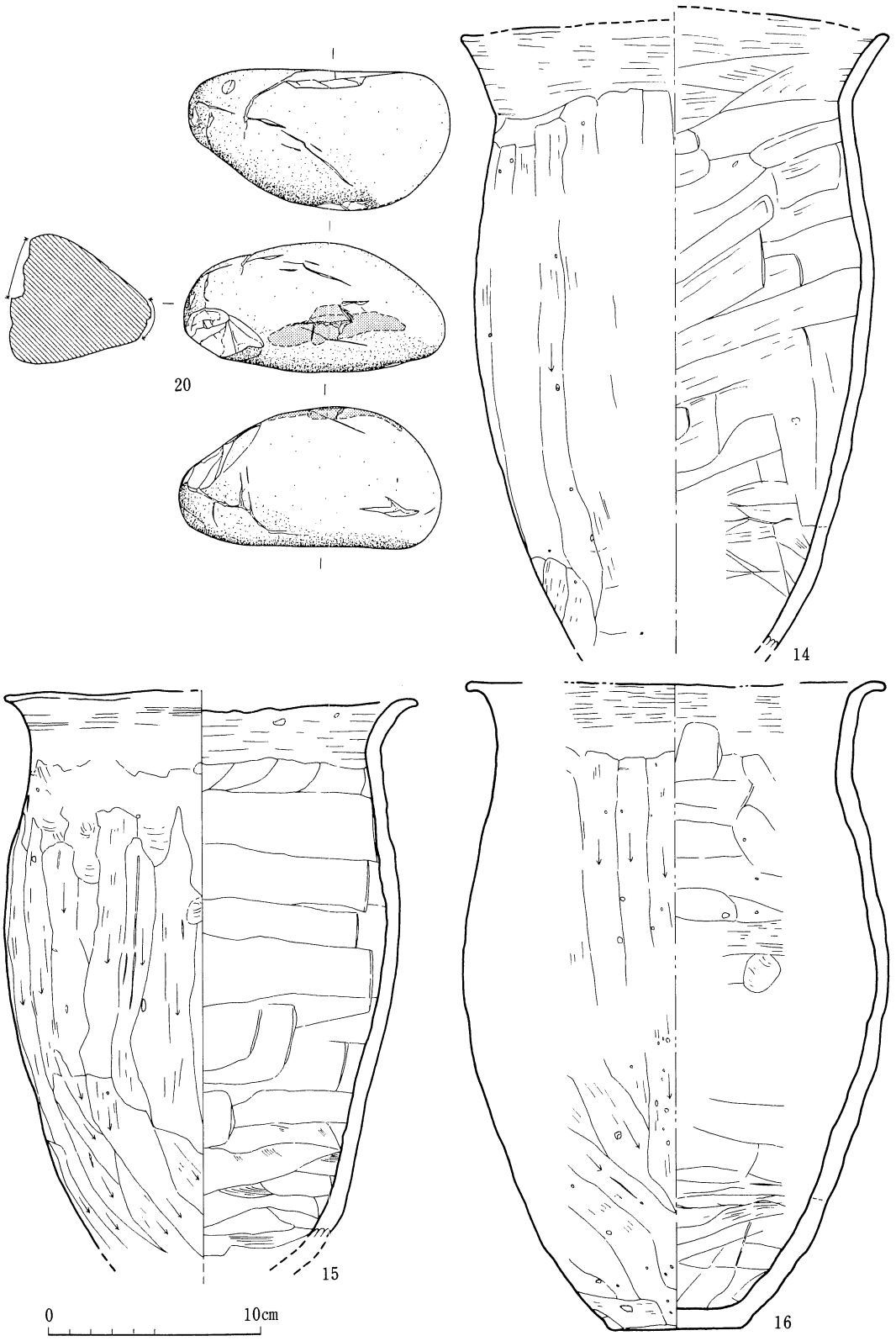
第224図　第139号住居跡出土遺物実測図(１～５)

第103表　第139号住居跡出土遺物観察表(１)

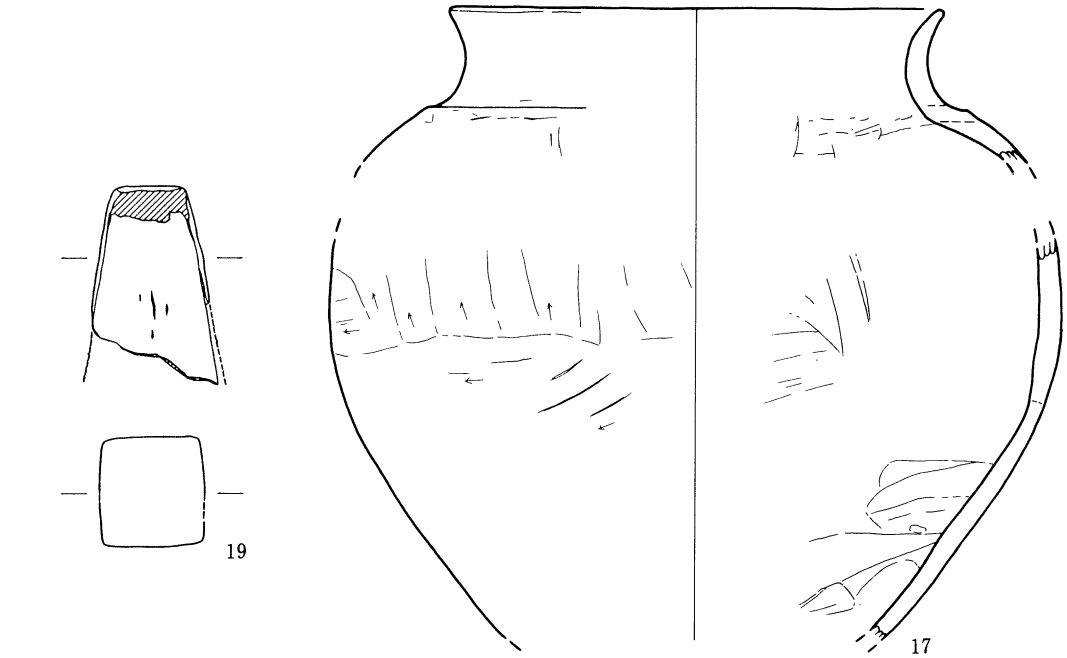
挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図224 1	a.(坏) b.カマド右側床面 c.全体の1/3	口径(11.3) 口縁最大径(11.6) 器高(3.2)	d.砂粒を含む e.少し不良	体部は、浅い塊状を呈し、口縁部は小さく内傾ぎみに立ち上がる。	両面とも摩耗が多く不明 〈色調〉淡褐色	〈色調〉褐色
図224 2	a.須恵器 b.カマド左側床面 c.全体の1/3	口径(8.7) 口縁部稜径(9.5) 底径5.0 器高4.8	d.緻密 e.良好	底部は、回転ヘラケズリにより、やや平底ぎみで、体部は、塊状、口縁部は、稜をもち、長く直立。	〈色調〉暗灰色	〈色調〉灰色
図224 3	a.須恵器甕片 b.覆土内	器厚8㎜	d.砂粒を含む e.良好		平行タタキ目 〈色調〉黒灰色	〈色調〉灰色
図224 4	a.(鉢) b.カマド右側床面 c.体下部～底部欠損	口径(17.0) 体部最大径(15.0)	d.小礫1～2㎜を多く含む e.少し不良	体部は、球状で、体部最大径は、中位に有り、口縁部は、直立ぎみで、上位で小さく外反する。	剝離が多く不明 〈色調〉両面とも赤褐色、一部黒褐色	口縁部＝横ナデ 他は、剝離多く不明
図224 5	a.(甕) b.カマド左側床面 c.体下部～底部欠損	口径(15.7) 体部最大径(16.15)	d.小礫2㎜以下を多く含む e.良好	体部は、球状を呈し、体部最大径は、中位に有り、口縁部は、小さく外反し、口唇部は、厚い。	口縁部＝横ナデ 体部＝縦方向ヘラケズリ 下部＝横ヘラケズリ 擦過痕多い。 〈色調〉淡橙褐色	口縁部＝横ナデ 体部＝横方向のヘラナデの後、指ナデ 〈色調〉褐色
図225 6	a.(甕) b.カマド左側床面 c.口縁部～体上部残存	口径(13.5) 頸部径(16.1)	d.小礫3㎜～5㎜を多く含む e.普通	胴部最大径を上部にもつと思われ、口縁部はやや直線的に立ち上がり、外反する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉赤褐色、黒褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデの後指横ナデ 〈色調〉赤褐色、暗褐色
図225 7	a.(甕) b.カマド左側床面 c.口縁部～胴上部1/6	口径(20.0) 頸部径(16.7)	d.砂粒を含む e.普通	胴部は、丸みをもち、口縁部は、長く、弧状をもって外反する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉暗褐色	6と同様 〈色調〉暗褐色、黒褐色
図225 8	a.(甕) b.カマド右側床面 c.上半部のみ1/2残存	口径(20.5) 頸部径(16.1) 胴部最大径(17.8)	d.小礫3㎜以下を含む e.やや不良	長胴の甕で、最大径は、中位にもち、口縁部は、2段の立ち上がりがみられ、外反する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 下位＝横方向ヘラケズリ 〈色調〉黒褐色、暗褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデの後指ナデ 下位＝ヘラナデツケ 〈色調〉暗褐色
図225 9	a.(甕) b.南側床面 c.全体の1/3	口径(19.0) 胴大径(21.1) 底径(6.7)	d.小礫3㎜以下を含む e.やや不良	やや球状を呈する胴部をもち、口縁部はくの字状に外反。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉黒褐色、暗茶褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデ 〈色調〉黒褐色、暗褐色
図225 11	a.(甕) b.カマド左側床面 c.底部のみ	底径(6.7)	d.砂粒を含む e.少し不良	平底で、わずかに丸みをもって、開いて立ち上がる。	胴下位＝斜め方向のヘラケズリ 摩耗が多い	ヘラナデ 〈色調〉両面とも淡褐色
図225 12	a.(甕) b.カマド右側床面 c.底部のみ	底径(7.4)	d.小礫2㎜を含む e.やや不良	平底で長胴ぎみに立ち上がる。	胴下部＝縦方向のヘラケズリ 胴下端＝横方向のヘラケズリ	ヘラナデ 〈色調〉両面とも褐色、暗褐色
図225 13	a.(甕) b.カマド左側床面 c.底部のみ	底径(6.4)	d.小礫5㎜以下を多く含む e.少し良好	10と同様だが、やや底部厚が薄い。	胴下位＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉両面とも暗黄褐色、黒褐色	ヘラナデの後、指ナデ
図226 14	a.(甕) b.カマド右と中央床 c.底部欠損	口径(20.3) 頸部(17.0) 胴部最大径(14.0)	d.小礫3㎜以下を多く含む e.少し不良	胴部最大径は、上位で、口縁部は、屈曲して外反する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラケズリ 下位は、斜め方向 〈色調〉暗褐色、黒褐色	ヘラナデの後、指ナデ 〈色調〉淡褐色、暗褐色
図226 15	a.(甕) b.P_1付近 c.底部欠損	口径19.6 頸部径16.5 胴部18.7	d. 小礫7㎜以下を多く含む e.良好	胴部最大径は、上位で、口縁部は、丸みをもって外反する。	14と同様	14と同様
図226 16	a.(甕) b.カマド右側床面 c.全体の1/3	口径19.7 胴大径20.0 底径6.4 器高30.7	d.小礫3㎜以下を含む e.少し不良	胴部最大径は、中位にもち、長胴である。 口縁部は、上位で横に外反する。	14と同様 〈色調〉黒褐色、一部淡赤褐色	14と同様 〈色調〉暗褐色、淡褐色、一部黒褐色
図227 17	a.(甕) b.カマド右側床面 c.底部欠損	口径(19.7) 胴部最大径(19.1)	d.砂粒を多く含む e.少し良好	胴部は球状で胴部最大径は、上位で、口縁部は、わずかな稜をもち、外反する。	14と同様 〈色調〉両面黄褐色	14と同様

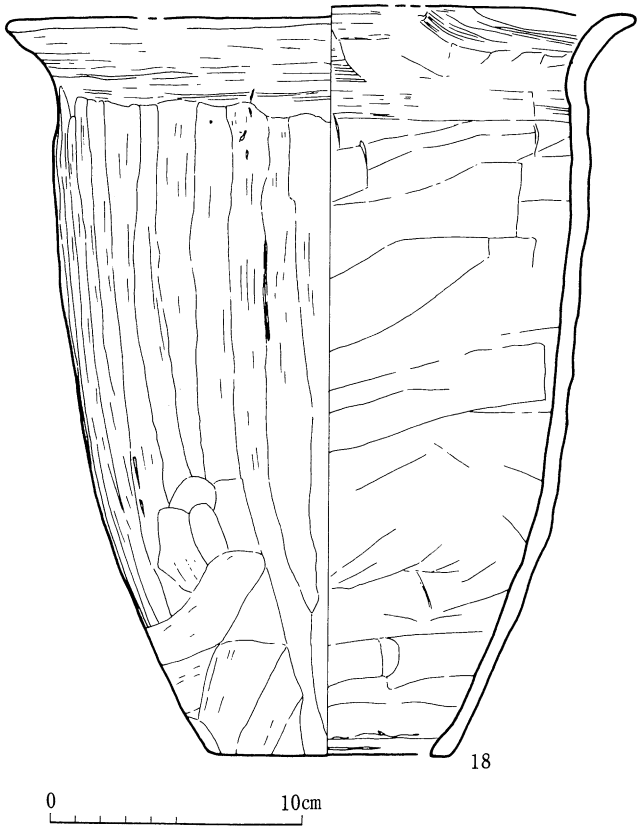


第225図　第139号住居跡出土遺物実測図（６～13）



第226図　第139号住居跡出土遺物実測図(14～16･20)





10は、長胴の甕とみられ、底径は、6.8cm。焼成は、やや不良、胎土は、砂粒を含む。摩耗が多い。

20は、磨石とみられる。一部に使用痕がある。

この他に鉄滓が1点出土している。

第227図　第139号住居跡出土遺物実測図(17～19)

第104表　第139号住居跡出土遺物観察表(２)

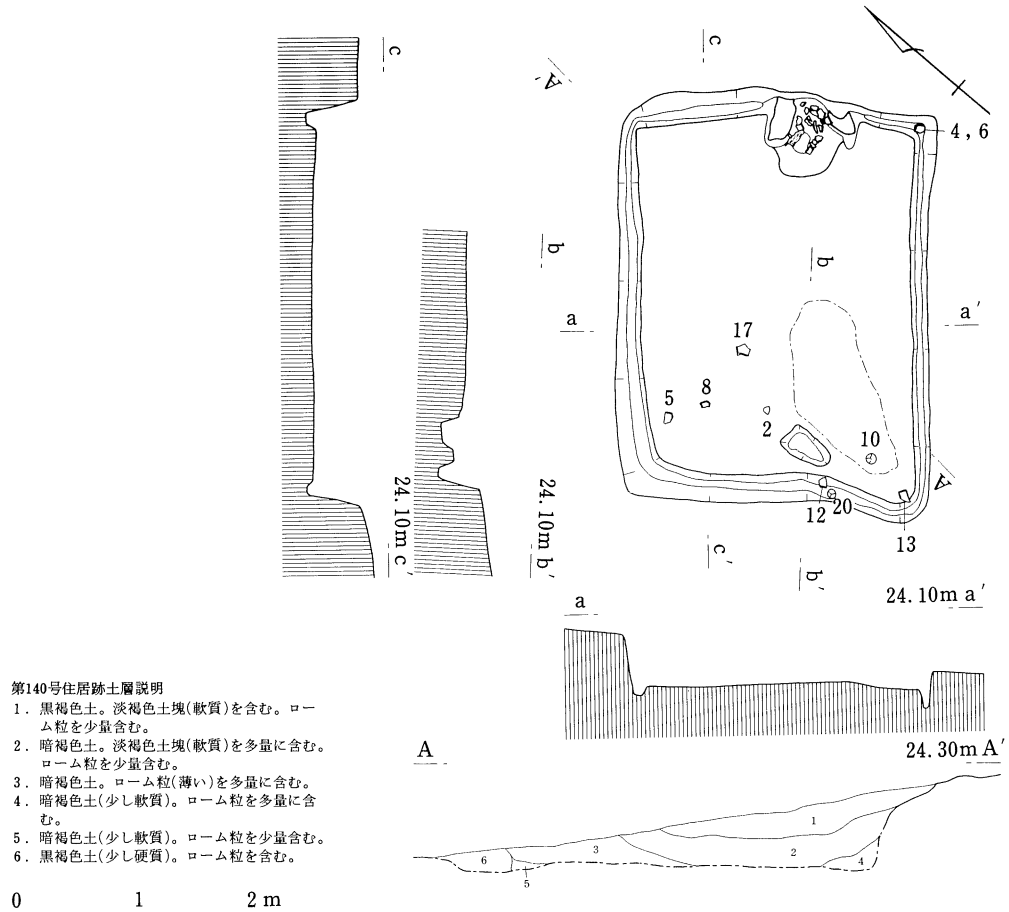
挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図22718	a.甑 b.カマド右側床面 c.ほぼ完形	口径25.0 頸部径21.1 孔径9.6 器高30.1	d.小礫３mm以下を含む e.普通	やや大きめの孔で、丸みをもって、急角度で立ち上がり、口縁部は、外反する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 下位＝斜め方向 〈色調〉淡橙褐色	口縁部＝横方向の指ナデ、一部は斜め方向 胴部＝ヘラナデ 〈色調〉淡褐色、一部暗褐色

(42) 第140号住居跡

調査地区の東側に位置し、東側の谷に向って傾斜している地点であり、今回の調査で最も小谷に近く低い場所に占地される。第145ａ号住居跡は、北西へ約９ｍに所在する。平面形体は、不整長方形で、南西隅がやや突出し、北東側壁は、少し胴張りぎみである。規模は、長軸3.40ｍ、短軸2.57ｍを測り、主軸方位は、長軸方向をはかり、Ｎ－49°－Ｅを示す。壁の立ち上がりは、斜面部のため、北西側壁が高く、南東壁が低い。深さは、42～15cmを測る。床面は、南西側がわずかに窪み、踏み固められた面は、南側に少し認められる。床面積は、約7.20㎡である。壁溝は、四周し、幅４～11cm、深さ５～13cmを測る。床面内のピットは、カマドの向い側の南西側床面に１本検出され、不整長円形を呈し、大きさは、上端43×22cm、下端31×16cm、深さ22cmを計る。いわゆる出入口相当施設用のピットと推定される。覆土は、暗褐色土が主体で、自然堆積とみられる。カマドは、北東側壁の中央やや南側寄りに設置され、袖の材料の一部に瓦が使用されている。煙道部は、竪穴壁をわずかに掘り込んでいる程度である。出土遺物は、土師器坏、甕、灰釉陶器長頸壷、須恵器坏蓋(流れ込みか)、同甕片、紡錘車、瓦等を検出。

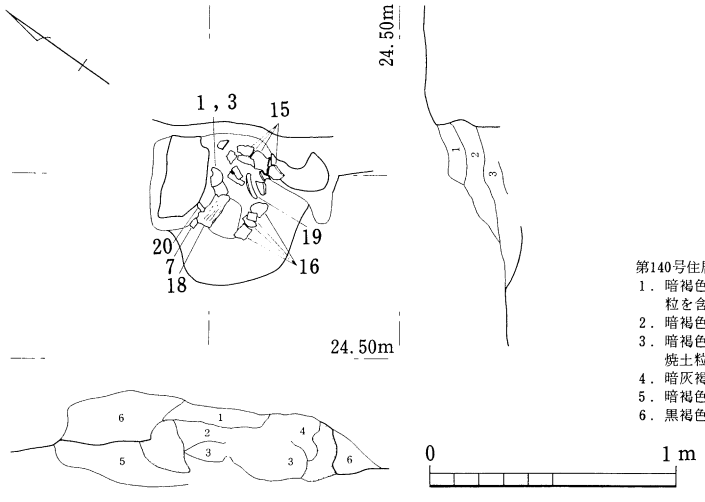
第105表　第140号住居跡出土遺物観察表(１)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図2301	a.坏 b.カマド内 c.口縁部の20%欠損	口径12.3 底径5.7 器高4.1	d. 緻密 e.やや不良	底部は、平底、体部は、やや丸みももって、開いて立ち上がる。少し小型である。	ロクロ水挽き成整形 体下位＝回転ヘラケズリ２段 底部＝右回転ロクロヘラ切り離し	黒い粒子が付着。 〈色調〉両面とも淡褐色
図2302	a.(坏) b.西側床面 c.底部～体下位残存	底径4.8	d.砂粒を少し含む e.普通	１と同様	ロクロ水挽き成整形 体下位＝回転ヘラケズリ１段 底部＝右回転ロクロ糸切り離し。未調整	〈色調〉両面とも暗褐色、淡褐色
図2303	a.坏 b.カマド内 c.底中央部を欠損	口径(12.25) 底径(5.35) 器高(4.8)	d.小礫２mm以下を極少量含む e.普通	１と同様	体下位＝手持ちヘラケズリ３段 他は、２と同様	粘土のヒビ割れが有る。 〈色調〉両面とも淡褐色
図2304	a.坏 b.覆土内 c.全体の2/3の残存	口径12.45 底径5.7 器高4.3	３と同様	１と同様	ロクロ水挽き成整形 体部に指頭痕、糸痕が残る 底部＝右回転ロクロ糸切り離し。未調整	〈色調〉両面とも暗褐色、淡褐色
図2305	a.(坏) b.西側床面 c.全体の1/3底中央欠	口径(12.8) 底径(5.8) 器高4.2	d.小礫３mm以下を極少含金雲母を含 e.普通	１と同様	底部は、右回転ロクロ糸切り離し後、指ナデ 他は、４と同様	黒い粒子が付着 〈色調〉両面とも暗褐色、淡茶褐色
図2306	a.坏 b.覆土内 c.全体の2/3の残存	口径13.1 底径5.9 器高4.35	d.小礫２mm以下を極少含む e.少し良好	１と同様	ロクロ水挽き成整形 体下位＝手持ちヘラケズリ 底部＝右回転ロクロ糸切り離し	〈色調〉暗褐色、一部黒褐色
図2307	a.坏 b.カマド内 c.全体の2/3の残存	口径13.7 底径6.2 器高4.4	６と同様	６と同様	６と同様	６と同様



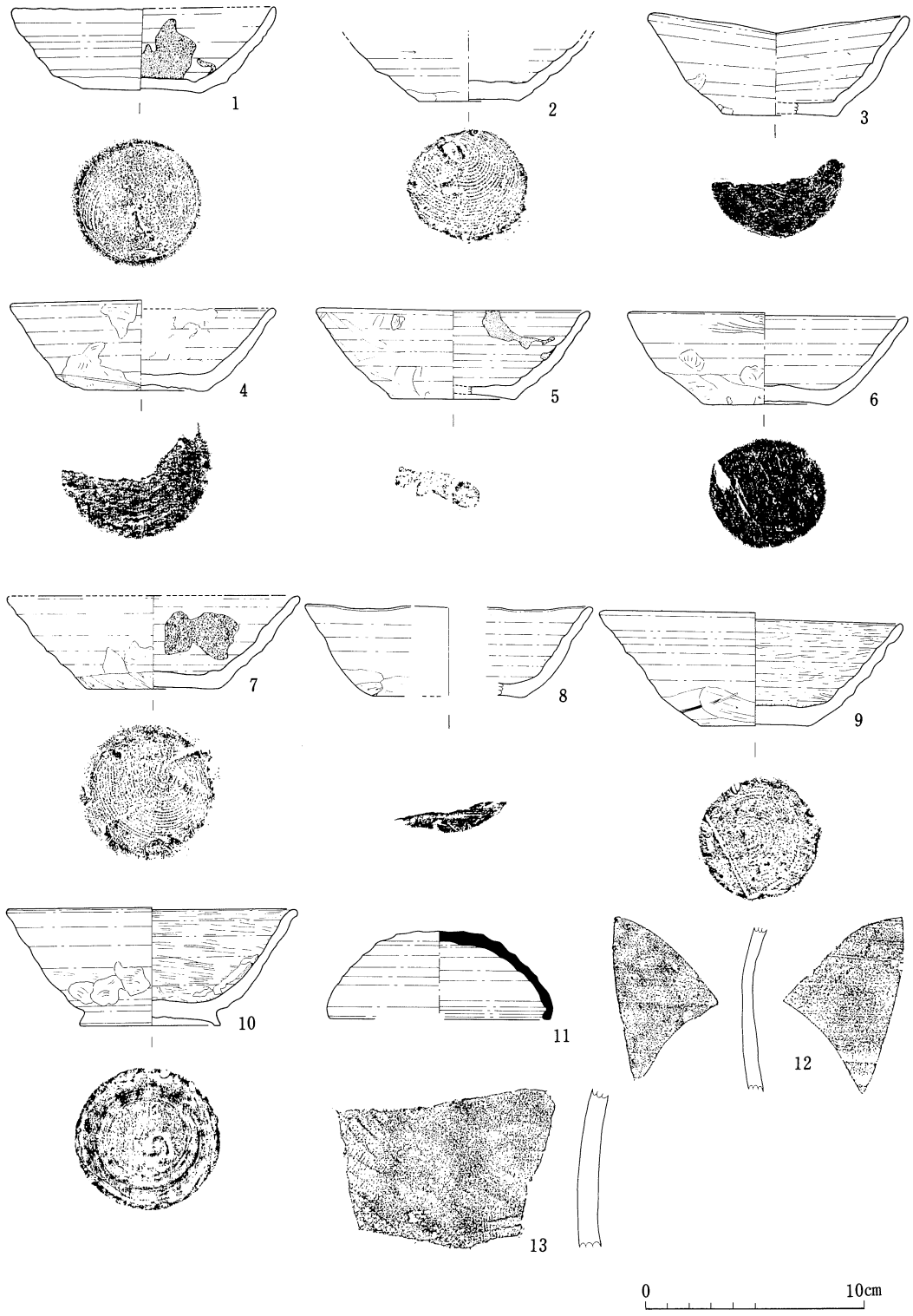
第140号住居跡土層説明
1．黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)を含む。ローム粒を少量含む。
2．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を多量に含む。ローム粒を少量含む。
3．暗褐色土。ローム粒(薄い)を多量に含む。
4．暗褐色土(少し軟質)。ローム粒を多量に含む。
5．暗褐色土(少し軟質)。ローム粒を少量含む。
6．黒褐色土(少し硬質)。ローム粒を含む。

第228図　第140号住居跡実測図

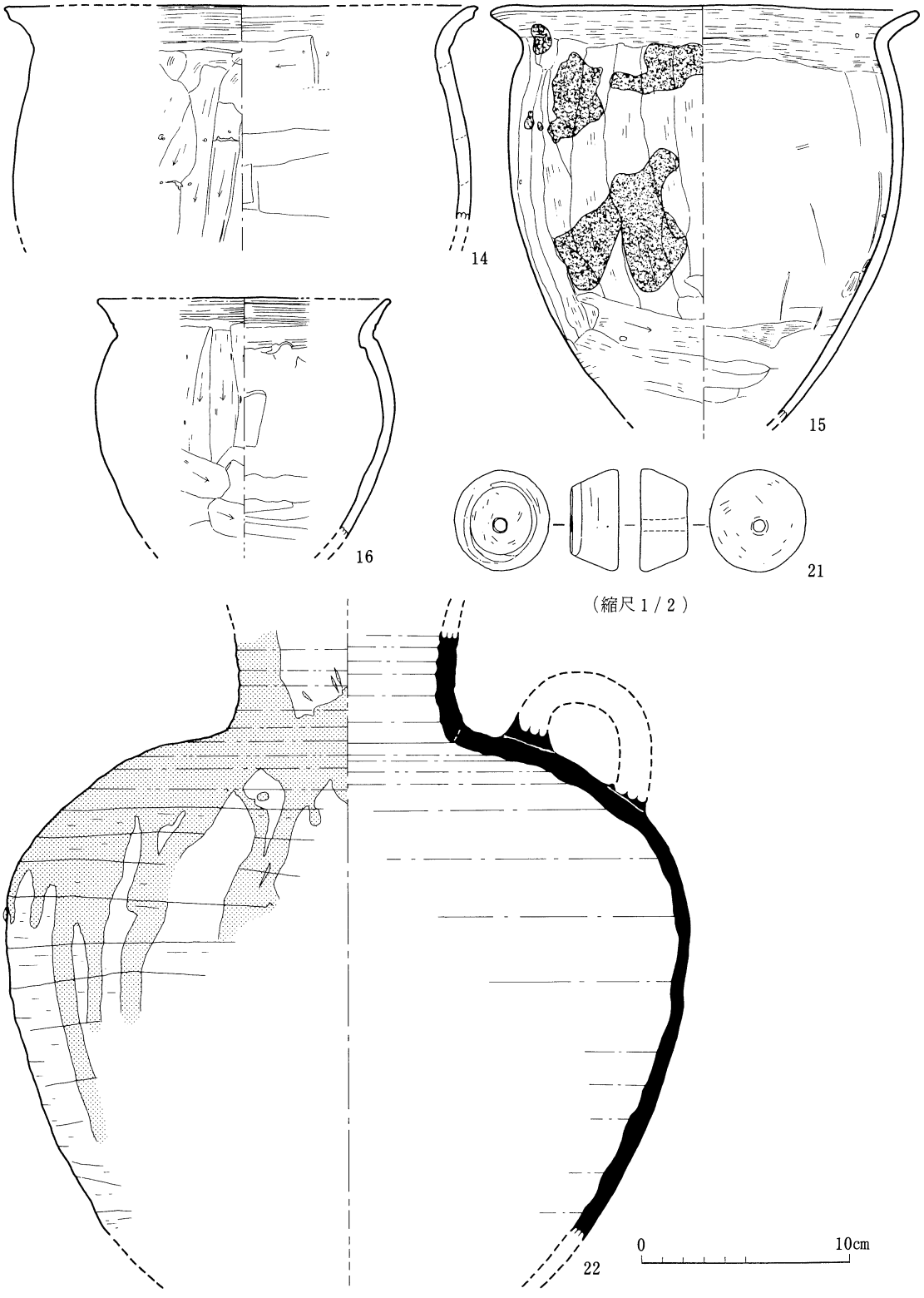


第140号住居跡カマド土層説明
1．暗褐色土。粘土を全体に薄く含む。ローム粒を含む。
2．暗褐色土(軟質)。粘土を全体に少量含む。
3．暗褐色土(軟質)。灰と粘土を多量に含む。焼土粒を含む。
4．暗灰褐色土(少し硬質)。粘土を多量に含む。
5．暗褐色土(やや硬質)。ローム粒を含む。
6．黒褐色土。焼土粒を多量に含む。

第229図　第140号住居跡カマド実測図



第230図　第140号住居跡出土遺物実測図(１～13)



第231図　第140号住居跡出土遺物実測図（14～16・21・22）

No.17は、女瓦で、凹面には、布目を有し、布端部も認められる。凸面は、縄目がなされていたと推定されるが、摩耗が多く不明確である。瓦端部は、ヘラ切りがなされる。色調は、淡褐色(酸化焔)色を呈し、焼成は、やや不良。No.18も、女瓦で、凹面に布目痕、凸面には、縄目痕がみられる。色調は、灰褐色(還元焔)で、焼成は、やや不良。

No.19も、女瓦で、凹面は、布目痕をナデによって摩消し、凸面は、同じくナデによって、摩消されている。色調は淡褐色で、焼成は普通。

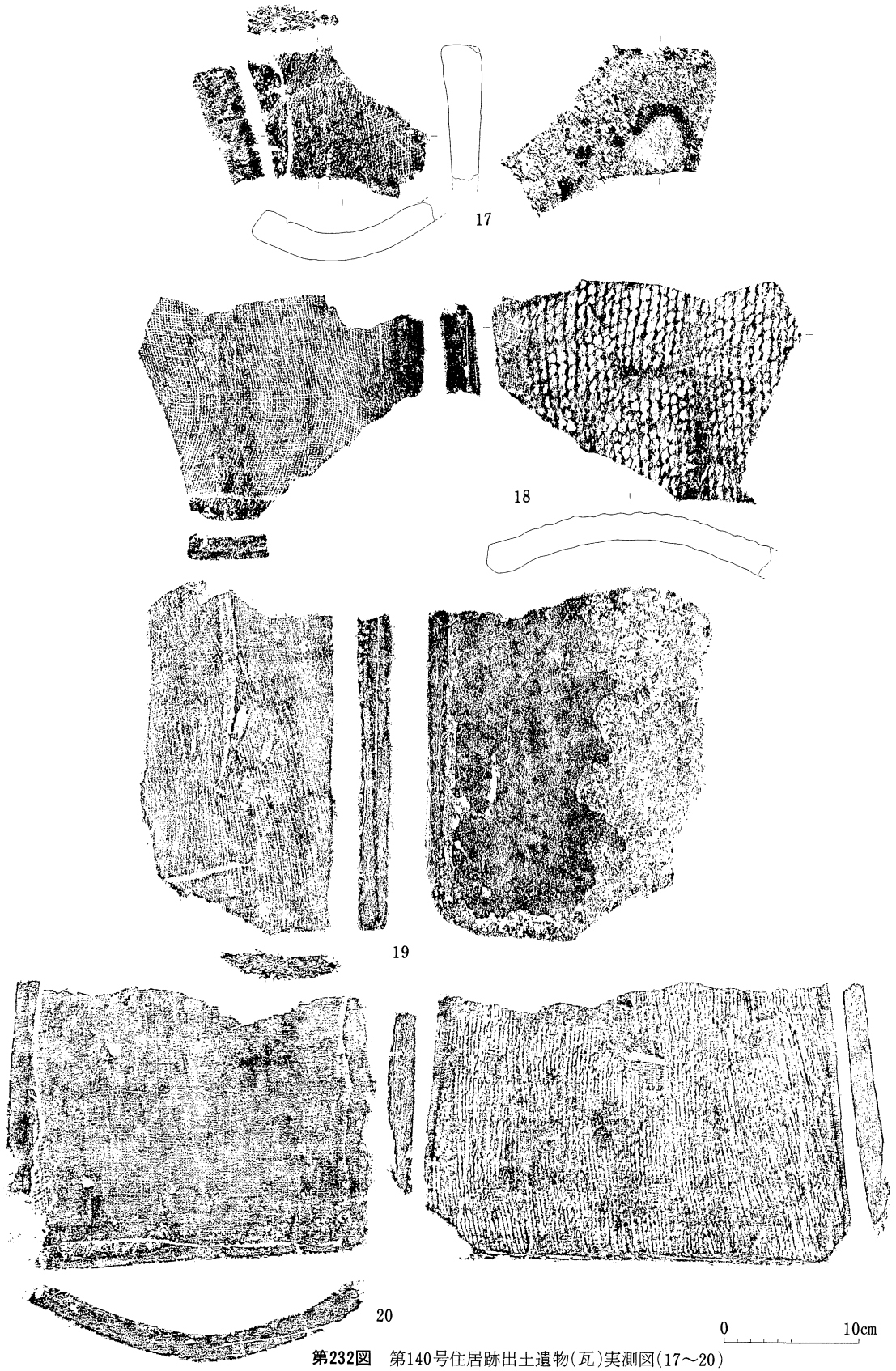
No.20も、女瓦で、最も多く残存する破片で、全体の1/3強の破片と考えられる。凹面は、布目痕、凸面は、縄目痕がみられる。焼成は良好、色調は暗灰色。胎土に砂粒を含む。

No.21は、紡錘車で、径4.6cm、厚さ2.3cm、孔径0.6cm。色調は、淡灰色である。

No.22は、灰釉陶器で、把手が1ヶ所に付く、長頸壷である。底部と口縁部を欠損する。大型で胴部最大径は、上部に有り、肩を有する形である。灰釉が胴上部付近を中心にかかっている。胴部最大径は、32.5cmを計る。胎土は、黒色粒を含み、緻密。色調は、灰褐色を呈する。

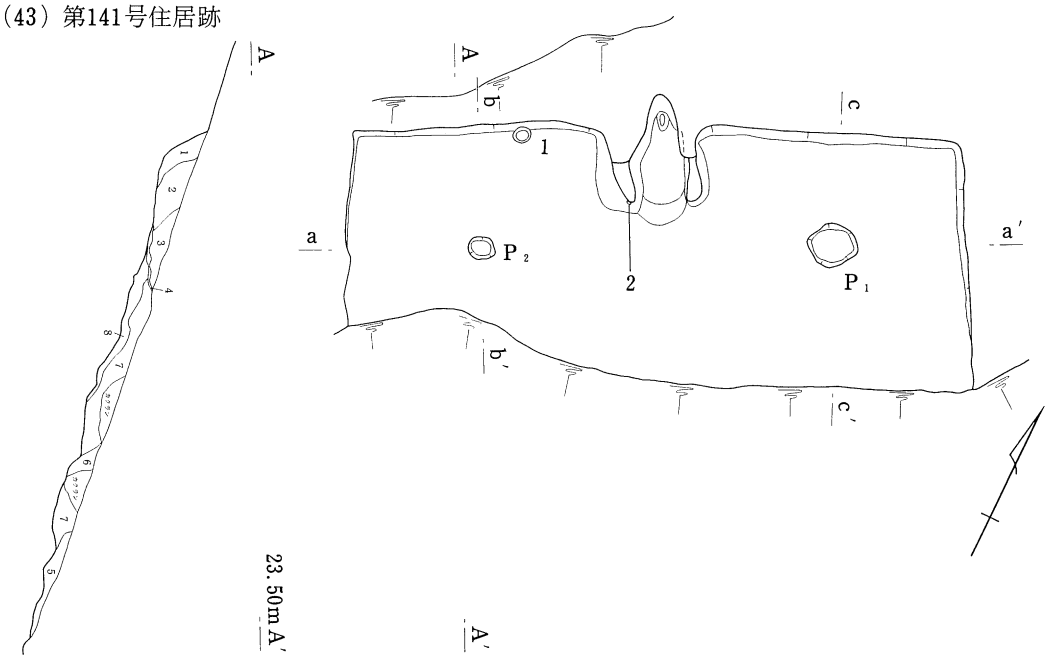
第106表　第140号住居跡出土遺物観察表(2)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図230 8	a.坏 b.西側床面 c.全体の1/4	口径13.5 底径7.2 器高4.3	d.小礫2㎜以下を少し含む e.普通	1と同様であるが、口縁部がゆるんでいる。	6と同様	〈色調〉両面とも暗褐色、淡褐色
図230 9	a.坏 b.覆土内 c.全体の3/4	口径14.2 底径5.2 器高4.5	8と同様	1と同様であるが、体部立ち上がりは、やや開きぎみ。	6と同様 〈色調〉両面とも暗褐色、一部黒褐色	ヘラミガキがなされ、黒色処理が施される。ウルシ?付着
図230 10	a.坏 b.南側床面 c.完形	口径13.7 高台径6.6 器高6.6	d.緻密 e.普通	9と同様であるが、底部に断面方形の細い高台(7㎜)を付す。	〈色調〉淡褐色、一部黒褐色	9と同様 〈色調〉黒褐色、茶褐色
図230 11	a.須恵器蓋坏 b.覆土内 c.1/4残存	口径10.4 最大径10.55 器高4.15	d.小礫3㎜以下を極少量含む e.普通	小型で埦状を呈し、口縁の内面に沈線をもつ。	〈色調〉灰褐色	〈色調〉灰色
図230 12	a.須恵器甕 胴部片 b.南側床面	器厚0.5～0.7	d.小礫3㎜を含む e.普通		平行タタキ目	
図230 13	a.須恵器甕 胴部片 b.南側床面	器厚0.9～1.1	d.緻密 e.普通		平行タタキ目の後カキ目	
図231 14	a.(甕) b.覆土内 c.上半部のみ残存1/8	口径(22.0) 頸部径(19.4) 胴部最大径(21.4)	d.小礫2㎜以下を含む e.やや良好	胴部最大径は、胴上部に有り、口縁部は屈曲して外反し、口唇部はつまみ上げ。	口縁部=横ナデ 胴部=縦方向のヘラケズリ 粘土接合痕がわずかに残る 〈色調〉淡茶褐色、淡褐色	口縁部=横ナデ 胴部=横方向ヘラナデの後指ナデ 〈色調〉黒褐色、淡茶褐色
図231 15	a.(甕) b.カマド内 c.底部付近欠損1/2	口径(20.0) 頸部径(17.05) 胴部最大径(18.40)	d.小礫4㎜以下を含む e.良好	やや胴部が短く、胴部最大径は上部で、口縁部は、くの字状に短く外反する。	口縁部=横ナデ 胴部=縦方向ヘラケズリ 下位=横方向ヘラケズリ 〈色調〉両面とも暗褐色	14と同様
図231 16	a.(甕) b.カマド内 c.底部欠損全体の1/6	口径(13.7) 頸部径(12.0) 胴部最大径(14.0)	d. 砂粒を含む e. 普通	胴部は、やや球状を呈し、胴最大径は上部。口縁部はくの字状に外反。内面に稜	口縁部=横ナデ 胴部=縦方向のヘラケズリ 下位=横方向 〈色調〉暗褐色、黒褐色	口縁部=横ナデ 胴部=ヘラナデの後、布? ブキ 〈色調〉黒褐色



第232図　第140号住居跡出土遺物(瓦)実測図(17～20)

（43）第141号住居跡

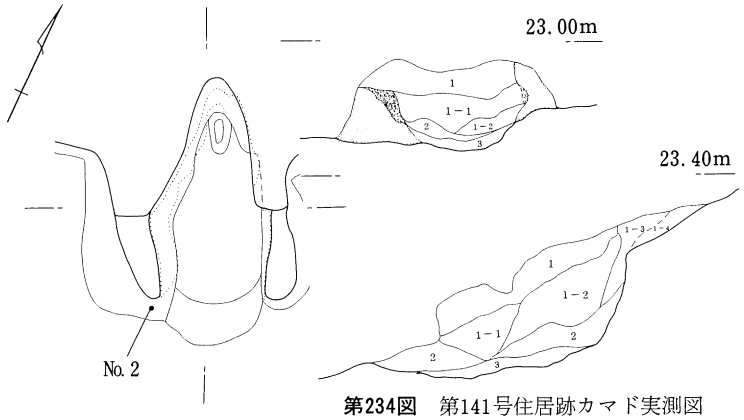


第141号住居跡土層説明

1．褐色土(軟質)。炭と焼土粒を多量に含む。
2．褐色土（少し軟質)。黒色土塊を含む。炭と焼土粒を少量含む。
3．暗褐色土(軟質)。炭と焼土粒を含む。
（2．3．住居跡覆土。）
4．黒色土(硬質)。炭と焼土粒を多量に含む。床面を構成する土。
5．暗褐色土。粘土粒を含む。
6．暗褐色土(硬質で粘性がある)。
7．暗褐色土(砂質)。黄灰白色粒を多量に含む。
8．黄灰白色砂岩状を呈する土。

0　1　2 m

第233図　第141号住居跡実測図



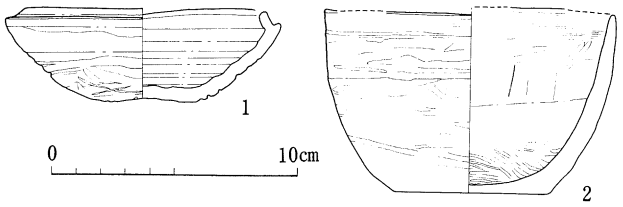
第141号住居跡カマド土層説明

1．暗灰褐色土(硬質)。粘土を多量に含む。焼土塊を少量含む。
1－1．焼土塊が極少量含まれる。
1－2．焼土塊を多量に含む。
1－3．暗褐色土塊を少量含む。
1－4．ローム土粒を少量含む。
2．暗赤褐色土。灰と焼土粒を多量に含む。
3．暗赤橙色土。焼土塊を多量に含む。ローム土塊を少量含む。

0　1 m

第234図　第141号住居跡カマド実測図

調査地区の東側に位置し、小谷に降りる傾斜面に占地されている。第137号住居跡より南東約12mの地点である。プランの半分以上(南東側)が、傾斜面のために、後世に崩壊したとみられ、削除されている。したがって残存している部分は、北西側のカマド付近及び床面のみである。平面形体は、わずかに胴張りぎみの方形と推定される。規模は、南西～北東方向で5.08mを測り、主軸方位は、南東～北西方向をはかり、N－25°－Wを示す。壁の立ち上がりは、傾斜面のため、北西側壁が残存し、最大で44cmを測る。床面は、北西側から南東側にかけて2mの距離で、レベルは、10cmほど下っている。また、北西側部分だけの残存で有り、床面積は、不明である。壁溝は、認められない。床面内のピットは、主柱穴4本のうちの2本と考えられるピットが検出されている。ピット間の距離は、2.85mを測り、各ピットの大きさは、P_1上端42×36cm、下端34×25cm、深さ63cm、P_2上端23×18cm、下端16×11cm、深さ68cmである。床面には、全体に焼土と細かい炭化物が覆っていた。竪穴の覆土は、褐色土が主体でローム土塊を中に多く含んでおり、人為的な埋めもどしの可能性がある。カマドは、北西側壁の中央に位置し、保存状況は、不良である。煙道部は、竪穴壁を約30cm掘り込んでいる。出土遺物は、カマド左袖前面より、鉢No.2、カマド左側の竪穴壁付近より、須恵器坏身が検出されている。



第235図　第141号住居跡出土遺物実測図

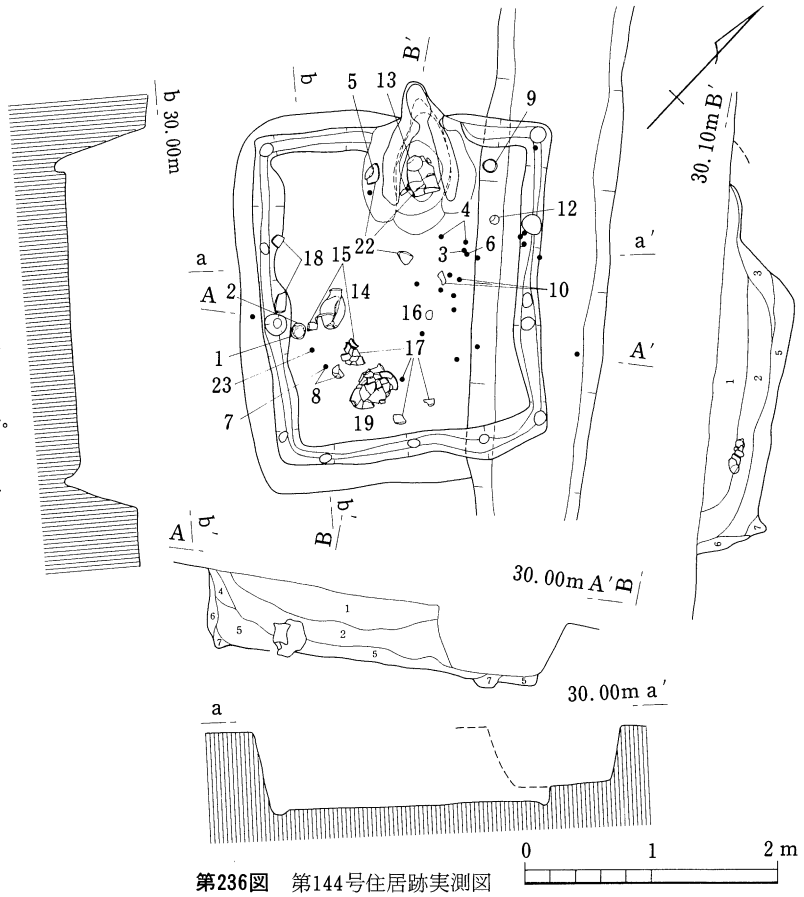
1は、須恵器坏身で、小さく斜めに立ち上がるかえりをもつ。小型で、底部外面は、手持ちのヘラケズリがなされる。胎土は、緻密で、色調は、外面が、暗灰色、内面は、淡灰色を呈し、焼成は良好である。口径9.6cm、器高3.6cmを計る。

2は、土師器鉢で、平底を呈し、椀状に立ち上がる。胎土は、砂粒を少し含み、色調は、両面とも暗褐色と暗茶褐色で、焼成は、少し良好である。体部両面には、ヘラミガキが認められる。口径11.5cm、底径6.1cm、器高7.4cmを計る。

(44) 第144号住居跡

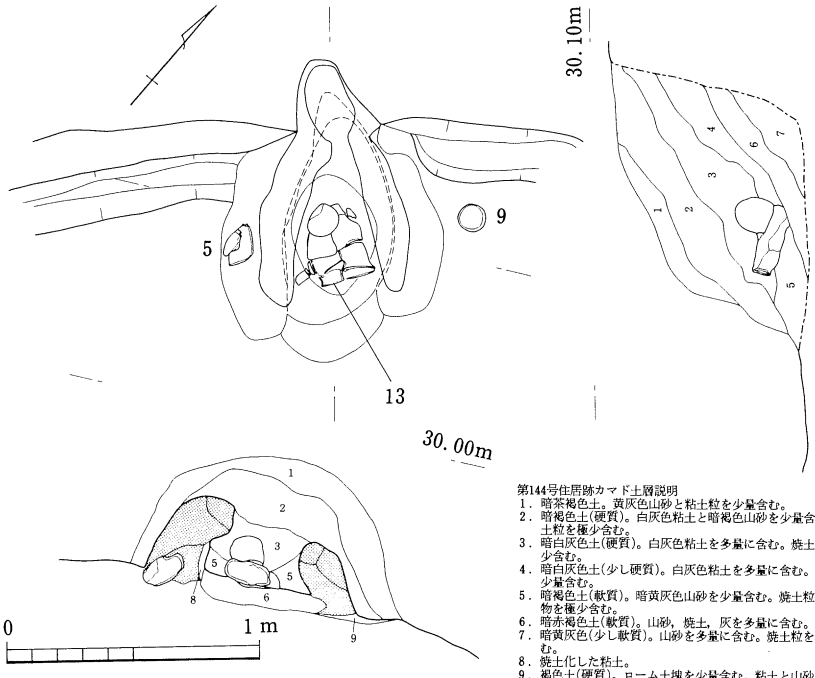
調査地区の南側に位置し、南東に約8mで小谷に下る傾斜面となる地点である。また、第103号方形周溝状遺構の溝にプランの北東側が切られている。しかし、床面までは、溝の底部は切り込んでいない。平面形体は、不整方形で、北東側壁が少し短い。規模は、長軸3.00m、短軸2.37mを測り、小型の竪穴である。主軸方位は、長軸方向をはかり、N－42°－Wを示す。壁の立ち上がりは、北西側がやや高く残り、最大で85cmを測る。床面は、ハードローム層内の

第144号住居跡土層説明
1．暗褐色土。褐色土塊(軟質)を斑点状に含む。焼土粒を少量含む。
2．暗褐色土。黒色土塊(軟質)を斑点状に含む。
3．暗褐色土(少し硬質)。粘土、山砂を少量含む。
4．暗褐色土。ローム粒を少量含む。
5．暗褐色土。ローム土塊を少量含む。炭化物を少量含む。
6．褐色土。ローム粒を多量に含む。
7．暗褐色土(少し軟質)。炭化物を少量混入。



第236図　第144号住居跡実測図

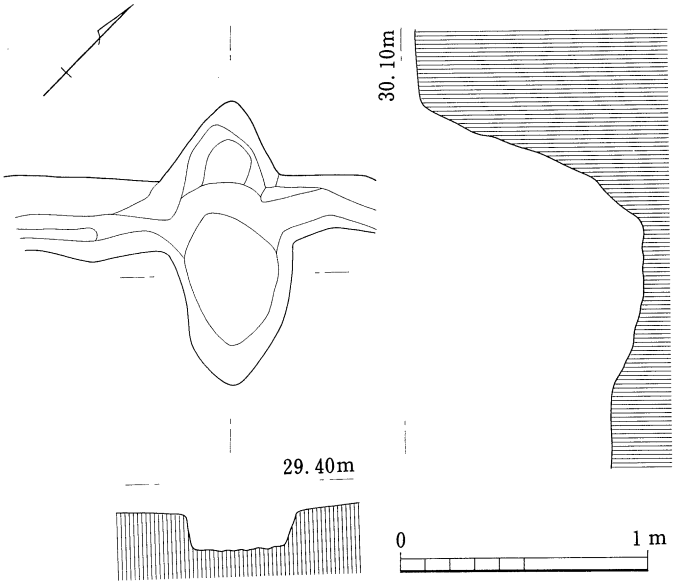
レベルに設定され、比較的平坦である。踏み固められた面は、床面中央に認められる。床面積は、約5.26㎡である。壁溝は、四周し、幅3～12cm、深さ3～14cmを計り、浅い小ピットが多く存在する。床面内のピットは、検出されなかった。焼土の流れ込みは、認められない。竪穴の覆土は、暗褐色土を主体とし、自然堆積の状況を呈する。カマドは、北西側壁の中央やや東寄りに設置され、煙道部は、竪穴壁を逆三角形に約30cm掘り込み、立ち上がりは、急傾斜で、高



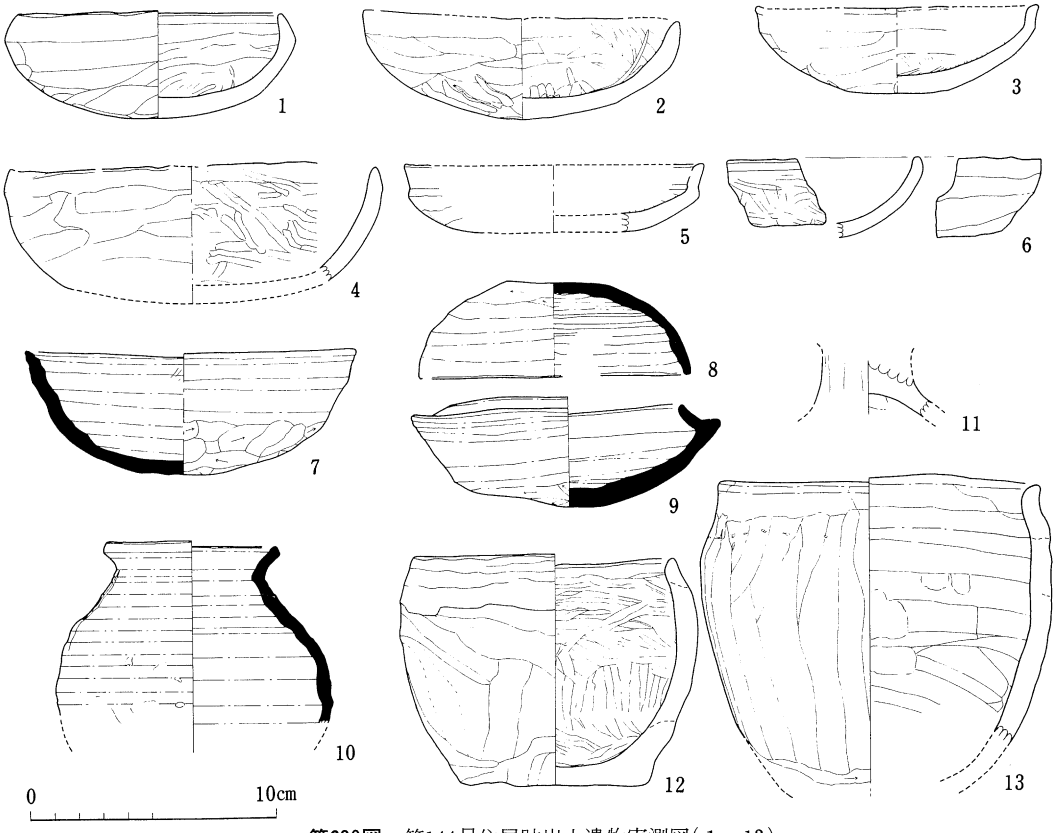
第237図　第144号住居跡カマド実測図

第144号住居跡カマド土層説明
1．暗茶褐色土。黄灰色山砂と粘土粒を少量含む。
2．暗褐色土(硬質)。白灰色粘土と暗褐色山砂を少量含む。焼土粒を極少含む。
3．暗白灰色土(硬質)。白灰色粘土を多量に含む。焼土粒を極少含む。
4．暗白灰色土(少し硬質)。白灰色粘土を多量に含む。山砂を少量含む。
5．暗褐色土(軟質)。暗黄灰色山砂を少量含む。焼土粒と炭化物を極少含む。
6．暗赤褐色土(軟質)。山砂，焼土，灰を多量に含む。
7．暗黄灰色(少し軟質)。山砂を多量に含む。焼土粒を極少含む。
8．焼土化した粘土。
9．褐色土(硬質)。ローム土塊を少量含む。粘土と山砂を多量に含む。

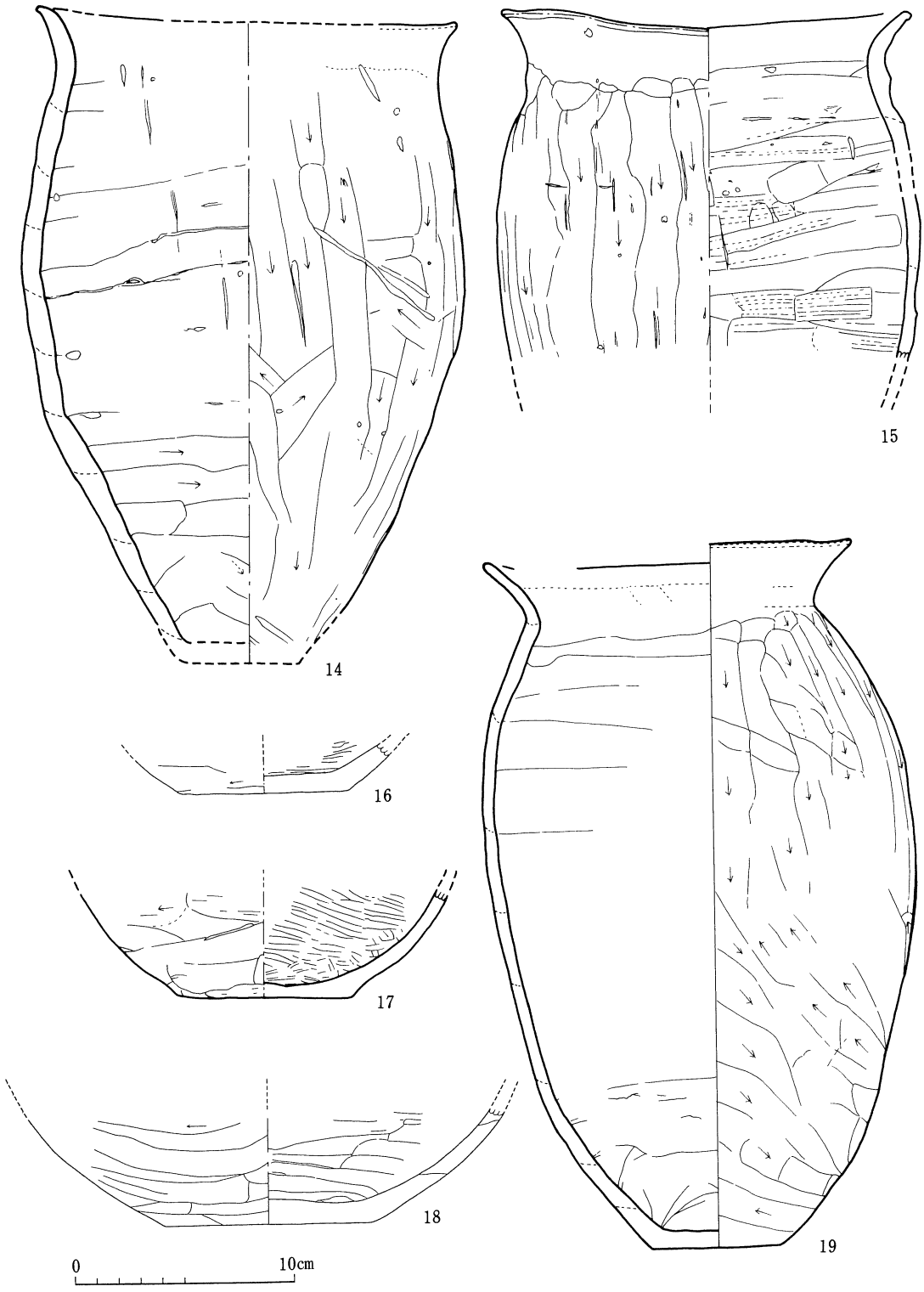
さは約80cmである。出土遺物は、土師器坏が、6点、須恵器坏身2、蓋1、土師器高坏片1、須恵器小型壷1、土師器鉢2、甕7、甑1、須恵器長頸壷片2の計23点(小片も含む)が出土している。そのうち、No.5、13、22がカマド内より、No.9、12がカマド右側床面、No.3・4・6がカマド右前面床面、No.10・16・22が中央付近床面、No.17・19が南側床面、No.1・2・7・8・14・15・18が西側より出土。



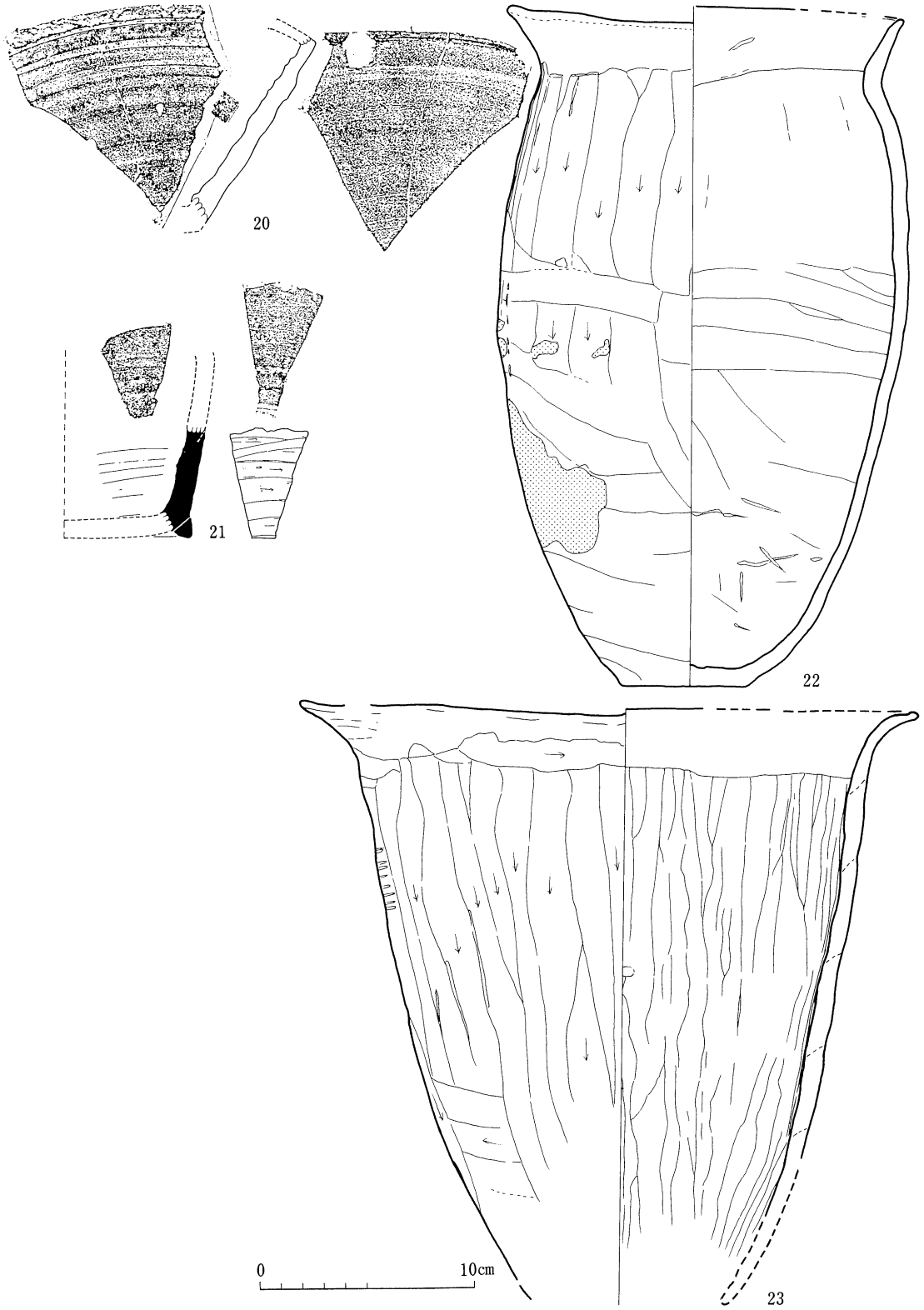
第238図　第144号住居跡カマド掘り方実測図



第239図　第144号住居跡出土遺物実測図(1～13)



第240図　第144号住居跡出土遺物実測図(14～19)



第241図　第144号住居跡出土遺物実測図(20～23)

第107表　第144号住居跡出土遺物観察表(１)

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調	
					外面	内面
図239 1	a.坏 b.南側床面 c.完形	口径10.75 口縁稜径11.8 器高4.4	d.砂粒を少量含む e.やや不良	丸底で浅い椀状を呈し、口縁部は、稜をもち、内傾する。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 〈色調〉両面とも暗褐色	ヘラナデ 両面とも少し摩耗。
図239 2	a.坏 b.西側床面 c.全体の4/5残存	口径12.9 器高4.0	d.小礫2㎜以下及び鉄分を含む e.普通	丸底で浅い椀状を呈し、口縁部は、稜をもち、やや直立する。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ(少し荒い) 〈色調〉淡褐色、黒褐色	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラミガキ 〈色調〉暗褐色
図239 3	a.坏 b.カマド内 c.全体の1/4	口径(11.5) 器高(3.4)	d.緻密 e.やや不良	丸底で浅い椀状を呈し、口縁部は、稜をもち、短く外反。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 〈色調〉両面とも暗褐色	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラミガキ
図239 4	a.(鉢) b.カマド右前床面 c.底部欠損全体の1/5	口径(14.9) 口縁部稜径(15.4)	3に似る	丸底で、体部は、丸みをもって横方向に開き、上部は椀状に立ち上がる。口縁部は小さく内傾する。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 〈色調〉黒褐色、暗褐色	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラミガキ 〈色調〉黒褐色
図239 5	a.(坏) b.カマド左 c.口縁部のみ1/8	口径(12.2) 器高(2.8)	3に似る	体部は、浅い椀状とみられ、口縁部は、稜をもち、やや外反する。	4と同様 〈色調〉両面暗褐色	4と同様
図239 6	a.(坏) b.カマド右前床面 c.体部上半部～口縁部の1/8残存		d.砂粒を少し含む e.普通	体部は、浅い椀状を呈し、口縁部上位でわずかに直立する。	4と同様 〈色調〉両面とも淡褐色	4と同様
図239 7	a.(坏) b.南側床面 c.全体の2/3残存	口径(13.5) 器高(5.0)	d.砂粒を極少量含む 黒い粒を多く含む e.やや不良	広い平底で、体部は短かく、直線的に立ち上がる。口唇部は薄い。	底部＝手持ちヘラケズリ 体下半部＝ていねいなヘラケズリ 体上部はナデ 〈色調〉淡褐色	〈色調〉淡茶褐色
図239 8	a.須恵器坏蓋 b.南側床面 c.1/2の残存	口径(11.0) 器高(3.95)	d.白色の小礫を少量含む e.普通	小型の椀状を呈する。	天井部は、2段の回転ヘラケズリ 〈色調〉両面とも暗灰色	
図239 9	a.須恵器坏身 b.カマド右側脇床面 c.ほぼ完形	口径9.35 口縁部稜径12.5 器高4.5	d.白色の小礫2～3㎜を少量含む e.良好	小型で、口縁部に高さ5㎜ほどのかえりをもち、全体に少しゆがんでいる。	底部＝左回転のヘラケズリ 〈色調〉両面とも暗灰色	口縁部内面は沈線状となる
図239 10	a.須恵器壺 b.カマド右前床面 c.底部欠損全体の1/4	口径(6.8) 頸部径(6.15) 体部最大径(11.2)	d.白と黒の粒子を少量含む e.良好	小型で、体部は、球状を呈し、口縁部は下位で少し内傾し、上位は、小さく外反する。 口唇部は、薄くつまみ上げている。	〈色調〉両面とも暗灰色	
図239 11	a.(高坏) b.覆土内 c.脚部上半部のみ残存	残存最大径3.7	d.砂粒を少量含む e.普通	径の小さい高坏の脚上部片。	縦方向のヘラケズリ 赤彩がなされる 〈色調〉赤褐色	ヘラケズリダシ 下位＝横ナデ 〈色調〉暗褐色
図239 12	a.鉢 b.カマド右側床面 c.完形	口径10.6 体最大径12.1 底径7.7 器高9.5	d.緻密 e.普通	平底で、体部は、球状で、最大径は、上位、口縁部は、内傾し、口唇部は、細い。	口縁部＝横ナデ 体部＝縦及び横方向のヘラケズリ、全体に摩耗する。 〈色調〉両面とも淡褐色	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラミガキ 一部剝離がみられる
図239 13	a.鉢 b.カマド内 c.底部欠損全体70%	口径13.1 胴部最大径14.2	d,小礫2㎜以下を少量含む e.やや不良	12に似る。 口縁部は直立ぎみ。	12と同様 体部のヘラケズリは縦方向が多い 〈色調〉12と同様	
図240 14	a.(甕) b.南側床面 c.底部欠損全体の1/3	口径(19.3) 頸部径(17.7) 胴大径(20.4) 器高(30.1)	d.小礫3㎜以下を含む e.良好	体部は、急角度で立ち上がり、最大径は中位にもち、口縁部は、わずかに外反。	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラケズリ 〈色調〉暗褐色、淡茶褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデ 粘土接合痕がわずかに残る 〈色調〉暗褐色
図240 15	a.甕 b.南側床面 c.胴上半部80%残存	口径(19.1) 頸部径(16.6) 胴大径(19.6)	d.小礫3㎜以下を含む e.普通	最大径は、胴部に有り、口縁部は、外反し、口唇部は、やや丸みを帯びる。	14と同様 〈色調〉両面とも淡褐色、暗褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデの後、横指ナデ

第108表　第144号住居跡出土遺物観察表(２)

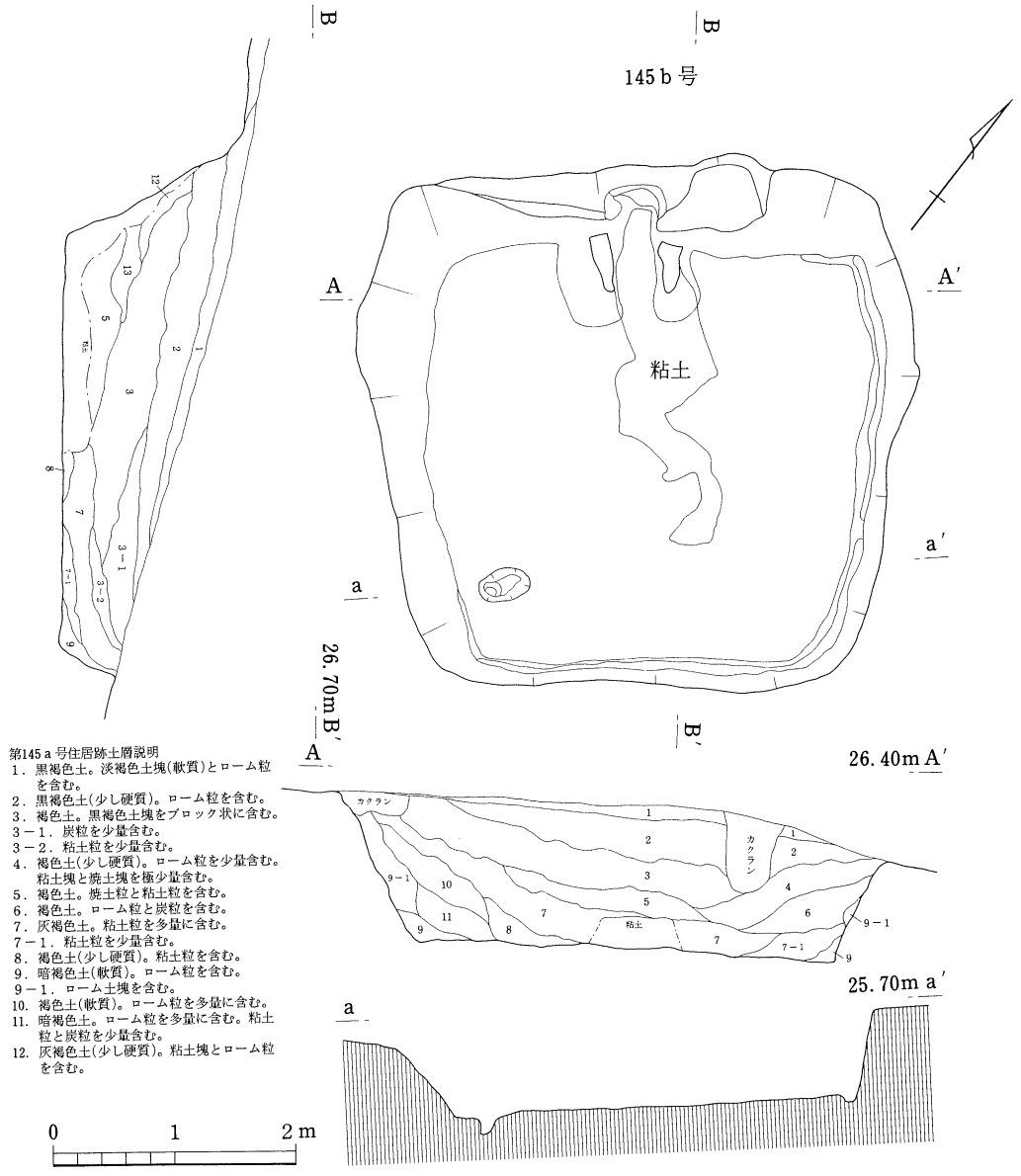
挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図240 16	a.(甕) b.床面中央 c.底部のみ	底径(7.9)	d.緻密 e.やや不良	平底	横方向のヘラケズリ 摩耗が多い 〈色調〉暗褐色	ミガキにちかいヘラナデ 〈色調〉黒褐色、淡褐色
図240 17	a.(甕) b.南側床面 c.底部～胴下位残存	底径(8.0)	d.砂粒を含む 鉄分を含む e.やや不良	平底で、胴部は、少し丸みをもって立ち上がる。	16と同様 〈色調〉黒褐色、淡茶褐色	16と同様 〈色調〉淡褐色
図240 18	a.(甕) b.南側床面 c.底部～胴下位１/３	底径(9.65)	16と同様	17と同様 同一個体ではない。	17と同様	17と同様
図240 19	a.甕 b.南側床面 c.90%残存	口径17.1 胴大径19.6 底径4.0 器高33.4	d.小礫３mm以下を含む e.良好	小さな平底で、長胴、最大径は、胴上部口縁部は、くの字状に外反する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝斜め及び縦方向のヘラケズリ 〈色調〉淡褐色、暗褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデの後、指ナデ 〈色調〉淡褐色、暗褐色
図241 20	a.須恵器壷 体部片 b.覆土内	器厚３～６mm	d.小礫３mm以下を含む e.良好		〈色調〉灰色	〈色調〉淡灰色
図241 21	a.須恵器壷 底部片 b.覆土内	器厚 ９～11.5mm	d.小礫２mm以下を含む e.良好	断面三角形の高台が底部に付き、底部は下に張り出す?	〈色調〉両面とも灰褐色	
図241 22	a.甕 b.カマド付近 c.90%残存	口径18.6 胴大径19.4 底径5.8 器高32.8	d.小礫３mm以下を含む e.良好	19に似る。 口縁部の屈曲が19より少し弱い。	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラケズリ 〈色調〉暗褐色、淡茶褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラナデ 〈色調〉暗褐色、淡褐色
図241 23	a.甑 b.南側床面 c.底部欠損	口径29.2	d.小礫２mm以下を含む e.普通	胴部は、急角度で直線的に開き、口縁部は、外反する。	口縁部＝横ナデ 胴部＝ヘラケズリ、少し摩耗 〈色調〉淡褐色、一部淡赤褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝横方向のヘラナデの後、ヘラミガキ

(45) 第145a号住居跡

調査地区の東側に位置し、東側の小谷に向う傾斜面に立地する。第146号住居跡が東約２mに所在し、また、第145b号住居跡の南側大半を切っている。平面形体は、胴張りの隅円方形を呈し、規模は、長軸4.62m、短軸4.17mを測る。主軸方位は、短軸方向をはかり、N－37°－Wを示す。壁の立ち上がりは、斜面部に占地されているため、北西側壁が高く残り、南東側壁は低い。深さは、1.48cm～47cmである。特に北西側壁は、高く残存している。床面は、ほぼ平担で、踏み固められた面は、不明瞭である。床面積は、約11.59㎡を測る。壁溝は、浅く、東側半分程検出された。最深部で６cmである。床面内のピットは、南側床面の壁近くに１本存在し、立ち上がりが２段を呈し、大きさは、上端42×27cm、中端32×14cm、16×12cm、下端９×６cm、深さ16cmを測る。竪穴の覆土は、褐色土が主体で自然堆積と考えられる。カマドは、北西側壁のほぼ中央に設置され、保存状況は、不良である。上部には、攪乱のピットが入り、また、カマド粘土が竪穴内に広がり、カマドをかき出した様な状況を呈する。出土遺物は小片のみで復元できうる遺物や特殊な遺物は、検出できなかった。

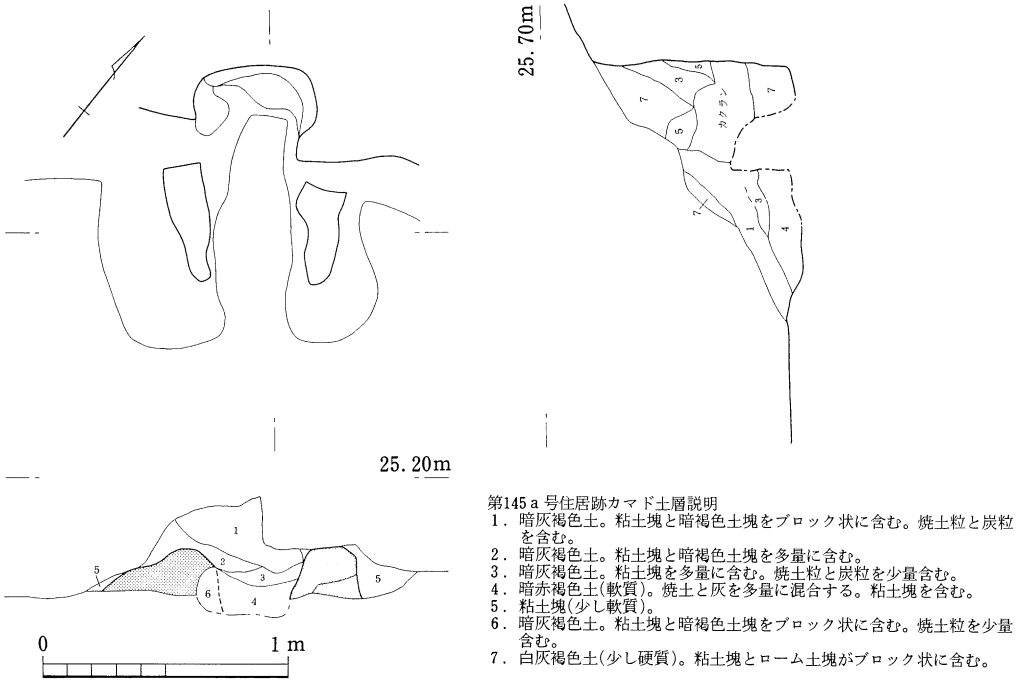
(46) 第145b号住居跡

第145a号住居跡に南側大半を切られており、北側の一部のみの残存である。平面形体は、胴張りの方形と推定される。規模は、南東～北西方向が5.00mを測り、また、主軸方位は同方向の直角方位をはかり、N－34°－Wを示す。壁の立ち上がりは、北西側壁がわずかに残り、最大で23cmを測る。床面は、斜面に占地するため、北西から南東方向へ、2.5mで15cm下がっ



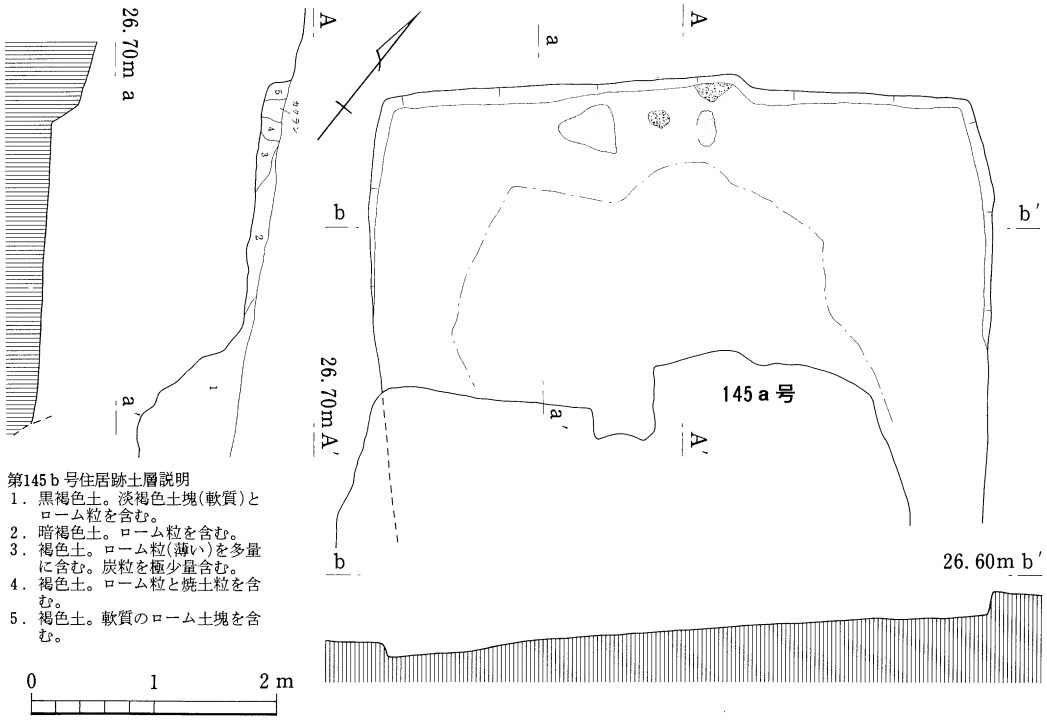
第242図　第145a号住居跡実測図

ている。踏み固められた面は、北西側の中央付近に明確に認められる。壁溝及び床面内のピットは、検出されない。竪穴の覆土は、暗褐色土と褐色土が主体で、褐色土内には、炭粒や焼土粒を含んでいる。北西側の中央付近の床面に粘土と焼土、炭粒等が存在し、カマドが設置されていた可能性が有る。出土遺物は、小片のみで復元可能な遺物は検出できなかった。



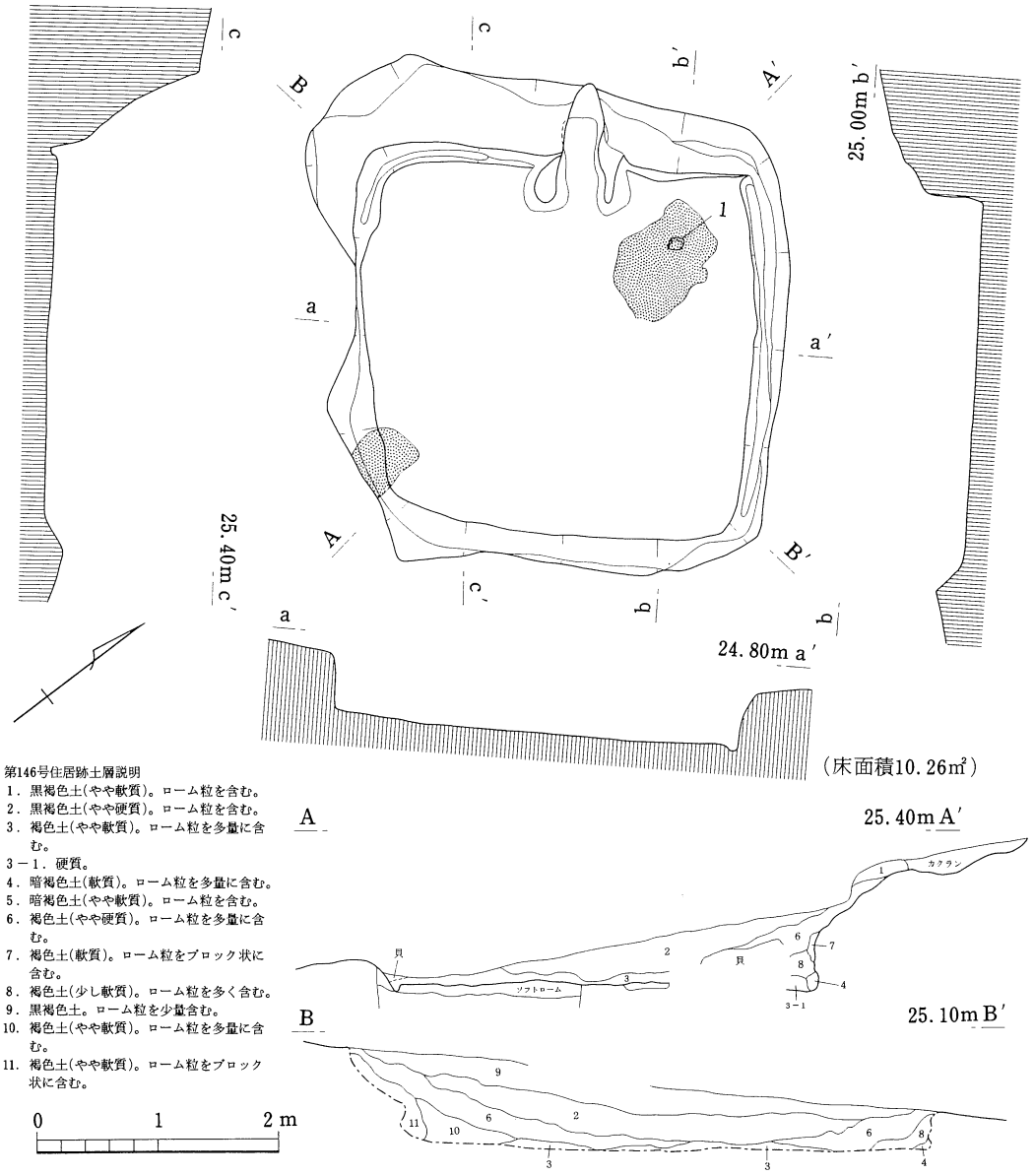
第145a号住居跡カマド土層説明
1．暗灰褐色土。粘土塊と暗褐色土塊をブロック状に含む。焼土粒と炭粒を含む。
2．暗灰褐色土。粘土塊と暗褐色土塊を多量に含む。
3．暗灰褐色土。粘土塊を多量に含む。焼土粒と炭粒を少量含む。
4．暗赤褐色土(軟質)。焼土と灰を多量に混合する。粘土塊を含む。
5．粘土塊(少し軟質)。
6．暗灰褐色土。粘土塊と暗褐色土塊をブロック状に含む。焼土粒を少量含む。
7．白灰褐色土(少し硬質)。粘土塊とローム土塊がブロック状に含む。

第243図　第145a号住居跡カマド実測図



第145b号住居跡土層説明
1．黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)とローム粒を含む。
2．暗褐色土。ローム粒を含む。
3．褐色土。ローム粒(薄い)を多量に含む。炭粒を極少量含む。
4．褐色土。ローム粒と焼土粒を含む。
5．褐色土。軟質のローム土塊を含む。

第244図　第145b号住居跡実測図

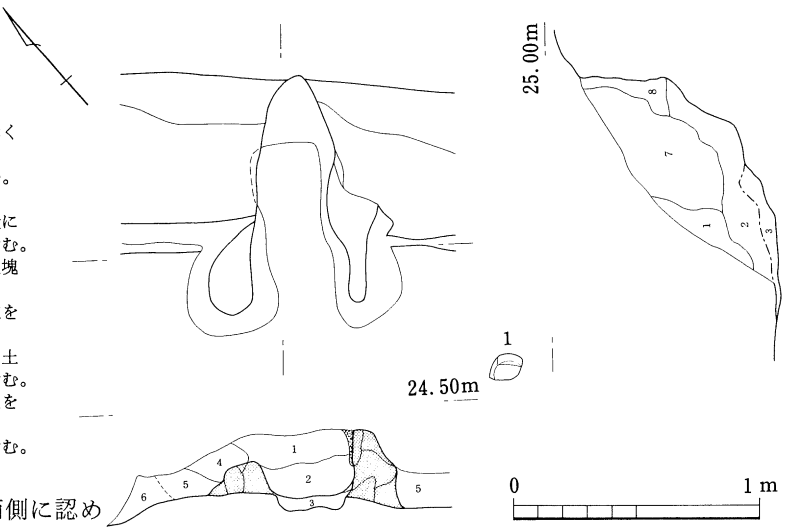


第245図　第146号住居跡実測図

(47) 第146号住居跡

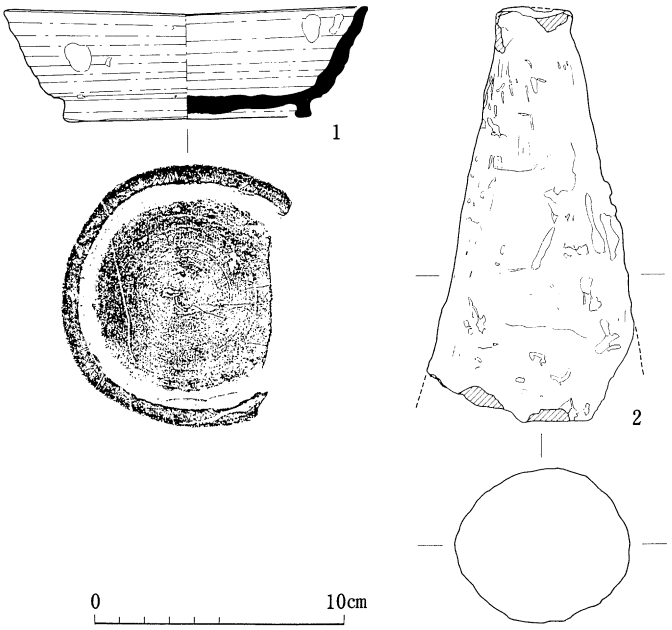
調査地区の東側に位置し、東側の小谷に向う傾斜面の中位付近に占地する。第138号住居跡より南西へ約８ｍ、第145ａ号住居跡より東へ約２ｍの距離に所在する。平面形体は、胴張りの隅円方形を呈する。規模は、長軸4.00ｍ、短軸3.55ｍを測る。主軸方向は、長軸を測り、Ｎ－49°－Ｗを示す。壁の立ち上がりは、竪穴の占地位置が斜面のため、北西側壁が高く、南東側が低い残存状況である。深さは、23㎝～115㎝を測る。床面は、ほぼ平坦で、斜面に設置されているが水平に設定されている。踏み固められた面は、カマド前面を主として認められるが、

第146号住居跡カマド土層説明
1．暗褐色土。粘土を全体に薄く含む。
2．白灰褐色土。焼土粒を含む。炭化物と灰を少量含む。
3．暗赤褐色土。焼土粒を多量に含む。灰と炭化物を少量含む。
4．粘土と焼土塊及び暗褐色土塊がブロック状に混入。
5．暗褐色土。粘土粒と焼土粒を含む。
6．暗褐色土。粘土塊とローム土塊を含む。焼土粒を少量含む。
7．暗褐色土(少し軟質)。粘土を全体に含む。
8．褐色土。粘土塊を多量に含む。ローム粒を含む。



第246図　第146号住居跡カマド実測図

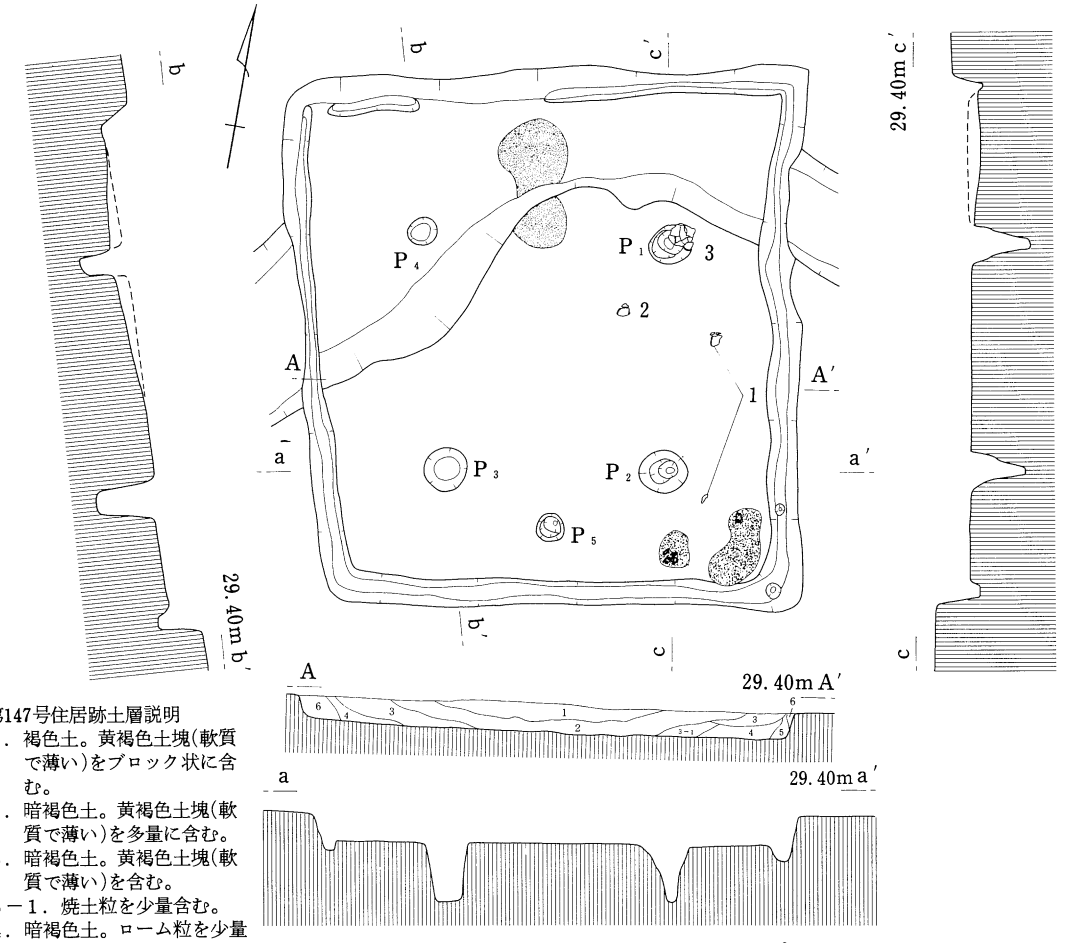
不明確である。東側と西側に認められる。幅は3～12cm、深さは2～4cmである。床面内のピットは、検出されなかった。竪穴の覆土は、自然堆積とみられる。カマドは、北西側壁のやや東寄りに設置され、袖部が短く、45～50cm、煙道部は、竪穴壁を約60cm掘り込み、立ち上がりは、急傾斜である。出土遺物は、No.1須恵器がカマド前面の床面、土製支脚が、カマド内より出土している。土製支脚は、円柱形で上端ほど細くなる形体で、下端を欠損し、上端径は、3.1cmを計る。色調は、暗褐色、胎土は、緻密である。また、貝が南側と北側より流れ込んだ形で検出した。ハマグリとシオフキである。



第247図　第146号住居跡出土遺物実測図

第109表　第146号住居跡出土遺物観察表

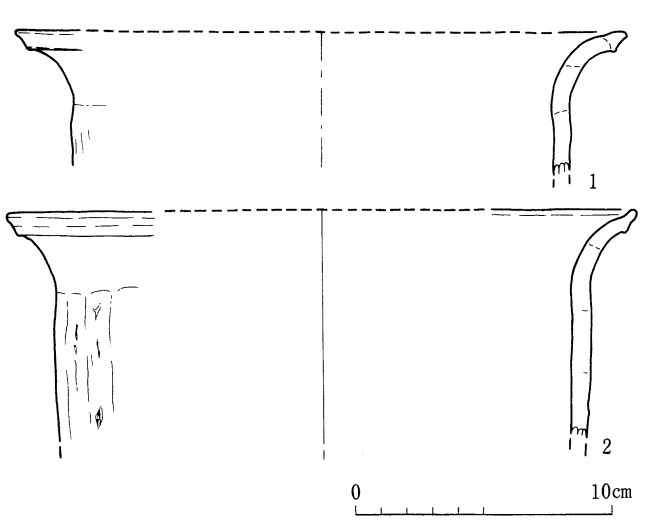
挿図番号	a．器種 b．出土位置 c．遺存度	法量(cm)	器質 d．胎土 e．焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図247 1	a．須恵器坏 b．カマド右前床面 c．3/4の残存	口径14.8 底径10.0 高台径10.1 高台高0.6 器高4.6	d．小礫3㎜以下を極少含む e．普通	底部は、広く、断面方形の高台が付き、底部は、少し張り出す。 体部は、やや丸みをもち、斜めに開く。	ロクロ水挽き成整形 底部は、回転糸切り離し(右回転)の後、回転ヘラケズリ調整。両面とも指頭痕有り。 〈色調〉暗灰色	〈色調〉灰色

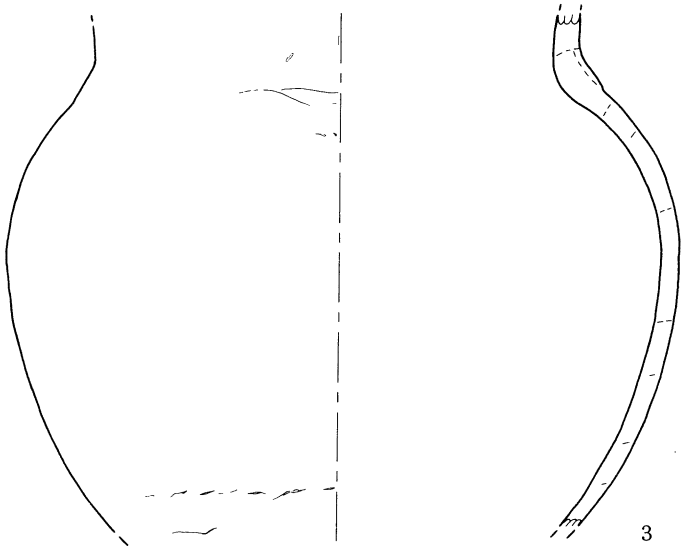


第147号住居跡土層説明

1．褐色土。黄褐色土塊(軟質で薄い)をブロック状に含む。
2．暗褐色土。黄褐色土塊(軟質で薄い)を多量に含む。
3．暗褐色土。黄褐色土塊(軟質で薄い)を含む。
3－1．焼土粒を少量含む。
4．暗褐色土。ローム粒を少量含む。
5．暗褐色土。ローム粒を多量に含む。
6．褐色土。軟質のローム土塊を多量に含む。

第248図　第147号住居跡実測図





第249図　第147号住居跡出土遺物実測図

(48) 第147号住居跡

第147号住居跡は、調査地区の北側やや東寄りに位置し、第123号住居跡より北東へ約13mの地点に所在する。また、第101方形周溝状遺構の溝に、北側床面とカマド付近を中心に切られている。平面形体は、方形を呈し、西側壁が胴張りぎみである。規模は、長軸4.37m、短軸4.04mを測り、主軸方位は、長軸方向をはかり、N－12°－

Wを示す。壁の立ち上がりは、やや浅く、最大で27cmである。床面は、北側床面が、第101号方形周溝状遺構の溝により床面を最深12cmまで切られている。踏み固められた面は、中央部付近に認められる。床面積は、約15.12㎡である。壁溝は、北西側が途切れており、方形周溝状遺構にも一部切られているため、全体は不明であるが、ほぼ四周していると推定される。幅は、3～18cm、深さは、4～12cmである。床面内のピットは、5本検出され、P_1～P_4は、主柱穴とみられ、各ピット間の距離は、P_1～P_2が1.85m、P_2～P_3が1.81m、P_3～P_4が1.94m、P_4～P_1が2.00mを測る。P_5は、南側壁近くの床面で、カマドの向い側に位置し、底部は、床面中央方向ほど低くなっている。いわゆる出入口相当施設用のピットと考えられる。竪穴内への焼土の流れ込みは、東南隅より検出され、炭化物も出土している。覆土は、暗褐色土が主体で、軟質で薄いシミ状の黄褐色土塊を多く含んでいるが、自然堆積と考えられる。カマドは、北側壁に設置されていたとみられるが、第101号方形周溝状遺構の溝に切られ、わずかに、燃焼部の火床が焼土として床面に残っているのみであり、煙道部は、竪穴壁を掘り込まない形態とみられる。出土遺物は、少なく、No.1、2は、東側床面より、No.3は、P_1に流れ込んだ状況で検出された。

第110表　第147号住居跡出土遺物観察表

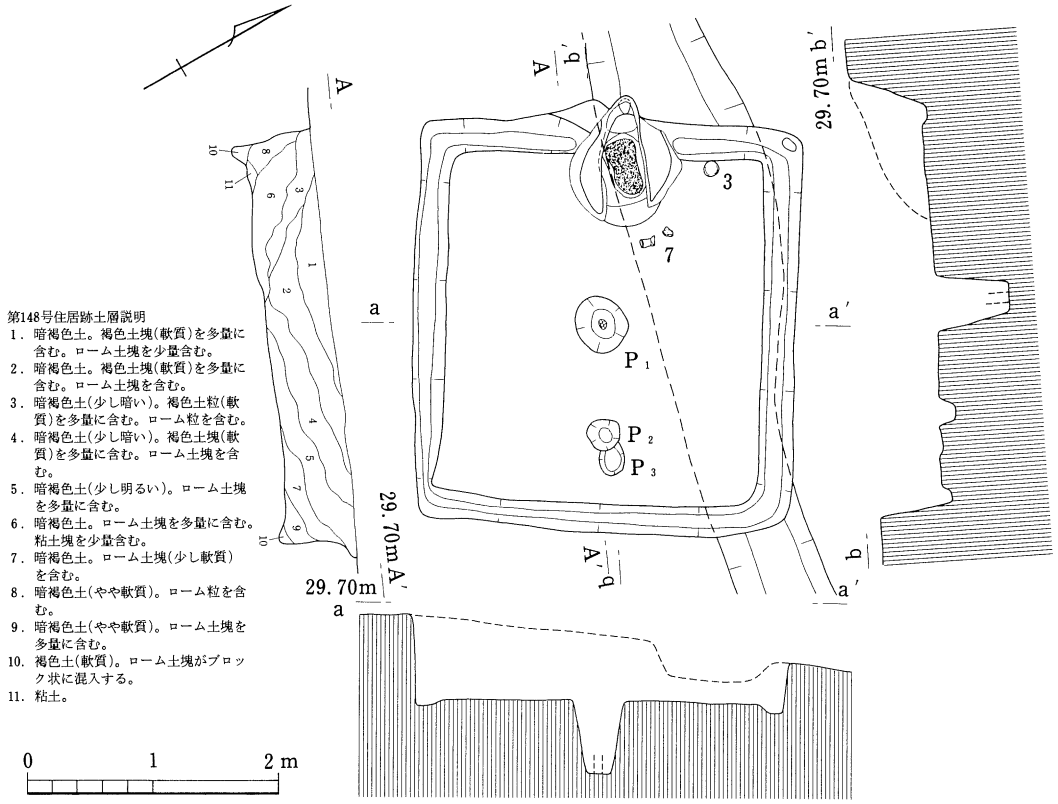
挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図249 1	a.(甕) b.東側床面 c.口縁部のみの残存	口径(23.9) 頸部径 (19.45)	d.砂粒を含む e.普通	胴部は、やや直線的に立ち上がり、口唇部はつまみ上げて、面をもつ。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ 〈色調〉褐色	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラナデ 〈色調〉淡褐色
図249 2	a.(甕) b.東側床面 c.口縁部のみ 1/4残存	口径(24.65) 頸部径(20.9)	1と同様	1と同様	1と同様	1と同様
図249 3	a.(甕) b.P_1内上部 c.胴部のみ 1/5の残存	頸部径(19.3) 胴部最大径 (26.8)	d.砂粒を含む e.少し不良	胴部は、球状を呈し最大径は、中位にもち、全体にやや大型である。	1と似ている。 摩耗が両面とも多く不明 〈色調〉暗褐色、淡褐色	1と似る 〈色調〉淡褐色

(49) 第148号住居跡

調査地区の北側に位置し、第111号住居跡が南東約2.5m、第101号住居跡が西約20mに所在する。また、第105号溝状遺構がプランの北側の一部を切っている。平面形体は、やや隅円の方形を呈し、規模は、長軸3.30m、短軸3.05mを測る。主軸方位は、長軸方向をはかり、N－51°－Wを示す。壁の立ち上がりは、最大で67cmである。床面は、ほぼ平坦で踏み固められた面は、全体的に存在する。床面積は、約8.78㎡である。壁溝は、四周し、幅は、4～15cm、深さは、3～8cmを測る。床面内のピットは、3本有り、P_1は、床面のほぼ中央で底部には、柱と思われるあたり痕跡が認められる。P_2 P_3は、南東側壁近くの床面に重なって存在する。いわゆる出入口相当施設用のピ

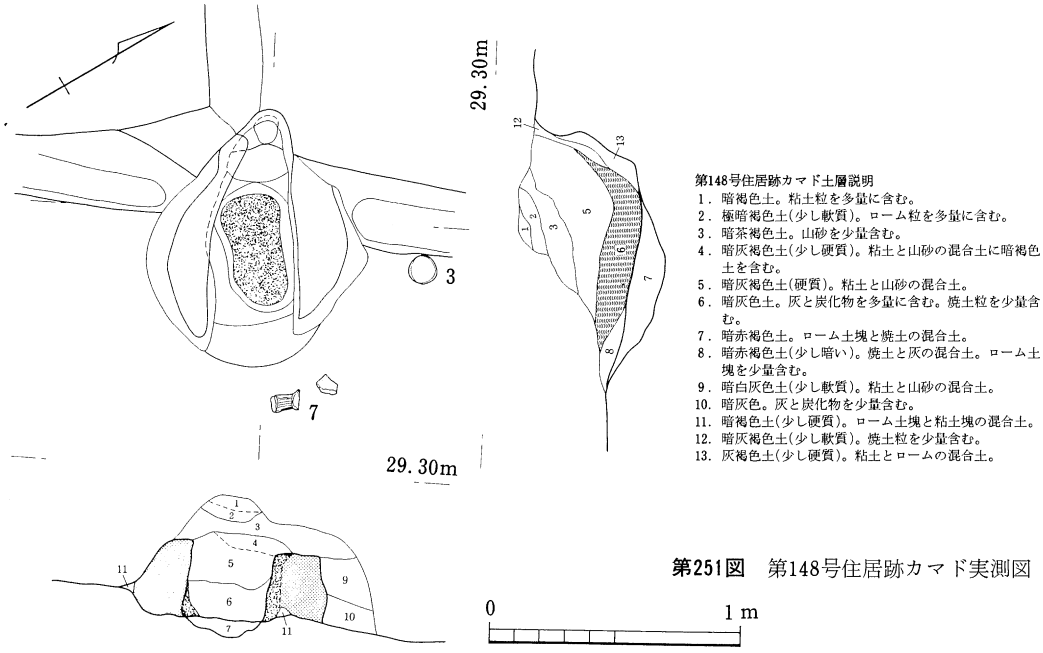
第111表　第147号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P_1	35×31	10×7	48
P_2	40×35	7×5	45
P_3	36×36	21×19	47
P_4	24×23	17×14	(36)
P_5	24×23	4×3	33



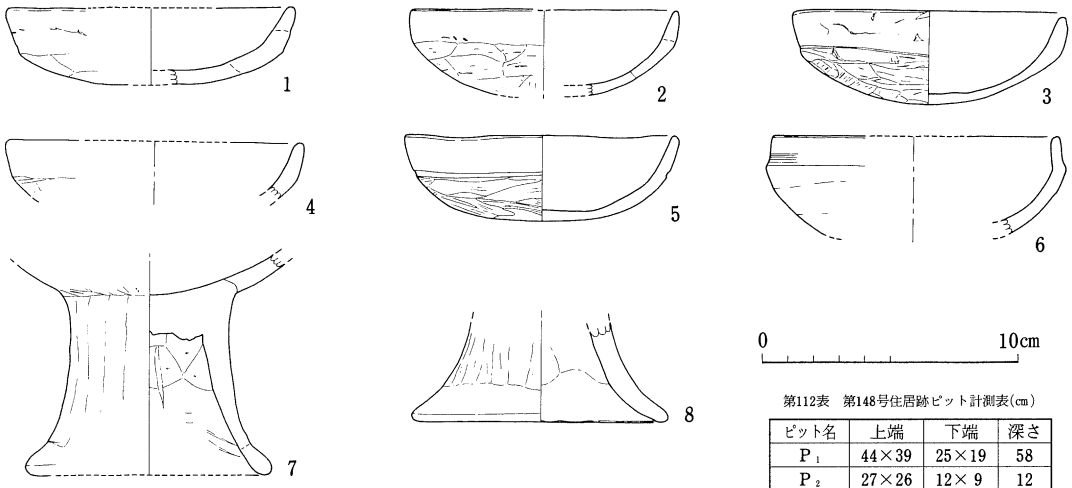
第148号住居跡土層説明
1．暗褐色土。褐色土塊(軟質)を多量に含む。ローム土塊を少量含む。
2．暗褐色土。褐色土塊(軟質)を多量に含む。ローム土塊を含む。
3．暗褐色土(少し暗い)。褐色土粒(軟質)を多量に含む。ローム粒を含む。
4．暗褐色土(少し暗い)。褐色土塊(軟質)を多量に含む。ローム土塊を含む。
5．暗褐色土(少し明るい)。ローム土塊を多量に含む。
6．暗褐色土。ローム土塊を多量に含む。粘土塊を少量含む。
7．暗褐色土。ローム土塊(少し軟質)を含む。
8．暗褐色土(やや軟質)。ローム粒を含む。
9．暗褐色土(やや軟質)。ローム土塊を多量に含む。
10．褐色土(軟質)。ローム土塊がブロック状に混入する。
11．粘土。

第250図　第148号住居跡実測図



第148号住居跡カマド土層説明
1．暗褐色土。粘土粒を多量に含む。
2．極暗褐色土(少し軟質)。ローム粒を多量に含む。
3．暗茶褐色土。山砂を少量含む。
4．暗灰褐色土(少し硬質)。粘土と山砂の混合土に暗褐色土を含む。
5．暗灰褐色土(硬質)。粘土と山砂の混合土。
6．暗灰色土。灰と炭化物を多量に含む。焼土粒を少量含む。
7．暗赤褐色土。ローム土塊と焼土の混合土。
8．暗赤褐色土(少し暗い)。焼土と灰の混合土。ローム土塊を少量含む。
9．暗白灰色土(少し軟質)。粘土と山砂の混合土。
10．暗灰色。灰と炭化物を少量含む。
11．暗褐色土(少し硬質)。ローム土塊と粘土塊の混合土。
12．暗灰褐色土(少し軟質)。焼土粒を少量含む。
13．灰褐色土(少し硬質)。粘土とロームの混合土。

第251図　第148号住居跡カマド実測図



第112表　第148号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P1	44×39	25×19	58
P2	27×26	12×9	12
P3	21×21	17×13	3

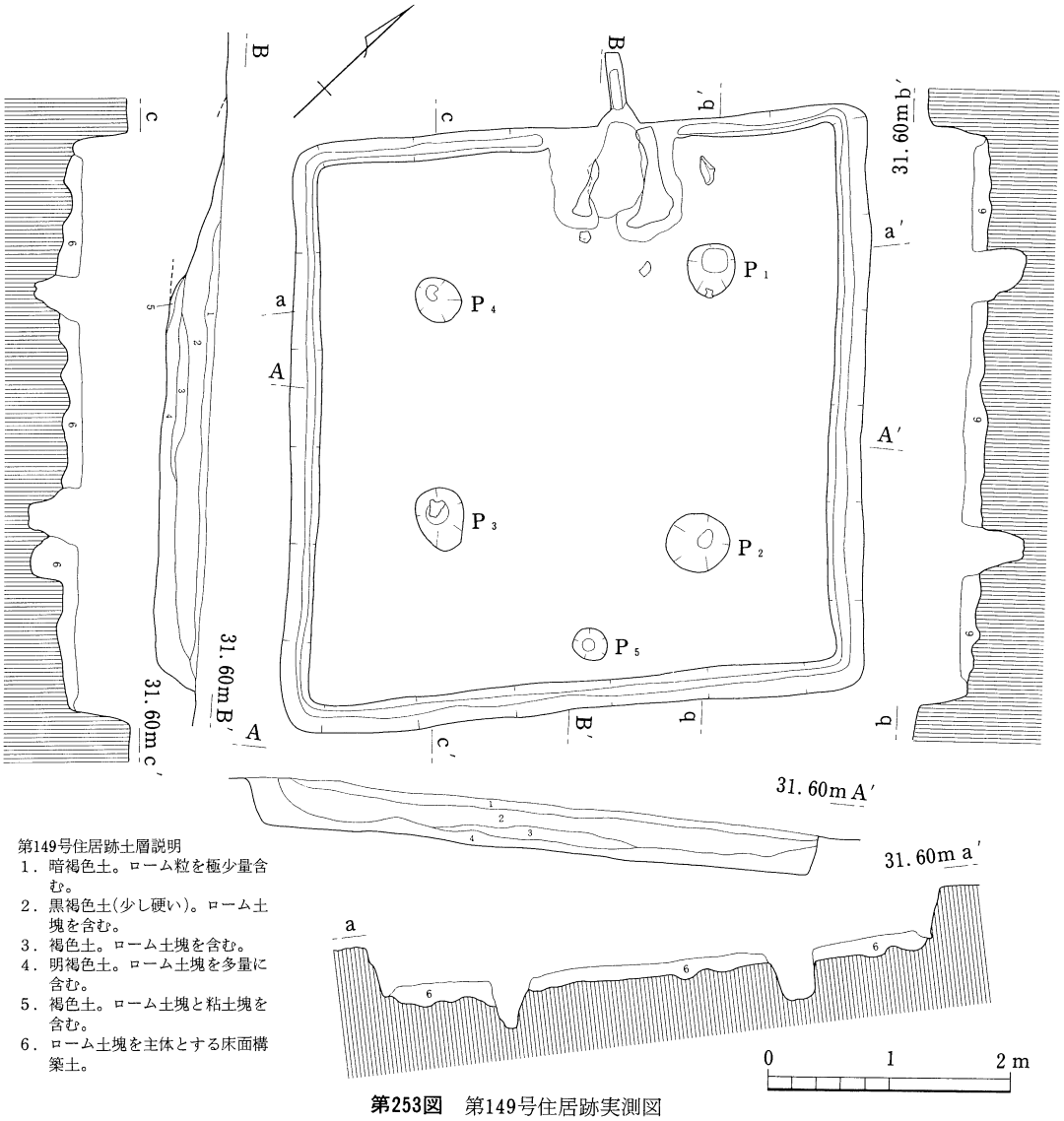
第252図　第148号住居跡出土遺物実測図

ットと推定される。竪穴の覆土は、暗褐色土が主体で、ローム土塊を含み、人為的な埋めもどしの可能性がある。カマドは、北西側壁中央やや東寄りに設置され、一部が第104号溝により切られている。出土遺物は、No.3が、カマド右側の床面、No.7がカマド前面の右寄りの床面より、その他については、覆土内の出土である。復元可能な遺物は、土師器坏が6点、高坏が2点である。

第113表　第148号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図252 1	a.(坏) b.覆土 c.底部欠損 全体の1/4	口径(11.4) 器高(3.1)	d.砂粒を含む e.やや不良	丸底で、浅い椀状に立ち上がり、口縁部の割合が2/3を占め、稜をもち直線的に開く。	口縁部＝横ナデ 粘土接合痕が少し残る 体部＝ヘラケズリ 〈色調〉淡褐色	ヘラナデ 摩耗が多い。 〈色調〉暗褐色
図252 2	a.(坏) b.覆土 c.底部欠損 全体の1/4	口径(10.6) 器高(3.5)	d.砂粒を含む e.普通	丸底で、浅い椀状に立ち上がり、口縁部は、やや丸みをもって直立する。	口縁部＝横ナデ 体部＝ヘラケズリ 〈色調〉暗褐色・褐色	ヘラミガキ 〈色調〉黒褐色・暗褐色
図252 3	a.坏 b.カマド右側床面 c.完形	口径10.8 器高3.8	d.砂粒を含む e.普通	丸底で、椀状に立ち上がり、口縁部は、わずかな稜をもち、直立したのち外反。	1と同様 〈色調〉赤褐色、黄褐色	ヘラミガキ 〈色調〉黒褐色、赤褐色
図252 4	a.(坏) b.覆土 c.底部欠損 全体の1/6	口径(11.8)	d.緻密 e.普通	口縁部は、やや斜めに外反する。	1と同様 少し赤彩がなされる 〈色調〉淡赤褐色、褐色	3と同様
図252 5	a.坏 b.覆土 c.全体の1/2	口径(10.9) 器高3.4	d.緻密 e.少し良好	丸底で、浅い椀状を呈し、口縁部は、少し外反する。	1と同様	3と同様
図252 6	a.(鉢) b.覆土 c.底部欠損 全体の1/5	口径(19.35)	d.砂粒を含む e.少し良好	体部は、椀状で、口縁部は、稜をもち、直立ぎみに立ち上がる。	1と同様	3と同様
図252 7	a.(高坏) b.カマド前面右床面 c.脚部のみ	脚小径6.25 脚端径9.7	d.砂粒を含む e.やや不良	裾部は、あまり開かず、柱状に立ち上がる。	脚部＝縦方向のヘラケズリ 裾部＝横ナデ 〈色調〉両面とも褐色と一部暗褐色	脚部＝ヘラケズリダシの後ヘラミガキ 裾部＝横ナデ
図252 8	a.(高坏) b.覆土 c.脚下半 1/3のみ	脚端径(10.1)	7と同じ	脚部は、弧状をもってハの字状に立ち上がる。	7と同様 〈色調〉両面とも暗褐色と一部淡褐色	脚部＝ヘラケズリダシ 裾部＝横ナデ

（50）第149号住居跡



第149号住居跡土層説明
1．暗褐色土。ローム粒を極少量含む。
2．黒褐色土(少し硬い)。ローム土塊を含む。
3．褐色土。ローム土塊を含む。
4．明褐色土。ローム土塊を多量に含む。
5．褐色土。ローム土塊と粘土塊を含む。
6．ローム土塊を主体とする床面構築土。

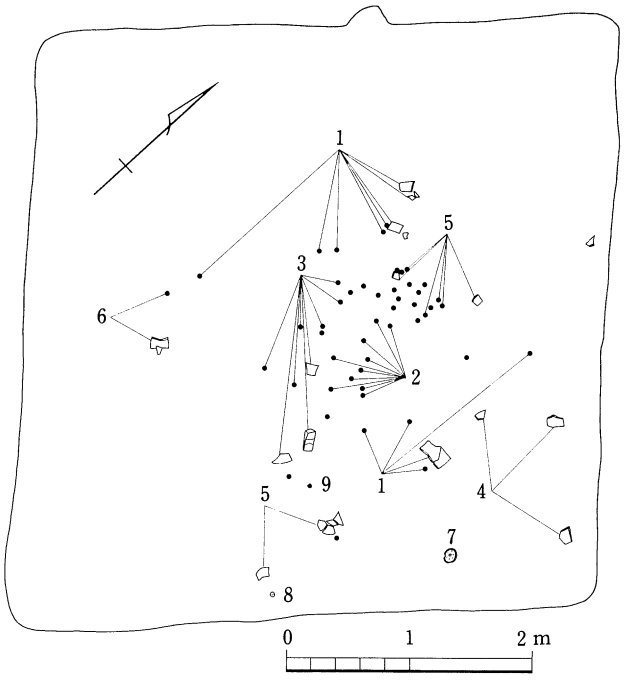
第253図　第149号住居跡実測図

第149号住居跡は、調査地区の南西側に位置し、第116号住居跡が北東約12m、第104号方形周溝状遺構が南西約２mにそれぞれ所在する。平面形体は、隅円方形を呈し、南西壁と南東壁が少し長い。規模は、長軸4.90m、短軸4.75mを測る。主軸方位は、長軸方向をはかり、N－47°－Wを示す。壁の立ち上がりは、最大で45cmである。床面は、ほぼ平担であり、踏み固められた面は、カマド前面から床面中央及びP5付近まで認められる。床面積は、約20.06㎡である。壁溝は、四周し、幅は、２～11cm、深さは、４～12cmである。床面内のピットは、５本検出され、P1～P4が主柱穴と考えられる。各ピット間の距離は、P1～P2が2.30m、P2～

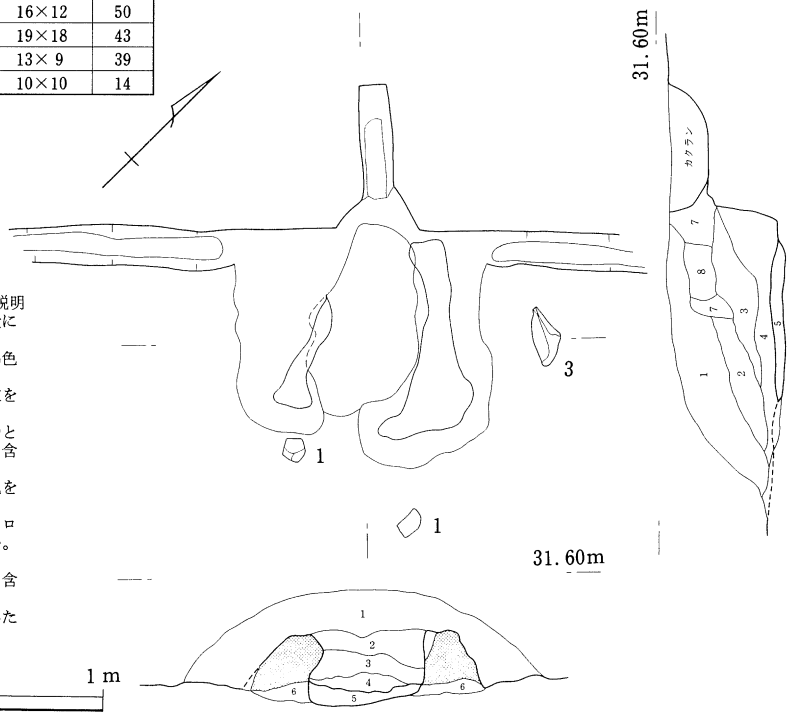
P_3が2.25m、P_3～P_4が1.80m、P_4～P_1が2.35mを測る。P_5は、カマドの向い側の壁近く床面に所在する。竪穴の覆土は、ローム土塊を多量に含み、人為的な埋めもどしの可能性が有る。カマドは、北西側壁の中央やや東寄りに設置され、煙道部は、立ち上がりが2段を呈するとみられるが、全体に攪乱が有り、残存状況は、悪い。出土遺物は、覆土中と床面より土師器甕6点、須恵器坏蓋片1点が検出されている。なお、遺物の説明は、省略した。(別図参照)

第114表　第149号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P_1	45×39	21×19	44
P_2	52×48	16×12	50
P_3	52×40	19×18	43
P_4	39×35	13× 9	39
P_5	29×26	10×10	14

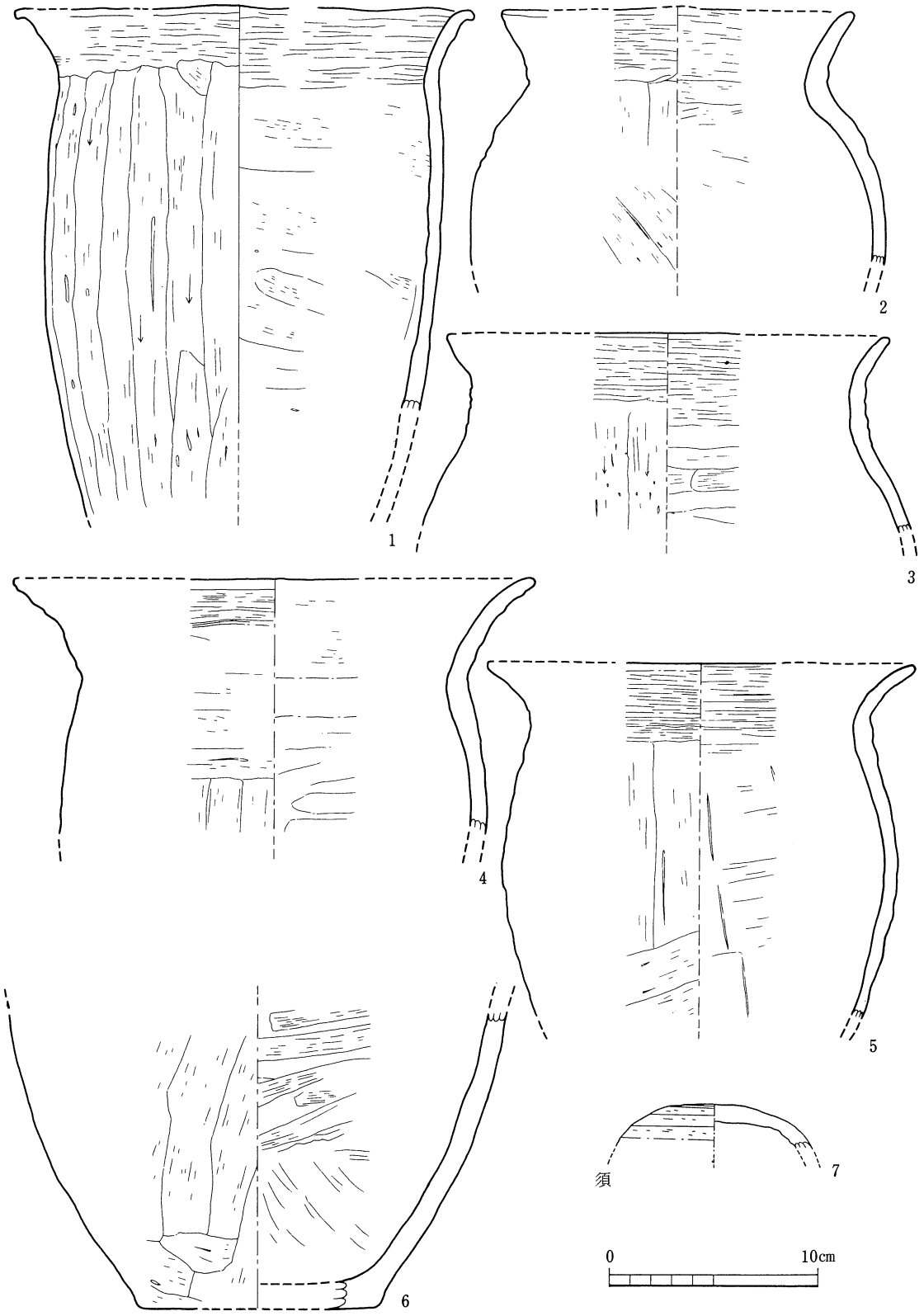


第254図　第149号住居跡遺物出土状況実測図



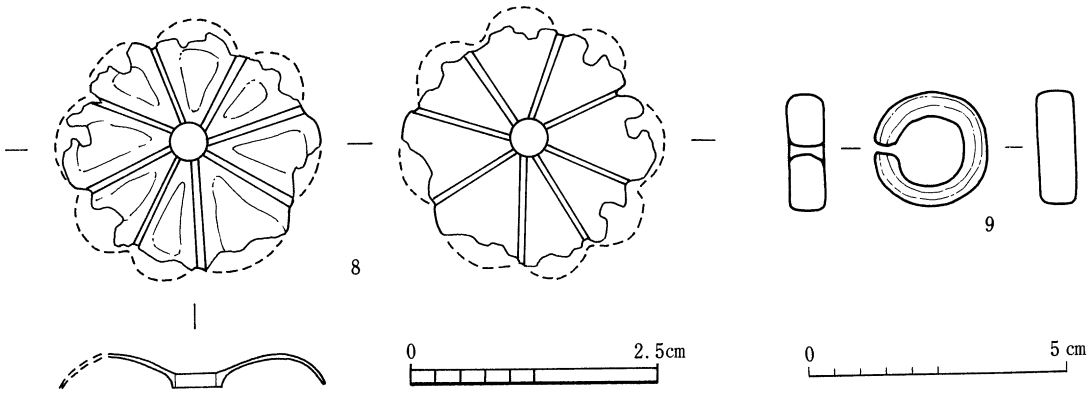
第149号住居跡カマド土層説明
1. 灰褐色土。粘土を多量に含む褐色土。
2. 灰褐色砂質粘土に黒褐色土を極少量含む。
3. 褐色土。粘土と焼土粒を少量含む。
4. 黒褐色土。粘土と山砂と灰及び焼土を少量ずつ含む。
5. 黄褐色土。ローム土塊をブロック状に含む。
6. 暗褐色土(少し硬質)。ローム土塊を多量に含む。粘土粒を少量含む。
7. 褐色土。粘土を多量に含む。
8. 暗赤褐色土。焼土化した粘土を多量に含む。

第255図　第149号住居跡カマド実測図



第256図　第149号住居跡出土遺物実測図（１～７）

No.8・9は、いずれもカマドの向い側の床面より出土しており、No.8は、飾り金具で、銅製八葉、9は、銅製の耳環である。



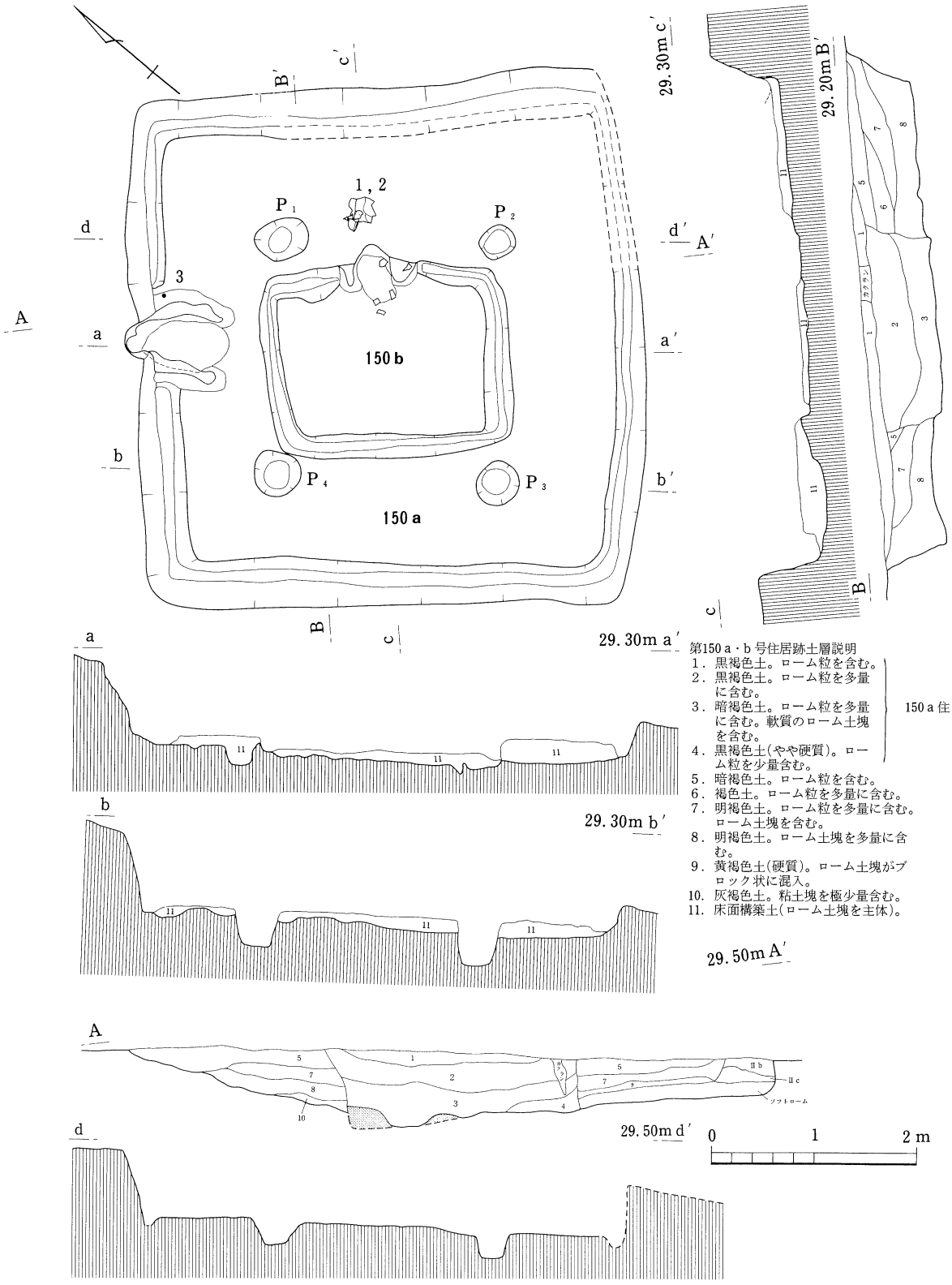
第257図　第149号住居跡出土遺物実測図(8・9)

(51) 第150a号住居跡

調査地区の南側に位置し、第143号住居跡が北西約6m、第103号方形周溝状遺構が北約6mに存在する。また、プランの中央部付近が第150b号住居跡に切られている。形体は、南東側壁がやや胴張りぎみの隅円方形を呈する。規模は、長軸5.28m、短軸4.97m、主軸方位は、短軸を測り、N－42°－Wを示す。壁の立ち上がりは、竪穴が斜面に立地するため、北西側壁が高く、南東側壁が低い。残存高は、最大で72cmである。床面は、ほぼ平坦であるが、東側がやや不明確であった。床面積は、約21.44㎡である。壁溝は、四周し、幅5～15cm、深さ5～16cmを測る。床面内のピットは、4本検出され、主柱穴と考えられる。各ピット間の距離は、P_1～P_2が2.15m、P_2～P_3が2.35m、P_3～P_4が2.15m、P_4～P_1が2.32mを測る。竪穴の覆土は、明褐色土が主体でローム粒を多量に含み、人為的に埋めもどされた可能性がある。カマドは、北西側壁の中央に位置し、燃焼部は、やや深く残り、煙道部は、立ち上がりが数段に認められ、竪穴壁を約15cm掘り込んでいる。出土遺物は、No.1(甕)、No.2(甑)?を北東側床面よりまとまって検出した。また、土製支脚No.3がカマド右側袖部付近より出土している。土製支脚は、上端ほど細くなる方柱形で、下部は、欠損する。色調は、淡褐色。胎土は、緻密。No.1の甕は、口縁部片で、長胴甕と推定され、くの字状に外反し、口唇部は、指でつまみ上げられ、外側に厚くなる。口径は、16.6cm、口縁部は、両面横ナデ、胴部は、外面縦ヘラケズリ、内面横ヘラナデ、色調は、両面暗褐色、胎土は、1mm以下の小礫を含む。焼成良好。No.2は、胴中位から口縁部の破片で、形体より甑と推定される。やや長胴ぎみと思われ、

第115表　第150b号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P_1	54×40	26×19	
P_2	34×31	26×22	
P_3	44×39	26×26	44
P_4	47×44	27×24	39

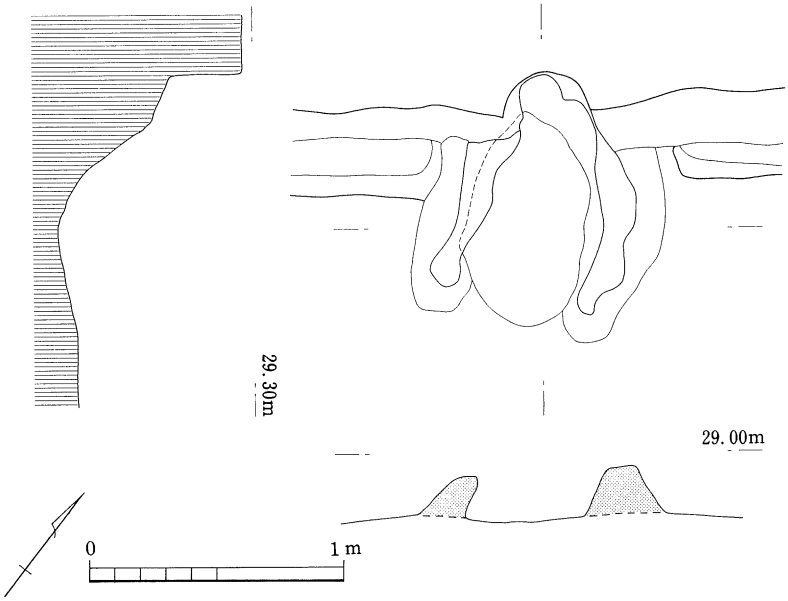


第150a・b号住居跡土層説明

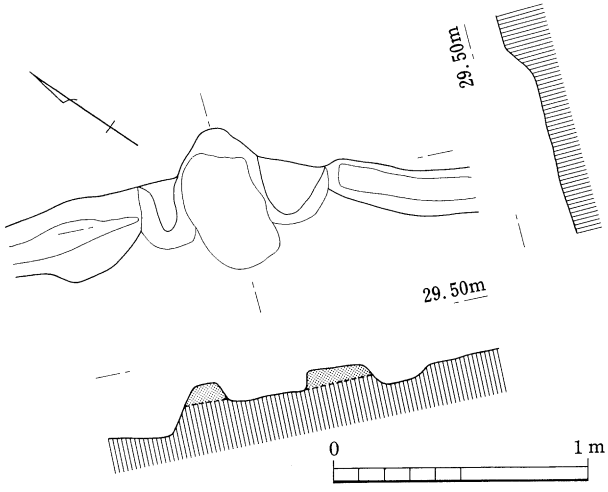
1. 黒褐色土。ローム粒を含む。
2. 黒褐色土。ローム粒を多量に含む。
3. 暗褐色土。ローム粒を多量に含む。軟質のローム土塊を含む。
4. 黒褐色土(やや硬質)。ローム粒を少量含む。
5. 暗褐色土。ローム粒を含む。
6. 褐色土。ローム粒を多量に含む。
7. 明褐色土。ローム粒を多量に含む。ローム土塊を含む。
8. 明褐色土。ローム土塊を多量に含む。
9. 黄褐色土(硬質)。ローム土塊がブロック状に混入。
10. 灰褐色土。粘土塊を極少量含む。
11. 床面構築土(ローム土塊を主体)。

150a住

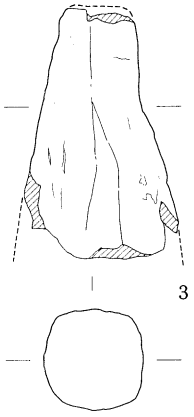
第258図　第150a・b号住居跡実測図



第259図　第150ａ号住居跡カマド実測図



第260図　第150ｂ号住居跡カマド実測図

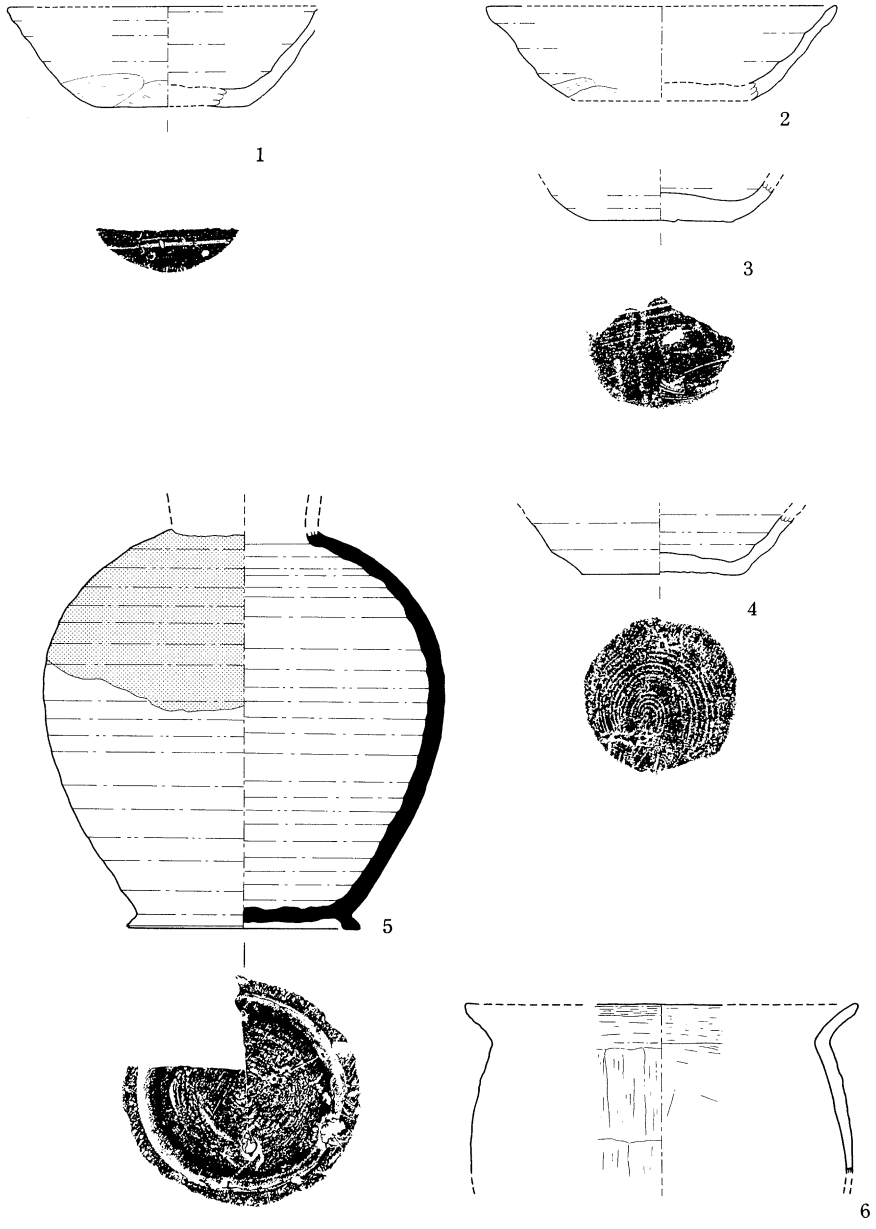


第261図　第150ａ号住居跡出土遺物実測図（３）

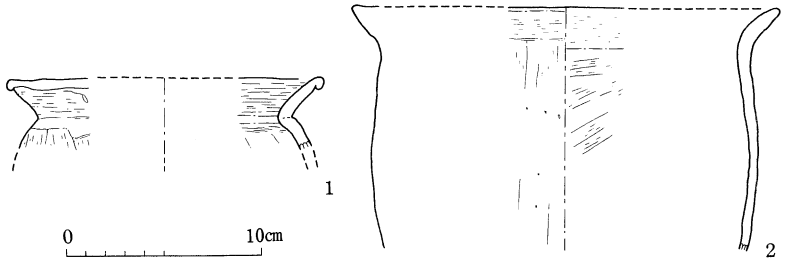
口縁部は、ゆるやかに外反する。口径は、22.6cm・胴部最大径は、20.4cm。口縁部は、両面とも横ナデ、胴部は、外面がやや摩耗が激しいが、縦方向のヘラケズリ、内面は、ヘラナデの後、指ナデ。色調は、両面とも淡褐色一部暗褐色、胎土は、小礫１㎜以下を含む。焼成は、やや不良。

（52）第150ｂ号住居跡

第150ａ号住居跡のプランの中央部を切って存在する。地形的には、少し東南方向に傾斜をはじめる地点である。平面形体は、隅円の長方形で、規模は、長軸2.42m、短軸1.92mを測る。主軸方位は、短軸方向を測り、Ｎ－46°　－Ｅを示す。壁の立ち上がりは、現在で10cmを測り、土層セクションでは、70cmである。床面は、やや凹凸が有り、踏み固められた面は、やや不明確である。床面積は、約3.85㎡を測る。壁溝は、全周し、幅４～14cm、深さ３～６cmを測る。床面内のピットは検出できなかった。覆土は、自然堆積と思われ、ローム粒を多量に含む黒褐色土が主体である。カマドは、北東側壁中央に設置されているが、保存状況は不良である。ａ号に比較すると小型で、開いた逆Ｕ字形を呈し、壁より約15cm外側に張り出している。出土遺物は、カマド周辺に集中している。



第262図　第150ｂ号住居跡出土遺物実測図（１～６）



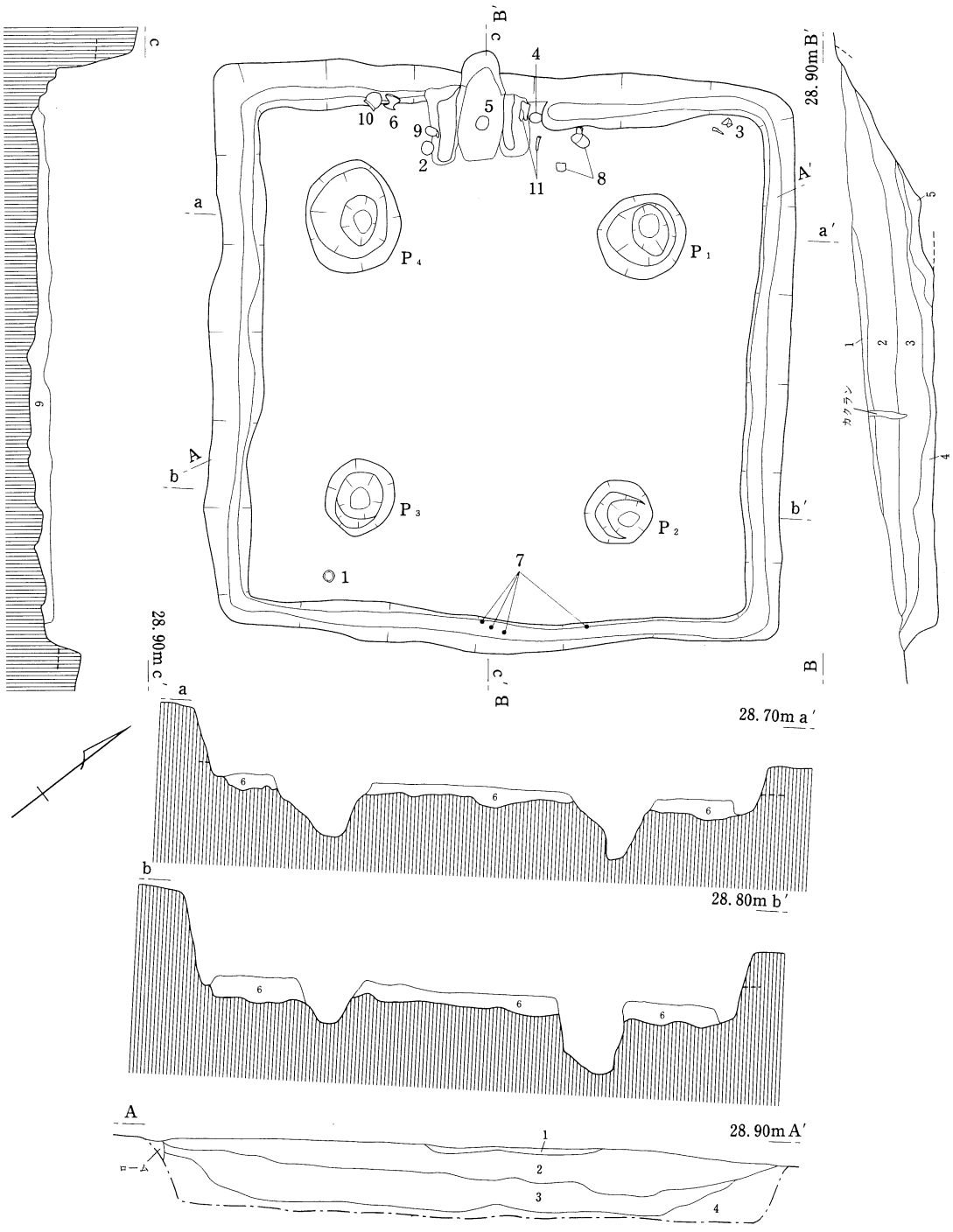
第263図　第150ａ号住居跡出土遺物実測図（１・２）

第116表　第150ｂ号住居跡出土遺物観察表

挿図番号	a.器種 b.出土位置 c.遺存度	法量(cm)	器質 d.胎土 e.焼成	形態の特徴	成整形技法及び色調 外面	成整形技法及び色調 内面
図262 1	a.坏 b.カマド付近 c.全体の1/3の残存	口径12.6 底径6.0 器高4.0	d.緻密 e.良好	小型で、底部は平底、体部は、やや丸みをもって開く。	ロクロ水挽き、底部は、回転糸切り離しの後、ヘラ削り調整、体下部もヘラ削り有り。	ロクロ水挽き(ユビナデ)
図262 2	a.坏 b.カマド付近 c.体部のみ1/3残存	口径13.8 底径(7.0) 器高(13.75)	d.緻密 e.良好	小型で、底部は平底と思われ、体部は、やや丸みをもって開く。	ロクロ水挽き。体下部は、手持ちヘラ削りがみられる。	ロクロ水挽き(ユビナデ)
図262 3	a.坏 b.カマド付近 c.底部付近1/3残存	底径5.6	d.緻密 e.良好	小型の坏と思われ、底部は、やや厚手である。	ロクロ水挽き。底部は、回転糸切り離しの後、手持ちヘラ削り調整。	ロクロ水挽き(ユビナデ)
図262 4	a.坏 b.カマド付近 c.底部～体下部	底径6.4	d.緻密 e.普通	小型の坏と思われ、底部は平底、体部は、やや丸みをもって開く。	ロクロ水挽き。底部は、右回転ロクロ糸切り離し。	ロクロ水挽き(ユビナデ)
図262 5	a.須恵器、長頸壺 b.カマド付近 c.体部～底部の3/4残存	体部最大径21.2 底径12.4	d.緻密 e.良好	底部は、糸切り離しの後、断面方形の高台が付く。体部は、球形にちかいが、最大径は、やや上位に有る。	自然釉が体上位に付着する。底部は、ロクロ糸切り離し後、高台を付ける。	ユビナデ。
図262 6	a.甕 b.カマド付近 c.口縁部～胴上位	口径20.8 頸部径17.8	d.小礫を少し含む e.良好	やや小さめの口縁部をもち、くの字状に開く、口径と胴最大径が同じ。	口縁部＝横ナデ 胴部＝縦方向のヘラケズリ	口縁部＝横ナデ。 胴部＝ヘラナデの後、ユビナデ

（53）第151号住居跡

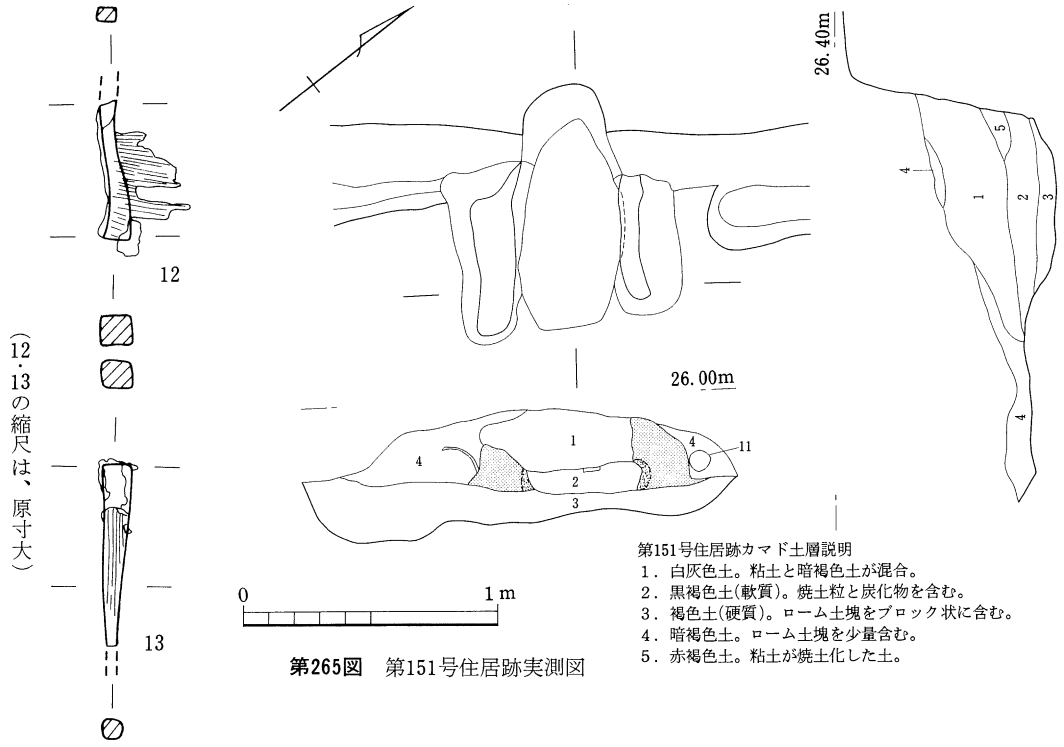
調査地区の南側で、東南方向に小谷に向かって傾斜する地点に位置する。第150ｂ住居跡が北西に約25ｍ、第107号土坑が南東に約６ｍに所在する。平面形体は、隅円方形を呈し、南東側壁がわずかに胴張りぎみである。規模は、長軸5.25ｍ、短軸5.23ｍを測る。主軸方位は、短軸方向をはかり、Ｎ－50°－Ｗを示す。壁の立ち上がりは、最大で78cmである。床面はハードローム層内のレベルに設定され、全体に貼り床であり、踏み固められた面は、カマド前面から中央に広がる。面積は、約23.62㎡である。壁溝は全周し、幅は、６～23cm、深さは、５～13cmを計る。



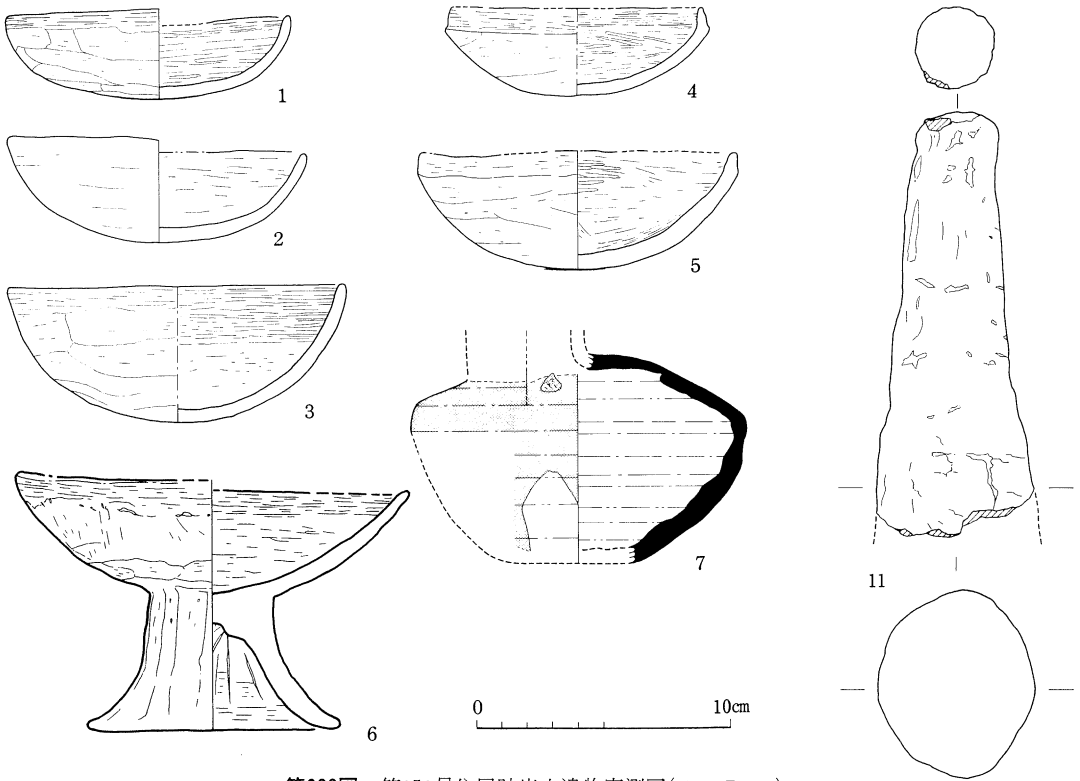
第151号住居跡土層説明

1．暗褐色土。ローム粒を極少量含む。
2．黒褐色土。ローム土塊を極少量含む。
3．明褐色土。ローム土塊を含む。
4．黄褐色土。ローム土塊をブロック状に含む。
5．褐色土。ローム土塊と粘土塊を含む。
6．ローム土塊を主体とする床面構築土。

第264図　第151号住居跡実測図



第265図　第151号住居跡実測図

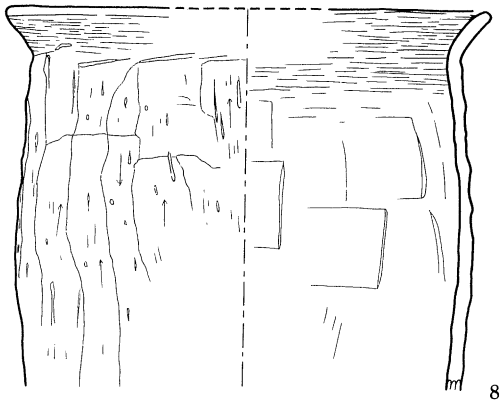


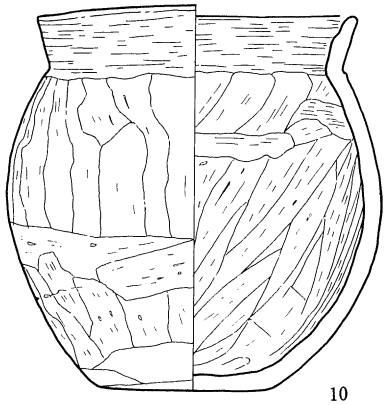
第266図　第151号住居跡出土遺物実測図(1～7・11)

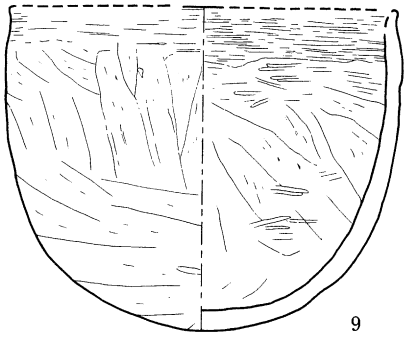
ピットは、床面内に4本検出され、方形に組合わされることにより、主体穴と考えられる。各ピット間の距離は、P_1～P_2が1.35m、P_2～P_3が1.20m、P_3～P_4が1.25m、P_4～P_1が1.30mを測る。焼土は認められないが、覆土には、ローム土塊を含んでいる。しかし、これは、斜面部の竪穴設定のため、埋没時に自然に入り込んだと考えている。カマドは、北西側壁、中央やや西寄りに位置し、竪穴壁を約20cm掘り込んで煙道を作る。立ち上がりは、急傾斜である。保存状況は、悪い。出土遺物は、カマド周辺の北西側壁とその向い側の南東側壁付近に集中する。No.1坏は、やや薄手で小型、浅い椀状を呈する。口径11.3cm、器高3.6cm。No.2坏は、小型の椀状を呈する。やや摩耗している。口径11.9cm、器高4.1cm。No.3坏は、椀状を呈し、薄手である。口径13.4cm、器高5.4cm、No.4坏は、小型で体部は椀状に立ち上がり、口縁部は、わずかに稜をもち、小さく直立する。口径9.9cm、器高3.5cm。No.5坏は、少し厚手で、体部は椀状に立ち上がり、口縁部は小さく直立する。口径12.6cm、器高4.7cm。No.6高坏は、やや小型で太く低い脚に、浅い椀状の坏が付く。坏口径16.3cm、器高10cm、脚下端径10.5cm。No.7須恵器平瓶は、小型で体部は丸みをもち、頸部より上は欠損する。体部には自然釉がかかる。体部最大径13.3cm。No.8甕は、上半部のみの残存であるが、長胴で胴部最大径は上部に有り、口縁部は、少し小さく外反する。口径19.2cm、胴部最大径18cm。No.9鉢は、砲弾状を呈し、底部は丸く、口縁部はわずかに直立する。口径15.4cm、器高13cm。No.10甕は、小型で球状の体部をもち、口縁部は、直線的に外半する。口径12.8cm、体部最大径14.8cm、器

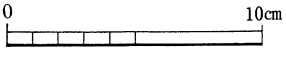
第117表　第151号住居跡ピット計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P_1	79×77	20×18	58
P_2	61×57	20×14	39
P_3	69×61	19×17	70
P_4	104×86	21×16	54


8


10


9



第267図　第151号住居跡出土遺物実測図(8～10)

高15.4cm。No.11は土製支脚で、少し細身で上端ほど細くなる円柱形を呈し、下端は欠損している。No.12・13は、木製品で断面方形を呈し、色調は、暗褐色。No.12は、一方に刷毛状の硬質物が付着する。

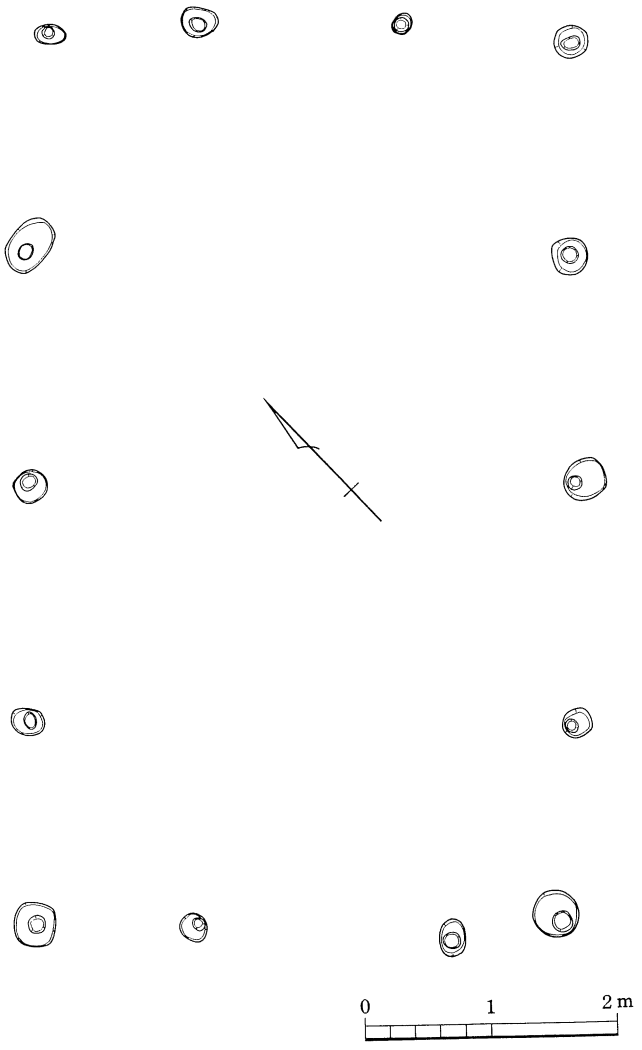
5．掘立柱建物跡

(1) 第101号掘立柱建物跡

調査地区の西側台地平担部に位置し、第102号掘立柱建物跡より北西約11m離れている。形体は3×4間の側柱で長軸6.25m、短軸4.30m、長軸方向は、N－43°－Eを示す。柱穴間隔は長軸側が1.55～1.92m、短軸側は中央部が広く、1.60～2.01m、両側は、0.89～1.35mを測る。柱穴は、上部で柱痕跡(径4～16cm)が確認でき、貫き取りは皆無と考えられる。また、下端には、柱のあたり痕跡も認められる。深さは、7～30cmである。掘り方は、長円形、円形など様々である。覆土は、柱痕内が粘土状の粒を含む暗灰色土と褐色土を含む暗褐色土が主体である。

第118表　第101号掘立柱建物跡
ピット(掘り方)計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P1	28×27	15×15	19
P2	31×31	24×22	13
P3	37×32	18×15	23
P4	39×26	24×12	11
P5	42×38	17×12	17
P6	30×21	11×10	20
P7	23×22	13×8	6
P8	41×36	24×15	12
P9	30×26	20×19	17
P10	32×30	18×15	30
P11	52×42	40×31	20
P12	28×20	20×11	10
P13	35×26	17×15	14
P14	19×19	6×6	15

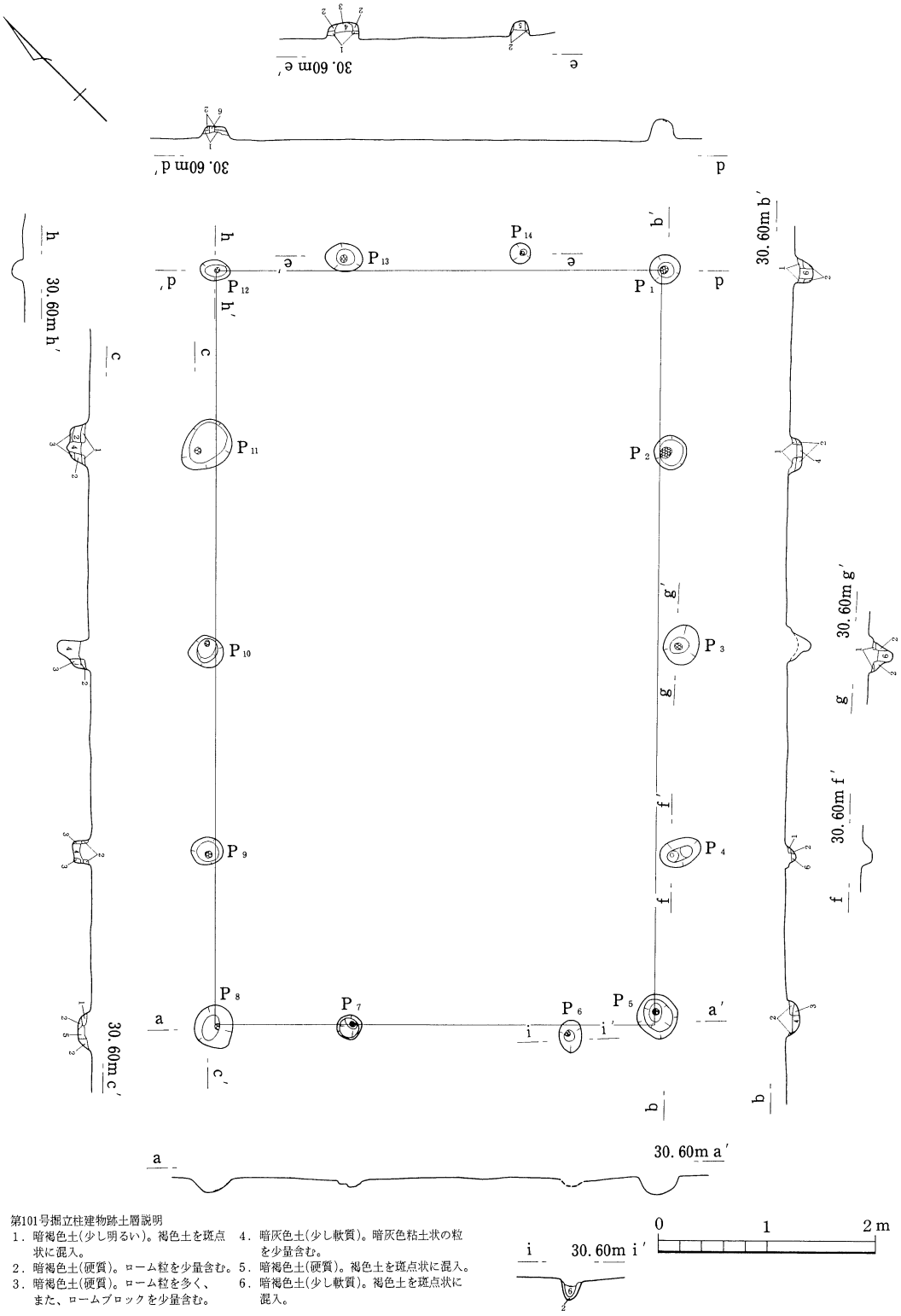


第268図　第101号掘立柱建物跡柱痕跡検出状況平面図

周辺は、ローム粒を含む暗褐色土が主に占めている。

(2) 第102号掘立柱建物跡

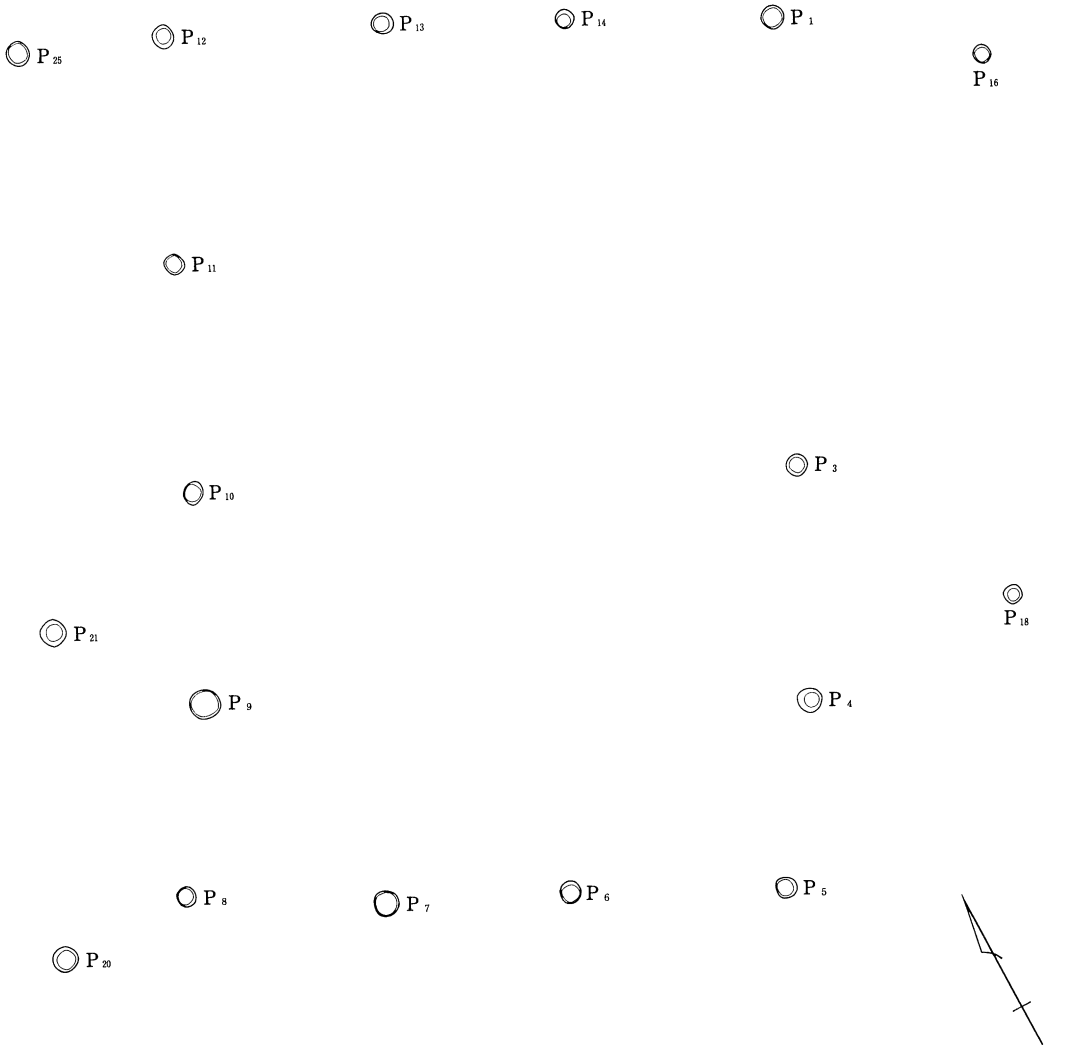
調査地区の南西側台地平担部に位置し、第107号住居跡が西約1m、第103号掘立柱建物跡は、南西約12mに存在する。形体は、3×4間の側柱で、長軸6.90m、短軸4.78m、長軸方向は、N－29°－Eを示す。また、長軸方向の東側列と西側列の外側にそれぞれもう1列不規則にピットが存在する。



第101号掘立柱建物跡土層説明

1．暗褐色土(少し明るい)。褐色土を斑点状に混入。
2．暗褐色土(硬質)。ローム粒を少量含む。
3．暗褐色土(硬質)。ローム粒を多く、また、ロームブロックを少量含む。
4．暗灰色土(少し軟質)。暗灰色粘土状の粒を少量含む。
5．暗褐色土(硬質)。褐色土を斑点状に混入。
6．暗褐色土(少し軟質)。褐色土を斑点状に混入。

第269図　第101号掘立柱建物跡実測図

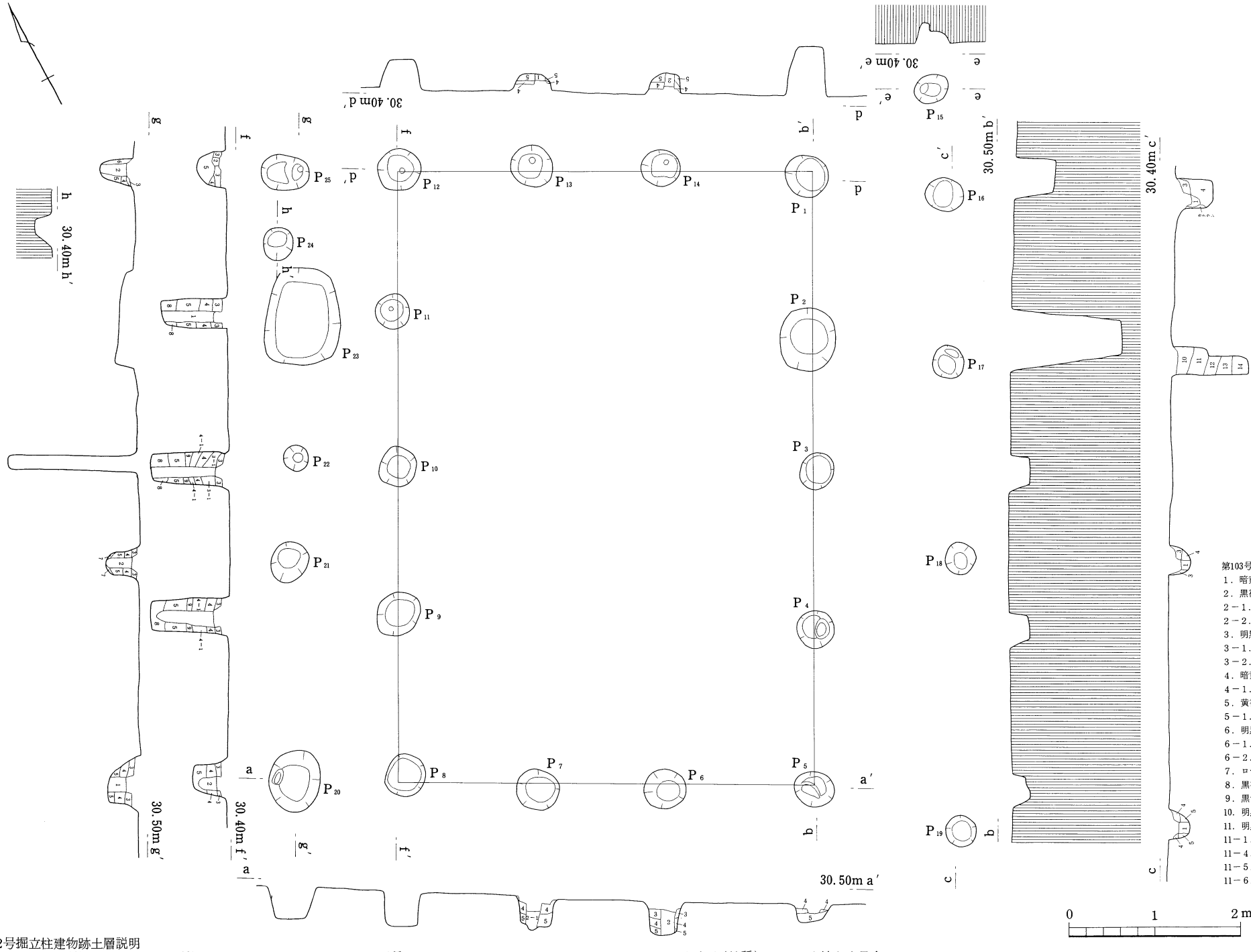


第270図　第102号掘立柱建物跡柱痕跡検出状況平面図

これらは、庇状の柱穴か、建設時の作業用のピットかは不明である。第270図のとおり、ほとんどのピットに柱痕跡が認められる。P_{2}・P_{9}・P_{10}・P_{17}・P_{22}は深く90cm以上を測る。P_{23}は土坑状で隅円胴張りの長方形を呈する。他の掘り方は不整円形で深さも20～59cmである。柱痕跡の覆土には、暗灰色粘土状の土塊を含む暗灰色が存在する。柱痕跡周辺の根固め用の土は、ローム土塊を含む暗褐色土や褐色土が主体である。

(3) 第103号掘立柱建物跡

調査地区の南西側台地平坦部に位置し、第108号住居跡を切っている。形体は、3×4間の側柱で、長軸8.95m、短軸4.33m、長軸方向は、N－35°－Eを示す。柱穴間隔は、1.22～



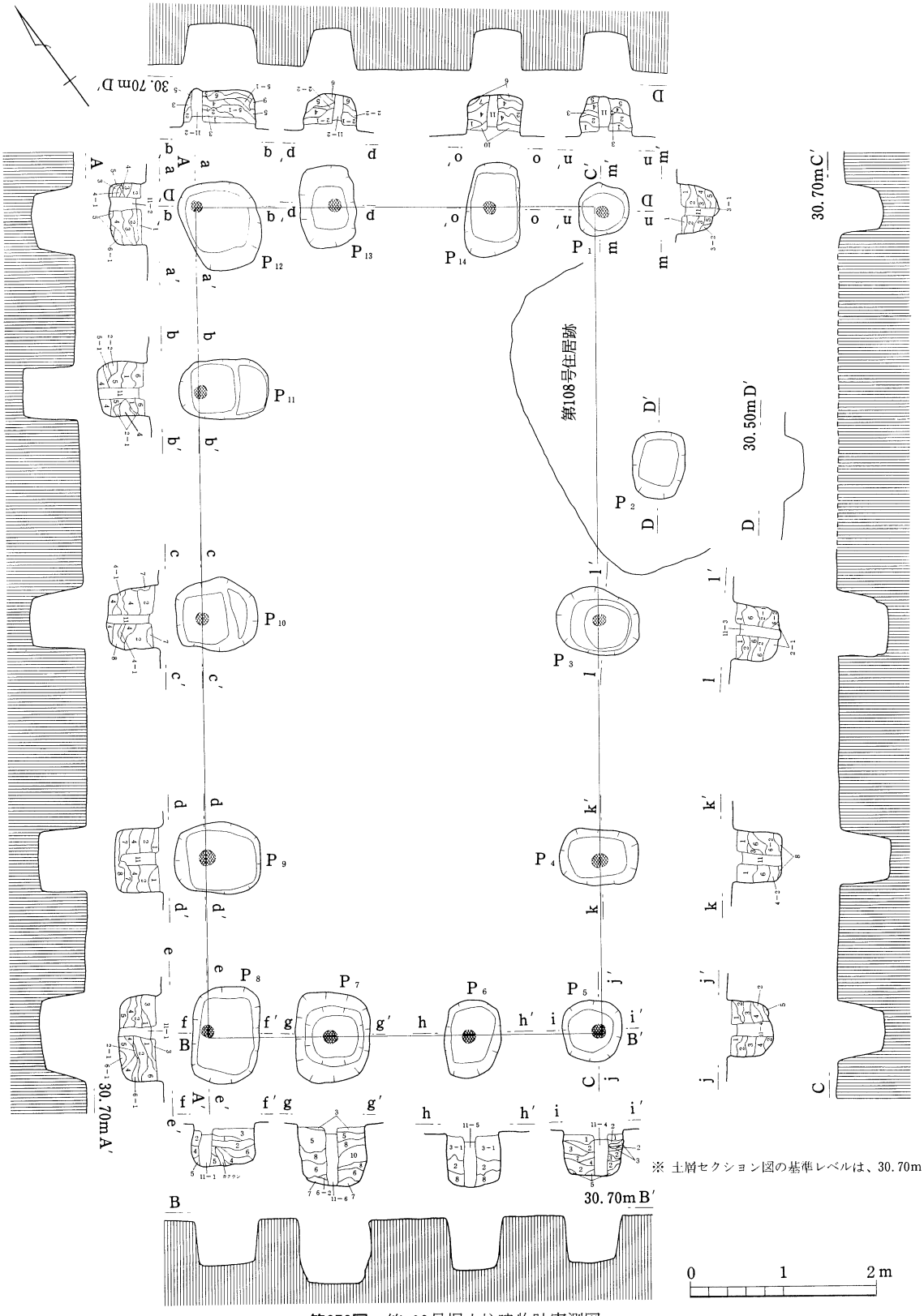
第119表　第102号掘立柱建物跡
ピット(掘り方)計測表(cm)

ピット名	上 端	下 端	深 さ
P 1	52×49	37×34	59
P 2	74×67	45×41	141
P 3	45×40	33×32	24
P 4	45×45	16×11	25
P 5	49×41	24×10	20
P 6	50×46	27×24	41
P 7	50×46	35×29	42
P 8	49×46	35×37	43
P 9	57×49	38×32	92
P 10	46×42	26×25	92
P 11	44×42	28×25	77
P 12	55×48	32×31	35
P 13	53×50	33×30	22
P 14	50×45	30×27	25
P 15	41×33	13× 9	24
P 16	46×40	32×23	43
P 17	38×37	24×18	91
P 18	37×35	20×15	26
P 19	37×36	24×23	25
P 20	74×58	43×34	37
P 21	50×42	24×23	38
P 22	31×29	11×11	149
P 23	114×88	89×63	23
P 24	39×33	24×18	23
P 25	63×42	19×13	45

第103号掘立柱建物跡土層説明(第272図)
1．暗黄褐色土。ローム土塊を多量に含む。
2．黒褐色土(少し軟質)。ローム土塊(軟質)を少量含む。
2－1．少し硬質。
2－2．ローム土塊を極少量含む。
3．明黒褐色土。ローム土塊を少量含む。
3－1．硬質。
3－2．少し暗い。
4．暗黄褐色土。ローム土塊を含む。
4－1．少し暗い。　4－2．ローム粒を含む。
5．黄褐色土(少し硬質)。ローム土塊をブロック状に含む。
5－1．少し軟質。
6．明黒褐色土。ローム粒を多量に含む。
6－1．ローム粒を少量含む。
6－2．ローム粒を含む。
7．ローム土塊がブロック状に混入し、少し軟質。
8．黒褐色土(硬質)。ローム土塊を極少量含む。
9．黒色土(軟質)。ローム粒を含む。
10．明黒褐色土。暗黄褐色土塊(軟質)を含む。
11．明黒褐色土(軟質)。ローム粒を含む。
11－1．少し暗い。　11－2．少し軟質。　11－3．ローム土塊を含む。
11－4．極めて軟質。
11－5．ローム粒は極少量でより暗い。
11－6．ローム粒を不規則に含む。

第102号掘立柱建物跡土層説明
1．暗褐色土(軟質)。淡褐色土塊(軟質)を斑点状に含む。
2．暗灰色土(軟質)。暗灰色粘土状の土塊を含む。
2－1．粘土塊を少量含む。
3．暗褐色土(少し軟質)。ローム粒を極少量含む。
3－1．少し硬質。ローム粒を少量含む。
4．暗褐色土。ローム粒とローム土塊を含む。
4－1．少し硬質。
5．暗褐色土(硬質)。ローム粒とローム土塊を極少量含む。
6．暗灰褐色土(少し軟質)。暗灰色粘土状の土塊を少量含む。
7．褐色土(硬質)。ローム粒を多量に含む。
8．暗褐色土(少し硬質)。ローム粒を少量含む。
9．褐色土。ローム土塊を多量に含む。
10．褐色土(軟質)。ローム土塊を少量含む。
11．褐色土(軟質)。ローム土塊を多量に含む。
12．暗褐色土(軟質)。ローム粒とローム土塊を含む。
13．褐色土。ローム土塊がブロック状に入る。粘土塊を少量含む。
14．褐色土。ローム土塊がブロック状に入る。暗褐色土塊を少量含む。

第271図　第102号掘立柱建物跡実測図



第272図　第103号掘立柱建物跡実測図

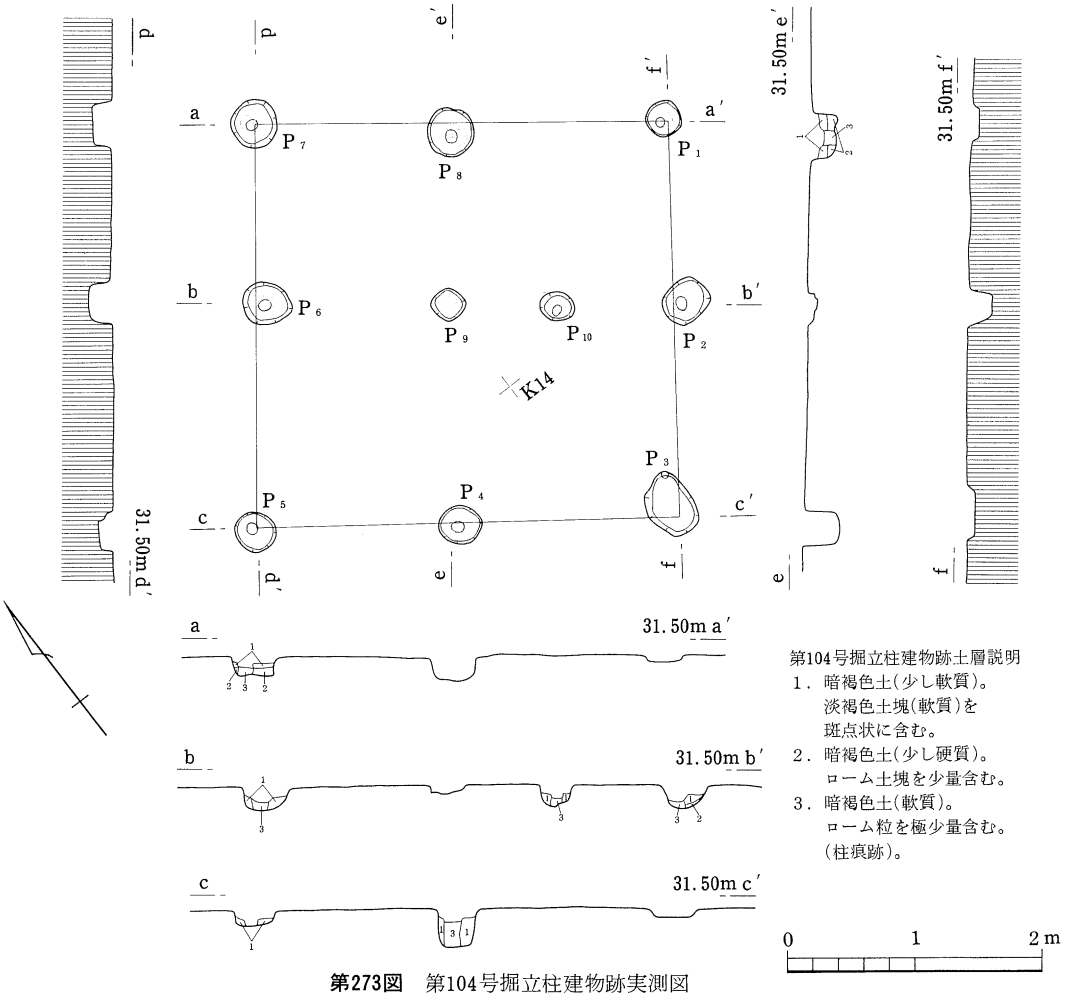
第120表　第103号掘立柱建物跡
ピット(掘り方)計測表(cm)

ピット名	上端	下端	深さ
P1	57×54	45×40	45
P2	73×57	51×39	20
P3	90×71	49×47	53
P4	85×61	62×44	54
P5	67×65	49×46	48
P6	85×61	65×45	57
P7	98×80	50×45	67
P8	106×72	83×57	48
P9	94×78	72×64	52
P10	88×80	55×47	48
P11	97×65	53×46	56
P12	107×81	67×67	43
P13	87×61	45×38	40
P14	103×58	74×50	43

2.62mと差が有り、特に隅付近は狭い。また、P2は、P3寄りで少し外側に位置する。柱穴は、径10～13cmの柱痕跡を確認できる。深さは、40～67cmを計り、P2が20cmであり、また、底部の柱のあたり痕跡もP2以外は認められる。掘り方は、大きな隅円胴張りの長方形である。柱痕跡の覆土は、明黒褐色土(軟質)でローム粒を含んでいる。また、掘り変えは状況から認められない。

(4) 第104号掘立柱建物跡

調査地区の西側やや北寄りの台地平坦部に位置し、第104号柱居跡が南約1m、第102号住居跡が北西約6mに存在する。形体は、2×2間の総柱で、長軸3.30m、短軸3.10m、短軸方向がN－37°－Eを示す。P10がP2とP9の中間に位置する。柱穴の平面形体は、不整円形で、掘り方は無いとみられる。柱のあたり痕跡は、認められるものもある。



第104号掘立柱建物跡土層説明
1．暗褐色土(少し軟質)。
淡褐色土塊(軟質)を
斑点状に含む。
2．暗褐色土(少し硬質)。
ローム土塊を少量含む。
3．暗褐色土(軟質)。
ローム粒を極少量含む。
(柱痕跡)。

0　1　2m

第273図　第104号掘立柱建物跡実測図

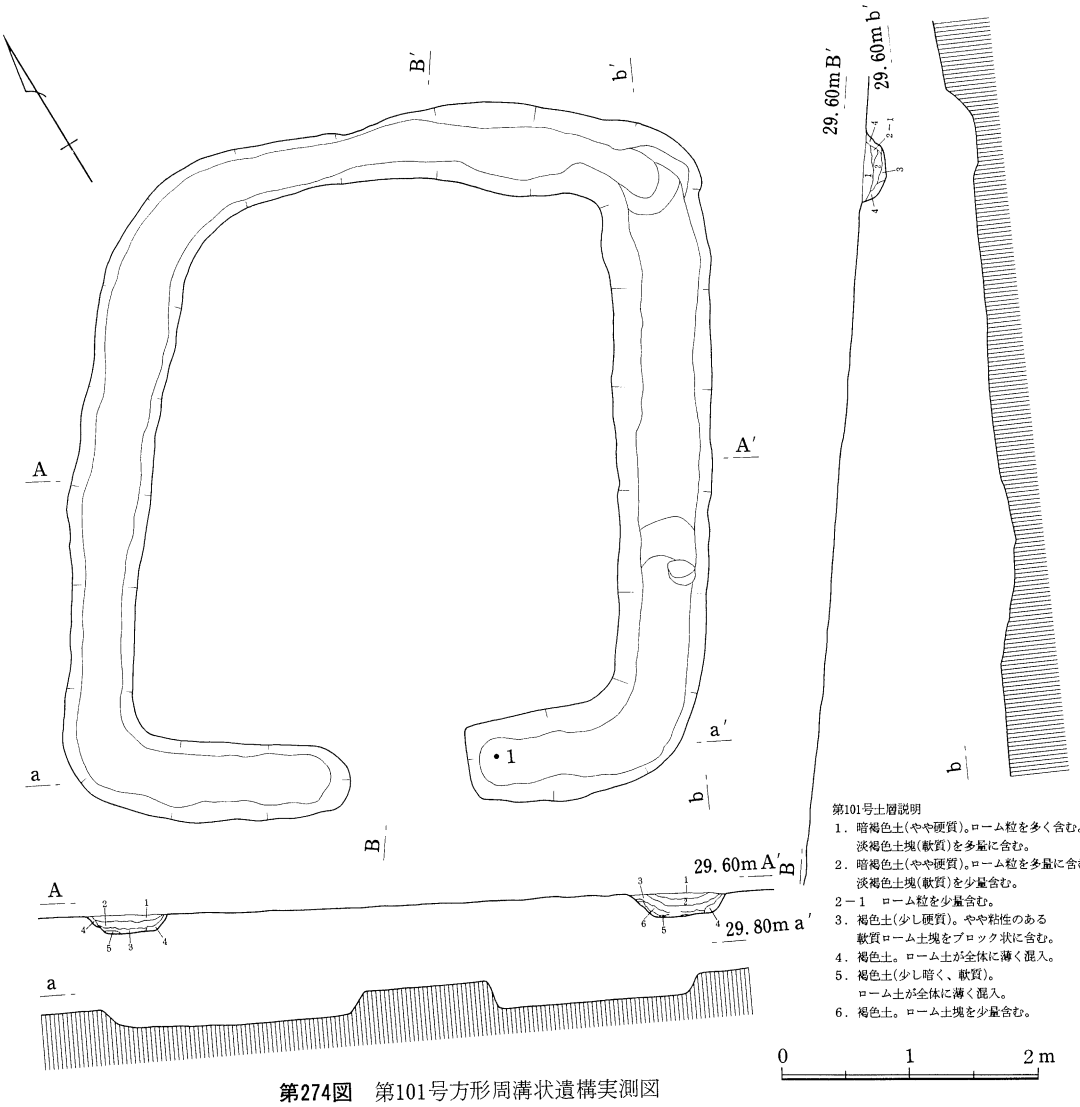
第121表　第104号掘立柱建物跡
ピット(掘り方)計測表(cm)

ピット名	上 端	下 端	深 さ
P1	28×27	24×23	5
P2	38×32	32×27	18
P3	53×37	46×28	7
P4	35×30	31×26	31
P5	32×30	28×25	12
P6	40×34	32×28	19
P7	38×37	31×30	16
P8	39×37	34×32	19
P9	28×26	22×22	8
P10	28×24	22×17	18

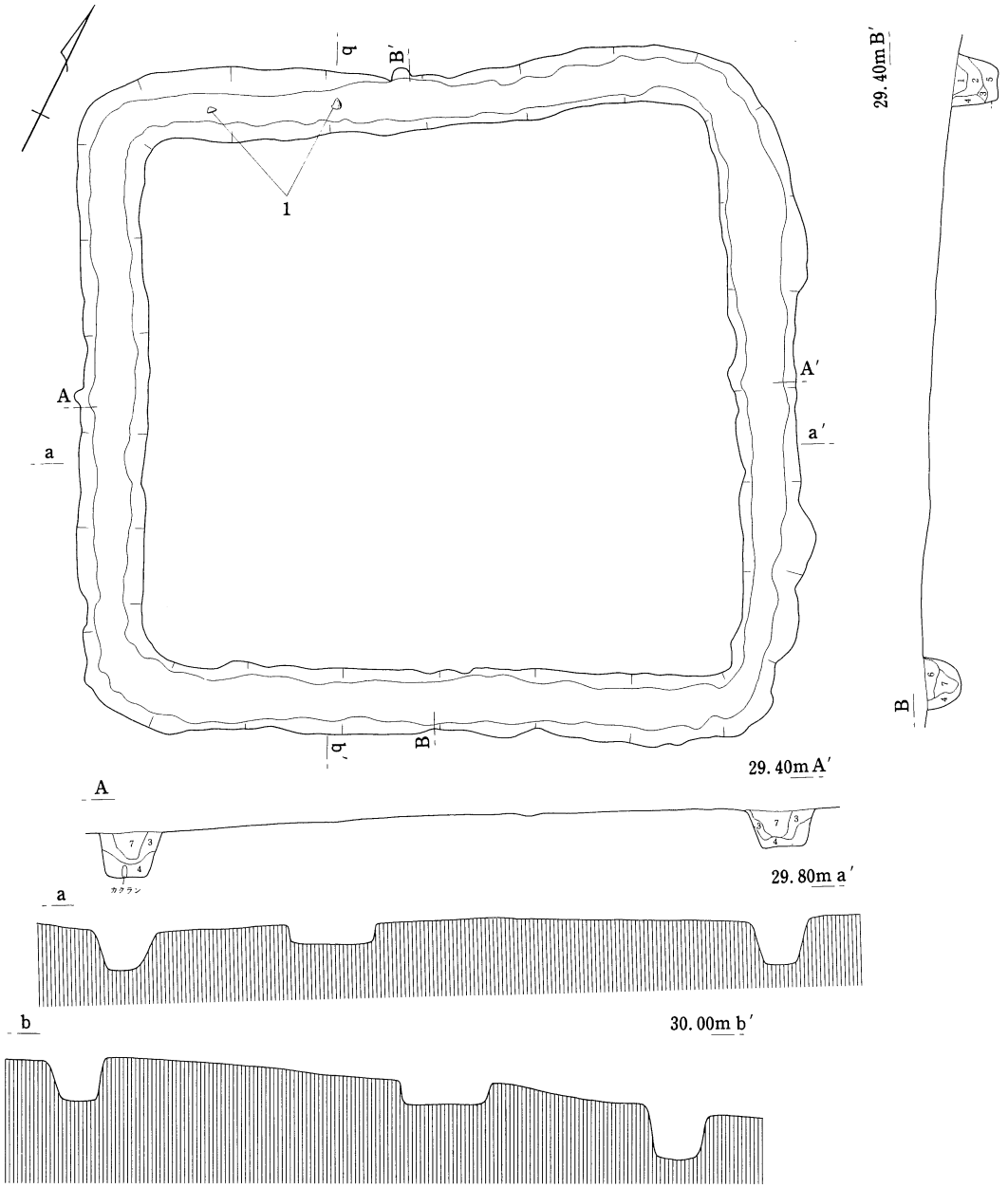
6．方形周溝状遺構

(1) 第101号方形周溝状遺構

調査地区の北東側、台地の端部に位置する。第147号住居跡の北側プランを切っている。周溝は、やや胴張りの隅円方形で、南西側中央部が途切れて、ブリッヂを呈している。規模は周溝区画内の内側で8.60×7.60m、周溝を含めた上端で11.0×10.1mを測る。周溝は、断面が逆台形で、幅は最大1.50m、深さは最深で76cmである。底部は比較的平坦であるが、東側では、他に比べて約20cm高くなっている。主軸方向は、長軸を測り、N－34°－Eを示す。南西側中央の周溝の途切れた部分は、



第274図　第101号方形周溝状遺構実測図



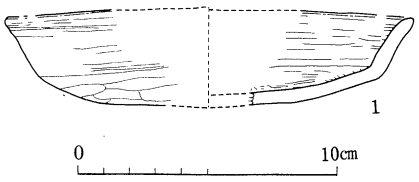
第102号方形周溝状遺構土層説明

1．暗褐色土(やや硬質)。ローム粒を含む。
2．暗褐色土(少し硬質、明るい)。ローム粒を極少量含む。
3．暗褐色土(やや軟質)。ローム粒を少量含む。
4．褐色土(やや軟質)。ロームを全体に薄く含む。
5．褐色土(やや軟質)。硬質のローム粒を多く含む。
6．暗褐色土(やや硬質)。硬質のローム粒を極少量含む。
7．暗褐色土(やや軟質)。ローム粒を極少量含む。

0　1　2m

第275図　第102号方形周溝状遺構実測図

位置がやや東側に片寄っている。幅は1.88mである。特に踏み固められた面や炭、焼土などは検出していない。覆土は、上部に暗褐色土、下部に褐色土を主に堆積し、いずれもローム粒を含んでいる。堆積状況は、自然堆積を示している。埋葬施設は検出されていない。出土遺物は、



第276図　第101号方形周溝状出土遺物実測図

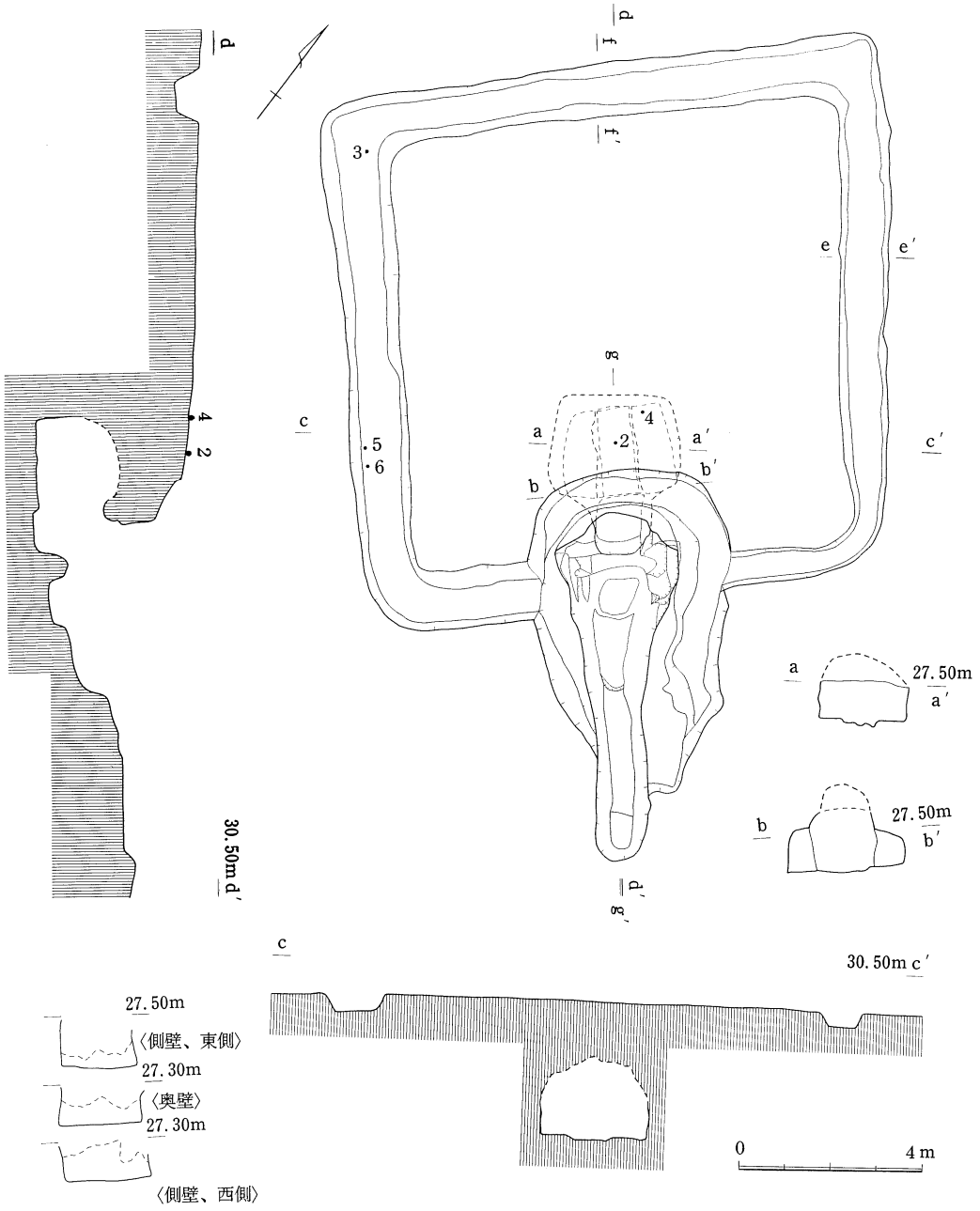
No.1が、坏で、底部は、丸底ぎみで、口縁部は、屈曲して、直線的に外反する。両面口縁部は、横ナデ、体部外面は、ヘラケズリ、内面は、ヘラナデ(ミガキにちかい)。色調は、両面とも暗褐色。胎土は、緻密。焼成は良好。口径は、推定15.8cm、器高3.9cm。

(2) 第102号方形周溝状遺構

調査地区の東側、台地端部に位置する。第125b号住居跡が北東約3m、第137号住居跡が南約3m、第101号方形周溝状遺構が北西約25mに存在する。形体は、隅円方形に囲る細い溝であり、東側溝がやや胴張りぎみである。規模は、区画内は、5.00×4.75m、周溝の外側上端により区画される範囲は、6.00×5.80mを測る。主軸方向は、長軸方向を測り、N－27°－Wを示す。溝断面は、箱形にちかく狭い、幅は、36～70cm、深さは、最深部で46cmである。覆土は、上部の暗褐色土と下部の褐色土が主体で、いずれも軟質で、ローム粒を含む。堆積状況は、自然堆積である。埋葬施設は検出されていない。方形区画の中央付近に方形の土坑が存在したが、覆土等より最近の所産である。出土遺物は、北西側の溝内よりNo.1高坏の脚と、西側溝内よりNo.2須恵器長頸壷の破片が検出されている。No.1高坏は、下端が欠損した脚で、脚部最小径は、5.5cmを計る。形態は、ハの字状にちかく、開きぎみである。外面は、褐色で、縦方向のヘラケズリ。内面は、坏部分が、褐色で、ヘラナデ、脚部が、褐色でヘラケズリダシ。No.2須恵器長頸壷は、体上部は、屈曲し、口頸部は、太い。色調は、外面暗灰色、内面灰色、胎土は、緻密である。

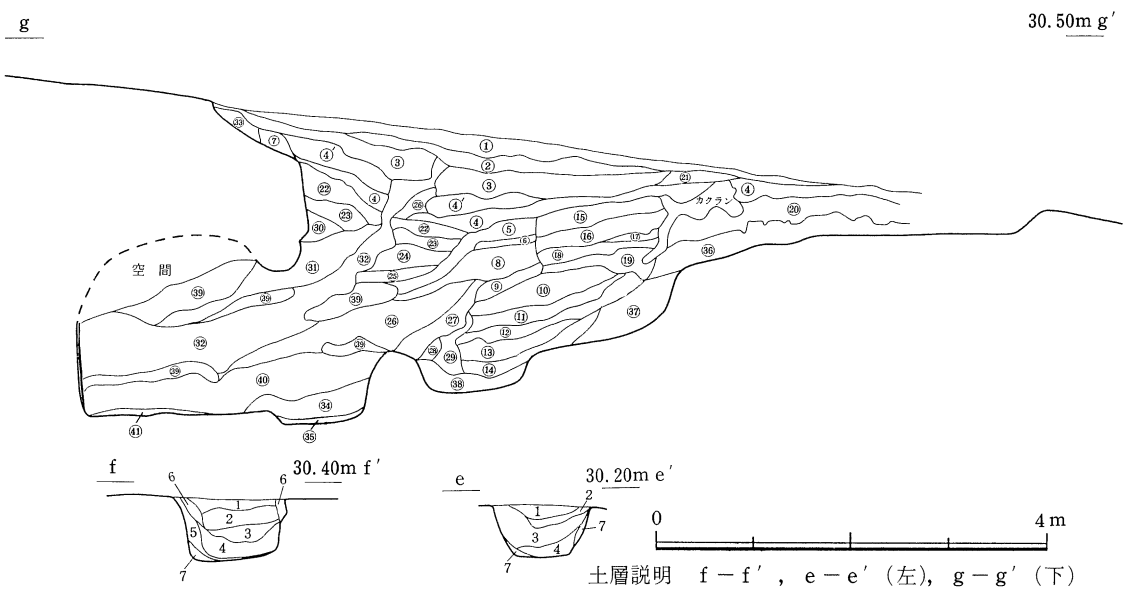
(3) 第103号方形周溝状遺構

調査地区の南側で、台地の南東側端部で南東側は、東側の谷に向って傾斜している。当遺構の溝によって、第142号、144号、117号住居跡のプランが各々切られている。形体は、四周する溝によって隅円方形に区画され、南東側の溝の中央部には、地下式横穴墓が付設している。規模は、方形区画内が9.60×9.90m、周溝外側上端が12.10×12.54mで、主軸方向は、短軸を測り、N－40°－Wを示す。各溝は、北西側溝が長さ12.60m、幅1.06～1.22m、深さ0.50～0.60m、北東側溝が長さ11.70m、幅0.63～1.15m、深さ0.26～0.50m、南東溝は長さ11.0m、幅0.57～1.37m、深さ0.13～0.35m、南西溝は長さ11.90m、幅1.14～1.58m、深さ0.23～0.60mを測る。溝の覆土は、自然堆積で、上部の暗褐色土と下部の褐色土が主体で、各々ロー



第277図　第103号方形周溝状遺構実測図

ム粒を含んでいる。南東側溝のほぼ中央に位置する地下式横穴墓は、土層より周溝との切り合いは無いみられ、同時期に造られていると考えられる。形体は、南東側より緩やかに降る墓道状の落ち込みをもち、数段の階段状の不規則な落ち込みが続いて、埋納部入口に至る。入口手前にわずかな前室状の平坦部が有り、埋納部入口は、1段高くなり狭い。埋納部は、いわゆる玄室に相当し、手前に、やや平坦な不整方形の部分をもち、奥に広く1段高い部分が存在する。

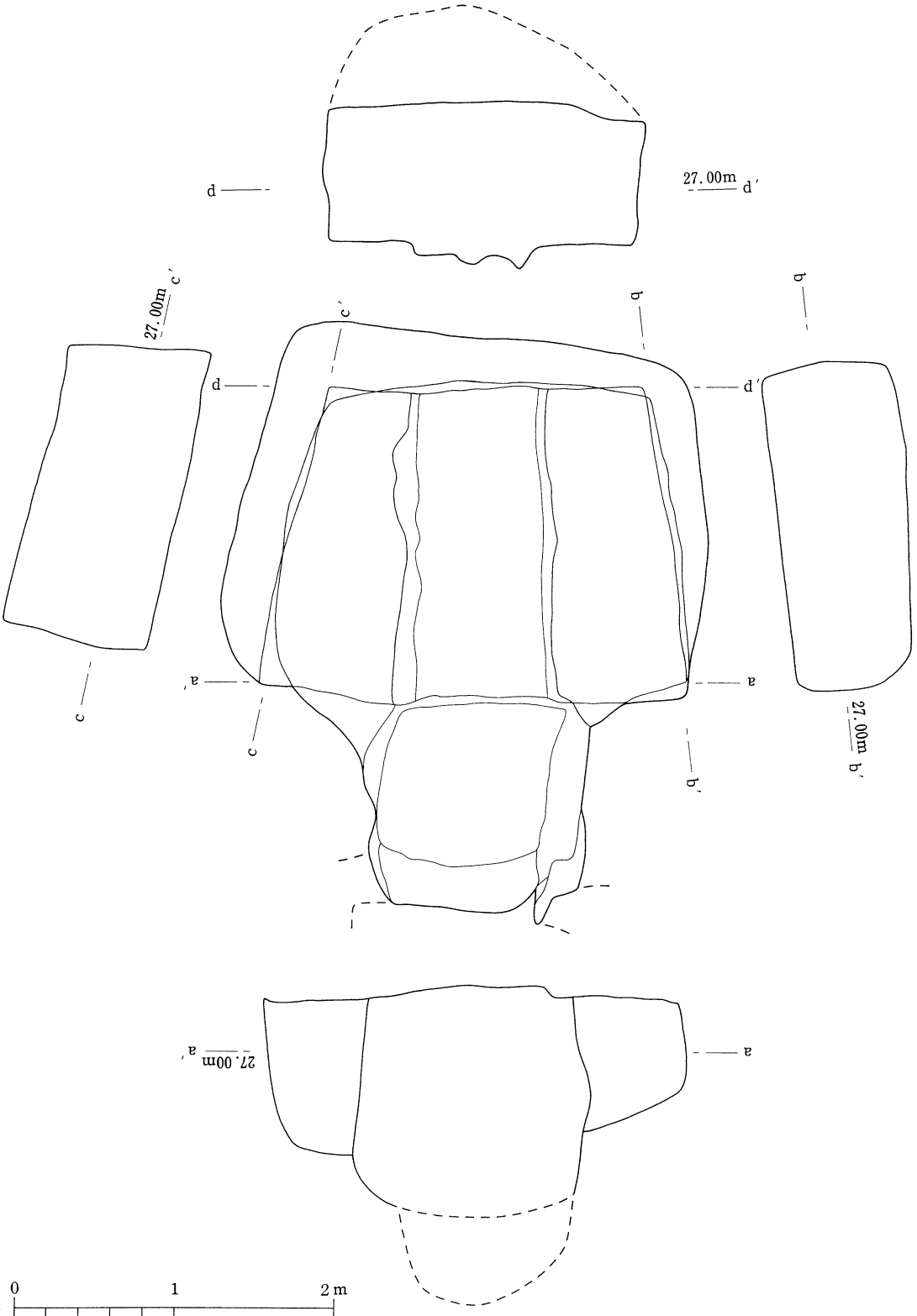


土層説明　f－f′，e－e′（左），g－g′（下）
（位置は第277図）

1 黒色土(少し軟質)。淡褐色土塊(軟質)を極少量含む。
2 黒褐色土(少し軟質)。淡褐色土塊(軟質)を含む。
3 暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を多量に含む。
4 暗褐色土(明るい)。淡褐色土塊(軟質)を含む。
5 暗褐色土(少し軟質)。ローム粒を少量含む。
6 暗褐色土。ローム粒を極少量含む。
7 褐色土。ローム粒を多量に含む。

① 極暗褐色　粒子細かく粘性締りとも弱い。
② 褐　色　粒子細かく粘性締りとも弱い、黒色土を斑点状に混入。
③ 黒 褐 色　粒子細かく粘性締りともややあり、ローム粒子、焼土粒子、炭化物を若干含む。
④ 暗 褐 色　粒子細かく、やや粘性あり、締り弱い、褐色土を斑点状に混入、④′ ④より少し暗い。
⑤ 黒 褐 色　④層よりやや褐色土の斑点状の混入が多く、若干の炭化物ローム粒も混入する、色調は④より明るい。
⑥ 黒 褐 色　粒子細かく粘性ややあり、締り弱く、ローム粒子を多量に含む。
⑦ 褐　色　ローム粒子を多量に混入し、締り弱く、ボロボロしている。
⑧ 褐　色　ローム粒子、ロームブロック(１cm大)を多量に含み、締りなくサクサクしている。
⑨ 褐　色　ローム粒子、ロームブロック(３～４cm大)を多量に含み、締りない土。
⑩ 褐　色　ローム粒子、ロームブロック(３～４cm大)を多量に含み、やや締りない土、⑨よりもロームブロックの量が多い。
⑪ 褐　色　ローム粒子、ロームブロック(10cm大)を多量に含み、やや締りある土。
⑫ 褐　色　ローム粒子、、ロームブロック(５～６cm大)を多量に含み、締り弱い土。
⑬ 褐　色　ローム粒子を多量に含み、少量のローム粒子混入、締り弱い（ロームブロックは５～６cm大)。
⑭ 褐　色　ロームブロックを多量に含み(５～15cm大)、若干の締りのないローム粒子を含む。
⑮ 褐　色　粒子やや細かく、粘性締りともやや弱い、ローム粒子を多量に含み、ロームブロックは認められない。
⑯ 褐　色　粒子やや粗く、粘性締りとも弱い、やや粒の大きいローム粒子を多量に含み、ロームブロックは認められない。
⑰ 褐　色　粒子やや粗く、粘性締りともややある。ロームブロック(２～３cm大)を少量含む。
⑱ 褐　色　粒子粗く、粘性、締りとも強い、ロームブロックを多量に含む(５～６cm大)ローム粒子も多量に含む。
⑲ 褐　色　粒子粗く、粘性、締りとも弱い、ボロボロしている、やや粒の大きいローム粒子を多量に含む。
⑳ 褐　色　粒子粗く、粘性、締りとも弱く、ボロボロしている。⑲にとても近いが粒子の粗は20の方が強い。
㉑ 暗褐色土　粒子細く、粘性締りともややあり、ローム粒子(やや粒が粗い)を少量含む。
㉒ 茶 褐 色　粒子やや細い、粘性締り強く、ローム粒子を少量含む。
㉓ 暗 褐 色　粒子やや粗い、粘性ややあり、締りややあり、３mm粒大のローム粒子を多量に含む。
㉔ 暗茶褐色　粒子やや粗い、粘性締り弱い、５mm～１cm大のローム粒子を多量に含む。
㉕ 暗 褐 色　粒子やや細かい、粘性ややあり、締り弱い、３mm大のローム粒子を少量含む。
㉖ 暗 褐 色　粒子やや粗い、粘性ややあり、締りとも弱い、ロームブロックを少量含み、ローム粒子を多量に含む。
㉗ 暗 褐 色　㉙と同じであるが、粘土ブロックを少量含む。
㉘ 褐　色　ハードロームブロック。
㉙ 白灰色粘土　粘土を多量に含み、少量のロームブロック及びローム粒子を混入、入口の閉塞部使用土と考えられる。
㉚ 茶 褐 色　粒子粗く、粘性がややあり、締りが弱い ローム粒子を多量に含み、２mm大のロームブロックを少量含む。
㉛ 暗茶褐色　粒子粗く、粘性締りとも弱い、ローム粒子を多量に含む。
㉜ 暗 褐 色　粒子粗く、粘性、締りとも特に弱い ローム粒子を多量に含む、天井崩落後、空間に流れこんだ土である。
㉝ 褐　色　粒子粗く、粘性、締りとも弱い、ローム粒子を多量に含む。
㉞ 暗 褐 色　ローム粒を多く、粘土粒子を少量含む。
㉟ 暗 褐 色　ロームブロックを少量含む。
㊱ 褐　色　少し軟質。ローム粒子を少量含む。
㊲ 褐 色 土　軟質。ロームブロックを多く含む。
㊳ 褐 色 土　少し軟質。ロームブロックを多く含む。少し暗い。
㊴ ロームブロック。天井が崩壊したと見られるハードロームブロック群。
㊵ 暗 褐 色　少し軟質。ローム粒とロームブロックを含む。
㊶ 暗 褐 色　粘性が強い。ローム粒とロームブロックを多量に含む。

第278図　第103号方形周溝状遺構土層セクション図(ｅ－ｅ′、ｆ－ｆ′、ｇ－ｇ′)

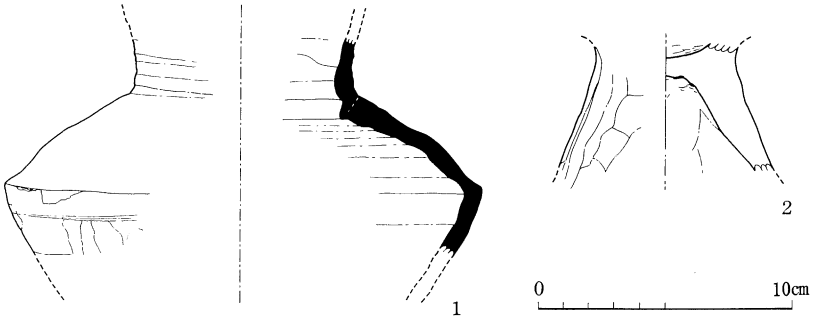


第279図　第103号方形周溝状遺構主体部(地下式横穴墓)実測図

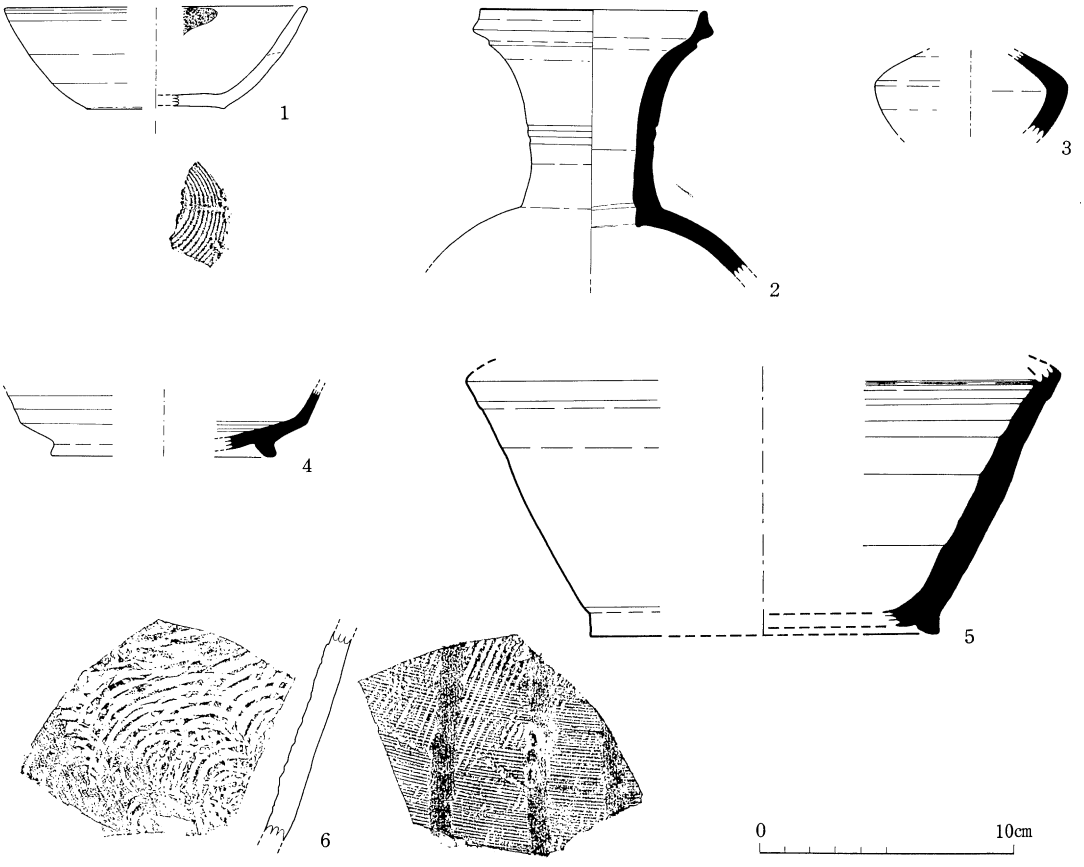
平面形体は、奥壁が狭い隅円の台形状を呈し、天井部は、落下していた(検出当時約25cm程度の空間が有った)が、ドーム状(カマボコ型)と考えられる。したがって、奥壁は、カマボコの断面状で、側壁は、台形状(やや右側が隅円である。)前壁は、大小2段を呈するカマボコ型である。床部は、手前の部分は平坦であるが、奥は約15cm高く、その中を更に、縦割りに3室の段差を設けている。中央が1段低く(10cm前後)、凹凸がみられ、両脇には、棺床とも推定される平坦部が存在する。なお、床部はいずれも硬質である。各部分の大きさは、墓道状の落ち込みが、長軸8.25m、埋納部入口付近の最大幅が1.37m、前室に相当する部分が、下端で、80cm四方の大きさであり、墓道上部から前室下端までの深さは、1.90mを測る。埋納部は、手前の不整方形部分が、下端で102×104cm、前室下端から30cmほど低い位置に設置されている。なお、埋納部入口部分は、崩落がひどいが、閉鎖されていた可能性が高く、前室部分と埋納部分との間に厚さ70cm程の地山(ハードローム)を掘り残しており、これが45cmほど残っている。埋納部奥の広く1段高い部分は、奥行1.95m、高さ約2.00m(推定)、奥壁の幅1.92m、高さ約1.60m、側壁右側下端1.92m、上端1.82m、高さ85cm、側壁左側下端1.92m、上端1.80m、高さ92cm、前壁が、幅2.60m、高さ約2.00mを測る。また、奥の床部分は、上部の最高位のローム漸移層からの深さが、3.80mである。埋納部の奥に有る。三つの区画の大きさは、各々下端で、中央が、奥行き1.12m、幅78cm、右側が、奥行き1.92m、幅81cm、左側が、1.92m、幅78cmを測る。この地下式横穴墓の主軸方位は、N－38°－Wである。壁には、掘削した用具痕が認められており、刃先が孤状を呈するとみられる。出土遺物は、埋納部奥の右側区画部と中央部より、人骨片、中央部より、馬の歯を検出している。また、埋納部上部の方形周溝区画内南側より、2・4の長頸壷、西側周溝内の北側より3の小壷、同じく南側より、平瓶と提瓶片とみられる須恵器が、各々検出されている。

No.1坏は、小型で体部は少し丸みをもつ。全体の1／6程度の残存である。ロクロ水挽き成形、底部は回転糸切り離し。内面の上部には煤が付着する。口径12.0cm、底径5.5cm、器高3.9cmと推定する。No.2は、須恵器長頸壷で、丸みをもった体部、頸部は弧を描いて急激に立ち上がる。口縁部は外反し、口唇部はつまみ上げられ、稜をもち、先端は細く直立する。胴上位から口縁まで約1／4の残存である。口径9.0cm、頸部径5.5cmと推定される。釉はかかっている。No.3は、須恵器小壷で体部中央付近1／4程度の残存である。体部は、球状で中位はかなり大きく張り出している。体部最大径は、推定で7.6cmを計る。No.4は、須恵器長頸壷の底部付近と考えられ、1／6程度の残存である。底部には、断面三角形の高台が付き、体下部は、わずかに直線的に大きく開いた後、屈曲して立ち上がる。また、底部中央は、高台部分より下に突張る形と推定される。大きさは、推定で、底径8.9cm、高台の高さは、0.5cmをはかる。No.5は、須恵器提瓶と推定でき、胴部から上部は欠損している。胴部は、屈曲部まで現存し、大きくが

っしりした立上がりをもつ。高台が付く底部は、高台付近のみの残存である。高台は、断面三角形を呈する。大きさは、推定で、高台がつくる底径は、14.0cm、胴部最大径は、23.8cmである。No.6は、須恵器瓶の胴部上位部分と推定され、No.5の一部とも考えられる。器厚は、0.7～1.1cmをはかり、外面は、タタキ目の後、カキ目、内面には、同心円のアテ目がみられる。



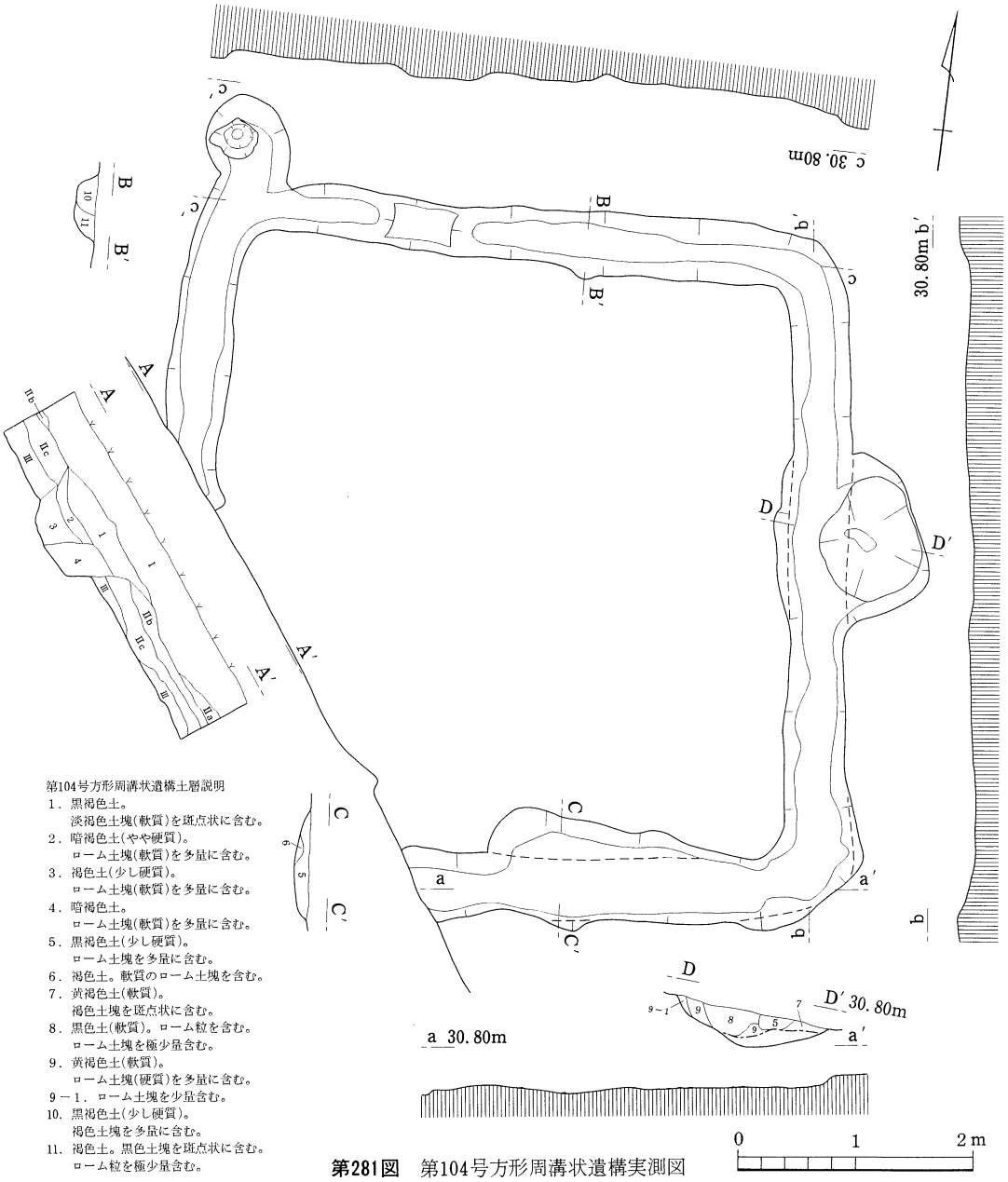
第102号方形周溝状遺構出土遺物



第280図　第102・103号方形周溝状遺構出土遺物実測図

（4）第104号方形周溝状遺構

調査地区の南端、やや西寄りに位置する。第150号住居跡が北東約２ｍに存在する。また、当遺構プランの南西隅は、地区外のため未調査である。形体は、隅円の方形に区画された全周する溝で、規模は、区画内が4.80×5.05ｍ、溝外側上端では5.80×6.00ｍを測る。主軸方向は、長軸を測り、Ｎ－２°－Ｗを示し、ほとんど磁北にちかい。溝は、上端幅43～50㎝、下端幅20～45㎝、深さは最深部で18㎝を測り、比較的浅い。底部には、少し凹凸がみられる。覆土は、自然推積であり、軟質のローム塊を含んでいる。出土遺物は、皆無である。



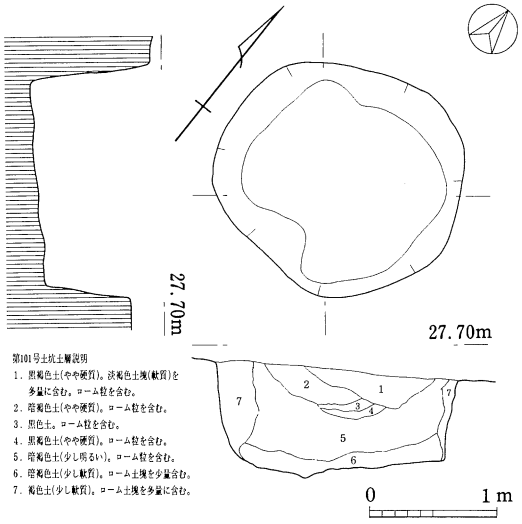
第104号方形周溝状遺構土層説明
1．黒褐色土。
　淡褐色土塊(軟質)を斑点状に含む。
2．暗褐色土(やや硬質)。
　ローム土塊(軟質)を多量に含む。
3．褐色土(少し硬質)。
　ローム土塊(軟質)を多量に含む。
4．暗褐色土。
　ローム土塊(軟質)を多量に含む。
5．黒褐色土(少し硬質)。
　ローム土塊を多量に含む。
6．褐色土。軟質のローム土塊を含む。
7．黄褐色土(軟質)。
　褐色土塊を斑点状に含む。
8．黒色土(軟質)。ローム粒を含む。
　ローム土塊を極少量含む。
9．黄褐色土(軟質)。
　ローム土塊(硬質)を多量に含む。
9－1．ローム土塊を少量含む。
10．黒褐色土(少し硬質)。
　褐色土塊を多量に含む。
11．褐色土。黒色土塊を斑点状に含む。
　ローム粒を極少量含む。

第281図　第104号方形周溝状遺構実測図

7．土坑

(1) 第101号土坑

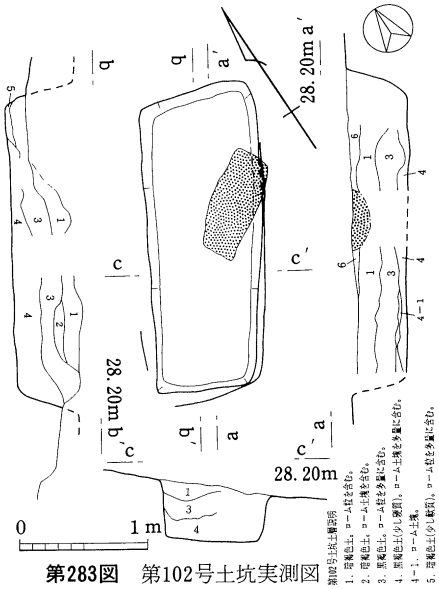
調査地区の北東側、台地端部に位置する。すでに東側谷部に向って傾斜する地点である。第134号住居跡が西側約6m、第133b号住居跡が北西約6mに、第134号住居跡と重複する第104号土坑が西南西約8mに存在する。本遺構は、他遺構との重複はない。平面形体は、不整円形で、規模は、上端の長径2.00m、短径1.89m、下端の長径1.84m、短径1.82mをはかる。底部はやや凹凸がみられ、特に硬くはない。立ち上がりは、急傾斜である。傾斜地に位置するため、南西側ほど高く、北東側が低く残っている。壁高は、最大で95cmをはかる。土坑の覆土は、ローム粒を含む暗褐色土を主体とし、底部付近は、ローム土塊を多く含む褐色土であるが、すべて自然推積と推定される。出土遺物は、無い。



第282図　第101号土坑実測図

(2) 第102号土坑

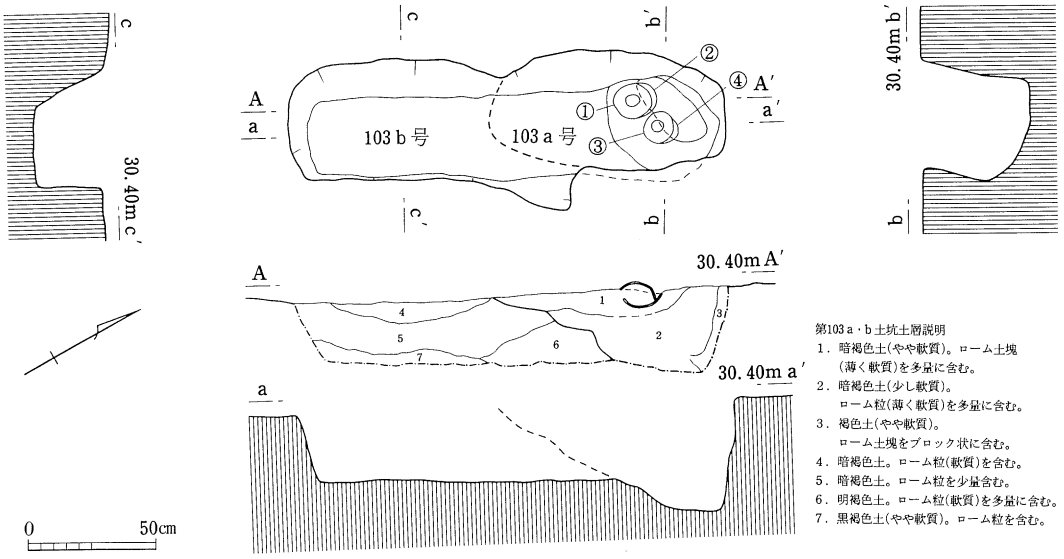
調査地区の中央、やや東寄りに位置する。第137号住居跡のプラン内に存在し、その住居跡の床面を切っている。平面形体は、やや不整の隅円長方形を呈し、規模は、上端の長軸2.45m、短軸0.90m、下端の長軸2.27m、短軸0.78mをはかる。主軸方位は、長軸方向を測り、N－30°－Eを測る。壁の立ち上がりは、最大で48cmである。底部は、ほぼ平担で、特に硬質な面は認められない。覆土は、上部東側に、ウミニナ、シオフキ、ハマグリを主体とした貝殻が検出されている。主体の土層は、ローム粒を多量に含む暗褐色土であり、上層の貝層を含めて、人為的な埋めもどしが想定できる。その他の出土遺物は、特に検出されていない。



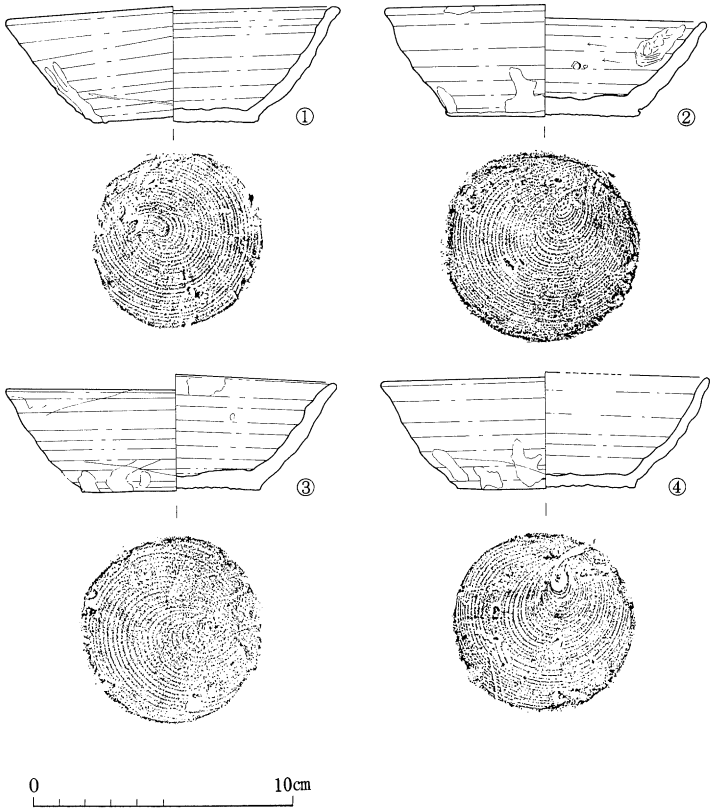
第283図　第102号土坑実測図

(3) 第103a・b号土坑

調査地区の南側、第116号住居跡の北約3mに位置する。本遺構は、2基の土坑が切り合った形体を呈する。第103a号土坑が第103b号土坑を北側で切っている。第103a号土坑は、平面形体が長円形を呈し、規模は、上端の長軸推定1.87m、短軸1.00m、下端の短軸0.82mをはかる。主軸方位は、長軸を測り、N－31°－Eを示す。



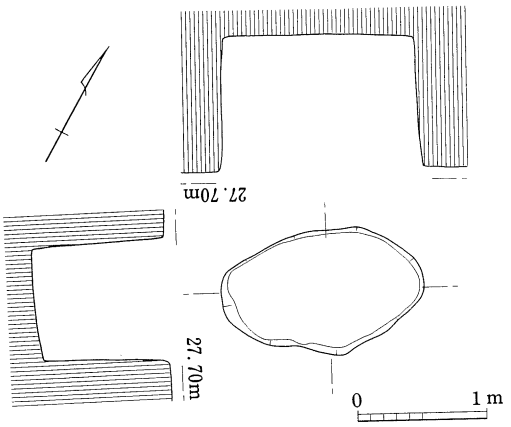
第284図　第103 a・b 号土坑実測図



第285図　第103 a 号土坑出土遺物実測図

底部は、平担ではなく、北側が深くなっており、立ち上がりは、東側がオーバハングしている。深さは、最大で56cmである。また、覆土は、ローム粒を多量に含む軟質の暗褐色土で人為的に埋没したものである。覆土上部より、底部糸切り離しの土師器坏が4個体、2個体ずつ合わさった形で検出している。第103 b 号土坑は、隅円の不整方形を呈し、規模は、上端の長軸推定2.30m、短軸0.93m、下端の短軸0.61mを測る。主軸方位は、長軸方向を測り、N－34°－Eを示す。底部

は、平担で、立ち上がりは、急傾斜である。深さは、最大で52cmを測る。覆土は、ローム粒を含む暗褐色土を主体とするが、人為的に急激に埋めもどされてはいない。出土遺物は無い。第103a号土坑より出土した土師器坏は、口径12.5～13.5cm、器高4.5cm前後の大きさで、底部は、右回転ロクロ糸切り離し、外面の体下位と内面の体上位に指頭痕跡が残る。いずれも焼成は普通。胎土に小礫を少量含む。



第286図　第104号土坑実測図
（第134号住居跡内）

(4) 第104号土坑

第134号住居跡内の床面中央やや南東寄りに、当住居跡内の床面を切って存在する。平面形体は、不整長円形を呈し、大きさは、上端の長軸1.99m、短軸1.25m、下端の長軸1.90m、短軸1.12mを測る。底部は、平担であるが、特に踏み固められてはいない。壁の立ち上がりは、急峻であり、垂直にちかい。最大の深さは、1.34mを測る。覆土は、軟質でローム土塊を多く含む暗褐色土が主体であり、人為的な埋めもどしと考えられる。当遺構は、出土遺物は無いが、覆土の状況などより、最近の所産とは考えにくい。

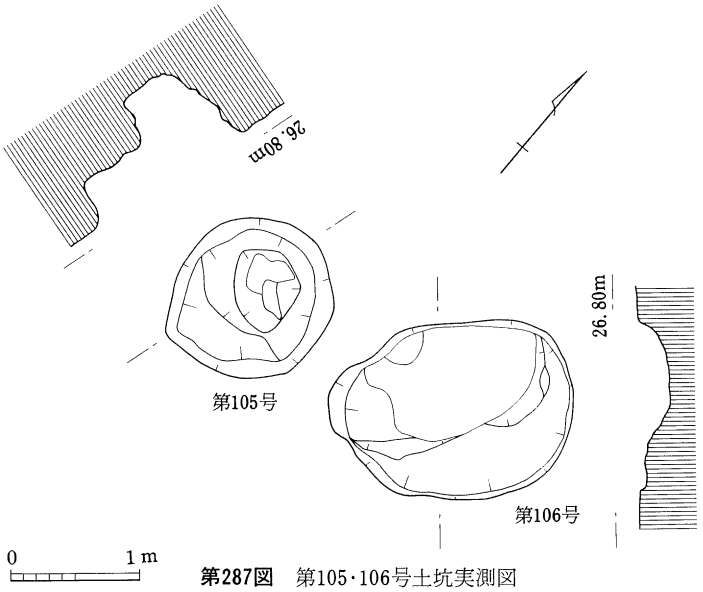
(5) 第105号土坑

調査地区の南東側に位置し、第106号土坑が、南東側に近接して存在する。平面形体は、不整円形を呈し、上端の長軸1.38m、短軸1.22mを測る。底部は、2段の立ち上がりが有り、北側が深く（73cm）南側が浅い（39cm）。出土遺物無し。

(6) 第106号土坑

平面形体は、不整の長円形を呈し、規模は、上端の長軸1.93m、短軸1.40mを測る。底部は、2段に分かれ、南東側が高く（深さ6cm）。北西側が低い（25cm）。出土遺物は無い。

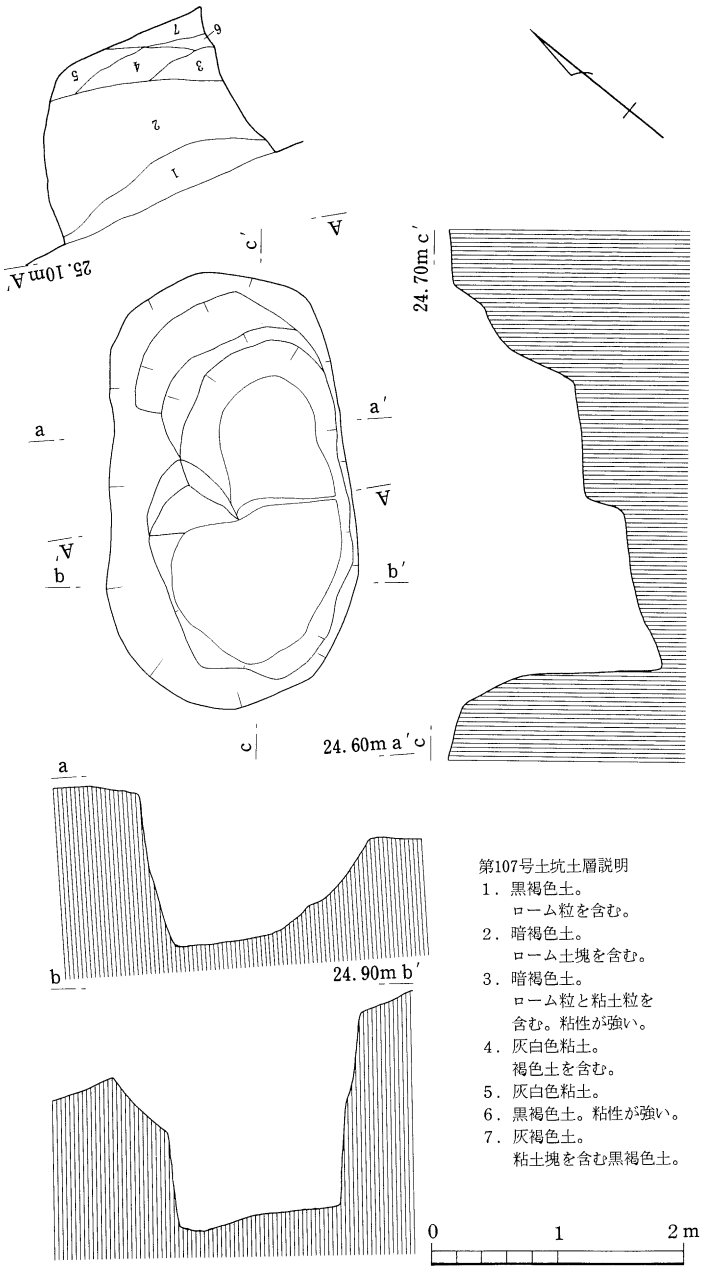
両土坑とも、覆土の観察などから、最近の所産ではない。また、両者の関係は不明。



第287図　第105・106号土坑実測図

(7) 第107号土坑

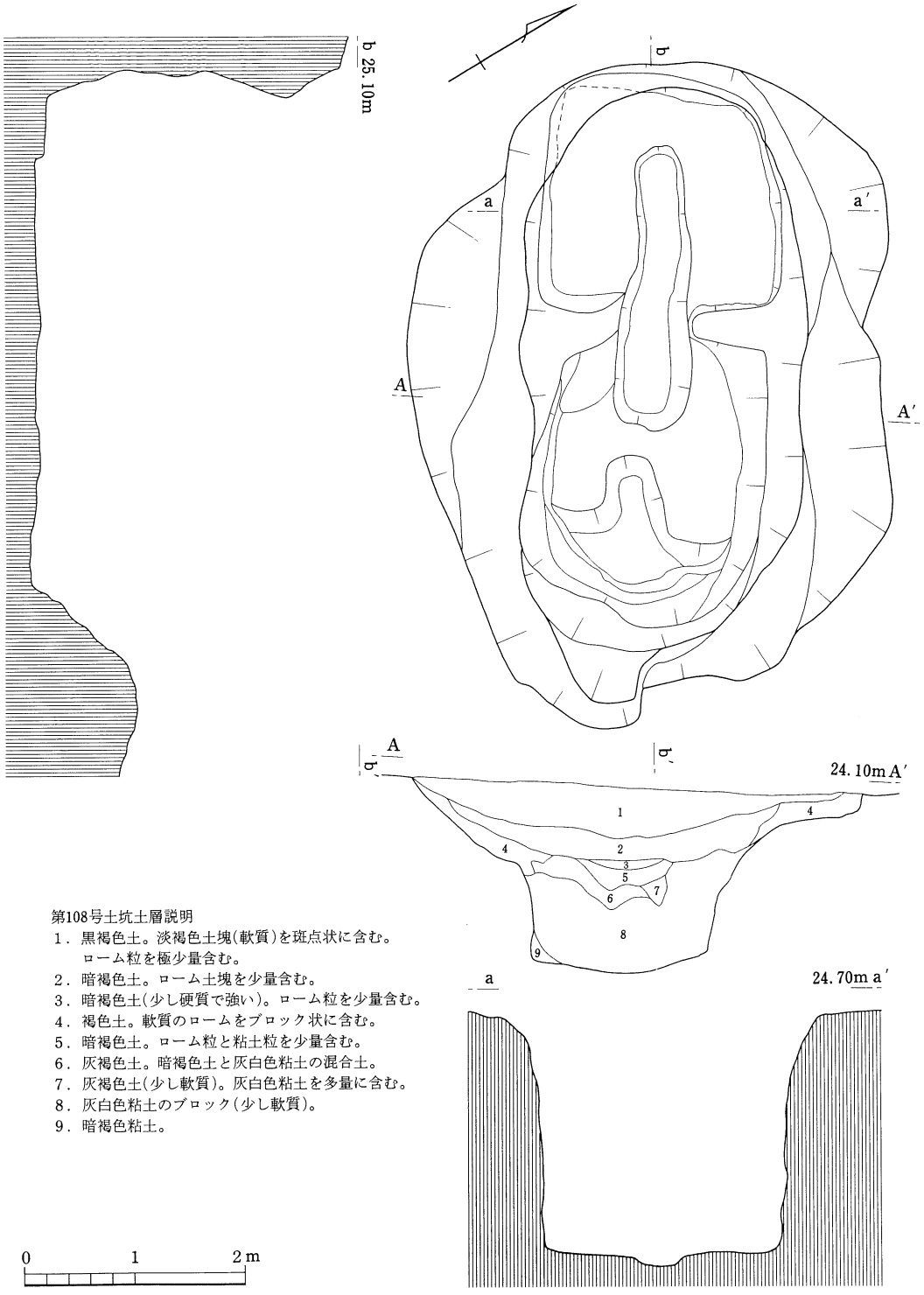
調査地区の南東側、斜面部に位置する。第108号土坑が南側約7m、第151号住居跡が北西側に約5m離れて存在する。当遺構は、斜面部に位置しているため、壁の立ち上がりは、北西側ほど高く、南東側ほど低い。全体の上端形体は、不整長円形で、規模は、上端の長軸3.45m、短軸2.00mを測る。主軸方位は、長軸方向を測り、N－47°－Eを示す。壁の立ち上がりは急傾斜であり、底部は、2段にわかれる。形態的には、地下式壙と考えられ、南西側の深い玄室状の部分と北東側の浅い前室状の部分に分けられる。玄室状の部分は、長円の半円形を呈し、幅、奥行きとも下端で1.20mを測る。また、残存の深さは、最大で1.52mである。底部は、やや南西側が低くなっている。また、北東側の前室状の部分は、玄室状の部分より約30cmほど高い位置に設定される。平面形体は、長円の半円形で、玄室状の部分と直線的に接している。幅80cm、長さ96cmを測る。残存の深さは、最大で1.24mで、北東側の入口状の部分の立ち上がりは、底部から60cmほどの位置で段を有し、2段を呈する。また、底部は、南西に向って少し傾斜している。覆土は、下位に粘土を含む土層をもち、上位に埋めもどしと考えられる土層が存在する。出土遺物は無い。



第288図　第107号土坑実測図

(8) 第108号土坑

調査地区の最も南東側に位置し、南東方向に傾斜する部分に存在する。したがって、立ち上がりは、北西側が高く、南東側が低く残存している。平面形体は、上端は、不整の長円形を呈する。規模は、長軸6.00m、短軸4.26mを測る。底部は、大きく2室状に分かれ、いわゆる地下式壙の形態を呈する。南東側が前室状の部分であり、北西側が玄室状の部分に相当する。前室状の部分は、不整の胴張り隅円長方形を呈し、規模は、底部で長軸(奥行き)2.50m、短軸(幅)1.74mを測る。南東側の立ち上がりが入口部に相当すると考えられ、階段状にちかい段差が認められる。深さは、95cmである。また、入口相当方向側より∩字形の浅い落ち込み(深さ8cm)が底部に存在する。また、底部中央付近から玄室状の部分へ向かって、大きな溝状の浅い落ち込みが存在する。大きさは、長さ2.54m、幅68～24cm、深さ6cmである、他の底部は、平担である。前室状の部分と玄室状の部分の間には、底部からの高さ約65cm、幅40～30cmの壁状の部分が存在し、両室を分けている。玄室状の部分は、平面形が隅円方形状を呈し、奥壁がドーム状である。底部は、前室状の部分と同じレベルであり、溝状の浅い落ち込み以外は、平担である。全体の規模は、幅2.18m、奥行き1.84m、奥壁の残存高2.64mを測る。本土坑の主軸方向は、長軸方向を測り、N－57°－Wを示している。覆土は、上部の1層は、新期テフラとローム粒を含んでおり、自然推積とみられるが、中位の2層は、ローム土塊を含み、人為的な埋めもどしの可能性も考えられ、下層8層は、灰褐色粘土のブロックを含み、玄室状の部分の閉塞用に使用された土の可能性もみられる。出土遺物は、無い。



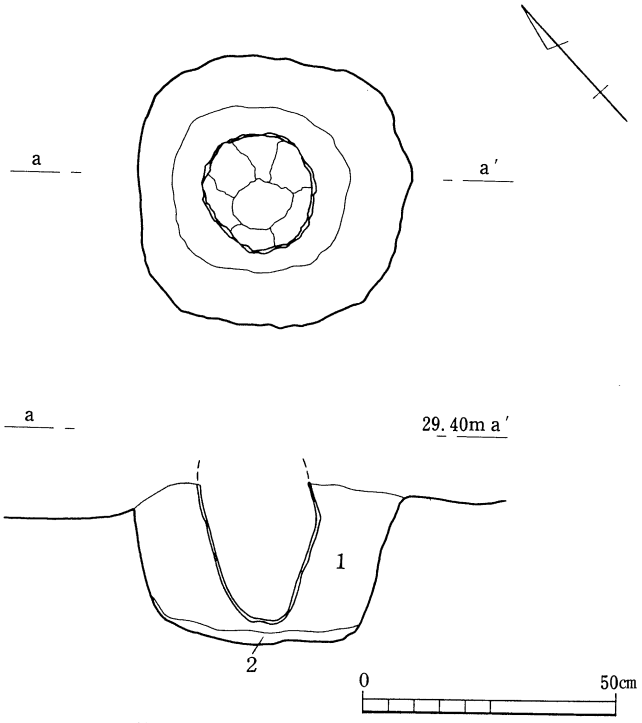
第108号土坑土層説明

1．黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)を斑点状に含む。
　ローム粒を極少量含む。
2．暗褐色土。ローム土塊を少量含む。
3．暗褐色土(少し硬質で強い)。ローム粒を少量含む。
4．褐色土。軟質のロームをブロック状に含む。
5．暗褐色土。ローム粒と粘土粒を少量含む。
6．灰褐色土。暗褐色土と灰白色粘土の混合土。
7．灰褐色土(少し軟質)。灰白色粘土を多量に含む。
8．灰白色粘土のブロック(少し軟質)。
9．暗褐色粘土。

第289図　第108号土坑実測図

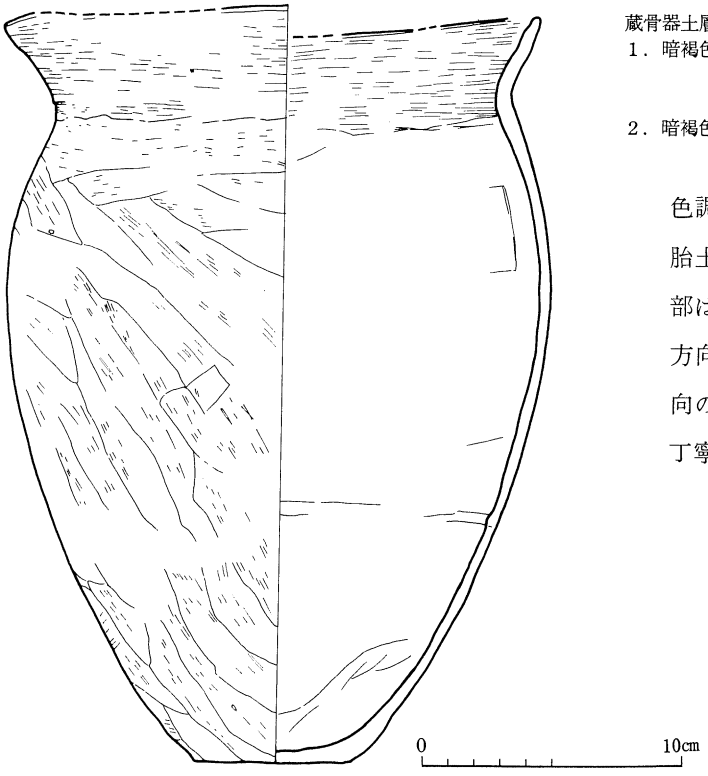
8．蔵骨器

調査地区の北東側、東側の小谷を望む地点で、第131号住居跡が北東約３ｍ、第124号住居跡が南西約３ｍに存在する。掘り方が不整円形で、大きさは径50.5×50.3cmを測り、深さは31cmである。底部は、ローム土塊を平担に５cmほどの厚さに敷き固め、その上に土師器の甕を埋設している。上部に蓋用の容器が存在したと考えられるが、現存しない。土師器甕は、薄手で、器高31cm、口径22cm、胴部最大径は上位に有り、径21.6cmを計る。土器周囲の埋土は、暗褐色土である。土器内には、人骨などの遺物は、検出されなかった。



第290図　蔵骨器出土状況実測図

蔵骨器土層説明
1．暗褐色土。淡褐色土塊(軟質)を斑点状に多量に含む。ローム粒を含む。
2．暗褐色土。硬質のローム土塊を含む。



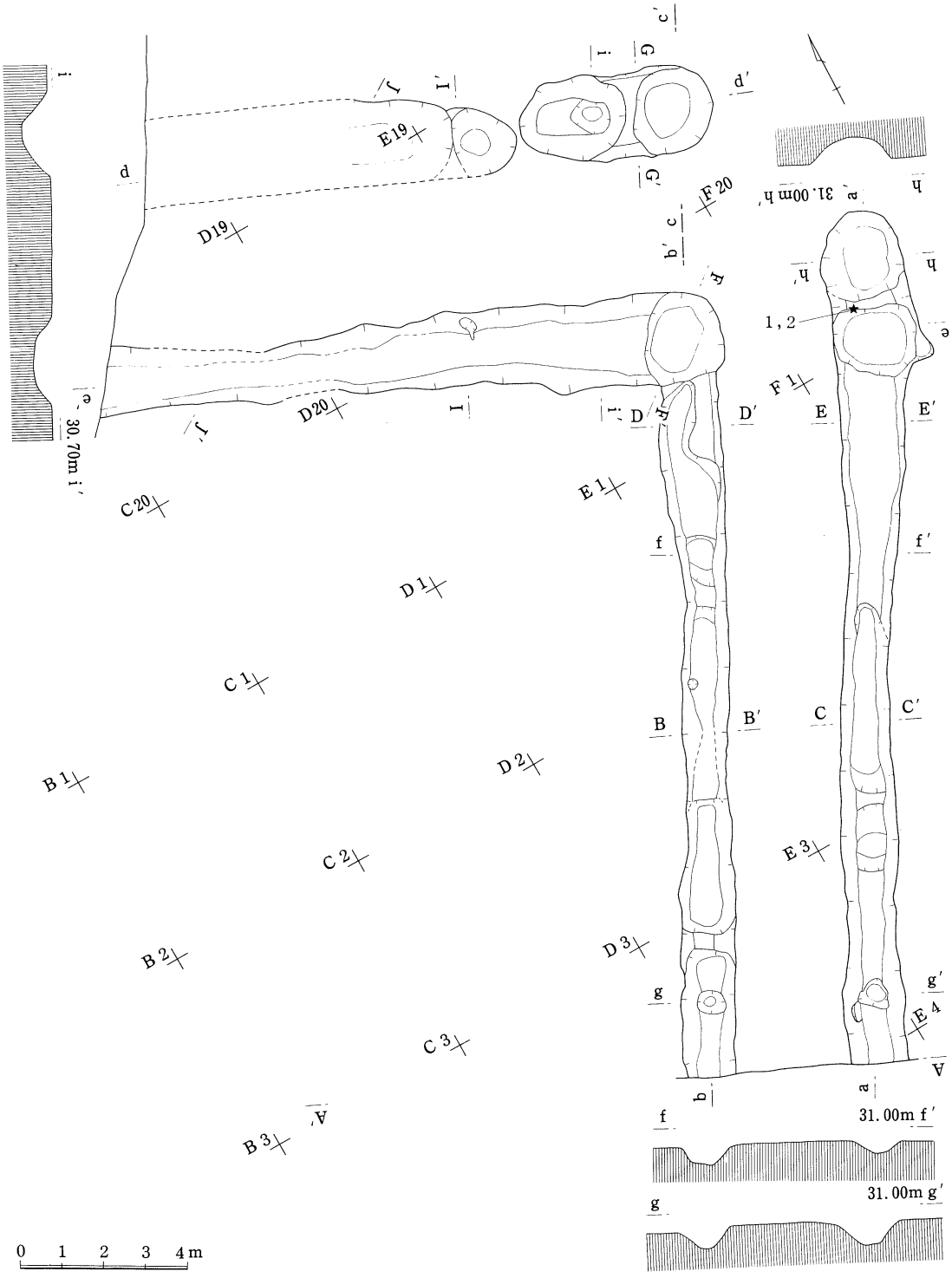
第291図　蔵骨器実測図

色調は、両面とも暗褐色と褐色。胎土は、緻密である。両面の口縁部は、横ナデ、外面胴部は、斜め方向のヘラケズリ。内面は、横方向のヘラナデの後、布ブキ?か、丁寧にナデている。焼成は普通。

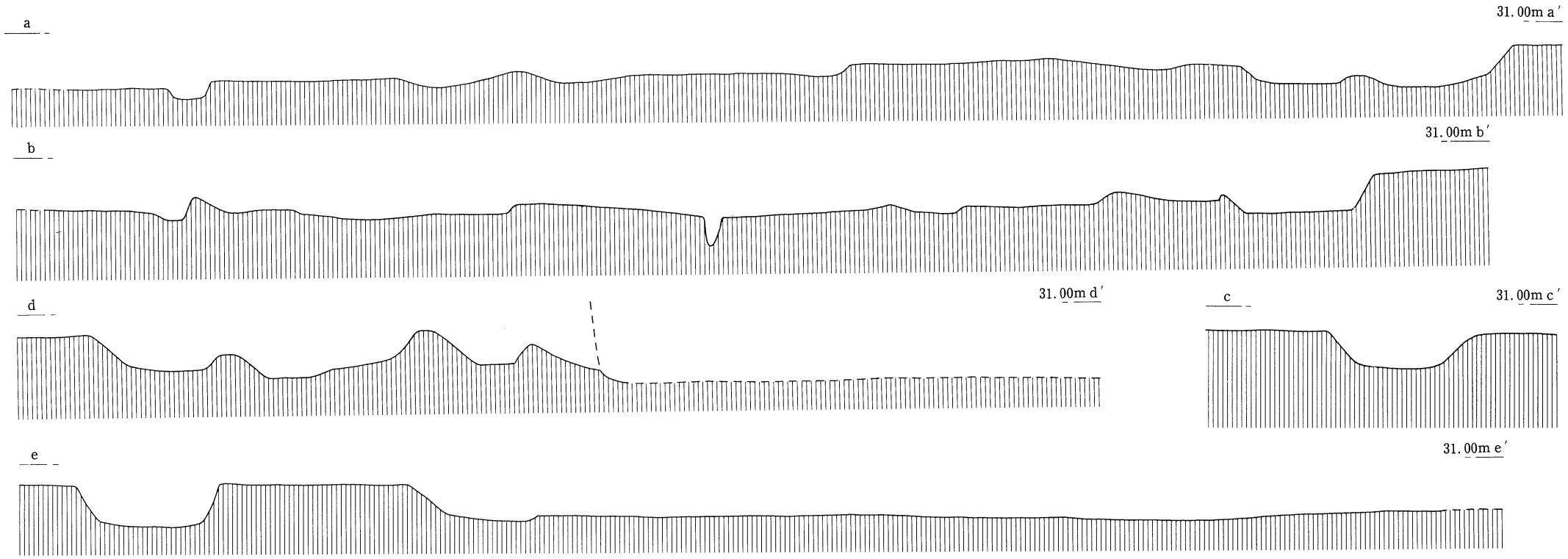
9．溝状遺構

(1) 第101・102・103号溝及び第109号土坑

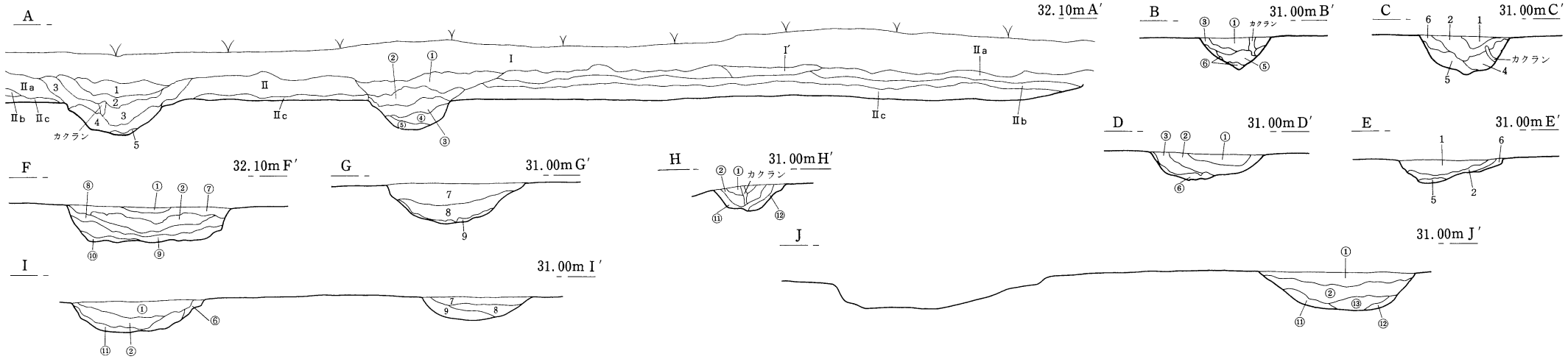
調査地区の南西隅に位置し、第101号と第102号溝が第109号住居跡を切っている。また、第110号住居跡が、第101号溝の区画内に存在する。当遺構は、西～南側が未調査地区に入り、全域の調査は実施していない。また西側は、既に一部が削除されており、昭和52年度の調査地区との関連も無いため、全体の復元は、今後不可能である。形体は、第101号溝が、冂形に区画し、その外側を約(2.6～3.8m)の間隔をおいて、第102号、103号、そして第109号土坑が組み合わさり、第101号溝を同じ形に取り囲んでいる。第102号と第109号土坑は、約20cm離れているが、土層上部は連結していたと考えられる。また、第109号土坑と第103号溝は、冂形の区画の隅の部分に相当するが、約4mの間隔をもってブリッヂ状に途切れている。第101号溝の北側の溝部分以外は、底部は凹凸が多く、不規則な土坑状に幾つかの落ち込みが存在する。また、立ち上がりは、逆台形状である。各溝及び土坑の規模は、検出した範囲内で、第101号の北側溝が、長さ15.00m、幅1.30～2.20m、深さ0.20～0.55m、第101号の東側溝が、長さ19.20m、幅1.00～1.50m、深さ0.30～0.50m、第102号溝が、長さ9.00m、幅約2m前後、深さ0.50～0.60m、第109号土坑は、長さ約4.70m、幅約2.00m、深さ0.36～0.56m、第103号溝が、長さ20.90m、幅約1.00～2.00m、深さ0.30～0.65mを測る。主軸方向については、第101号溝と第103号溝の長さ方向を測り、N－35°前後－Eを示す。覆土は、第101号溝が、上部はローム粒や新期テフラを含む黒褐色土や明黒褐色土が主体で、自然堆積である。また、最下部には、ローム土塊を含む暗褐色土が主体である。第102、103号溝、第109号土坑は、上部がローム粒や新期テフラを含む黒褐色土など、下部が軟質のローム土塊を含む黄褐色土などが主体で同じく自然推積とみられる。出土遺物は、第103号溝の北東側底部付近から1・2の埦、1は2の蓋のように合わさった形で検出された。他は、すべて覆土中からの遺物である。1は、少し小型の土師器埦で、底部は、右回転ロクロ糸切り離しの後、断面三角形にちかい高台を付ける。器高4.9cm、口径6.1cm、底径4.9cmを測る。焼成は、良好。色調は、内面が暗褐色と茶褐色、外面が茶褐色を呈する。外面が横方向のヘラナデとヘラミガキ、内面が横方向のヘラミガキを施す。2は1より大きい埦で、底部はロクロ糸切り離しの後、断面三角形にちかい高台を付ける。口径13.7cm、底径7.0cm、器高6.1cm計る。焼成は普通、色調は、外面が黒色と褐色、内面は黒色で、いわゆる内黒である。内面には、横方向のヘラミガキが施される。3も土師器埦で、全体の約1／4の残存である。推定口径は、18.8cmを計る。4は、土師器埦の底部と考えられ、断面方形の高台が付く。底径6.8cm。5は、土師器甕で、全体の約1／6の残存である。推定口径20.5cm、胴部最大径21.4cmを計る。外面は、口縁部が横ナデ、胴部は、縦方向のヘラケズリ、内面は、口縁部が横ナデ、胴部が、横方向のユビナデがなされる。胎土に2～3mmの小礫を多



第292図　第101・102・103号溝状遺構及び第109号土坑実測図



第293図　第101・102・103号溝状遺構及び第109号土坑断面図



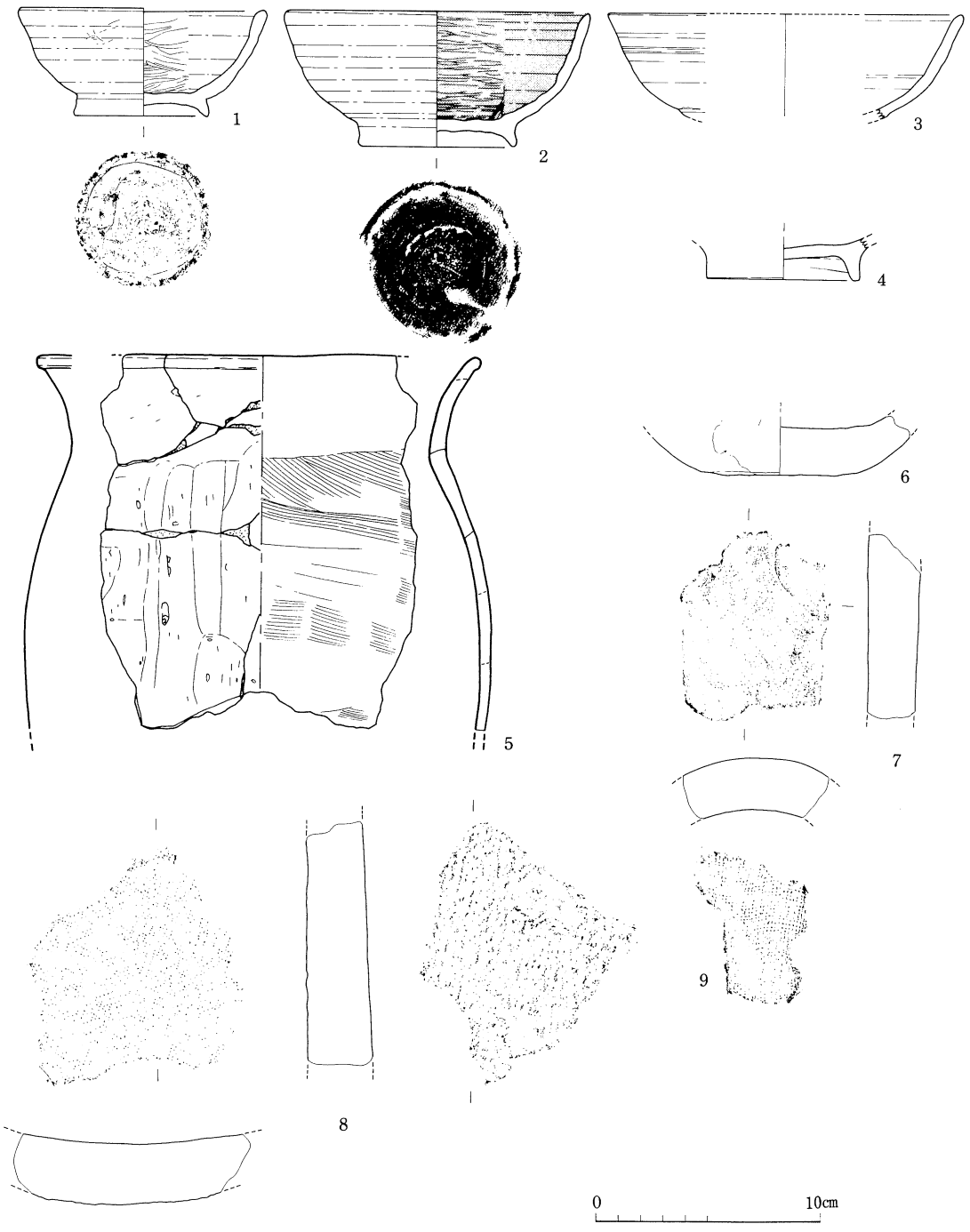
第101号溝状遺構土層説明

① 黒褐色土(暗い)。ローム粒を極少量含む。
② 明黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)を斑点状に多量に含む。
③ 明黒褐色土。ローム粒を含む。
④ 黒褐色土(少し軟質)。ローム粒を含む。
⑤ 黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)を少量含む。ローム粒を含む。
⑥ 黄褐色土。ローム土塊(軟質)を含む。
⑦ 黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)を含む。
⑧ 黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)をブロック状に含む。
⑨ 黒褐色土(少し軟質)。ローム土塊を少量含む。
⑩ 黄褐色土。ローム土塊を少量含む。
⑪ 暗褐色土。ローム土塊を多量に含む。
⑫ 暗褐色土(少し硬質)。ローム粒を多量に含む。
⑬ 暗褐色土。ローム粒を多量に含む。

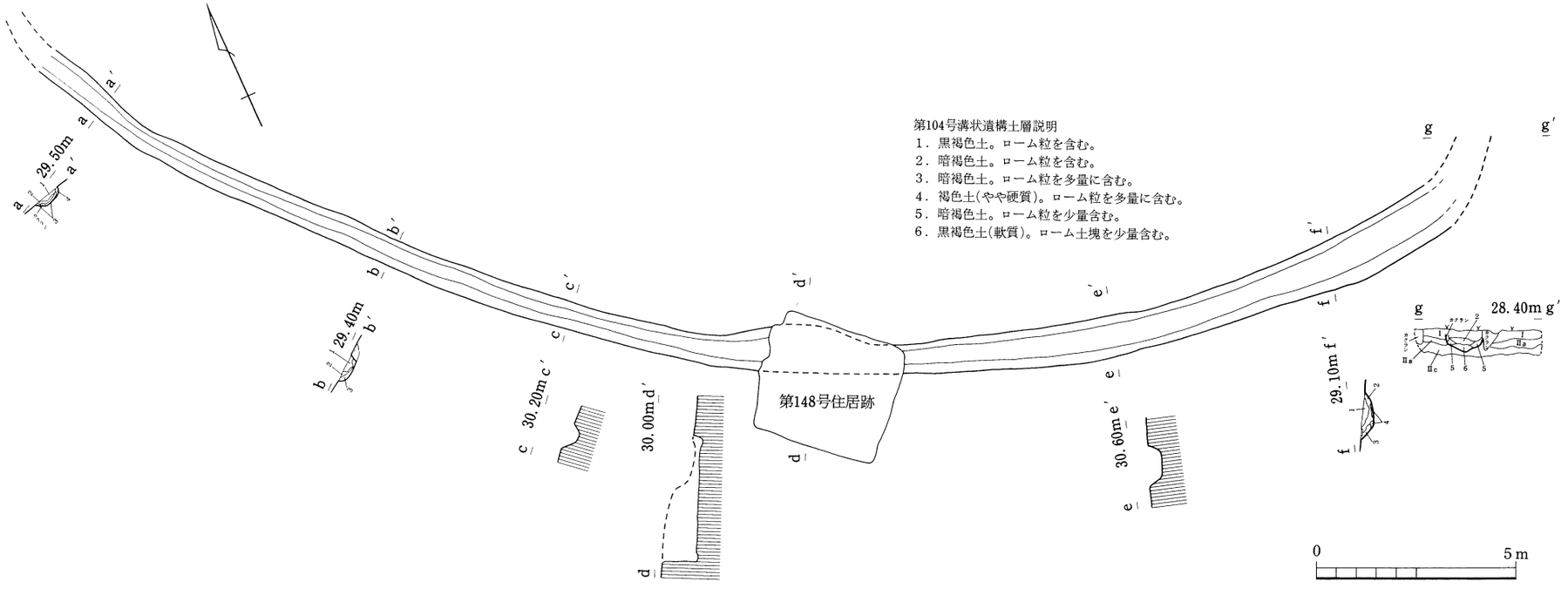
第102・103号溝状遺構、第109号土坑土層説明

1. 黒褐色土(暗い)。淡褐色土塊(軟質)を極少量含む。
2. 明黒褐色土。ローム粒を多量に含む。
3. 明黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)を含む。
4. 暗黄褐色土(少し硬質)。ローム土塊を極少量含む。
5. 褐色土。軟質のローム土塊を多量に含む。
6. 明黒褐色土。軟質のローム土塊を含む。
7. 明黒褐色土。淡褐色土塊(軟質)とローム粒を含む。
8. 暗黄褐色土。淡褐色土塊(軟質)とローム粒を多量に含む。
9. 黄褐色土。ローム土塊を含む。

第294図　第101・102・103号溝状遺構及び第109号土坑土層図



第295図　第101～104号溝状遺構出土遺物実測図



第296図　第104号溝状遺構実測図

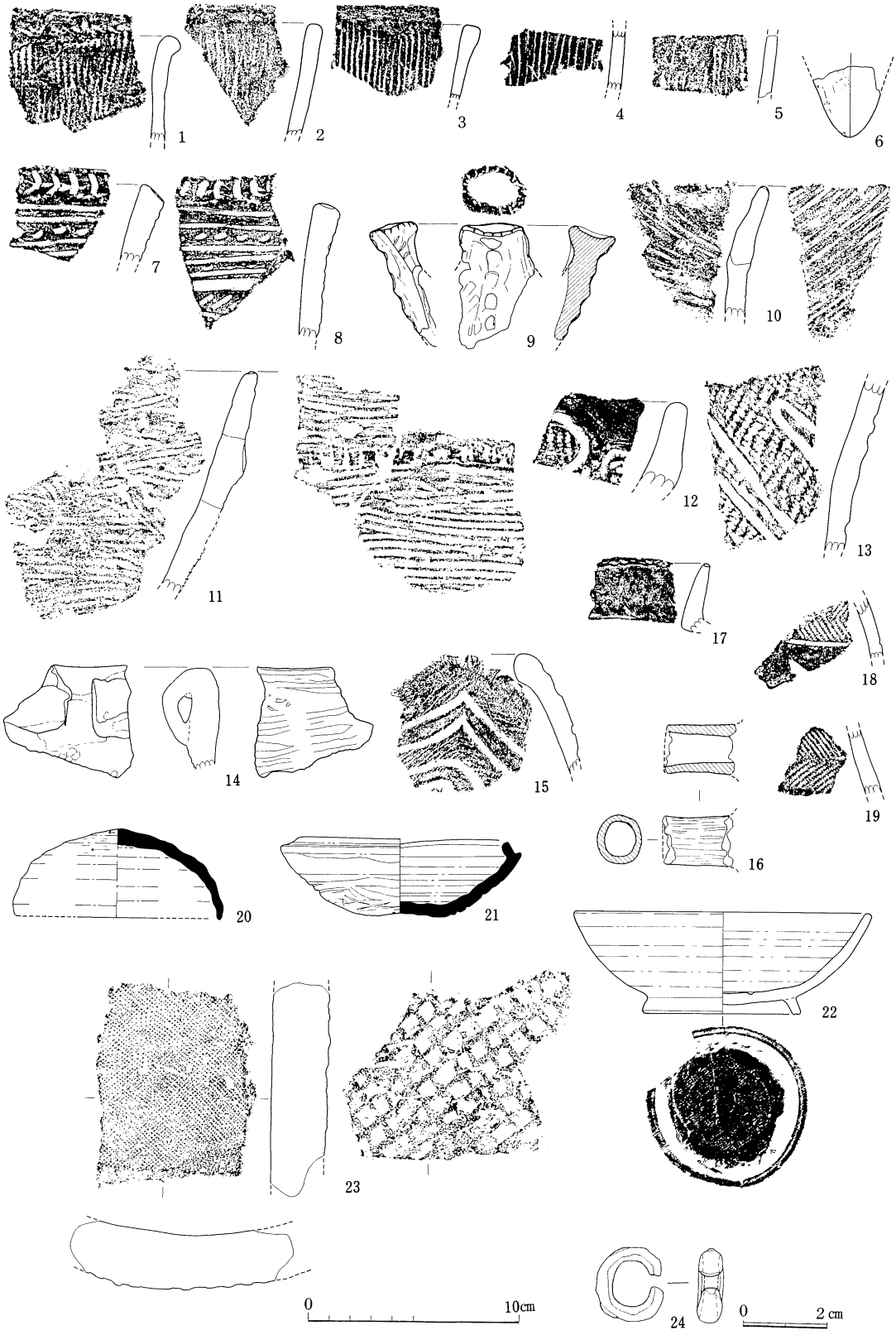
く含む。6は、土師器甕の底部片で、器厚2.1cmと厚手である。底径は、7.0cmを計り、かなり全体に摩耗している。7は、男瓦片で、凹面は、横方向のナデ、凸面は、布目痕が認められる。厚さは、2.3cmである。8は、女瓦片で、凹面は、布目痕、凸面は、縄目痕が存在している。厚さは、2.9cmである。

(2) 第104号溝

調査地区の北西側、台地端部、すでに北側に向かって傾斜をはじめる部分に存在する。当台地へ北側より小さな谷が入り込み、その谷を周るように、東西に孤を描いて所在している。また、北西側と北東側は、未調査であったが、谷方向へ降っていると推定される。第148号住居跡の竪穴覆土上部を切っている。形体は、断面が丸みを帯びた浅い逆台形状で、西側ほど幅が狭く浅い。大きさは、上端幅0.52～1.26m、下端幅0.18～0.73m、深さ0.22～0.34mを測る。溝の覆土は、自然推積と考えられる。底部は、特に硬質ではない。遺物は、上記布目瓦である。

10. その他の主な出土遺物

1は、単節の縄文を縦に、また、口唇部にも施されており、縄文早期井草式とみられる。2～6は、撚糸文系で、稲荷台式、7～9は、ヘラ状工具による沈線や刺突文の組み合わせで、9は、口縁部片で、隆部をもち、その端部まで刺突文や刻目がみられる。田戸下層式と考えられる。10、11は、胎土に繊維を含み、貝殻条痕文をベースとした茅山上層式とみられる。12、13は、縄文を沈線で区画しており、縄文中期加曽利EⅢ式頃と推定される。14は、中期～後期頃の内耳鉢片か、色調外面暗茶褐色、内面暗褐色、15は、加曽利B式期頃の浅鉢片か。16は、後期以降にみられる注口土器の注口部片と考えられる。焼成良好、暗褐色を呈する。17は、甕の口縁部片で、口唇部を押圧により、波状を形作っている。18、19は、壺胴上部片とみられ、18は、横位の沈線と羽状縄文、19は、羽状縄文である。17～19は、いずれも、弥生後期久ケ原式期の所産である。20は、須恵器坏蓋で、口径10.0cm、器高4.3cmを計り、天井部に、3段のヘラケズリがなされる。色調は、外面が淡灰褐色、内面は、暗灰褐色を呈する。全体の1／8の残存。21は、須恵器坏身で、受部がわずかに立ち上がる形で、口径10.0cm、器高3.6cmを計る。底部に荒いヘラケズリが認められる。完形品である。22は、緑釉陶器で、やや不良である。色調は、淡緑褐色と白褐色を呈する。底部は、断面方形の高台をもち、体部は、浅い椀状を呈して立ち上がる。体部内面には、トチン痕が認められる。口径14.2cm、器高4.9cm、底径7.6cmを計る。約3／4の残存である。23は、女瓦で、凹面は、布目、凸面は、斜格子状圧痕が残る。器厚2.8cm。24は、金銅製の耳環で、径3.5cmを計る。



第297図　その他の主な出土遺物実測図

第Ⅲ章　まとめ（千草山遺跡）

1．先土器時代

調査地区の南西側より、先土器時代のユニットが検出されている。残核状のフレイク及び石屑チップ等で、計10点、武蔵野台地基準層等のⅥ層上部からの出土である。筆者の近藤氏は、石器製作跡と考えられている。付近には、西側の小谷を挟んで、向い側の稲荷台遺跡から、ユニットが検出されており、その関連性が注目される。

2．縄文時代

表採などによって、早期前葉の井草式や稲荷台式、田戸式などの土器片が検出されているが、伴なう遺構は、認められなかった。確認した遺構では、三戸、田戸下層式の土器片を検出した第102号遺構が、調査地区の南側に存在する。不整円形の竪穴状を呈しているが、西側は、立ち上がりが、認められず、開いている。深さは、最大で50cmを測る。遺物は、竪穴の覆土上部から下部より出土している。炉やピットなどは、検出されていない。また、炉穴が3群存在する。調査地区北側の台地平担部上に位置する。各々約15～25m離れている。第101号炉穴は、5基、第102号炉穴は、5基以上、第103号炉穴は、2基以上が各々重復すると考えられる。時期については、わずかな出土遺物から、第101号が黒浜Ⅱ式、第102号が茅山上層式、第103号が茅山上層式頃と推定される。中期では、南側台地上より住居跡が2軒検出されている。第142号は、円形の竪穴をもち、床面中央には、土器囲み炉が存在する。出土遺物は、加曽利EⅣ式が主体とみられる。第143号も、同様の形体である。また、第142号とは、南西側へ約13m距離を置いている。出土遺物は、加曽利EⅢ式頃とみられる。この他、表採等の小片では、内耳鉢片や加曽利B式、後期頃と考えられる注口土器片も検出されている。

3．弥生時代

住居跡が3軒検出されており、いずれも、北東側台地上に位置する。第131号は、長円形を呈し、大型で、長径10.15m、短径8.00m（いずれも上端）を測る。炉は、北西側中央付近に存在し、また、竪穴壁を直角に切るような土坑や、溝を方形に囲らし、中にピットをもつ施設が認められている。出土遺物は、複合口縁で、複合部に斜縄文、複合端部は、ヘラ状工具を押捺した刻目をもつ壷口縁部片や、横位の沈線で区画された2段の羽状縄文を同上部にもつ壷片、また、口唇は、押圧による波状口縁を形成し、粘土紐接合痕を口縁部にもつ甕などが検出されている。これらの土器の特徴から、当遺構は、弥生時代後期久ヶ原式期の所産とみられる。第136号は、第131号より約8m西に位置し、竪穴が、やや小型になるが、平面形体は、第131号と同じ、長円形（いわゆる小判形）で、北西側床面中央に炉をもっている。出土遺物は、少量であるが、第131号と同様の土器とみられ、時期も同じ頃と考えている。第133b号は、プラン

北側の大部分を第133ａ号に切られ、不明な点が多い(炉は切られたためか、検出していないなど)が、出土遺物は、２点検出している。甕は、口縁部が、押圧による波状口縁を呈し、胴上部は、粘土紐接合痕を１段残している。鉢は、小型で、外面の体部上位に、ヘラ状工具による条線が縦方向にみられる。これらの土器は、久ケ原期の所産と考えられる。３軒の竪穴のうち、第131、136号より焼土が検出されており、火災住居の可能性がある。

４．古墳時代から奈良平安時代

当時期に概当する竪穴住居跡は、52軒検出されている。先ず、各住居跡より出土した土器を細分し、編年を行ない、そして、各住居跡の時期別の特徴を追ってみたい。千草山遺跡については、昭和50年から51年にかけて、西北側の約23.500㎡を調査しており、同時期頃の72軒分の竪穴住居跡が検出されている。これについては、「千草山遺跡の再検討」として(註1)、編年を行なっており、今回も、これを基本として、細分を行なう。また、今回の調査によって、各器種について、更に、形体の違いが有り、ここでは、新しく加えることとし、それらのみを記述した(タイプ名は大文字を使用した)。

(1) 土師器坏

Ａ類を非ロクロとして、ａ～ｙまで分類したが、更に９タイプが加わるため、アルファベットの大文字を使用する(後述の番号は、出土住居跡名とその遺物番号である)。

Ａ－Ａ．丸底で埦状を呈し、口径が大きい(15.0cm)。内面は、ヘラミガキがなされる、また、黒色処理(漆仕上げを含む)がなされる。103－１。

Ａ－Ｂ．ｇに似るが、やや底部が凸っている。113－５。

Ａ－Ｃ．ｐに似るが、口縁部に稜をもち、内面は、縦方向のヘラミガキ。124－２。

Ａ－Ｄ．小型で浅い埦状を呈し、厚手である。口径9.0cm、器高1.8cm。138－１。

Ａ－Ｅ．ｒに似るが、厚手である。117－１。

Ａ－Ｆ．丸底で、浅い埦状を呈し、内面に、斜格子状暗文がわずかであるが認められる。口径11.7cm、器高2.4cm。124－１。

Ａ－Ｇ．平底で、盤状を呈し、ｙよりもやや口径が小さい。119ａ－８。

Ａ－Ｈ．丸底で、盤状を呈し、体中部より屈曲して斜めに立ち上がる。口唇部内面に沈線を有し、体部には、放射状暗文を有し、底部内面には、らせん状暗文を配す。103－１。

Ａ－Ｉ．平底で、盤状を呈する。口唇部内面に沈線を有し、内面に、放射状暗文とらせん状暗文を配する。112－２。

Ｂ類は、ロクロ成整形であり、ａ～ｍまで分類したが、更にＡ～Ｄの４タイプを加えた。

Ｂ－Ａ．ａに似るが、やや器高に対して口径が広い。底部は、回転糸切り離しである。口径13cm前後、器高4.5cm前後。105－１・３など。

B－B．Aに比べて、器高に比して、口径が広い。口径15cm前後、器高4cm前後。106－1など。

B－C．器形は、B－Aに似るが、少し浅く、底部は、回転糸切り離しの後、手持ちのヘラケズリがなされる。107－1など。

B－D．Cに似るが、体部に丸みをもち、やや深い。107－7など。

(2) 土師器坏蓋

初めての出土で、小片1点のみである。

A．扁平で、口唇部内面に沈線をもち、両面は、ヘラミガキがなされる。内面に、らせん状暗文がわずかに認められる。112－3。

(3) 土師器鉢

a～sまで分類したが、更にA～Kの11タイプを確認した。

A．丸底で、体部は、砲弾状を呈し、口縁部は、わずかに外反する。口径14.4～15.4cm、器高10.4～13.0cm。133a－5、151－9。

B．やや小型で、体部は椀状を呈し、口縁部は直立する。丸底で、わずかに厚手。内面は、横方向のヘラミガキがなされる。124－3。

C．丸底で、6に似るが、口縁部にわずかな稜をもつ。113－10。

D．fが大型になった形で、口径は15.8cm。124－4。

E．平底で、丸みをもって大きく開く。両面ともヘラミガキが有る。133a－8。

F．平底で、浅い椀状を呈し、口縁部は、直立する。口径15.2cm。128－5。

G．平底で、体部は大きな椀状を呈し、口縁部は、直立する。内面の体部は、ヘラミガキがなされる。口径は、16.3cm。101－3。

H．底部は、小さな平底。口縁部は、小さく内傾し、体部は、球状を呈する。口径7.8～8.2cm。115－4、115－5。

I．平底で、kの大型の形体である。口縁部は内傾する。口径12.4cm、器高9.2cm。133a－6。

J．平底で、pに似るが、少し浅く、大型で、体部は、直線的に開く。内面体部は、ヘラミガキがなさる。口径17.8cm、器高7.4cm。109－11。

K．平底で、体部は、大きく孤状を呈して立ちあがり、口縁部は、稜をもち、大きく外反する。体部両面は、横方向のヘラミガキがなされる。口径22.1cm、127－13。

(4) 土師器甕

a～sまで分類したが、小型の甕を主として、更にA～Tまでのタイプが確認された。

A．器高が低く、胴部最大径は、胴上部に有り、口径が、やや胴部より大きい。器高24.1cm口径18.8cm。102－11。

B．Aに似るが、胴部最大径は、胴上位で、口縁部は、やや開き、甑に似た形を呈する。器

高23.7cm、口径20.6cmを計る。103－22。

C．最大径は、胴上部に有り、口縁部は、外反する。103－21、112－8。

D．最大径は、胴上部にもち、肩を有する。口唇部は、少し長く外反する。135－7。

E．小型で、胴部最大径は上位。口縁部は、小さく外反する。口径14.0、器高16.7cm。118－14。

F．胴部最大径は上位部にあり、Cに似るが、口縁部は、小さく外反する。少し厚手。

G．Eよりさらに小型で、胴部最大径は、中央付近に有り、口縁部は、甕より小さく外反する。口径11.4cm、器高14.0cm。118－15。

H．最大径を胴部中位にもち、口縁部は、外反する。116－7。149－2。

I．小型で、少し厚手。体部は、球状を呈し、口縁部は小さく外反する。117－12。

J．小型で、胴部は球状を呈し、口縁部は、小さく外反する。最大径は、胴部に有る。104－8。

K．最大径は、口縁部に有り、胴部最大径は、中央。口縁部は、外反する。127－14。133a－12。

L．Jに似るが、やや胴部の張りがない。128－10。

M．やや長胴で、最大径は、胴上部に有り、口縁部は、外反する。器高26.9cm。132－6。

N．大型で球状を呈する。口縁部は、くの字状で、最大径は、胴中部に有る。135－11。

O．小型で、最大径は、胴中部で、口縁部は、くの字状に開く。器高15.4cm。151－10。

P．胴部最大径を上位にもち、口縁部は、小さく、くの字状に外反する。口唇部を少しつまみ上げている。胴下半は、細い。107－9。140－14。

Q．Pに似るが、口縁部は、やや長く、丸みをもって外反する。口唇部断面は、三角形状を呈する。胴下半は、細い。107－10。

R．最大径は、口縁部で、胴部最大径は、胴上部。口縁部は、短かくくの字状に外反する。胴下位は、細い。140－11、140－12、140－13。

S．gの器高が低い器形である。胴下位は、細い。140－15。

T．小型で、最大径は、胴中位。口縁部は、くの字状に外反する。器高は低く、胴下位は、細い。胴部最大径14.0cm。140－16。

(5) 土師器甑

すべて一孔の形体で、a～gまで分類したが、更にA～Eの5タイプが確認された。

A．dに似るが、薄手で、内面に、縦方向のヘラミガキがなされる。127－12。

B、fに似るが、口唇部をつまみ出している。外面にヘラミガキがみられる。121－14。

C．孔が広く、胴下半部から直線的に開く(胴下半部のみ残存)。孔径12.8cm。124－7。

D．小型で、厚手。やや直線的に開き、口縁部は、少し外反する。器高13.1cm。128－16。

E．小型で、厚手。大きく孤状を描いて立ち上がる。口径23.0cm。112－7。

第122表　千草山遺跡住居跡別出土土器分類表

住居跡名	出土土器	住居跡名	出土土器
101	坏A－a、n、鉢G、j、甕j、高坏h	130	甕i、j、k、r、高坏F
102	坏A－a、甕e、A、高坏F、G	132	坏A－g、q、甕c、M、甑d、高坏F、H
103	坏A－g、A、s、甕n、B、須坏蓋f、g 須坏身c、B	133a	坏A－a、鉢I、E、A、甕K、甑f、d(2)、高坏h、D(2)、須坏身b
104	坏A－e、g、k、鉢j、甕J、j、甑d	134	甕l
105	坏B－g、A(2)、a(2)	135	鉢r、甕D、i、N、高坏d(3)
106	坏B－B	137	坏A－g、j、甕i、甑g、高坏g、須坏蓋e、f、 須坏身e、須平瓶、須高坏
107	坏B－a、b(3)、A、C、D、甕P、Q、g	138	坏A－D、鉢g、須甕(2)
108	坏B－A(5)、c(2)、d、b(3)、e、g 須長頸壺、灰釉埦	139	坏A－k、甕N、i(7)、甑e、須小壺
109	坏A－b、e、f、g、h、o、鉢o、J、須坏蓋d	140	坏B－a、b(3)、g、l　甕N、甑a、灰釉長頸壺
110	坏A－c、e、r、鉢o、須坏身b(2)	141	鉢p、須坏身c
111	坏A－e、j、k(2)、o、r、鉢l　、r、甕i	144	坏A－m、k、q(2)、鉢d、m、k、甕d、j、 i、 甑g、須坏蓋d、g、須小壺、須坏身、須長頸壺
112	坏A－y、H、I、坏蓋A、甕g、C、甑E	146	須坏身C
113	坏A－e、h、j、r、B、鉢n、p、C、甕j、甑 g、高坏E	147	甕l　、甑a
114	坏A－a、e、g、j、鉢q、甕d、i、l、高坏e (2)、a	148	坏A－e、i、q、r、鉢h、高坏g
115	坏A－i、q、r(2)、鉢H(2)、高坏C、須坏蓋 f、g	149	甕i(2)、j、I、須坏蓋g
116	坏A－b、鉢m、甕H、高坏b、須坏蓋c、d	150a	甕i、j
117	坏A－b(3)、h、k、m、n(2)、E、甕I、 高坏d、甑g	150b	坏B－b、c、甕R、須長頸壺
118	坏A－c、m(2)、甕i、j、o(2)、G、E、 甑a、 須坏身d	151	坏b(2)、c、g、m、鉢A、甕O、高坏I、須平瓶
119a	坏A－c、G、甕l、i、高坏A、h、g、須台付埦		
119b	甕G		
120	坏A－j(2)、k(2)、甕i、鉢m、甑e、須長頸壺 (2)		
121	坏A－e、f、m、n(3)、q、s、w、甕o、甑 B、高坏a		
122	鉢m、o、高坏d、須坏蓋d		
123	坏A－a、g、m、鉢o、甑g		
124	坏A－F、C、鉢B、D、甑C		
125a	鉢d、甕c、g、j		
125b	坏A－p、手づくね小鉢(埦)		
126	高坏B		
127	坏A－c、g(3)、i、r(2)、甕c(2)、e(2)、 k、K、鉢K、高坏h、甑A、須坏蓋d		
128	坏A－i、r、v(2)、鉢F、甕L、i(2)、甑D、 須坏蓋e、須長頸壺		
129	坏A－r、鉢a、甕i(3)		

(　)は、2個以上の個体数

(6) 土師器高坏

a～iまで分類したが、更に、A～Iの9タイプを確認した。

A．dに似るが、坏体部は、大きく開く。119a－9。

B．脚部は低く、立ち上がりは、丸みを帯び、坏部に比して小さい。fに似る。126－1。

C．脚部はgに似るが、坏部がやや大きい。115－8。

D．脚部は高く、坏部も大きく開く。口縁部に稜をもつ。両面ともヘラミガキがなされる。口径21.7cm、脚下端径14.5cm。脚部と坏部が接合できないが、同一個体である。113a－10・113a－11。

E．坏下部に稜をもつ。全体にやや荒いつくりである。坏部内面は、ヘラミガキ。113－11。

F．脚部、坏部とも小型で、脚部は、ハの字状、坏部は、浅い埦状を呈する。一部に粘土紐接合痕を残す。内面は、ヘラミガキがなされる。口径11.2～12.1cm。器高6.5～6.9cm。102－1・2・4・6・7・8など。

G．Fに似るが、脚部が柱状で下端は少し開く。102－3・5。

H．坏部が小さく、浅い埦状を呈し、口縁部は外反する。132－1。

I．脚部は、少し孤状を呈して立ち上がり、坏部は、浅い埦状である。器高10.0cm。151－6。

(7) 手づくね土器

一個体のみ出土。小鉢形で、器高4.2cm、口径7.9cmである。125b－2。

(8) 須恵器等

坏蓋

a～hを分類したが、更に1(A)タイプ加える。

A．体部は、埦状を呈し、天井部でヘラケズリがなされるタイプで、dに似るが、やや大型である。口径10.7cm、器高4.5cm。109－12。

坏身

a～eに分類したが、更にA～Cの3タイプが加わる。

A．受部が低く、稜がはっきりしている。口径11.9cm。103－9。

B．平底で、少し上げ底ぎみである。底部は、ヘラケズリがなされ、体部は、直線的に開いて立ち上がる。口径16.9cm、底径9.5cm、器高3.6cm。103－11。

C．断面方形の高台が付き、体部は、やや斜めに立ち上がる。口径14.8cm、底径10.0cm、器高4.6cmである。146－1。

この他に、小鉢(104－9)、長頸壷(108－14、120－5、150b－5)、台付埦(119a－6)、甕片(138－4など)、小壷(139－2)、平瓶(151－7)、灰釉埦(108－13)、灰釉把手付長頸壷(140－22)、などが更に検出された。なお、小片で全体が不明瞭な器形については、分類で、取り上げていない。

※ また、遺物の形体分類の図は、紙面の都合上、掲載していない。

以上の分類により、編年作業を行ってみたい。主に、前回の千草山遺跡の調査成果に基づいて(註2)、時期区分を行ない、また、わずかな遺構の切り合い関係等を含めて更たに考えてみたい。切り合い関係については、119aとb。125aとb、127と129、133aとb、145aとb、150aとbの6ヶ所が有り、このうち、145aとbは、特に遺物は、出土していない。133aとbは、鬼高期と弥生後期、150aとbは、鬼高期と国分期の各々重複であり、時期が離れている。他の3ヶ所については、鬼高期の範囲内の重複とみられる。

Ⅰ期. 小型化した須恵器坏類の段階であり、須恵器坏蓋d、坏身bがみられる。また、須恵器では、151より平瓶が出土している。土師器坏では、A類のc・e・r・g・i・q・a・bが存在する。鉢は、oや今回更たに確認されたK・I・E・Aが認められる。甕では、c・e・k・lと、更たに、K・M・Oが追加されている。甑は、d・f・a及び更たに、Aが存在している。高坏は、hの他、更たに、F・H・D・Iが認められる。

Ⅱ期. 今回の調査で、最も概当する住居跡の数が多い時期である。また、小型の須恵器坏類も多く出土し、Ⅰ期と近接しているとみられる。須恵器坏蓋では、d・f・g・c・d・eが、坏身では、d・eが各々認められる。この他の須恵器は、長頸壺片、平瓶片、小壺が出土する。土師器坏は、A類で、a・n・b・e・f・g・h・o・j・k・r・i・q・c・mが検出され、更に、Bが加わっている。いずれにせよ、種類が多く、すべて丸底である。鉢はG・j・o・l・r・n・k・m・a・d・k・hが認められ、更たに、G・J・C・Hが存在する。甕はj・e・i・o・k・rが出土し、更たにA・H・G・E・D・N・Iが追加される。特に、iとj類が多く認められる。甑は、g・a・eが検出されている。高坏では、h・b・d・gの他、更たに、F・G・E・Cが加わっており、比較的、新しく加った形が多く出土している。

Ⅲa期. 平底の坏類がみられる段階である。須恵器では、坏蓋がe、坏身がcを各々認められ、この他に、須恵器では、台付埦、長頸壺、甕片が出土している。土師器坏は、A類で、e・g・k・a・j・b・h・m・n・c・i・r・vが存在し、更に、E・G・Dが加わる。平底は、VとGである。鉢は、j・q・g・pと、更たに、Fが加わっている。甕は、j・d・i・l　の他、更にJ・I・Lが加わった。甑は、d・gに、更に、Dが追加されている。高坏は、a・eが認められ、Aが加わる。この時期については、104がやや古く、119aがやや新しいと推定され、細分も考えられる。

Ⅲb期. 平底の坏類が多い時期である。また、須恵器坏類も存在する。坏蓋では、f・g、坏身では、Cと更たにBが認められる。土師器坏では、A類のg・s・e・f・m・n・q・wが存在し、平底は、s・wである。鉢は、dがみられる。甕では、n・o・c・g・jに、

更に、B・Gが認められる。甑は、Bが存在する。高坏では、aとBがみられる。また、121と125aは、やや古い様相が考えられる。

Ⅳ期．この時期については、住居跡の切り合い関係によって分けたため、今回は、特に、比定できる遺構は、みられない。

Ⅴ期．A－RやA－Fに概当する土師器坏類が存在する時期である。土師器坏では、A－R及び、更たに、C・Fが加わっている。鉢は、B．D．甑はC類が存在する。また、手づくね土器も1点みられる。

Ⅵ期．盤状坏がみられる時期である。平城Ⅱに概当すると思われる坏類が出土している。坏は、A類のyとH，Iがみられる。甕は、gとc、甑はEが存在し、また須恵器坏蓋のAも認められる。当期に概当する住居跡は112の1軒のみである。

Ⅵ′期．146の1軒だけであるが、高台付の須恵器坏が出土している。形体から8世紀前半頃の所産と考えられるが、先の編年には、無い時期であるため、仮にⅥ′期とした。

Ⅶ期．前の時期とは、やや離れた年代と考えられる。ロクロ土師器などが主体であり、土師器坏類では、B類で、a・b・c・d・e及び、更たに、B類のA・B・C・Dが加わっている。甕では、g、更にP・Q・Rが存在する。この他に、須恵器長頸壺が認められている。106·107·108は、やや古い様相を呈する。

Ⅷ期．140の1軒のみである。土師器坏は、B類a・b・g・l、甕は、N、甑はaが各々存在し、また、灰紬の長頸壺とみられるものが認められる。

Ⅸ期．この時期については、今回は、認められていない。

以上、11期に分類したが、今回はⅥ'期が更たに加わり、また、Ⅳ期とⅨ期に概当する住居跡は、検出されていない。なお、ここで扱った、各時期については、先回の時期区分と同じ名称を使用した。また、出土遺物が少量で、時期区分として断定しがたい住居跡もある。

次に、各竪穴住居跡の変遷と特徴についてふれてみたい。出土土器の分類によって、今回は、9期が認められる。各時期の住居跡は次のように考えられる。(　)は、不明確。

Ⅰ期　110・127・132・133a・147・151

Ⅱ期　101・102・109・111・113・115・116・118・120・(122)・123・129・130・135・137・139・144・148・149・150a

Ⅲa期　104・114・117・119a・128・(134)・(138)・141

Ⅲb期　103・(119b)・121・125a・(126)

Ⅴ　期　124・125b

Ⅵ　期　112

Ⅵ　期　146

Ⅶ　期　105・106・107・108・150ｂ

Ⅷ　期　140

この区分によって、各時期別の遺構を考えてみる。

Ⅰ期は、６軒と推定され、散在している。規模は、110を最大(長軸7.80ｍ)とし、最小は、132(長軸4.25ｍ)を測る。主軸方位は、Ｎ－12°～77°－Ｗを示す。主柱穴は、４本が多いが、127と132は、認められていない。カマドは、北西側壁の中央に設置されている。出入口用ピット(梯子ピット)は、110・147で検出されている。竪穴の覆土及び床面付近より、焼土や炭化物が検出された住居跡は、110・132・133ａ・147の４軒である。埋めもどされたと考えられる住居跡は、133ａのみである。特殊遺物としては、110より軽石、132より土製小玉が出土し、カマド支脚は、133ａ(２)、151より各々検出されている。

Ⅱ期は、20軒と考えられ、調査地区の全体に広がって存在する。115と118・111と148・122と123のように、かなり近接しており、同時期とは、考えにくい竪穴もあるが、ここでは、同時期として取り上げておく(今後、更に細分が可能と考えられる)。規模は、115を最大(長軸8.93ｍ)とし、最小は、144(長軸3.00ｍ)を測る。115は、今回検出した古墳時代～奈良平安時代の竪穴で最も大きい、主軸方位は、Ｎ－19°～72°－Ｗを示す。主柱穴は、４本が多いが、111・144・148は、床面中央に１本のみである。カマドは、北西側壁中央付近に設置されている。カマド支脚は、101・102・113・115・118・123・130・135・137・139より検出され、２ヶ以上が多い。出入口施設用ピットは、101・102・109・118・120・122・123・129・135・137・139で検出されている。また間仕切り溝が、115・118に認められる。焼土や炭などは、102・109・113・115・118・120・122・123・130・135から認められて、123は、明らかに火災住居である。埋めもどされた住居跡は109・115・118・122・123・129・148・149・150ａにみられる。特殊遺物としては、101より石製紡錘車、102より金銅製耳環、115より鉄鏃２、不明鉄片２、鉄滓、120より砥石、123より石製紡錘車、139より鉄鏃、149より金銅製飾り金具、耳環が出土している。

Ⅲａ期は、８軒と推定され、散在して所在する。規模は、最大が、114(長軸7.40ｍ)、最小は、138(長軸3.25ｍ)である。主軸方向は、Ｎ－25°～62°－Ｗを示す。主柱穴は、４本が多いが、114は、四隅付近に離れて位置する。また、134・138・119ｂは、認められていない。カマドは、北西側壁中央付近に設置されている。カマド支脚は、104・114・117・134より出土している。出入口施設用ピットは、確認されていない。焼土や炭は、104・117・128・134・141より検出されており、埋めもどされた竪穴は、104・114・117・128・141とみられる。特殊遺物としては、104より不明鉄片、鉄滓７、117より刀子、128より鉄滓２、134より軽石、刀子、鉄滓が、各々出土している。

Ⅲｂ期は、５軒とみられる。南東側の台地縁辺部に４軒がまとまり、103がやや西側に離れ

て所在する。規模は、125ｂが最大で(長軸7.81ｍ)、最小は、103で(長軸3.95ｍ)ある。主軸方位は、Ｎ－37°～72°－Ｗを示す。主柱穴は、４本が多く、126のみ、不明である。カマドは、北西側壁の中央に設置され、カマド支脚は、103･119ａより出土している。出入口施設用ピットは、121･125ｂより検出されている。また間仕切溝を119ａに確認している。焼土や炭は、103と126で認められ、埋めもどされた竪穴は、103のみとみられる。特殊遺物として、103より砥石、桃実、121より砥石が、各々出土している。

Ｖ期は、２軒で、北東側に接近して存在する。規模は、124が長軸6.21ｍ、125ａが長軸4.88ｍを測り、主軸方位は、各々、Ｎ－46°（124）、34°（125ａ）－Ｗを示す。主柱穴は、４本でカマドが北西側壁に設置される。支脚は、125ａより出土している。出入口施設用ピットは、125ａで認められ、焼土や炭は、124で検出されている。特殊遺物は、125ａより刀子と不明鉄片がある。

Ⅵ期は、112の１軒で、規模は、5.79ｍ(長軸)、主軸方位は、Ｎ－42°－Ｗを示し、主柱穴は４本である。カマドが北西側壁に設置され、支脚も出土している。出入口施設用ピットと間仕切溝も検出されている。特殊遺物では、鉄滓がみられる。

Ⅵ'期も１軒で、146である。規模は、4.00ｍ(長軸)、主軸方位は、Ｎ－49°－Ｗを示し、主柱穴は、認められない。カマドが北西側壁に設置され、支脚も出土している。この他に、覆土中の北側と南側より、貝(シオフキ、ハマグリ)が検出されている。

Ⅶ期は、５軒で、南西側に集中する。規模は、107が最大で、長軸7.62ｍ、最小は、150ｂで長軸2.42ｍを測る。比較的小型の竪穴が多く、150ｂは、今回調査した内で最も小規模である。主軸方位は、Ｎ－14°～46°－Ｅを示す。主柱穴は、認められていない。カマドは、北東側壁に設置され、支脚は、検出していない。焼土や炭は、150ｂ以外は、存在する。埋めもどされたとみられる竪穴は無い。特殊遺物としては、105より刀子、布目瓦、106より布目瓦、107は布目瓦、108は、鉄滓と不明鉄片が、各々出土する。

Ⅷ期は、140の１軒だけである。規模は、長軸3.40ｍを測り、主軸方位は、Ｎ－49°－Ｅを示す。主柱穴は、認められず、カマドは、北東側壁に設置される。また、カマド支脚を布目瓦を立てて使用し、カマド袖部にも布目瓦を用いている。出入口用ピットは、南西側に検出されている。特殊遺物は、石製紡錘車が出土している。

以上の他、建て替えされた住居跡は、101･109･115･119ａ･121･125ａ･130･133ａが認められる。また、台地の傾斜面に立地する竪穴住居は、135･138･139･140･141･145ａ･145ｂ･146の８軒であり、128･132･134･137は、傾斜変換点付近に立地している。

５．掘立柱建物跡

４棟分を検出している。いずれも調査地区の南西側に集中する。101は、桁行7.06ｍ、梁行

妻4.32mを測る、4間×3間の建物で、主軸方位は、N－43°－Eを示す。小さな掘り方が有り、柱痕跡が認められる。また、覆土中に、粘土粒を少量含んでいる。102は、桁行7.24m、梁行妻4.90mを測る、4間×3間の建物で、主軸方位は、N－29°－Eを示す。掘り方内に柱痕跡が認められる。また、覆土中に、暗灰色粘土塊がみられる。庇状のピットが、やや不規則に東西両側に存在するが、これは、建築時の足場用ピットと推定している。103号は、桁行8.99m、梁行妻4.27mを測る、4間×3間の建物で、主軸方位は、N－35°－Eを示す。掘り方内には、柱痕跡が認められる。粘土は、検出されない。104は、桁行3.32m、梁行妻3.18mを測る、2間×2間の総柱とみられる建物で、主軸方位は、N－37°－Eを示す。掘り方は小さいが、一部に柱痕跡が認められる。粘土は、検出されない。各棟とも、主軸方位は、特に一致しないが、N－29°～43°－Eの範囲内であり、それほど不規則ではない。特に伴出する遺物はないが、103が108号住居跡を切っている。108はⅦ期に概当し、また、南西側の101～103号溝等との関連性が、時期や位置的に注目されるため、これら4棟とも近似する時期と推定している。

6．溝状遺構

4条を検出し、そのうち、101～103は、方形の二重に囲まれた溝の組み合わせである。調査地区の南西側に位置し、南と西の未調査地区等に続いている。北東隅がブリッヂ状に途切れており、また、各溝の底部には、土坑状の落ち込みが、不規則に存在する。覆土は、自然堆積である。出土遺物は、少量であるが、103の北東側隅の底部付近から、土師器高台付坏が2点、また、覆土中から埦片が2点と甕片が検出されている。これらの出土遺物から、当遺跡のⅧ期に相当し、年代的には、9世紀末～10世紀初頭頃とみられる。このような溝の形態については、寺院等の施設の一部として考えられているが、ここでは、千草山廃寺跡との関連性が想定される。しかし、南側や西側部分のつながりが不明(未調査及び削平された)であり、千草山廃寺跡の主要伽監についても、不明であるため、断定はできない。また、前記の掘立柱建物跡や竪穴住居跡なども、時期や配置等の面で、付属雑舎的な機能を推測できるが、同じく、今後の南側隣接地の千草山廃寺跡本体の調査を待つべきであろう。104は、台地北縁部に位置し、幅0.5～1m強、深さ0.2～0.3mを持ち、北側から少し入り込む小谷縁辺に添って、孤状を描いて所在する。各々の末端は、谷部に降ちているとみられる。時期については、布目瓦片2点が出土し、148号住居跡を切っているが、確定できる資料とは言えない。

7．方形周溝状遺構

4基が検出されている。104以外は、いずれも、台地縁辺部付近に立地する。101は147号住居跡を切り、南東側溝の中央部が約1.90mほど、ブリッヂ状に途切れている。規模は、周溝を含めた上端で、11.0×10.1m、主軸方位は、N－34°－Eを示す。主体部は認められず、出土

遺物は、土師器坏片が1点検出されている。102は、やや小型で、6.00×5.80mで、主軸方位は、N－27°－Eを示す。溝は狭く、北西側溝内より、土師器高坏脚部片と須恵器長頸壺片が出土している。103は最も大きく、12.10×12.04mを測り、主軸方位は、N－40°－Wを示す。また、南東側には、いわゆる地下式横穴墓が付設する。長さ8.25mの墓道状の落ち込み部をもち、前室や玄室に相当すると考えられる埋納部が存在する。玄室相当部分は、カマボコ型で、床は、三区画され、左右の部分は、棺床の様な形態を形作っている。また、人骨と馬の歯がその床部分より出土している。この他の出土遺物は、周溝内やその区画上より、須恵器短頸壺片、提瓶片、平瓶などが検出されている。104は小型で、6.00×5.80mを測り、主軸方位は、N－2°－Wを示す。主体部や出土遺物は、皆無である。この4基のうち、出土遺物から時期の推定できるものは、101と102と103である。これらは、いずれも、8世紀代の所産で、101は、第1四半期、102が前半頃、103が第3四半期とみられる。他の1基も、同様の時期と考えられるが、101については、ブリッヂをもつ例として注目される。

8．土坑

8基が検出される(109については、溝状遺構との関連で考え、ここでは、除外する)。このうち、102は、137号住居跡を切り、覆土上部にウミニナ、シオフキ、ハマグリなどの貝を含んでいる。木棺痕は認められていないが、土壙墓であろうか。103ａｂは、ａがｂを切る形体である。ａは、不整長円形で、覆土上部に、ロクロ土師器坏を4点(2点ずつ合わさった形で)検出している。時期的には、9世紀の第4四半期頃とみられるが、機能については、不明である。104は、134号住居跡を切っている。時期や性格は不明である。107･108は、地下式土壙墓(横穴墓)と考えられ、各々、2室に分かれ、特に108は、中央に溝状の落ち込みが入っている。おそらく、8～9世紀代の所産と推定される。

9．蔵骨器

101の1点のみである。131号と124号住居跡の間に所在する。台地の東側端部に位置する。不整円形の小さな土坑を掘り、土師器甕を埋納した形で、人骨等は検出されない。平安期の所産とみられる。

註

(註1)「千草山遺跡の再検討」田中清美『市原市文化財センター研究紀要Ⅰ』1987 (財)市原市文化財センター

(註2)(註1)と同様。なお、時期と名称も同様の記号等で使用している。

東千草山遺跡

第Ⅳ章　遺跡の位置と調査内容(東千草山遺跡)

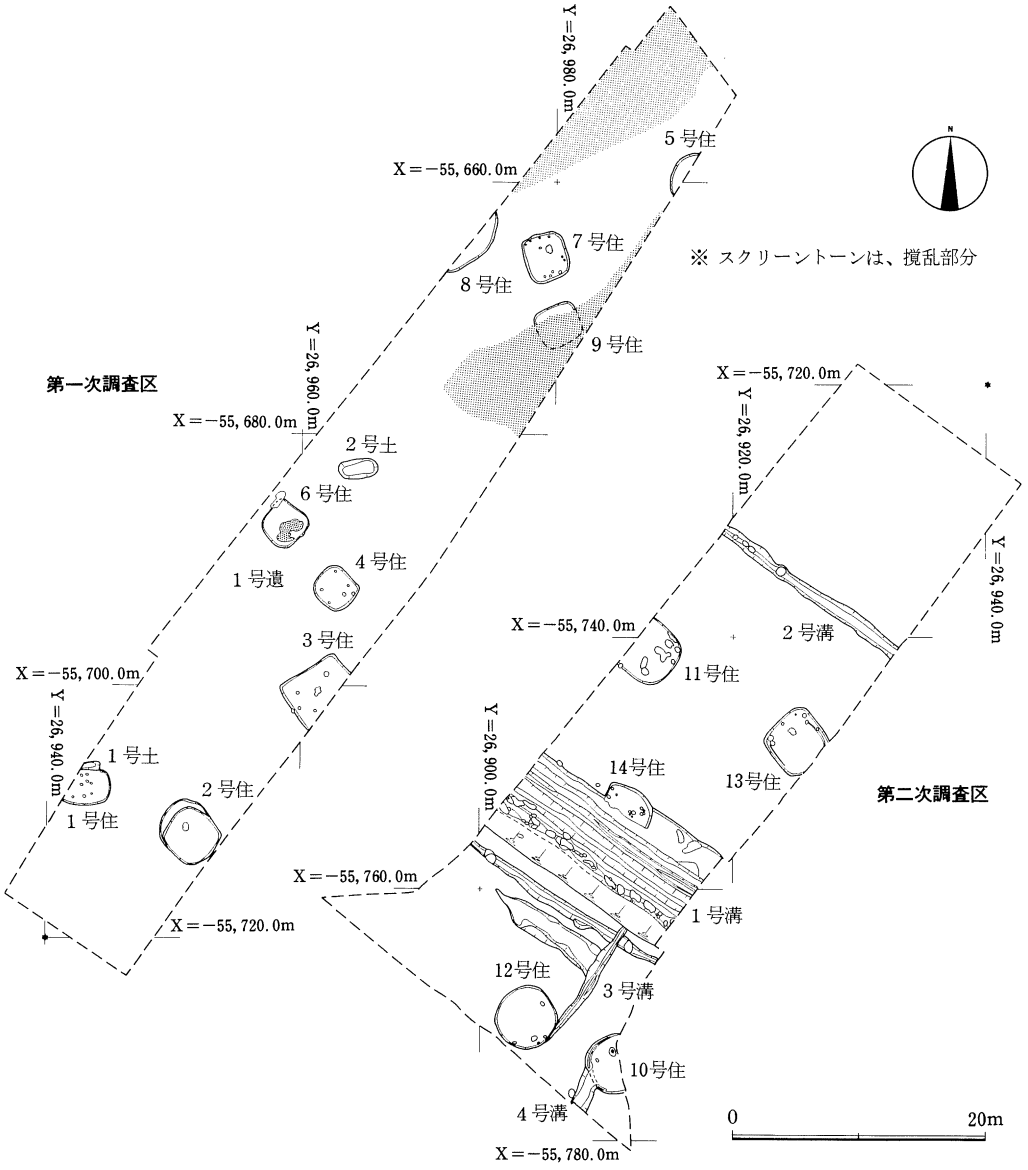
1．遺跡の位置と環境

東千草山遺跡は、千葉県市原市能満字東千草山1,482－7地先他に所在する。東京湾からは、約4km東に入った地点で、樹枝状の小谷に刻まれた標高約32mの洪積台地上である。当遺跡は、台地上のほぼ平坦部であるが、この台地は、北側より小谷が存在し、その分岐として、西側と東側からより小さな谷が入り込んでいる。北側小谷との比高は、約13mを測る。東千草山遺跡は昭和60年に一部が調査された山田橋表通遺跡と同じ台地上であり(北側に隣接する)、今回検出した遺構の内容から、山田橋表通遺跡の範囲に含んでも良いと考えられるが、本書では東千草山遺跡として区分しておく。今回の調査範囲は、西側に存在する小谷を望む台地端部及びその南東側部分であり、調査面積は、4,500㎡を対象とした。また、調査区域は、南東～北西方向の現道路が通過しているため道路部分は未調査で、その道路を挟んで、北東側と南西側の2ケ所の区域に分かれて、調査を実施した。当遺跡から西側小谷を挟んだ北西側の台地は千草山遺跡である。山田橋表通遺跡は、弥生時代後期の竪穴住居跡を主体とする集落跡で、また、国道297号線を挟んで北西側に存在する稲荷台遺跡より連なる道路状遺構が、本遺跡内を通過して山田橋表通遺跡に所在することが想定されていた。また、台地南西側の小谷上には、縄文時代中期～後期頃の亥の海道貝塚、南側台地上縁辺部には、山田橋大塚台古墳が存在している。

2．調査内容

調査前の遺跡は、主に畑地として利用され、また、北側の一部は、土取りや産業廃棄物処分場などにより既に削除されていた。調査期間は確認調査を含め、昭和62年4月1日より昭和63年1月31日までである。調査は、座標北を軸として、20m間隔の方眼を組み、トレンチを調査面積の約10%設定した。本調査は、北側の削除された部分を除く4,360㎡を実施した。全体の表土を重機で掘り下げた後、遺構の平面プランを確認し、土層セクションベルトを残し、掘り進めていった。遺構の実測は、方眼抗を基準として、1／10～1／20縮尺を基本に、各遺構の状況に応じて変えている。写真は、ブローニー版と35ミリ版のカラースライド及び白黒を記録している。遺構名は、全調査区域を一連の番号で統一し、001から呼称した。しかし、本書では、遺構の種類別に分け、別表(第123表)のとおり変更して掲載した。なお、当遺跡の略式記号は、セ49である。

検出した遺構は、弥生時代後期竪穴住居跡11軒、古墳時代前期竪穴住居跡3軒、遺構1基、溝状遺構4条、土坑2基である。



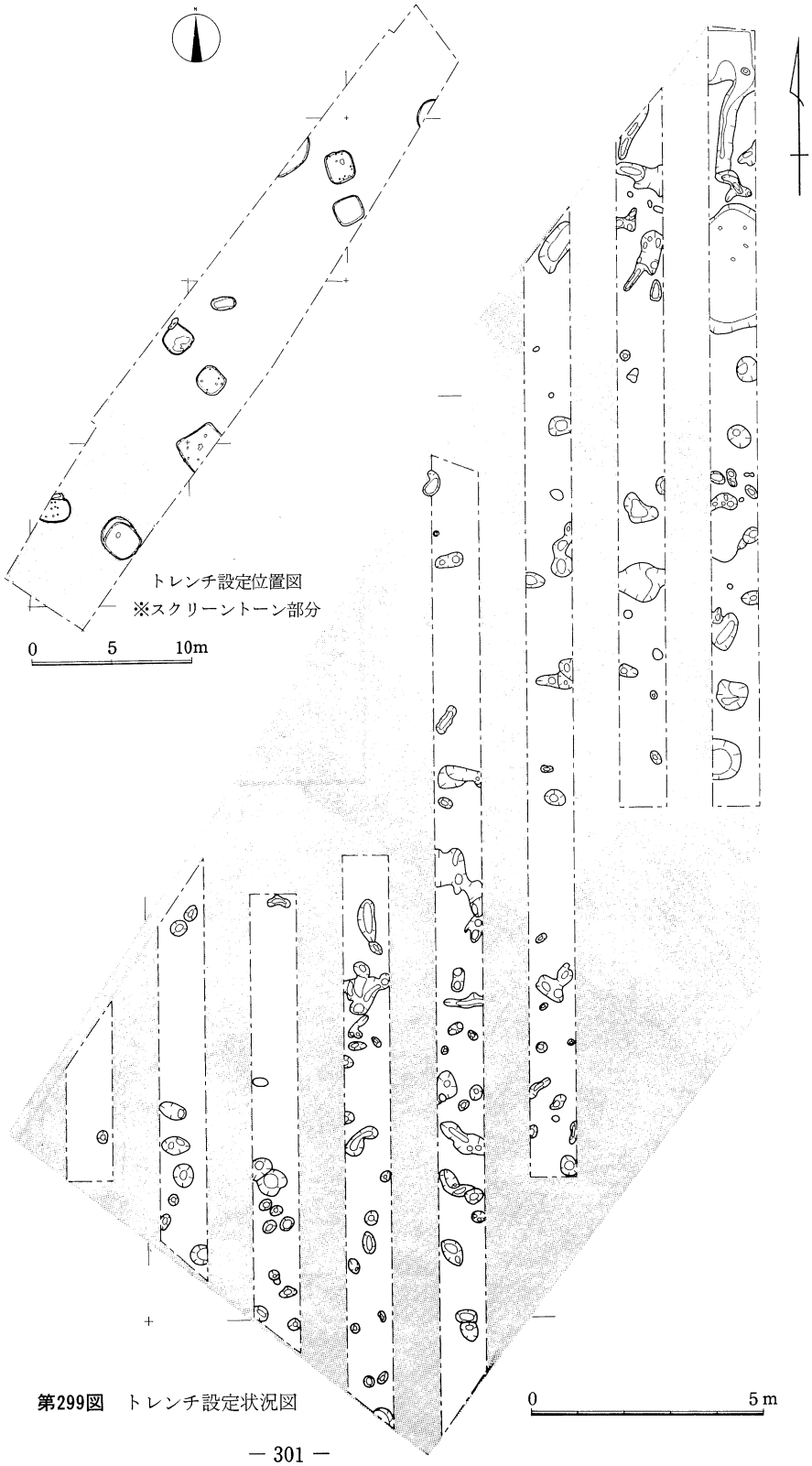
第298図　東千草山遺跡遺構配置(全体図)

第123表　遺構別新旧対照表

現地調査時名	当報告書掲載名	現地調査時名	当報告書掲載名	現地調査時名	当報告書掲載名
001	1号住居跡	011	9号住居跡	007	1号遺構
002	2号　〃	014	10号　〃	019	1号溝状遺構
004	3号　〃	017	11号　〃	018	2号　〃
006	4号　〃	015	12号　〃		3号　〃
009	5号　〃	016	13号　〃		4号　〃
008	6号　〃	020	14号　〃		
010	7号　〃	003	1号土坑		
012	8号　〃	013	2号　〃		

1．ローム層内トレンチ

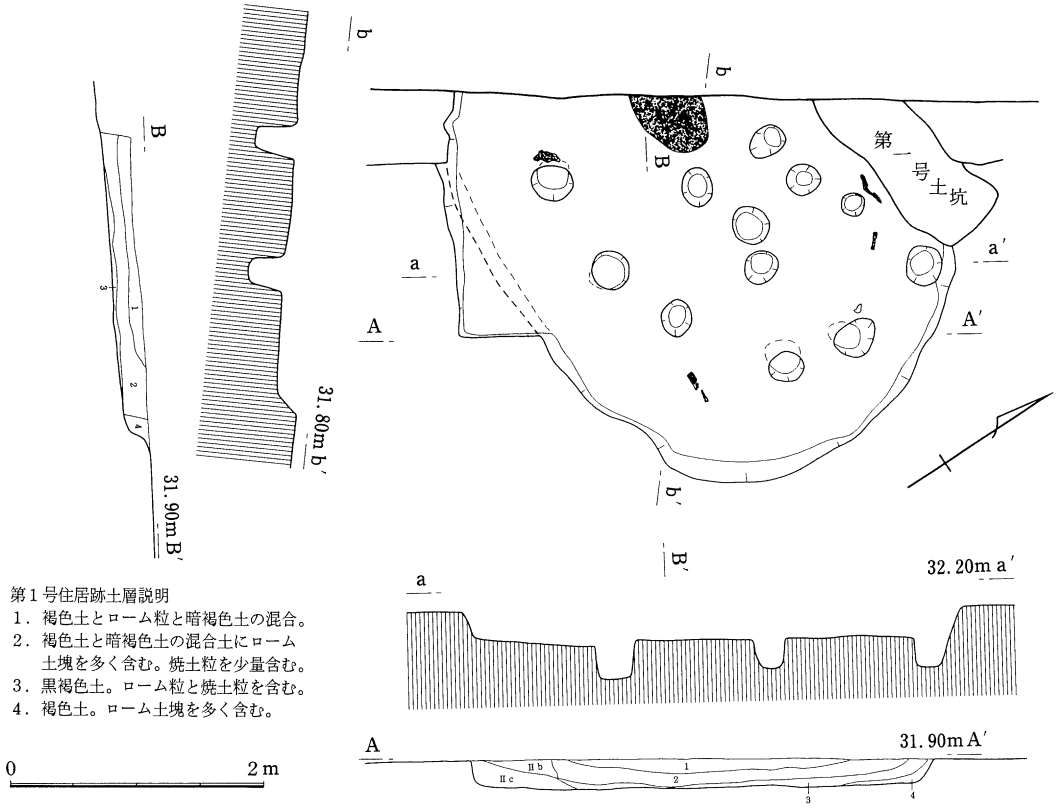
北側の地区において、ローム層下にトレンチを設定している。北側地区の南西部にあたり、当付近は、やや標準Ⅱ層のｃ～ｄが厚く残存していたため、ハードローム層のレベルまでトレンチにより掘り進めたものである。トレンチは、南北方向に幅1ｍの大きさで竪穴住居跡部分を除いて各々1ｍ間隔で8本設定した。調査の結果、不規則な配列の多数のピットや土坑状の落ち込みを検出したが、遺構と考えられるものはない。また、出土遺物も皆無であった。



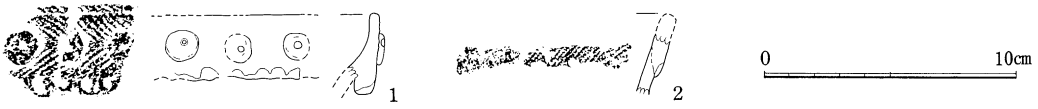
第299図　トレンチ設定状況図

2．竪穴住居跡

(1) 第1号住居跡



第300図　第1号住居跡実測図



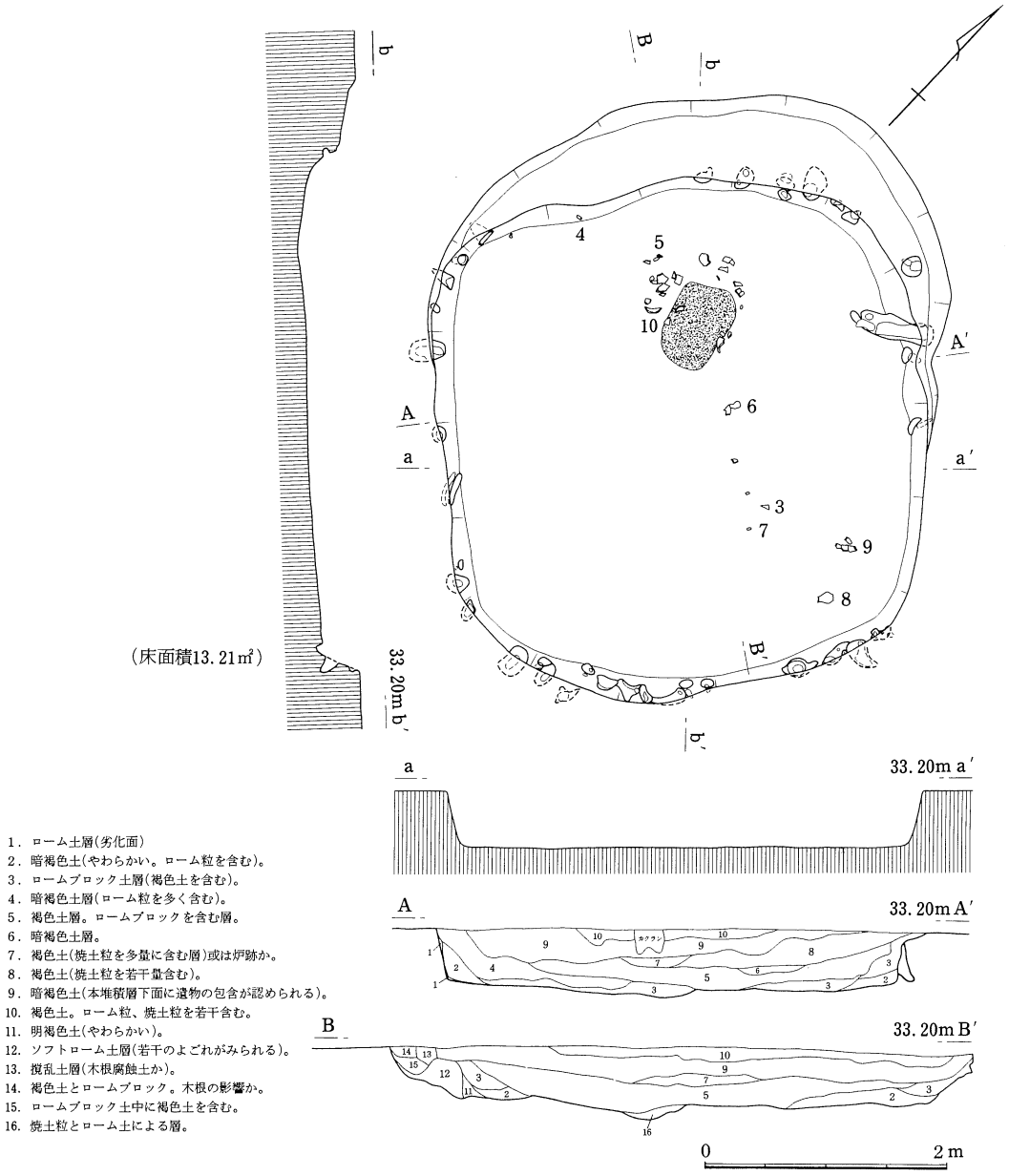
第301図　第1号住居跡出土遺物実測図

当遺構は、第1次(北側)調査地区の南西側に所在し、西側の一部は、未調査地区に入る。また、北側は第1号土坑によって切られている。第2号住居跡より西約4.5m離れている。平面形体は、長円形(いわゆる小判型)を呈する。規模は推定で長径4.30m、短径3.20m(いずれも上端)を測る。主軸方位は、短径方向を測り、N－10°－Wである。床面は、ほぼ平坦であるが、ピットが多く、12本検出されている。ピットの性格、機能は不明である。炉は、西側中

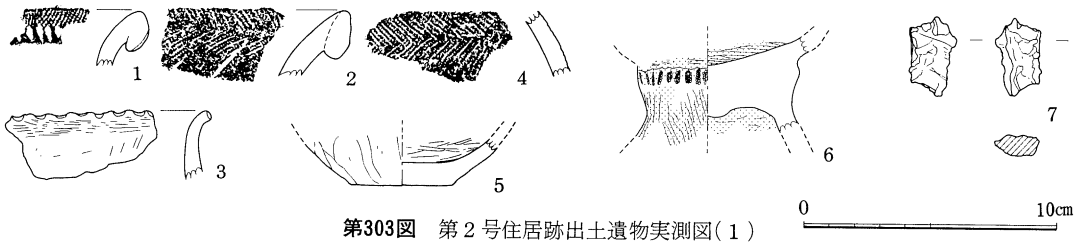
央床面に存在するが西側は未調査区に入っており、全掘はしていない。竪穴壁は、浅い残存で、最大で20cmである。炭化物を少量床面付近より検出している。この他の出土遺物は、土器片を2点検出している。1は、壺口縁部片と考えられ、複合口縁で口唇部に斜縄文、複合部に羽状縄文を施し、中央に小さな孔の有る円形浮文を付している。複合端部は、押捺がなされる。2も壺口縁部片とみられ、複合口縁で複合部には、羽状縄文、複合端部に押捺がみられる。いずれも小片で、焼成は少し不良。

(2) 第2号住居跡

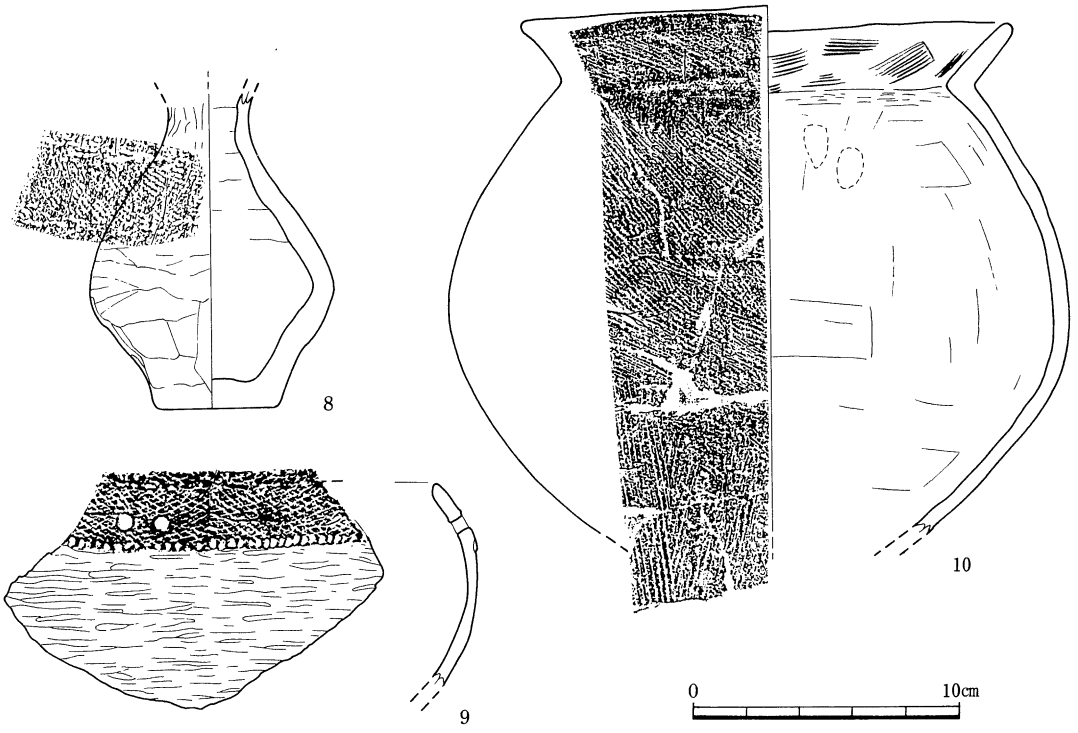
第1次(北側)調査地区の南側に所在する。床面レベルの違う2基の竪穴が重複したと考えられ、北西側に浅い掘り込みが存在する。北西側の掘り込みが南東側の深い方に切られている形態を呈する。北西側は、不整円形で、深さは18cmを測り、立ち上がりは、ゆるやかである。底部は特に硬質ではなく、南東に向かって傾斜している。ピットは、小ピットが東側に1本存在する。出土遺物は検出していない。南東側の竪穴は平面形態が胴張りの隅円方形で、規模は、上端長軸4.28m、短軸4.07mを測り、主軸方位は、長軸方向を測り、N－44° －Wを示す。床面は、ほぼ平坦で壁溝は認められない。また、主柱穴も検出している。竪穴壁は、最大高52cm残存する。竪穴壁に斜めや横方向に小ピットが存在する。いずれも不規則であり、人為的かは不明である。炉は、北西側床面中央に存在する。竪穴の覆土は、褐色土や暗褐色土が主体で、ローム粒や焼土粒、炭粒などを含んでいる。出土遺物は、床面の炉周辺、東側床面などより多く検出された。1は、壺口縁部片と考えられ、短い複合口縁を有し、複合部に短節の細かい斜縄文を施し、複合端部には、ヘラによる押捺が加えられる。2も、壺口縁部で、短い複合部をもち羽状縄文が施されている。3は、甕口縁部片と考えられ、口唇部にユビによる押圧がなされ、波状口縁を形作っている。4は、壺胴上部片とみられ、単節の細かい羽状縄文が施されている。5は、壺底部片と推定される。小型で底径4.0cm、外面は、縦方向のヘラナデ、内面は横方向のヘラミガキが認められる。6は、高坏の坏部と脚部の接合部付近とみられる。両面とも赤彩がなされ、脚外面は、縦方向のヘラミガキ、中央部分に縄紐状の圧痕が横位に列点状に施される。坏部両面は、横方向のヘラミガキか。脚部内面は、ヘラケズリダシ後、若干のヘラナデが認められる。7は、鉄滓片で南側竪穴覆土出土。8は、壺で、頸部が細長く、胴部最大径は、下位に有る。底径4.6cm、胴部最大径9.2cmを計る。胴下半は、縦方向(下位)と横方向(上位)のヘラケズリ、胴上半は、横位の2本セットのS字状結節文に上下を囲まれた斜縄文が施されている。やや全体に摩耗している。9は、鉢片で、体部は、球状を呈し、口縁部は丸みをもって内傾する。口縁部には、2ケ所の小さな穿孔が存在する。外面の口縁部は、横ナデ、体部は横方向のヘラミガキがなされる。10は、甕で、胴部は大きな形状を呈し、口縁部は、くの字状である。外面はすべて刷毛目調整、内面は口縁部が横ナデ、胴部が横方向のヘラナデの



第302図　第２号住居跡実測図



第303図　第２号住居跡出土遺物実測図(１)

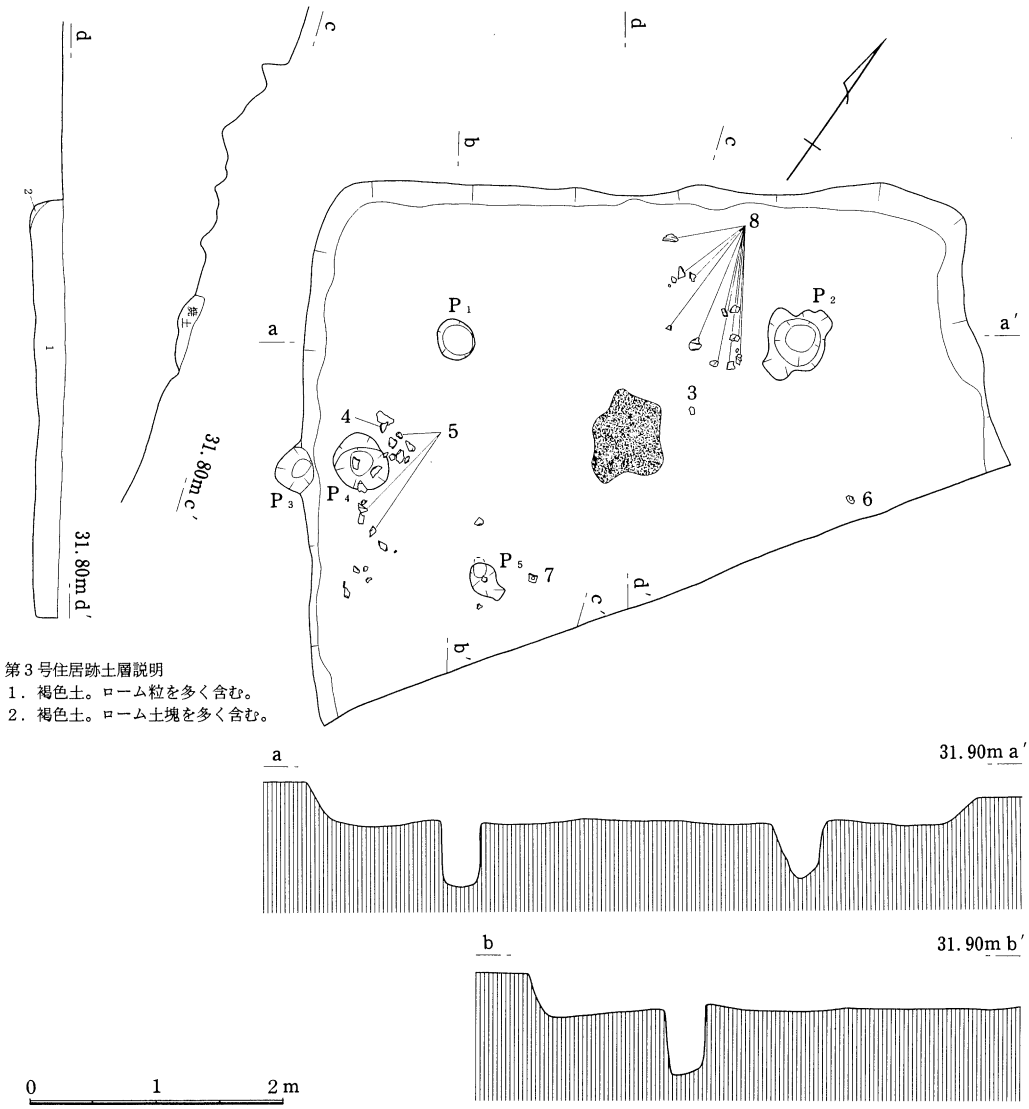


第304図　第２号住居跡出土遺物実測図(２)

後、ユビによるナデがなされる。一部に指頭痕が残る。胴下部から底部を欠損する。口径18.5cm、胴部最大径23.3cmを計る。

(3) 第３号住居跡

第１次調査(北側)地区の南東側に所在し、プランの約半分、南東側が未調査区に入る。第４号住居跡が北約3.5m、第２号住居跡が南西約10mに離れて存在する。全掘していないため不明な点が多いが、平面形体は、隅円方形と推定されるが、やや東側壁が開きぎみである。規模は、南西～北東方向の軸が5.60m(上端)を測る。主軸方位は、P_1とP_2を結ぶ線の垂直方向を測り、N－36°－Wを示す。竪穴壁は最大で35cm残存する。床面は、ほぼ平坦で壁溝はみられない。ピットは壁部分も含め、５本検出された。P_1とP_2は、主柱穴用ピットと考えられる。炉は北西側床面の中央部分に存在する。竪穴の覆土は、下層のみの検出であるが、褐色土が主体で、ローム粒を多く含んでいる。出土遺物は、炉の北側や南西側床面から検出されている。１は、壺口縁部片で、複合口縁を呈し、複合部に斜縄文、複合端部に押捺が施される。２は、壺の胴上部片と考えられ、横位の羽状縄文を挟んで上下にS字状結節文が横位に配されている。３は鉢で小さな底部をもち、体部は球状でやや浅く、口縁部は短く広く開く。口径12.1cm、底径3.2cm、器高6.1cmを計る。外面の口縁部は横ナデ、体部は横及び斜め方向のヘラナデ。内面の口縁部は、横及び斜め方向のユビナデ、体部は縦及び斜め方向のヘラナデがなされる。４も鉢と考えられ、体下部から底部を欠損する。体部は丸みをもち、口縁部は短く、わ



第305図　第３号住居跡実測図

ずかに外反する。口径12.8cm、体部最大径13.1cmを計る。外面は刷毛目調整、内面は横及び縦方向(体下部)のヘラナデがなされる。５は高坏脚部片とみられる。脚はやや幅広く、裾はあまり広がっていない。脚裾部径12.7cm。穿孔が３ヶ所存在する。外面の脚部は、縦方向の丁寧なヘラミガキ、わずかに裾部が横ナデ、内面は脚上部がヘラケズリダシ、下部はユビナデである。６は、壺底部片とみられる。胴部は小型で球状を呈すると考えられる。床径4.3cm、外面の胴下位は縦方向のヘラケズリ、内面は縦方向のヘラナデがなされる。７も、壺底部片とみられる。６よりやや薄手であるが、胴下半部の張り方から、やや大きめの壺と推定される。底径4.5cm、外面の胴下位は縦方向のヘラケズリ、内面はヘラミガキがなされる。外面はやや擦過痕が目立つ。８は少し大型の壺と考えられ、胴部は球状であるが、わずかに上位に最大径が有

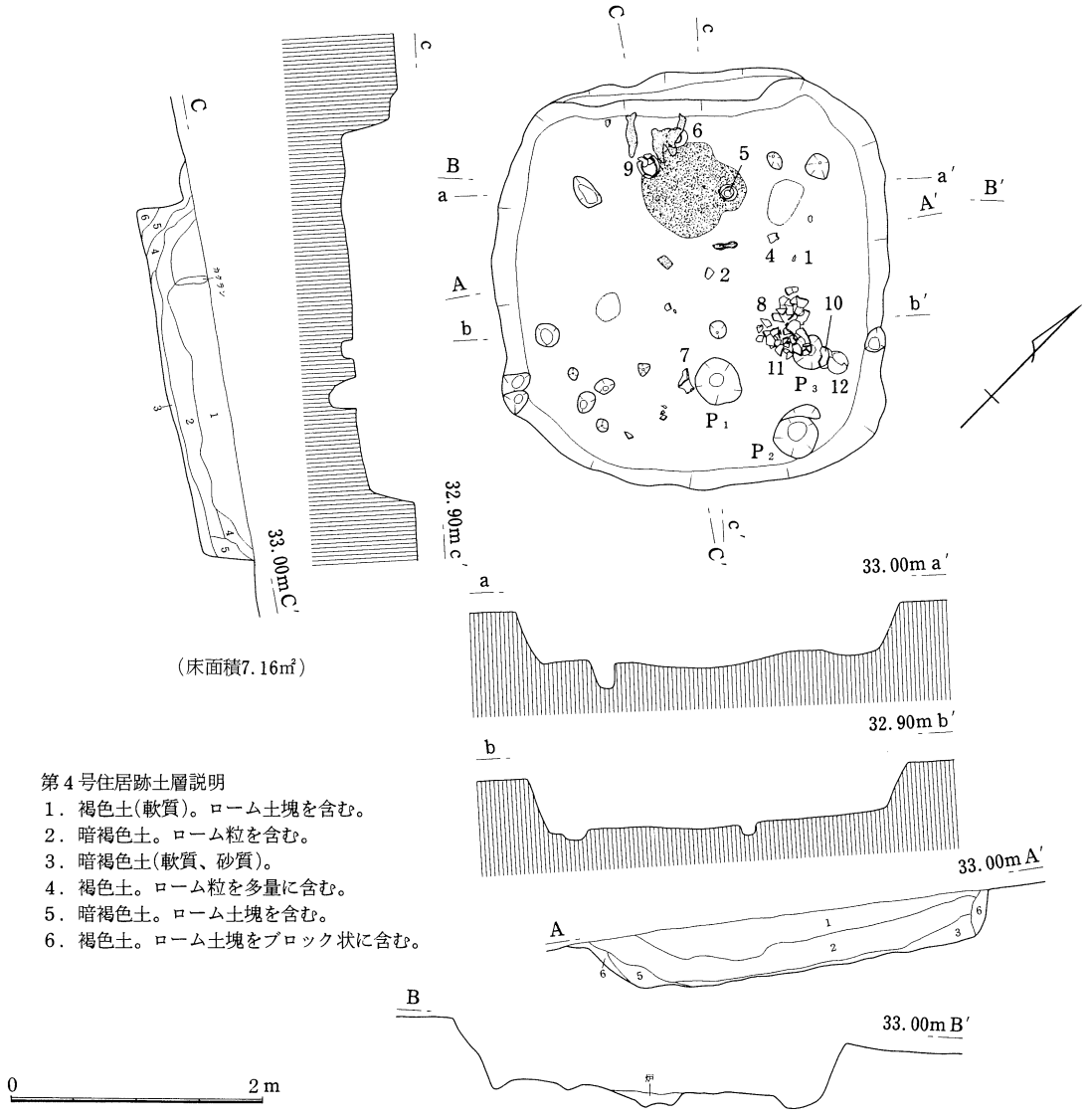


第306図　第３号住居跡出土遺物実測図

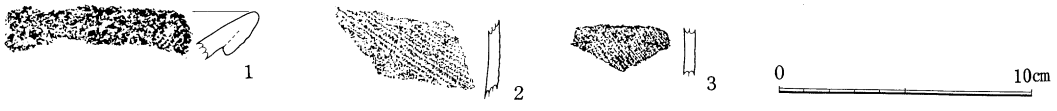
る。口縁部は、くの字状にちかく外反する。口径16.2cm、胴部最大径22.6cm、底径6.5cm、器高22.5cmを計る。外面の口縁部は、横ナデ、頸部から胴部は縦方向のヘラナデ及びヘラミガキ、底部周辺が横方向のヘラケズリがなされる。内面は、口縁部が横方向のヘラミガキ、胴部は横方向のヘラナデの後、ユビナデがなされている。完形ではない。

(4) 第４号住居跡

第１次調査区(北側)の中央やや南寄りに所在し、第５号住居跡が北西約３ｍ離れて存在し

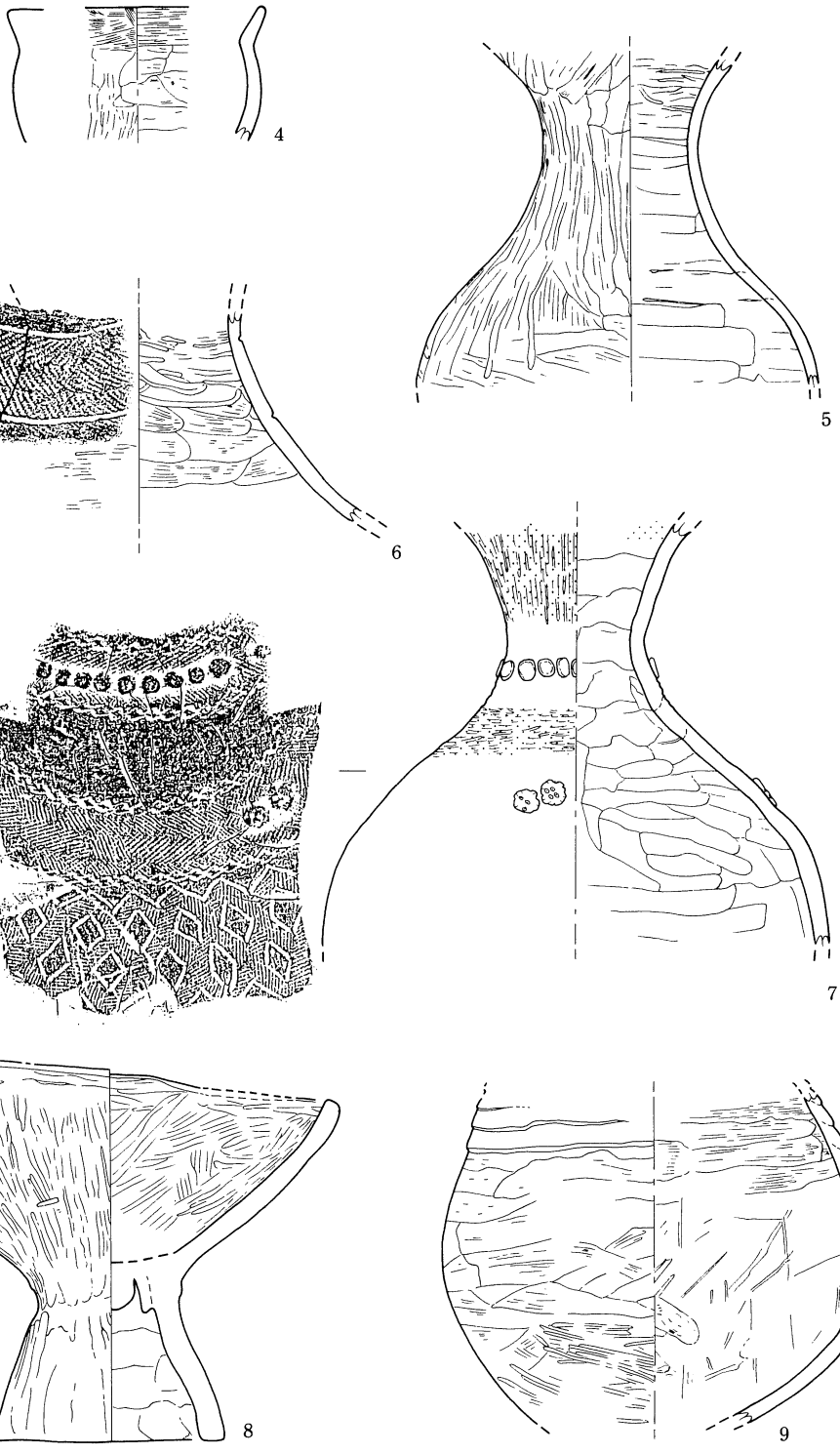


第307図　第４号住居跡実測図



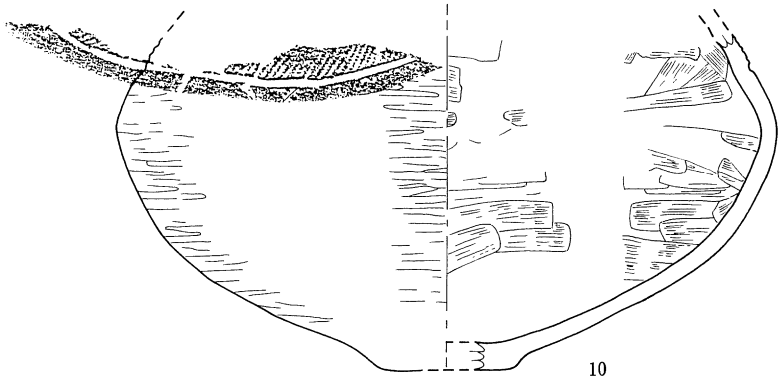
第308図　第４号住居跡出土遺物実測図(１)

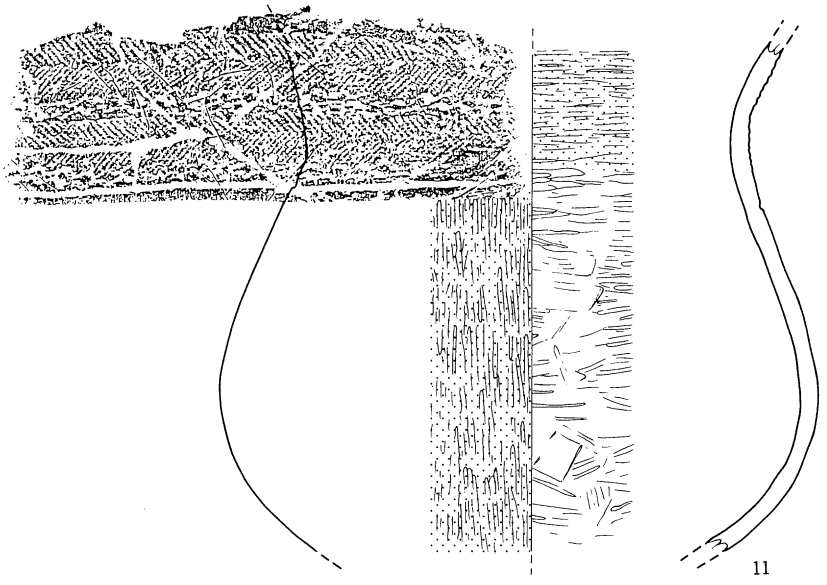
ている。竪穴の平面形体は、胴張りの隅円方形とみられ、規模は、長軸3.23m、短軸3.15m(上端)を測る。北西側壁の立ち上がりが2段を呈している。残存高は、最大で43cmである。竪穴の主軸方位は、短軸方向を測り、N－46°－Wを示す。床面はやや凹凸がみられ、中央部が少し窪んでいる。壁溝は、認められない。ピットは、小ピットを含み、多く検出している。P_1は所在する場所から、出入口施設用と推定され、P_2はいわゆる貯蔵穴とも考えられる。P_1深さ22cm、P_2深さ35cm。炉は北西側中央床面に存在する。また、炭化物や焼土が床面中央部から炉の周辺にかけて少し認められる。出土遺物は、多く、1・2・4・7が、床面中央付近、5・6・9が、炉の周辺、8・10・11・12が東側床面(P_3)付近などから検出されている。竪穴の覆土は、褐色土と暗褐色土が主体で、ローム粒やローム土塊を多く含み、人為的に埋めもどされた可能性が伺える。遺物は1が、壺口縁部片で、複合口縁を呈する。摩耗が激しいが、複合部には、斜縄文が認められる。2は薄手で、壺胴部片とみられる。やや不明瞭であるが、横位のS字状結節文と斜縄文の組み合わせである。3も薄手で、刷毛目状の痕跡を有し、壺胴部片と考えられる。4は、鉢で、体部は小型の球状を呈し、口縁部は小さく直線的に外反する。口径10.4cmと推定される。5は、壺の胴部から頸部にかけての破片で、頸部は細長い形体である。外面は縦及び横方向のヘラケズリ後、縦方向のヘラミガキがなされる。内面は、頸部上位が横方向のヘラミガキ及びナデ、頸部から胴部は、横方向のヘラナデがなされる。内面の一部には、粘土紐接合痕が残る。6も頸部の細長い壺の胴上部から頸部にかけての破片で、胴上位には、横位の沈線で上下を区画された三段の羽状縄文が施される。頸部内面は、横方向のヘラナデ及びヘラミガキ、胴部はユビナデである。7も同様の壺破片で、外面の頸上部は、赤彩され縦方向のヘラミガキ、その下は横位のS字状結節文に上下を囲まれた斜縄文で、中央に円形浮文が横位に並ぶ。その下は、赤彩され、横方向のヘラミガキ、さらに下の胴上位にはS字状結節文を上位に配し、その中を三段の斜縄文と2ケの円形浮文、その下には沈線と斜縄文で構成される連続菱形文が施されている。内面は、ヘラ及びユビナデである。8は、高坏で、太くがっしりとした形である。坏部口径19.3cm、脚裾部径9.4cm、器高15.3cmを計る。外面は、横及び縦方向のヘラミガキとヘラナデ、内面は坏部がヘラミガキ、脚部はヘラケズリダシである。9は、甕胴部片とみられる。球状の大きな胴部をもち、胴上部には、粘土紐接合痕を残している。外面の胴部は、上部が横方向のヘラナデ、下部はヘラナデの後ヘラミガキ、内面は、ヘラナデの後ユビナデとヘラミガキが認められる。胴部最大径17.5cm。10は壺胴下半部片で、胴上部に沈線で区画された斜縄文が認められる。その他の外面は、横方向のヘラミガキ、内面はユビナデ、胴部最大径26.1cm。11は、甕胴部片で、外面の頸部に沈線とS字状結節文で区画された羽状縄文をもつ、一部内外面に赤彩。胴大径23.7cm。12は、波状口縁の甕で、口径16.7cm、胴大径16.5cm、底径5.9cm、器高16.7cmを計る。

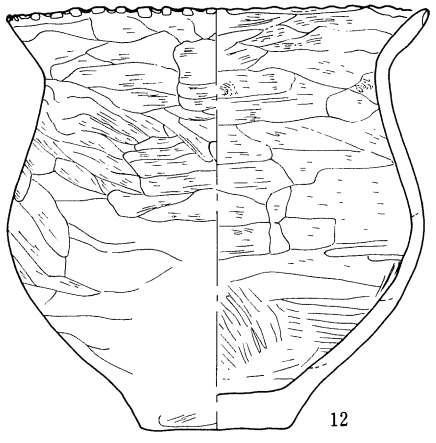


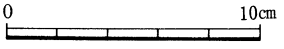
第309図　第４号住居跡出土遺物実測図（２）

0　10cm



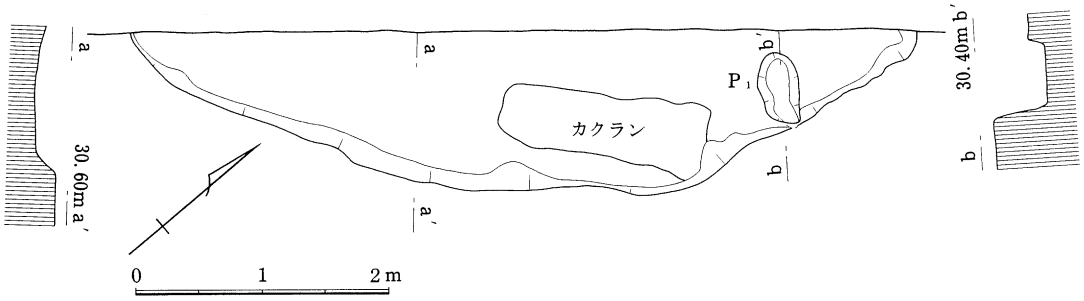




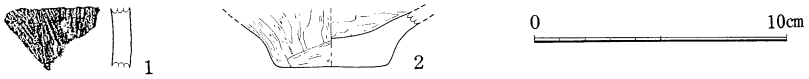


第310図　第４号住居跡出土遺物実測図（３）

(5) 第5号住居跡

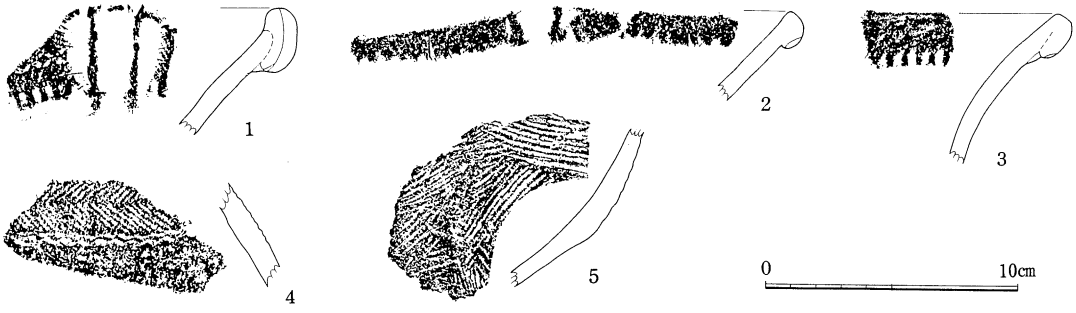


第311図　第5号住居跡実測図



第312図　第5号住居跡出土遺物実測図

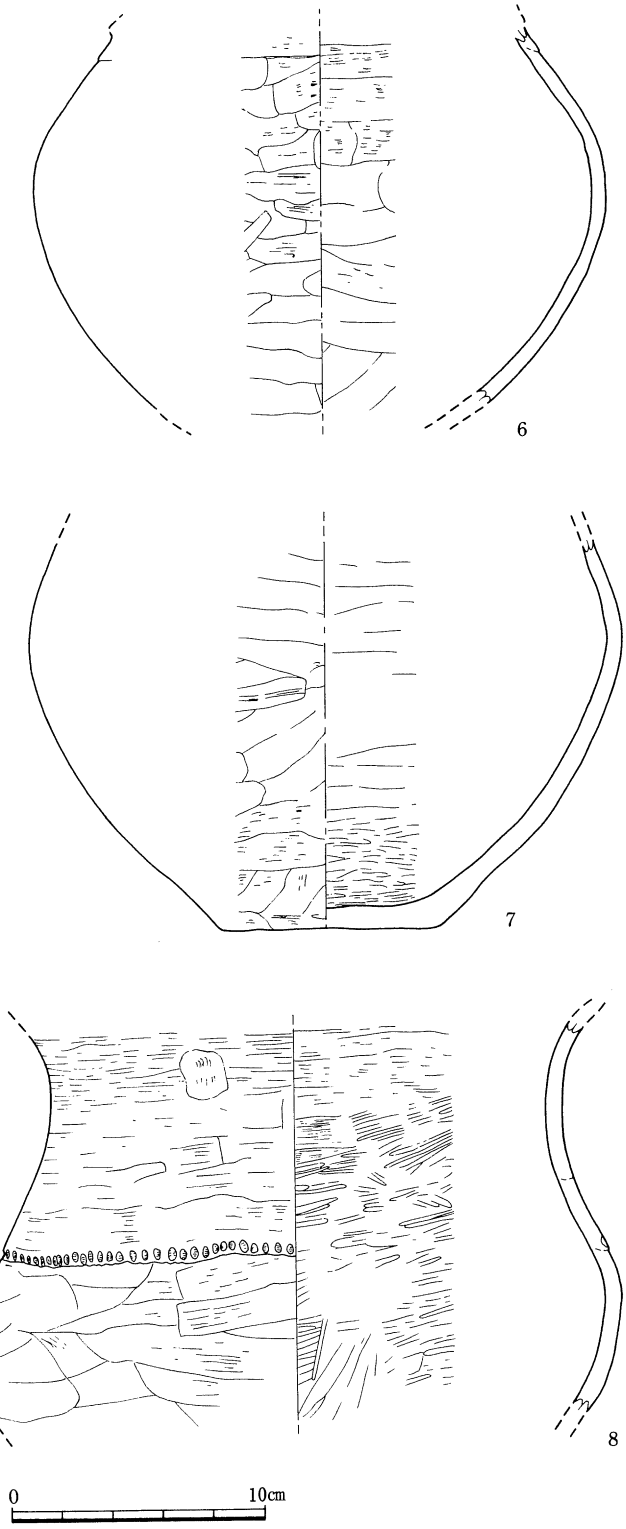
当住居跡は、第一次(北側)調査地区の北西側に所在し、プランの南東側一部分のみを調査しただけであり、北西側は、大部分が未調査域である。第7号住居跡が東約2.5mに存在する。平面形体は、推定であるが、やや大きい小判型?と考えられる。規模は、検出した範囲での最大径で6.20m(上端)を測る。竪穴壁は残存が浅く。最大で15cmである。床面は比較的平坦であるが、南西側はイモ穴による土坑に切られている。また、浅いピットが壁近くに1本検出された。機能は不明である。竪穴の覆土は、下層のわずかな調査であるが、自然堆積と考えられる。本遺構は、部分的な調査であるが、その形態から竪穴住居跡と推定している。主な出土遺物は、竪穴の覆土中より2点検出している。1は、甕胴部片と考えられる。外面に刷毛目調整痕を有し、内面はヘラナデが認められる。2は、壺?の底部片と推定される。底径4.3cm。やや小さめの底部を有する。外面は縦及び横方向のヘラケズリ、内面はヘラナギがなされている。褐色を呈し、焼成は少し良好である。



第313図　第1号遺構出土遺物実測図(1)

(6) 第1号遺構

当遺構は、第1次(北側)調査区の南西側に位置し、第6号住居跡より南西に約4m、第4号住居跡より西に約5.5m、各々離れて所在する。検出時には、特に落ち込み等のプランは認められず、遺物が出土しただけである。したがって、ピットや炉なども検出していない。本遺構の性格は不明である。出土遺物は、壺小片5点、甕とみられる破片3個体分を検出し、一括して取り上げている。1は、壺口縁部片とみられ、複合口縁で、複合部に斜縄文とS字状結節文、複合端部に押捺がなされている。また、2本の棒状貼付浮文が有る。2・3も壺口縁部片で、短い複合口縁をもつ。少し摩耗しているが、複合部に斜縄文、複合端部に押捺が認められる。4は、壺胴上部片とみられ、外面に横位の羽状縄文と2条のS字状結節文が施されている。5は、壺胴下部片と考えられ、外面に刷毛目調整痕が存在する。6は、甕胴部付近の破片とみられる。大きな形状を呈し、胴部最大径を中央にもち、22.6cmを計る。上位に、粘土紐接合痕を残している。両面とも横及び斜め方向のヘラナデがなされている。7も甕胴下半部の破片とみられる。胴

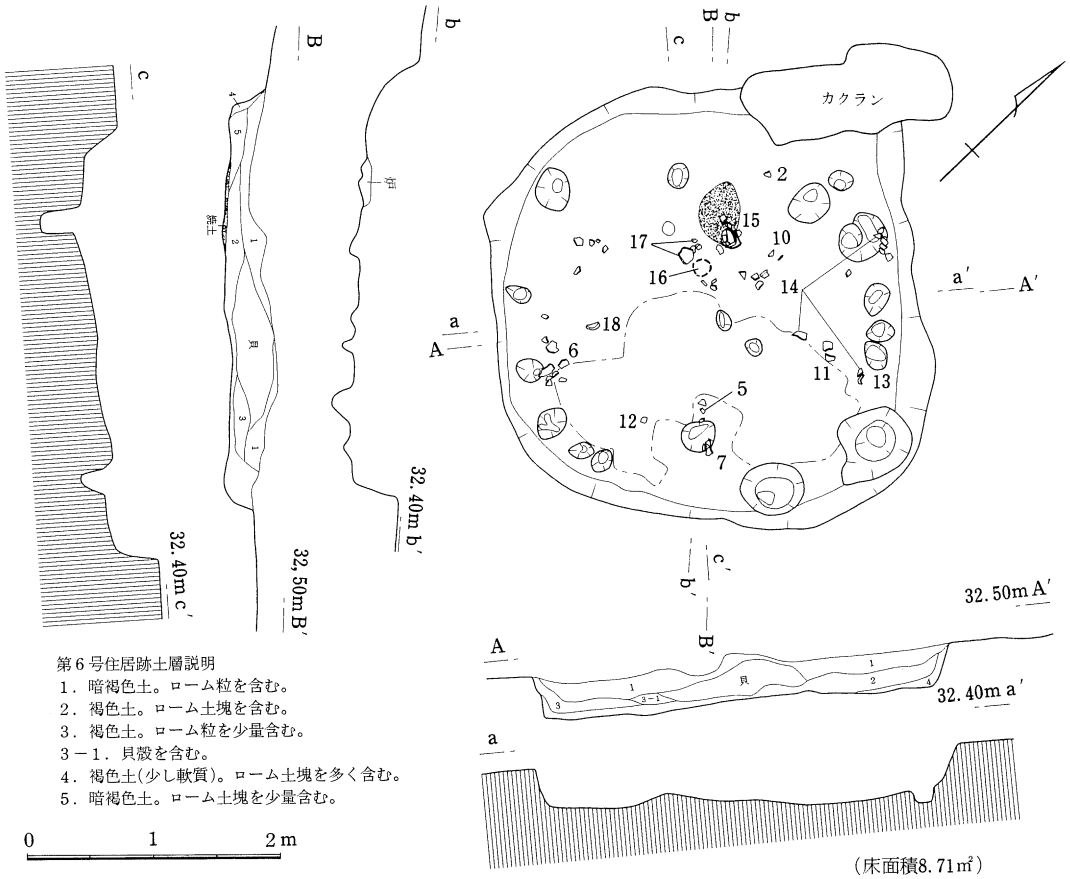


第314図 第1号遺構出土遺物実測図(2)

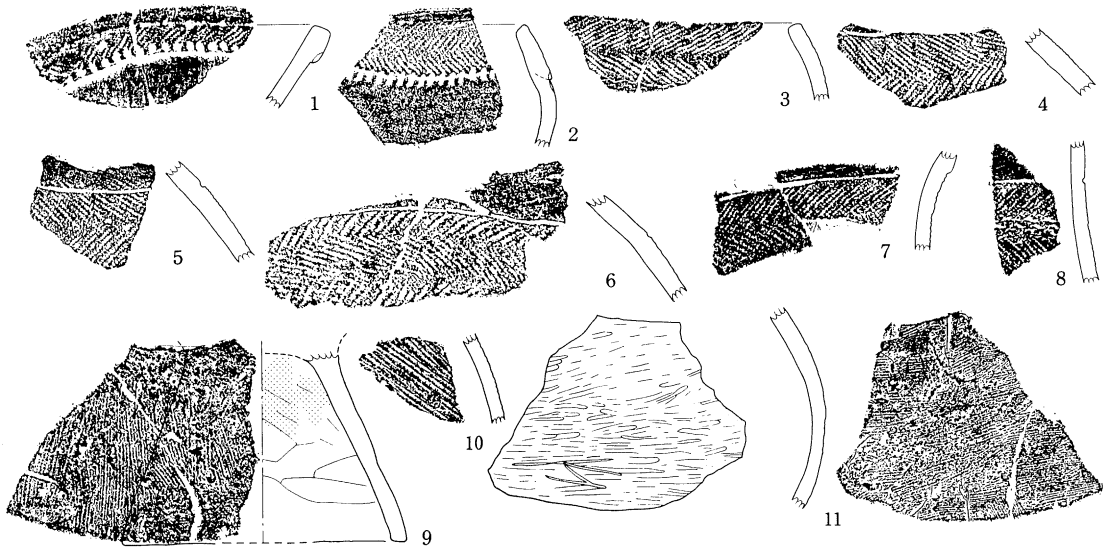
部は球状で、底部はやや広く、しっかりしている。底径8.6cm、胴部最大径23.3cmを計る。外面は、横及び斜め方向のヘラナデ、内面は横方向のヘラナデ、底部付近は丁寧なヘラミガキがなされている。8も甕胴部付近の破片で、胴上部に粘土接合痕を残し、その端部に縄文原体を押捺した刻目がなされている。外面の胴上部は、横方向のヘラナデの後、ユビナデがなされ、一部に指頭痕も残る。胴下部は、横方向のヘラナデである。内面は、上部が横ナデ、他はヘラミガキが認められる。

(7) 第6号住居跡

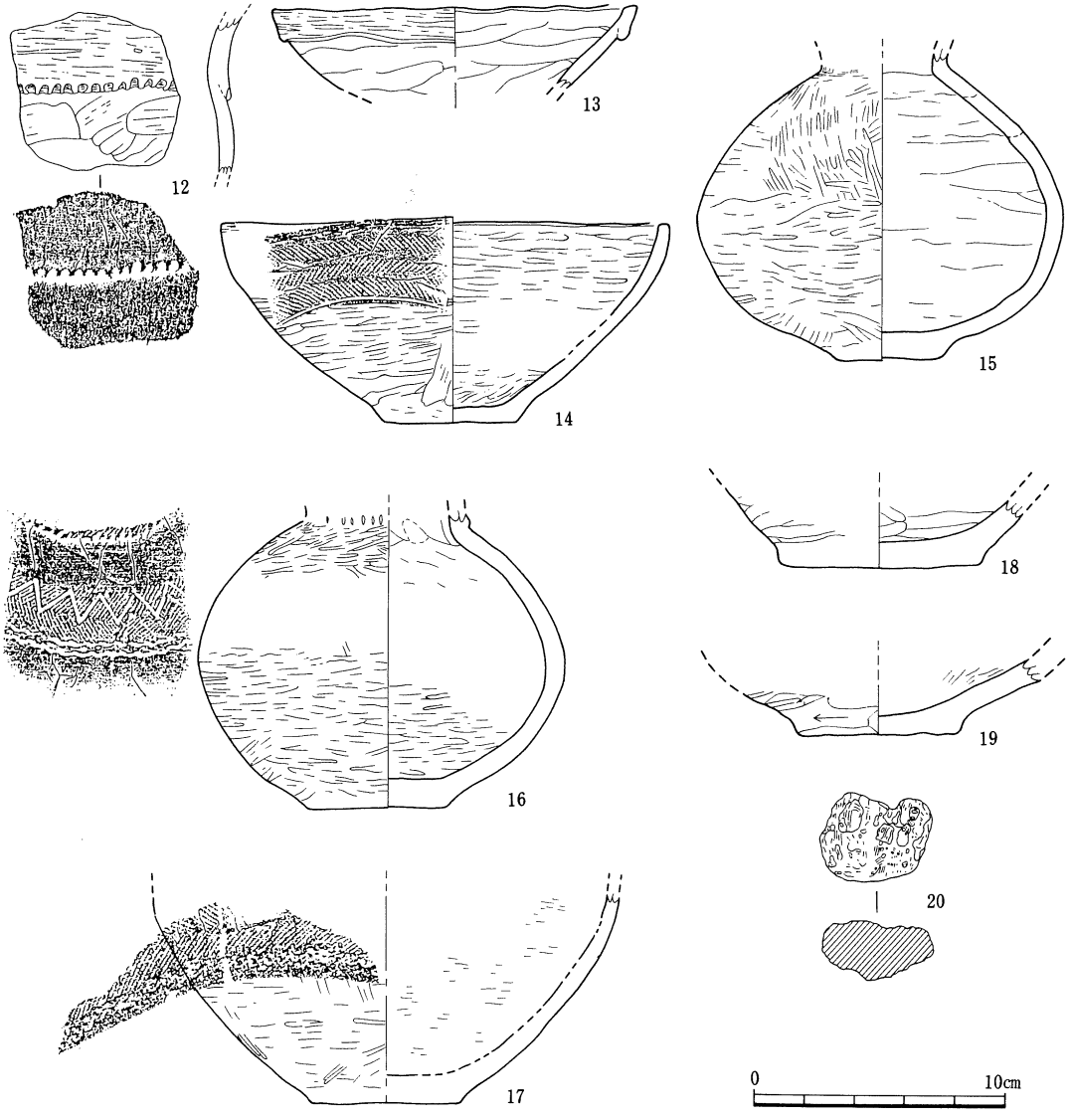
第1次調査区の南西側に位置し、北側はイモ穴による攪乱土坑によって切られている。第4号住居跡が、南西約3.5mに位置する。竪穴の平面形体は、不整の胴張り隅円方形で、規模は長軸3.46m、短軸3.40mを測る。主軸方位は、短軸方向を測り、N－41°－Wを示す。床面は凹凸が多く、やや不安定である。また、ピットが壁付近を主として多数存在する。炉は、北西側床面中央に、やや小さく所在する。竪穴壁の立ち上がりは、少し斜めであり、残存高は最大で42cmである。竪穴の覆土は、ローム粒とローム土塊を含む暗褐色土と褐色土が主体である。また南側には、覆土上部から床面付近まで約30cm以上の厚さをもった貝が存在し、人為的に堆積したと考えられる。出土遺物は、床面付近や覆土中より多く検出されている。1は、壺口縁部片で、複合口縁をもち、複合部に斜縄文、端部に押捺がなされる。2は、鉢口縁部片とみられ、内傾する複合口縁で、羽状縄文と端部に刻目がなされる。3も鉢口縁部片とみられ、羽状縄文が施される。3・4・5・6は、壺胴上部片と考えられ、横位の沈線と羽状縄文が施されている。7・8は、壺頸部片とみられ、7は、横位の羽状縄文と沈線、8は、横位の沈線と羽状縄文及びS字状結節文が認められる。9は、台付甕の台部片とみられ、外面は刷毛目調整、内面は一部に赤彩がなされ、ヘラケズリダシ。10は、甕？胴部片と考えられ、外面に刷毛目が認められる。11は、壺胴部片と考えられ、外面は刷毛目調整、内面は横方向のヘラミガキがなされる。12は、甕胴部片で、粘土接合痕を1本残し、端部にユビによる押捺が有る。13は、鉢?の口縁部片と推定され、複合口縁である。外面の口縁部は、横ナデ、他はヘラナデがなされる。口径14.5cm。14も鉢で、口径17.8cm、底径5.2cm、器高8.2cm。口縁部に、沈線で囲まれた3段の羽状縄文がある。15･16は壺胴下半部片で、小型で球状の胴部をもつ。15は、胴部最大径14.6cm、底径4.3cm。外面は、ヘラナデとヘラミガキ、内面はユビナデとみられる。16は、胴部最大径14.6cm、底径5.4cm。外面の頸部には、横位に突帯が囲り、縄文原体による刻目があり、その下には、羽状縄文上に沈線の山形文とS字状結節文が施されている。17も、壺胴下半部片で、羽状縄文とS字状結節文が横位に存在する。底径5.9cm。18･19は、壺底部片か。18は、底径8cm。19は、底径6.3cmを計る。20は、軽石の小片で、覆土中の出土である。



第315図　第６号住居跡実測図



第316図　第６号住居跡出土遺物実測図(１)

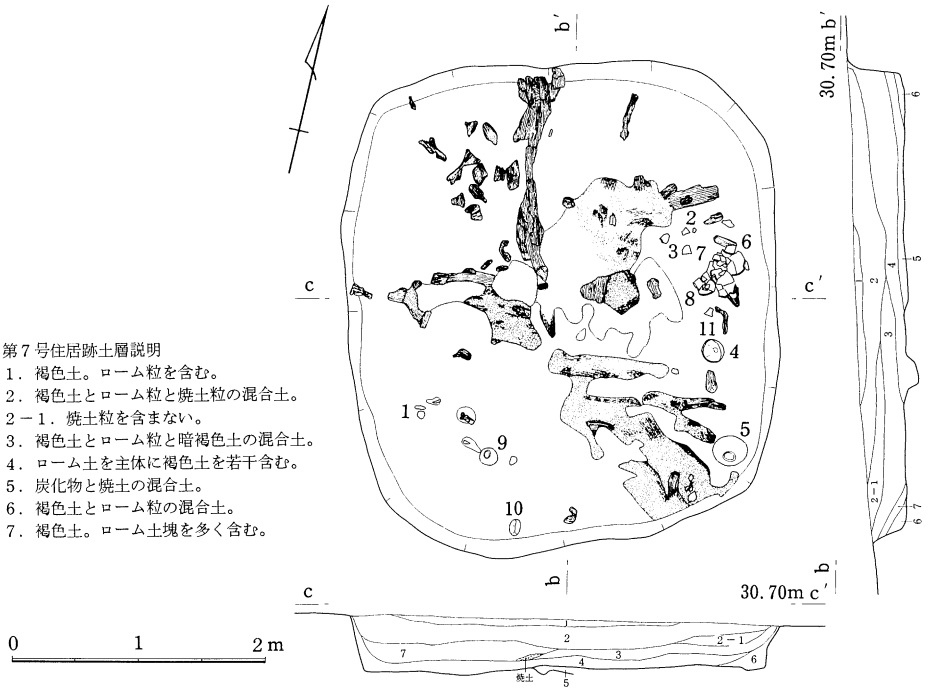


※ なお、検出した貝類等については、
別頁(第VI章)で金子浩昌氏が分析されている。

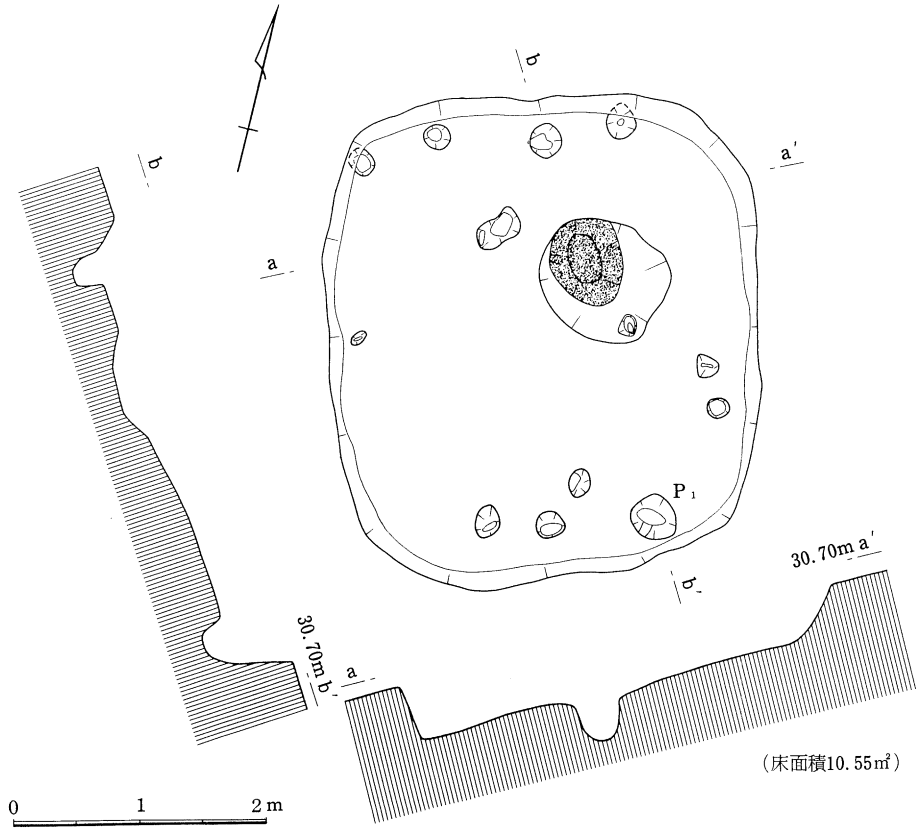
第317図　第６号住居跡出土遺物実測図(２)

(8) 第7号住居跡

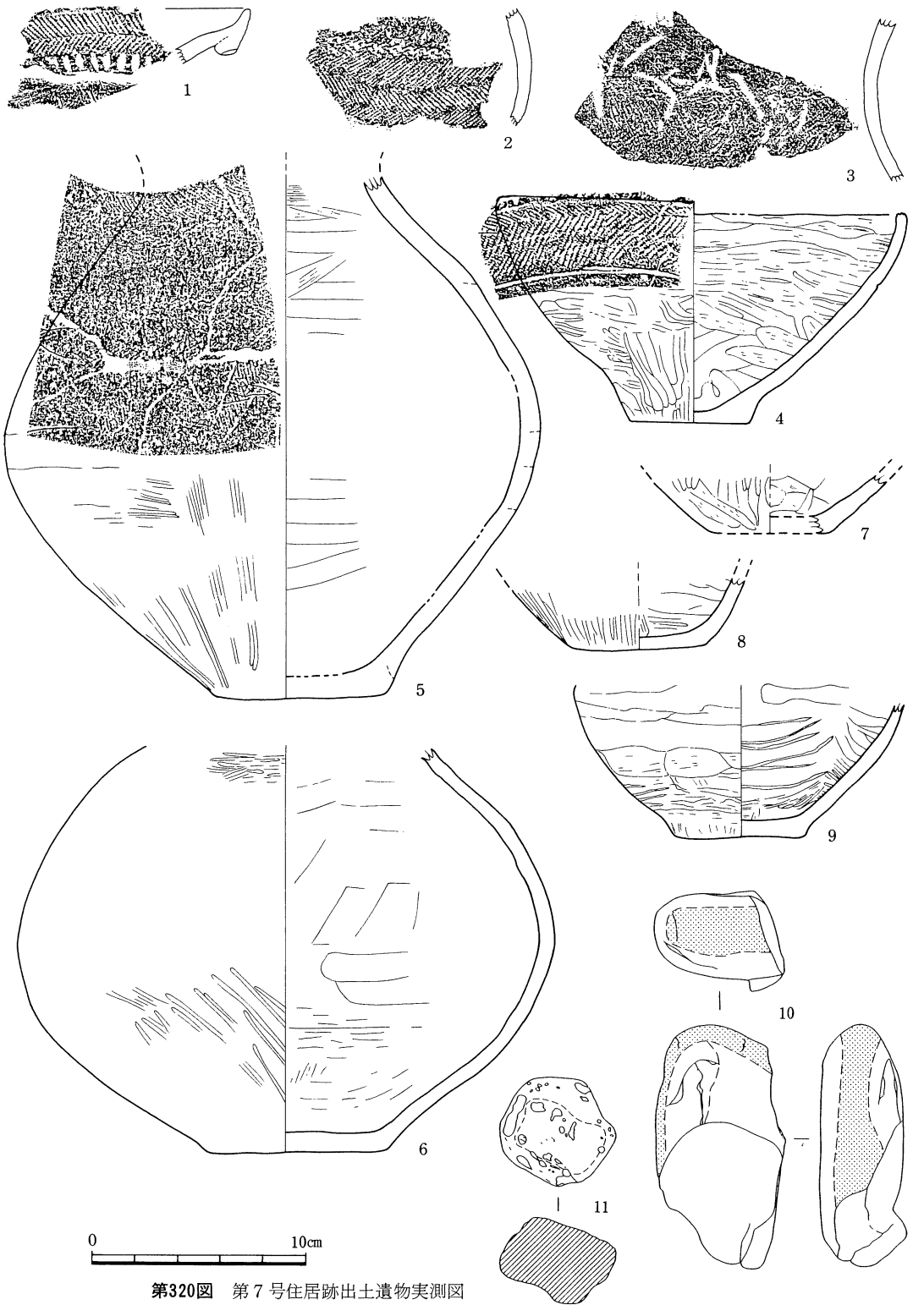
第1次調査地区の北側中央付近に位置する。竪穴の平面形体は、胴張りの隅円方形で、規模は長軸3.75m、短軸3.40m（上端）を測る。主軸方位は、長軸方向を測り、N－17°－Wを示す。床面は、ハードローム層内のレベルに設置され、南東側が、わずかに高いが、比較的平坦である。ピットは、小ピットが炉の周辺と南東側に集中



第318図　第7号住居跡遺物出土状況



第319図　第7号住居跡実測図

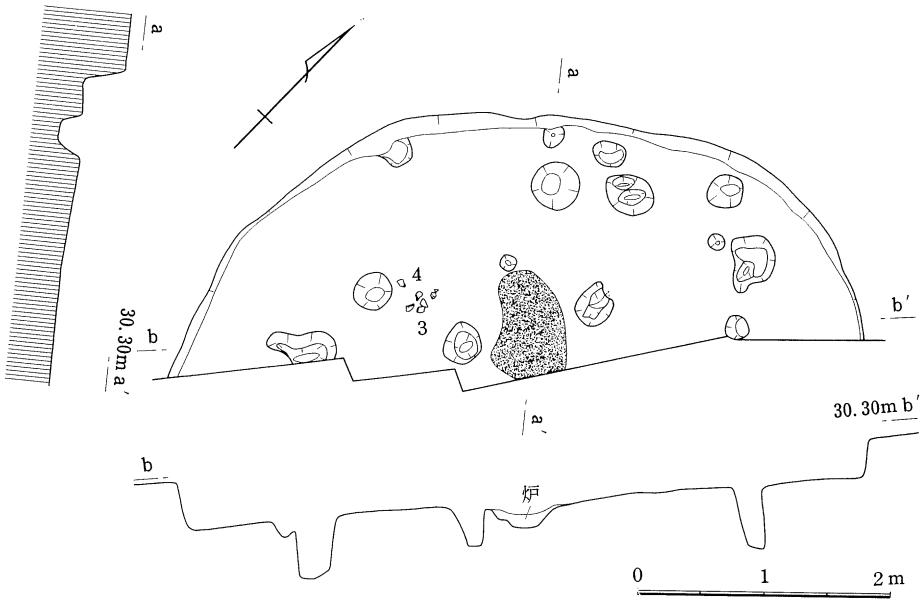


第320図　第７号住居跡出土遺物実測図

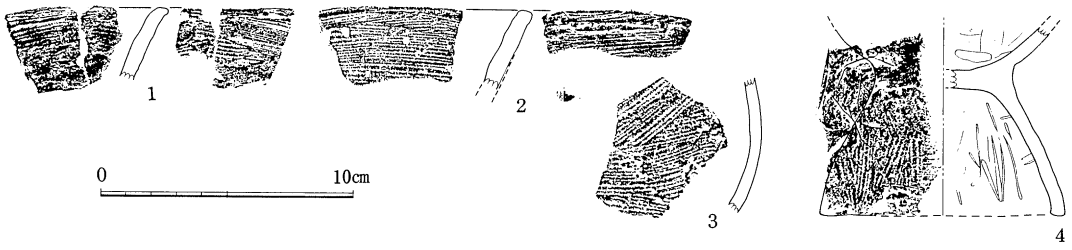
している。P_1は、位置からみて、出入口用施設のピットとも考えられる(深さ22cm)。炉は、北側床面中央に存在し、落ち込み部分は、大きく、焼土部分は、やや北西側に寄っている。竪穴壁の立ち上がりは、東側と西側は急傾斜で、最大残存高は、25cmである。覆土は、褐色土を主体とし、焼土や炭粒を含み、また、下層には、ローム土塊を多く含んでおり、人為的な埋没の可能性がある。また、焼土や炭化物が、壁ぎわより流れ込んだ形で検出されており、火災住居とも考えられる。出土遺物は、東側と南西側床面付近より多く検出している。1は、壺口縁部片で、複合口縁を呈し、複合部には、羽状縄文と端部には、ヘラによる押捺刻目が施されている。2は、壺胴上部片で、三段の羽状縄文とS字状結節文が横位に認められる。3は、壺頸部片とみられ、S字状結節文と羽状縄文の組み合わせである。4は、鉢で、ほぼ完形を呈し、口縁部には、上下に横位の沈線で囲まれた羽状縄文がみられる。他はヘラミガキとヘラナデ。口径19.2cm、底径5.6cm、器高10.4cmである。5は、壺胴部から底部片で、やや摩耗がみられるが、外面には、上位から、斜縄文、S字状結節文、羽状縄文、山形文が施されている。他の外面は、ヘラミガキ、内面は、ヘラナデの後、ユビナデが認められる。底径8.1cm、胴部最大径25.0cmを計る。6も壺とみられ、外面の胴部は、ヘラミガキ、内面は、ヘラナデが認められる。底径8.4cm、胴部最大径25.1cm。7・8・9は、壺底部片と考えられ、各々底径は、7が5.5cm、8が2cm、9が6.0cmを計る。7は、外面は、ヘラナデ及びヘラケズリ、内面は、ヘラナデ。8は、外面が縦方向のヘラミガキ、内面は、横方向のヘラナデとミガキ。9は、外面がヘラナデとヘラミガキ、内面は、ヘラミガキとユビナデである。10は、磨石で、使用痕が認められる。11は、軽石であり、東側床面より出土している。

(9) 第8号住居跡

第1次調査地区の北東側に位置し、当調査では、最も北側に存在している。部分的な調査であり、南東側の大部分は、未調査地区に入っている。全体を調査していないため、不明な点が多いが、竪穴の平面形体は、長円形と推定される。径は、調査した内、最大で5.50cm(上端)を測る。床面は、ほぼ平坦で、ピットが大小含め、多数不規則に存在する。主柱穴など各ピットの機能は、不明である。炉は、北西側床面の中央に位置し、床面から19cmの深さがある。竪穴壁は、最大で33cmの残存高をもつ。竪穴の覆土は、自然堆積と考えられる。出土遺物は、炉の西側床面と覆土中より少量検出されている。1・2は、壺口縁部片とみられ、口縁部は、くの字状を呈すると考えられる。両面とも刷毛目調整がなされ、色調は、黒褐色である。3も、壺胴部片とみられ、外面に、刷毛目調整が残る。内面は、ヘラナデの後、ユビナデである。4は、台付甕の台部片とみられる。台部は短かく、やや丸みをもっている。外面には、刷毛目調整痕が残り、脚部内面は、ヘラナデ痕跡、甕底部付近もヘラナデが認められる。



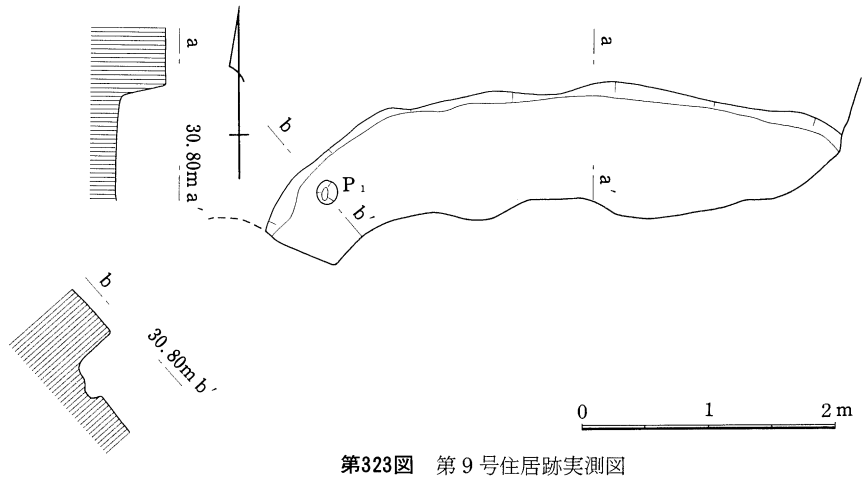
第321図　第８号住居跡実測図



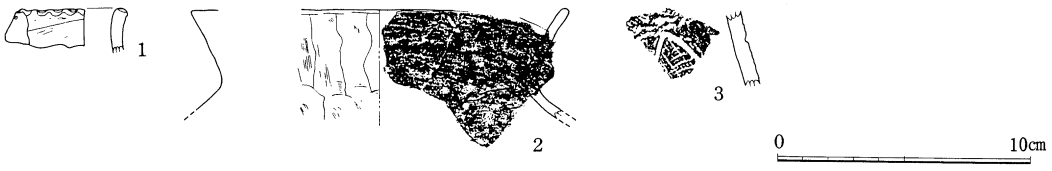
第322図　第８号住居跡出土遺物実測図

（10）第９号住居跡

第１次調査地区の北東側に位置する。プラン北側の一部分のみの調査である。南側は、未調査であるが、攪乱されている可能性が大きい。部分的な調査のため、不明な点が多いが、平面形体は長円形とも考えられる。規模は、検出した最大径で、上端4.60ｍを測る。床面は、平坦で小ピットが北西側に１本存在する（深さ８cm）。竪穴壁の立ち上がりは、しっかりしており、残存高は最大で40cmを測る。焼土、炭化物、炉などは、検出されていない。竪穴の覆土は、自然堆積とみられる。出土遺物は、少量で破片のみである。いずれも覆土内から検出した。１は、甕口縁部片と考えられ、口唇部は押圧がされ、波状口縁を呈している。両面ともユビナデが認められる。２は壺口縁部片で、口径14.9cmを計り、外面はヘラケズリ。内面はヘラミガキである。３は、壺胴上部片と考えられ、斜縄文、Ｓ字状結節文、山形文が認められる。



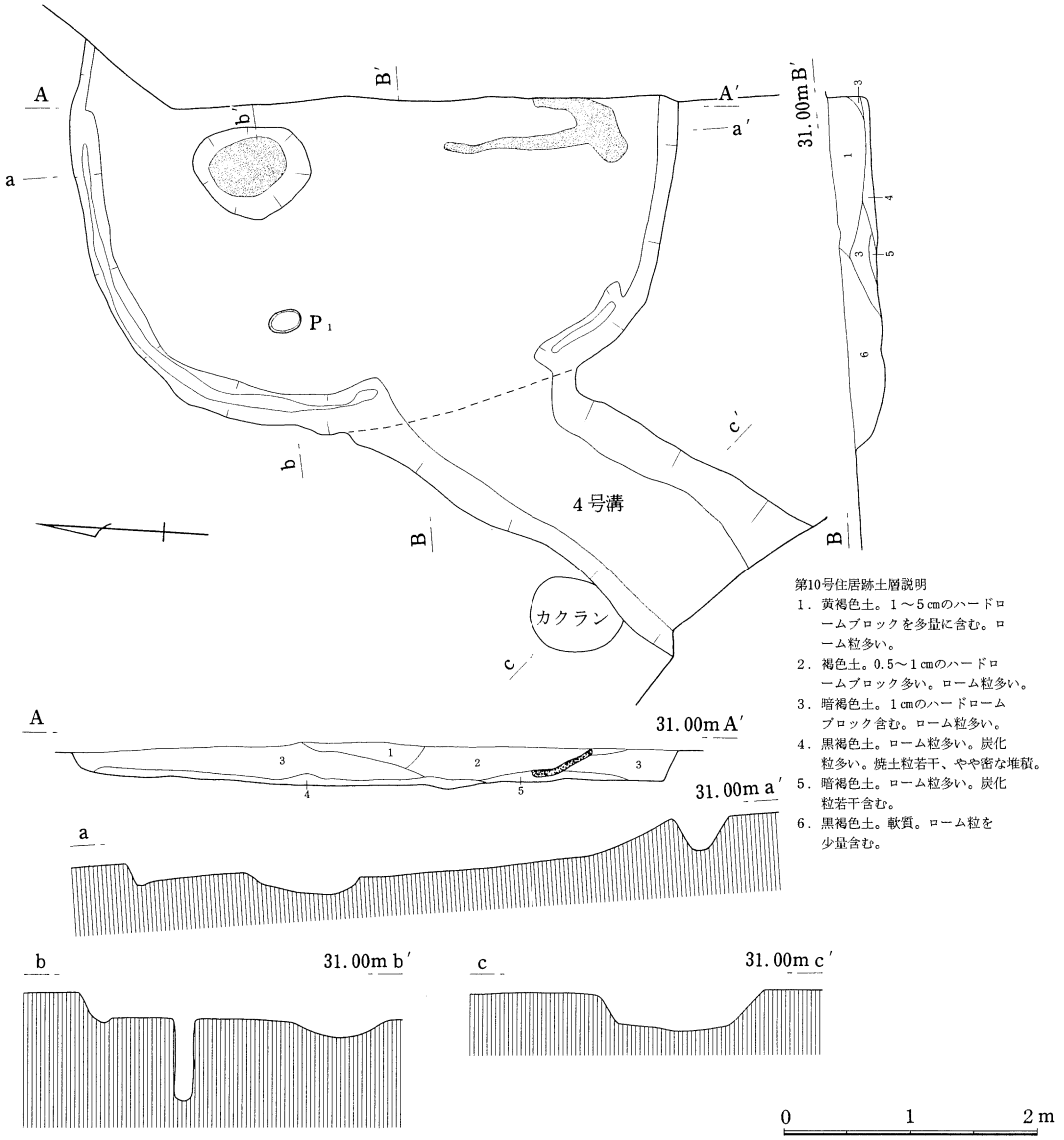
第323図　第９号住居跡実測図



第324図　第９号住居跡出土遺物実測図

(11) 第10号住居跡

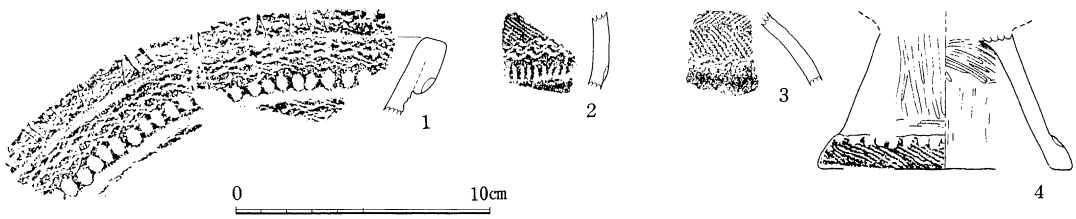
第２次調査地区(南側)の南東部に位置する。南西側～北東側(覆土上部)にかけて、第４号溝に切られている。西北西約3.5mに第11号住居跡が存在する。プランの西側約半分の調査があり、東側は未調査地区に入る。竪穴の平面形体は、長円形(いわゆる小判型)と推定される。規模は、南北方向で4.82m(上端)を測る。南北方向の主軸方位は、N－７°－Wを示す。床面はほぼ平坦で、西側の周囲には、壁溝が存在する。ピットは１本のみ北西側より検出している。深さは、66cmと深いが機能は不明。炉は、北側床面中央付近に所在する。竪穴壁の残存高は、最大で20cmと比較的浅い。竪穴の覆土は、ローム土塊を多く含んでおり、人為的な埋めもどしの可能性がある。また、焼土が南側から流れ込んだ形に検出されている。出土遺物は、すべて覆土内で小片のみである。１は、壺口縁部片で、複合口縁を呈し、口唇部から複合部、また胴上位にかけて、横位のＳ字状結節文を配している。また、複合端部には押捺がなされる。２も、壺口縁部片とみられ、複合口縁で、複合部に斜縄文、Ｓ字状結節文、複合端部に、縄紐の押捺とみられる刻目がなされる。３は、壺胴上部片とみられ、上部より羽状縄文、Ｓ字状結節文、山形文が認められる。４は、壺口縁部片で、短い複合口縁である。口径20.1cm、複合部には斜縄文、複合端部にヘラ状工具による押捺、その他両面にはヘラミガキがみられる。



第10号住居跡土層説明

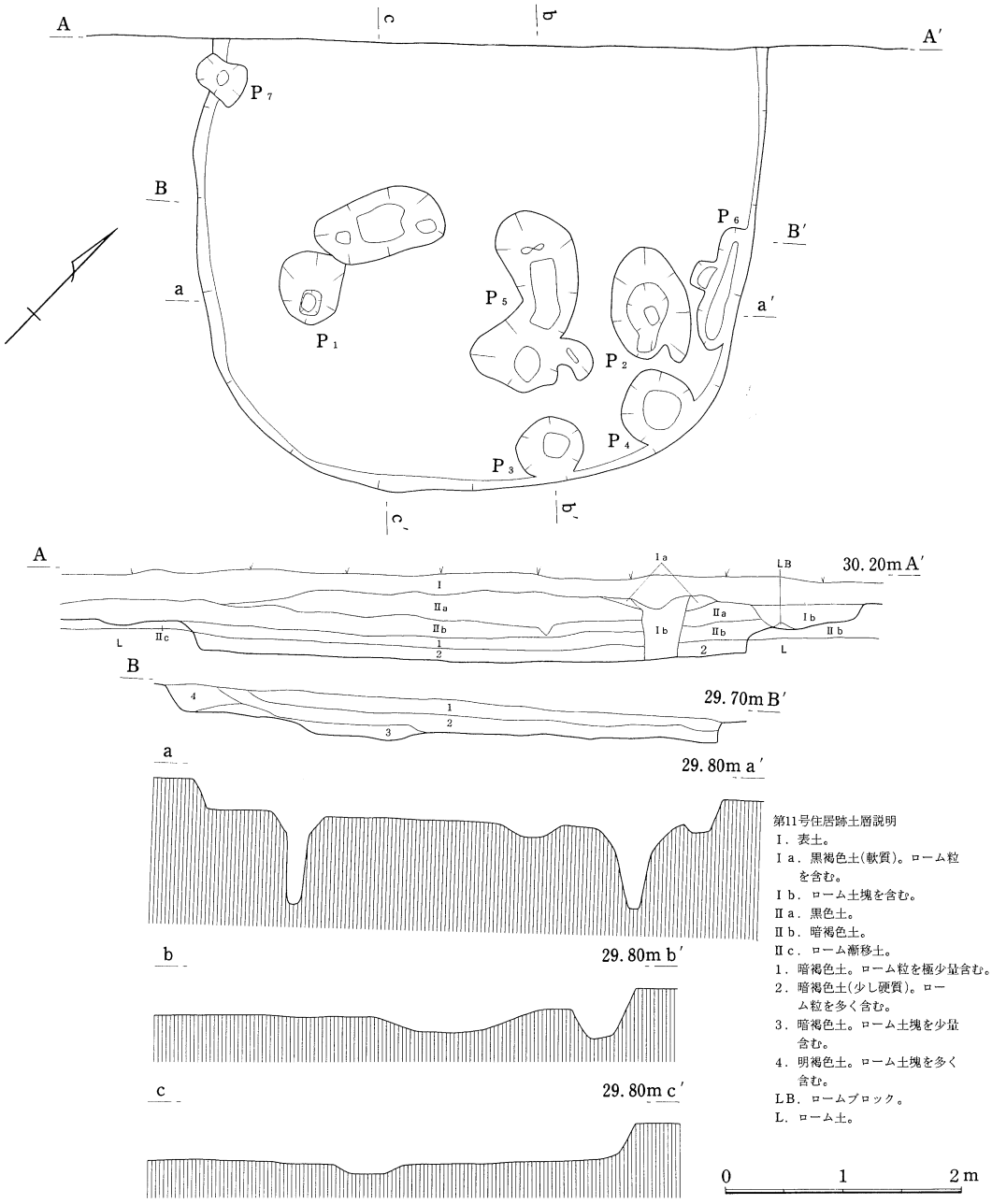
1．黄褐色土。1～5㎝のハードロームブロックを多量に含む。ローム粒多い。
2．褐色土。0.5～1㎝のハードロームブロック多い。ローム粒多い。
3．暗褐色土。1㎝のハードロームブロック含む。ローム粒多い。
4．黒褐色土。ローム粒多い。炭化粒多い。焼土粒若干、やや密な堆積。
5．暗褐色土。ローム粒多い。炭化粒若干含む。
6．黒褐色土。軟質。ローム粒を少量含む。

第325図　第10号住居跡実測図



第326図　第10号住居跡出土遺物実測図

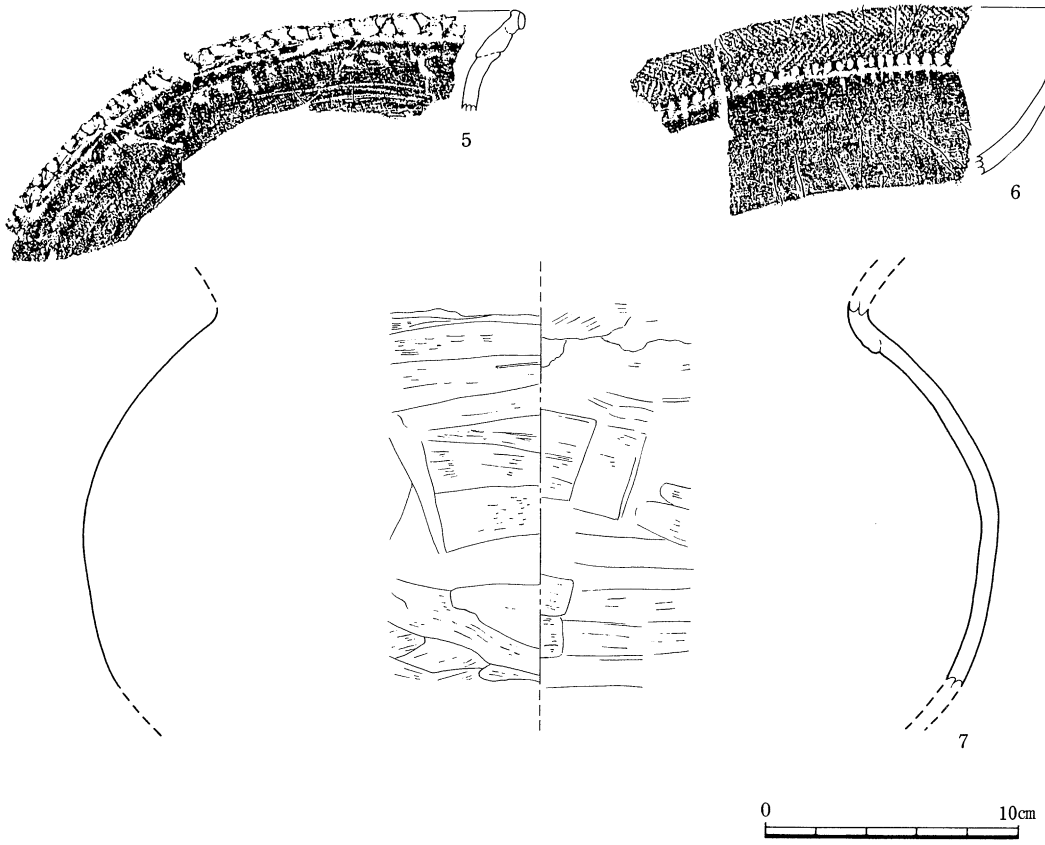
（12）第11号住居跡



第327図　第11号住居跡実測図

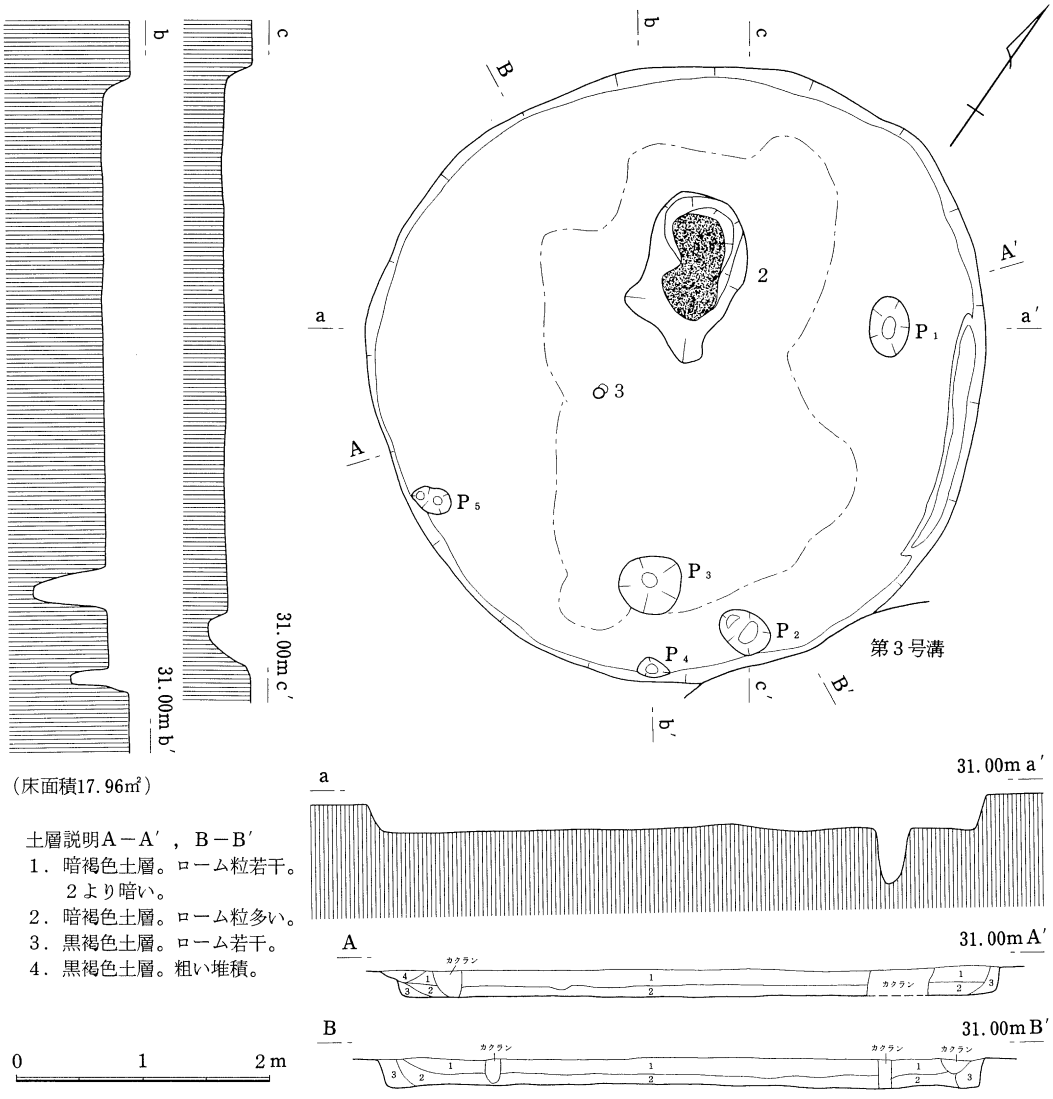


第328図　第11号住居跡出土遺物実測図(１)



第329図　第11号住居跡出土遺物実測図(２)

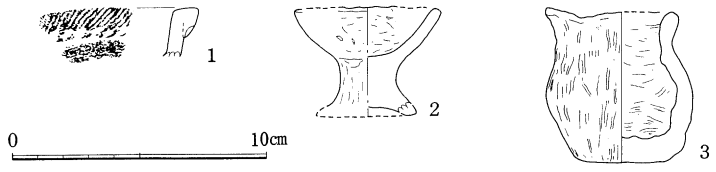
第２次調査地区の北西側に位置する。第12号住居跡が東南東約９ｍ、第14号住居跡が南約7.5ｍに各々所在する。当住居跡は、北西側が未調査区域に入り、全体の２/３程度を調査した。竪穴の平面形体は、胴張りの隅円方形と推定される。規模は長軸が不明で、短軸は、上端4.80ｍを測る。主軸方位は、短軸の直角方向(長軸)を測り、Ｎ－42°－Ｗを示す。床面は、ハードローム層上面のレベルに設置され、ほぼ平坦である。ピットが床面内及び竪穴壁を切って７本存在する。P_1とP_2は主柱穴の可能性がある。炉は検出されていないが、未調査区域内に存在していると考えられる。竪穴壁の残存高は、最大で30cmである。覆土は、ローム粒を含む暗褐色土が主体で、自然堆積とみられる。焼土、炭などは検出されない。出土遺物は、すべて覆土内で、１は、壺口縁部片で複合口縁を呈し、複合部に羽状縄文、端部に刻目。２も壺口縁部片で複合口縁、口唇部に斜縄文、口唇外面端部に押捺がなされる。３も、壺口縁部片で少し長い複合口縁をもち、複合部は三段の斜縄文、複合端部に押捺がなされる。４は、甕胴上部片で、粘土紐接合痕を残しその端部に押捺、上部にはヘラミガキがみられる。５も、甕口縁部片と考えられ、上部に粘土紐接合痕をわずかに２段残し、口唇外面には、ユビとみられる押圧に



（床面積17.96㎡）

土層説明A－A′，B－B′
1．暗褐色土層。ローム粒若干。
　2より暗い。
2．暗褐色土層。ローム粒多い。
3．黒褐色土層。ローム若干。
4．黒褐色土層。粗い堆積。

第330図　第12号住居跡実測図



第331図　第12号住居跡出土遺物実測図

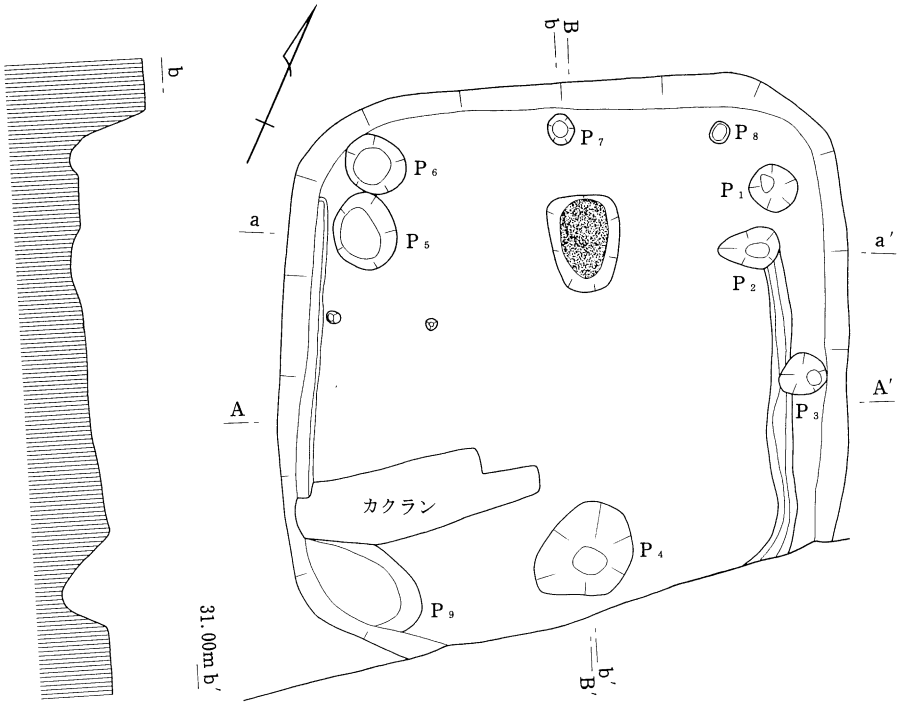
より、波状口縁を呈する。6は、鉢の体上部から口縁部片とみられる。口縁部は、直立ぎみで、複合口縁である。複合部に羽状縄文、複合端部には、押捺がなされている。体部外面や内面は、横方向のヘラミガキである。7は、大型の甕胴部片と考えられ、胴部は大きな球状を呈する。胴部最大径は、36.3cmを計る。内外面ともヘラナデがみられる。

(13) 第12号住居跡

第2次調査地区の南側中央部分に位置し、第10号住居跡より西北西に約3m離れている。東側の一部を第3号溝が切っている。竪穴の平面形体は、不整円形で、規模は、上端で直径4.90m、短径4.85mを測る。主軸方向は、炉の長軸とすると、N－27°－Wを示す。床面は、平坦でソフトローム下部のレベルに設置されている。また、踏み固められた面が炉の周囲からP_3付近まで認められる。壁溝は、東側に少し検出されている。ピットは5本確認されている。P_3は、位置的には出入口施設用ピットとも考えられる。炉は、北西側床面中央部に存在し、焼土は窪んだ中央に所在している。竪穴壁の残存高は、最大で22cmを測る。竪穴の覆土は、ローム粒を含む暗褐色土が主体で、自然堆積と考えられる。焼土粒や炭化物は含まれていない。出土遺物は、2・3が炉の周囲、他は覆土内より検出されている。1は、壺口縁部片で、短い複合口縁を呈し、複合部は斜縄文、複合端部はヘラによる刻目がなされる。2・3は、手づくね土器で、2は高坏、3は小壺(坩)である。両者とも、内外面にヘラミガキが部分的になされる。焼成は良好。大きさは、2が口径5.8cm、脚裾部径(4.0cm)、器高4.4cm、3は口径5.3cm、体部最大径5.8cm、底径3.4cm、器高6.0cmを計る。

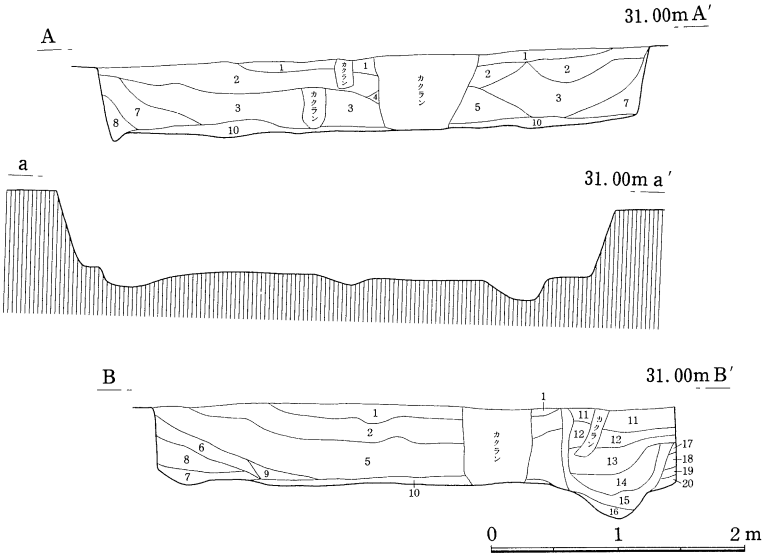
(14) 第13号住居跡

第2次調査地区の中央やや東寄りに位置し、プランの南東側の一部が未調査域に入る。第14号住居跡より北東へ約10m、第11号住居跡より北西へ約9mに、各々離れて所在する。竪穴の平面形体は、胴張りの隅円方形とみられる。規模は、上端で長軸4.70m(推定)、短軸4.50mを測る。主軸方位は、長軸方向を測り、N－24°－Wを示す。床面は、ほぼ平坦でハードローム層内のレベルに設置されている。また、南西側には、イモ穴の攪乱土坑が入り、切られている。さらに、竪穴覆土内中央部にも、床面には達していないが、イモ穴が存在している。壁溝は、西側と東側に認められ、東側では、床面中央付近に存在し、竪穴を拡張した可能性を伺わせる。ピットは、北側床面を中心に9本存在する。南側のP_4は土層観察より、後世の土坑状の落ち込みによる底部付近とみられるが、出土遺物は無く、機能等は不明である。炉は、北側床面中央付近に存在する。不整長円形を呈し、やや小型である。竪穴壁は、最大で60cmの残存高を測る。覆土はローム土塊の混入が多く、大部分が人為的な埋めもどしと考えられる。土層中の5に焼土ブロックが混入している。出土遺物は小片のみで、すべて覆土中より検出された。1は、甕口縁部片で、粘土紐接合痕が3段まで認められ、口唇部はユビによる押圧によって、波状口

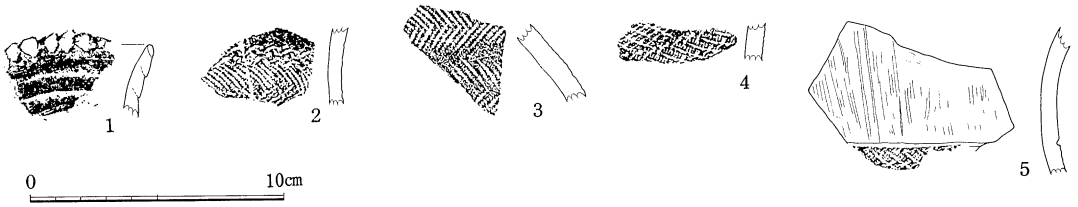


土層説明A－A′，B－B′

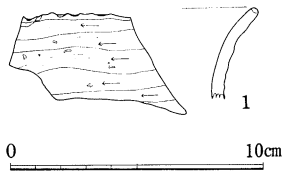
1. 黒褐色土層。ローム粒混入。1㎝のハードロームブロック若干含む。
2. 暗褐色土層。ローム粒多い。
3. 明褐色土層。1㎝～12㎝のハードロームブロック非常に多い。ローム粒非常に多い。
4. 黒色土層。ローム粒若干含む。
5. 明褐色土層。ローム粒非常に多い。1～3㎝のロームブロック若干含む。焼土ブロック混入。
6. 黒褐色土層。ローム粒多い。1㎝のロームブロック若干含む。
7. 暗褐色土層。ローム粒混入。粗い堆積。
8. 黄褐色土層。5～10㎝のハードロームブロック多い。ローム粒多い。
9. 黒色土層。ローム粒多い。粗い堆積。
10. 黒褐色土層。非常に硬い。ローム粒混入。
11. 暗褐色土層。ローム粒多い。
12. 黄褐色土層。1～3㎝のハードロームブロック多い。ローム粒多い。
13. 明褐色土層。1～3㎝のハードロームブロック混入。ローム粒多い。
14. 黄褐色土層。約5㎝のハードロームブロック粒からなる。
15. 暗褐色土層。ローム粒非常に多い。0.5～1㎝のハードロームブロック若干含む。
16. 明褐色土層。ローム粒、0.5㎝のハードロームブロックよりなる。
17. 褐色土層。ローム粒多い。粗い堆積。
18. 黄褐色土層。ロームブロック（5㎝）よりなる。
19. 黒色土層。ローム粒混入。硬い堆積。
20. 黄褐色土層。1㎝ロームブロック主体。



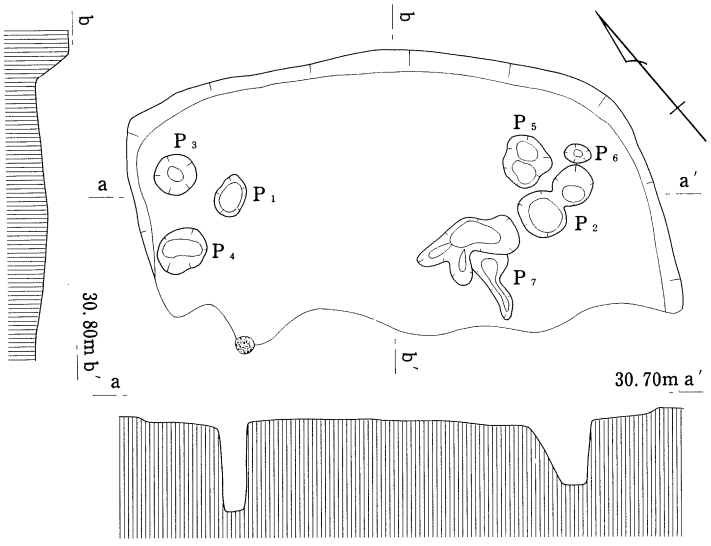
第332図　第13号住居跡実測図



第333図　第13号住居跡出土遺物実測図



第334図　第14号住居跡
出土遺物実測図



第335図　第14号住居跡実測図

縁を形作っている。2は、壺頸部片と考えられる。外面に、横位のS字状結節文と羽状縄文を配している。3は、壺胴上部片で、横位の羽状縄文を2段2組ずつ配している。4は、壺頸部付近の破片と推定される。外面に、網目状撚糸文を施す。5も、壺口頸部片で、上部は縦及び横方向のヘラミガキ、下部は横位の沈線と網目状圧痕がみられる。

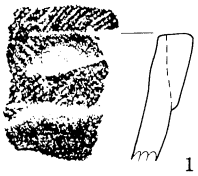
(15) 第14号住居跡

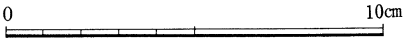
第2次調査地区の南側、中央付近に位置する。第2号溝により、プランの南側2／3近くが切られている。第11号住居跡より南側に約8m離れている。竪穴の形体は、胴張りの隅円方形と考えられる。規模は、東西で4.05m(上端)を測る。主軸方位は、西側壁の方向を測り、N－28°－Eを示す。床面は、ほぼ平坦でソフトローム層内のレベルに設置されている。ピットは、北西側と北東側に集中し、7本が検出されている。P_1とP_2は主柱穴の可能性があるが、他の機能は不明である。また、焼土がわずかに西側中央床面の第2号溝に切られた境付近に認められる。これが炉とも考えられる。竪穴壁の立ち上がりは、浅く、最大で26cmの残存高である。主な出土遺物は、1点で、覆土中からの検出である。1は、甕口縁部片で、口唇部は押圧がなされ、波状口縁を呈する。外面は、横方向のヘラケズリがなされている。

3．土坑

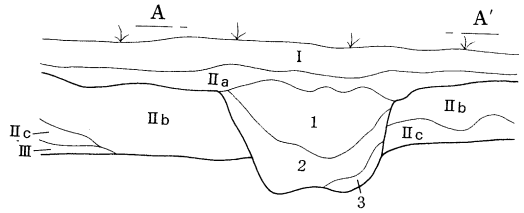
(1) 第1号土坑

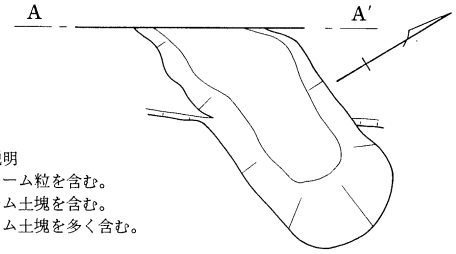
第1号住居跡の北側プランを切って存在し、西側は未調査地区内に入る。平面形体は、不整の長円形と考えられるが、北側隅がやや曲がって内傾している。規模は、長径は不明、短径は





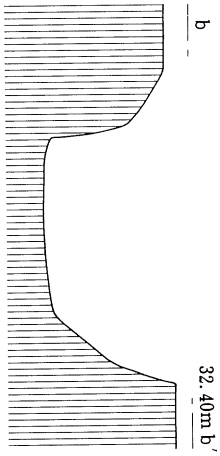
第336図　第１号土坑出土遺物実測図

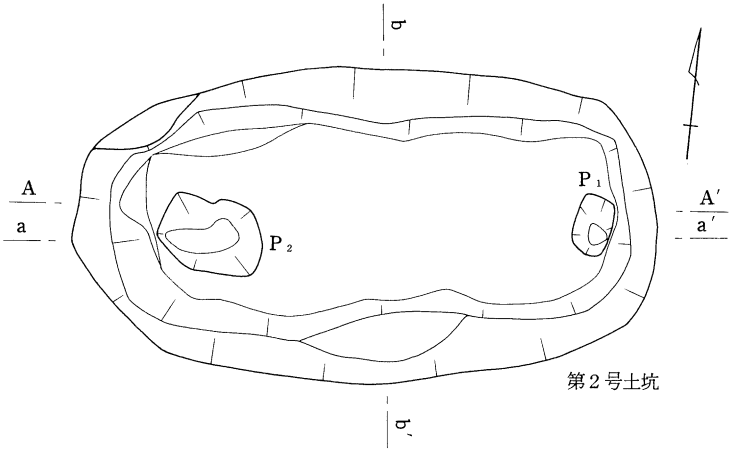




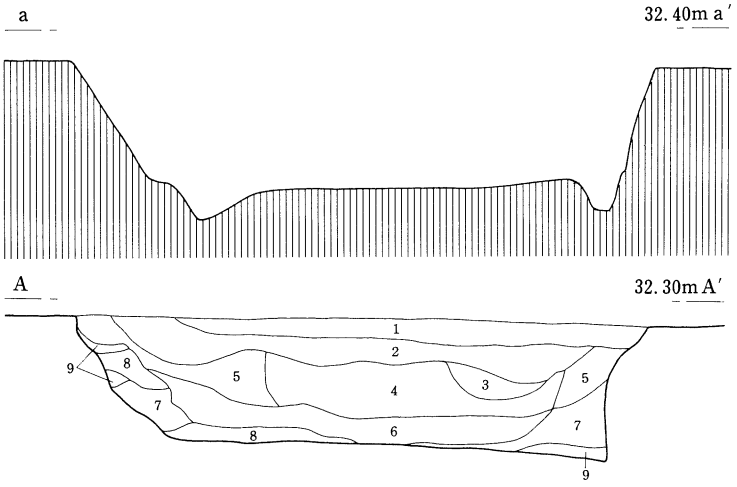
第１号土坑土層説明
1．暗褐色土。ローム粒を含む。
2．褐色土。ローム土塊を含む。
3．褐色土。ローム土塊を多く含む。

第１号土坑

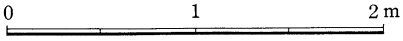




第２号土坑



第２号土坑土層説明
1．褐色土。暗褐色土塊を少量含む。
2．暗褐色土。褐色土塊を多く含む。
　ローム粒を少量含む。
3．暗褐色土。ローム土塊を多く含む。
　炭化物を含む。
4．明褐色土。
　褐色土塊とローム粒を多く含む。
5．暗褐色土。
　ローム土塊をブロック状に含む。
6．明褐色土。
　ローム土塊と褐色土のブロック。
7．暗褐色土がローム土塊中に含まれる。
8．褐色土がローム土塊中に含まれる。
9．ローム土塊のブロック。



第337図　第１・２号土坑実測図

65cm(上端)、45cm(下端)を測る。主軸方位は、短径の直角方向を測り、N－93°－Wを示す。深さが55cmで、土層観察より、標準Ⅱb層より掘り込まれている。底部は中央付近が、わずかに高い。覆土はローム粒やローム土塊を含む褐色や暗褐色土で、自然堆積とみられる。主な出土遺物は、覆土中より1点検出されている。1は、壺口縁部片と考えられ、複合口縁で口唇部に斜縄文、複合部には羽状縄文が施されている。当土坑は、その機能は不明であるが、土層観察やわずかな出土遺物より、弥生後期の所産と考えられる。

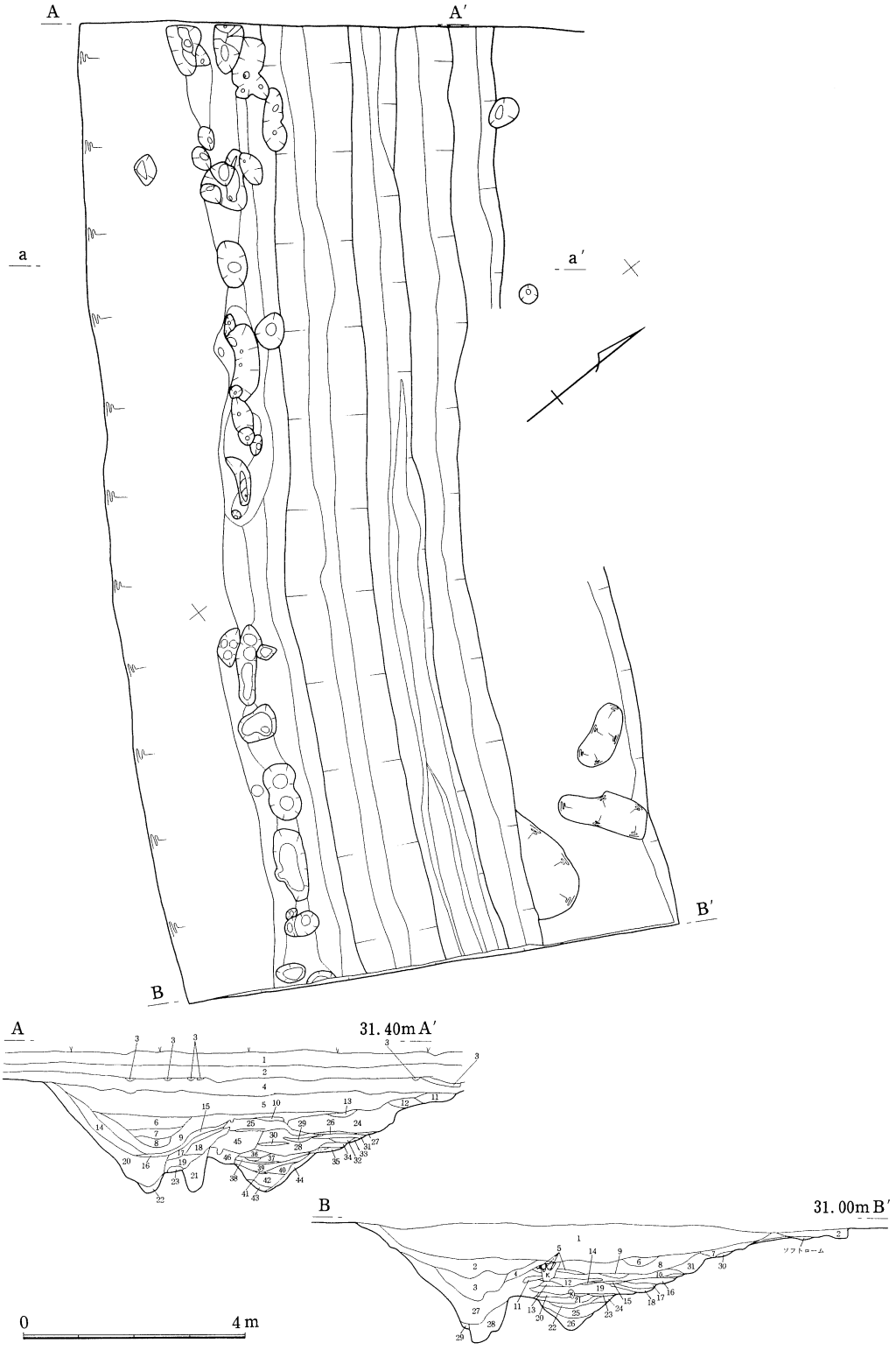
(2) 第2号土坑

第1次調査地区のほぼ中央付近に所在し、第6号住居跡より北東へ約4m離れて位置している。平面形体は不整の長円形で、規模は、上端長径3.10m、短径1.67m、下端長径2.50m、短径1.03m、深さ65cmを測る。主軸方位は、長径方向を測り、E－5°－Nを示す。立ち上がりは、北西側と南側でわずかに上部が2段を呈しているが、概して急傾斜である。底部には西側と東側の両端にピットが存在する。東側のP_1は、上端長径29cm、短径19cm、下端長径11cm、短径9cm、深さ17cm、P_2は上端長径56cm、短径39cm、下端長径39cm、短径13cm、深さ19cmを計る。土坑内の覆土は、上層は自然堆積と考えられるが、下層はローム土塊を多く含み、人為的な埋めもどしの可能性がある。焼土などは含まれていない。当土坑は、形体や覆土の状況から、縄文期の陥穴と考えられる。

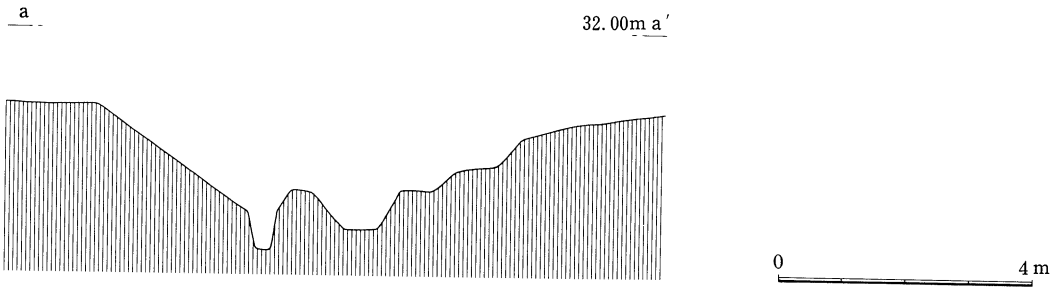
4．溝状遺構

(1) 第1号溝状遺構

第2次調査地区の南側に位置し、第14号住居跡を切っている。また、第3号溝と重複するが、新旧関係は不明である。形体は、数条の溝の重複である。最も幅が広く浅い部分が、幅7.50m～9.00m、深さ4～8cm。底部は2～3本の深い溝が存在し、最深部は2.15mを測る。主軸方向はN－55°－W前後である。また、南側の立ち上がり上面には、小ピットが不規則に並んでいる。中央の3本の深い溝は、土層観察より同時期に存在せず、北東側から南西側に向かうほど新しいと考えられる。覆土は、暗褐色土が主体で、一部に黒褐色土、暗黄褐色土が有り、ローム粒やロームブロックを含んでいる。また、各溝の底部は、比較的硬質であり、各覆土中の層レベルでも、部分的に硬質な面がみられる。掘り込み面は、4層の下であり、2層と4層の間には富士宝永火山の火山灰がレンズ状に堆積している。出土遺物は、覆土一括であるが、土師器片、須恵器片、布目瓦片、陶器片、鉄滓、砥石などである。これらから、本遺構の時期については、江戸中期以前の3時期以上の使用が考えられる。また、覆土の状況や底部の観察などから、道路として使用されていた可能性がある。出土遺物の1～3は、ロクロ土師器坏の口縁部片で、口径は11.6～11.8cmである。4・5は、須恵器長頸壺片とみられ、4は口縁部片、5は体上部と頸部との境目付近であろう。7～11・12・13は、須恵器甕胴部片と考えられ、7・8



第338図　第１号溝状遺構実測図



第339図　第１号溝状遺構断面図

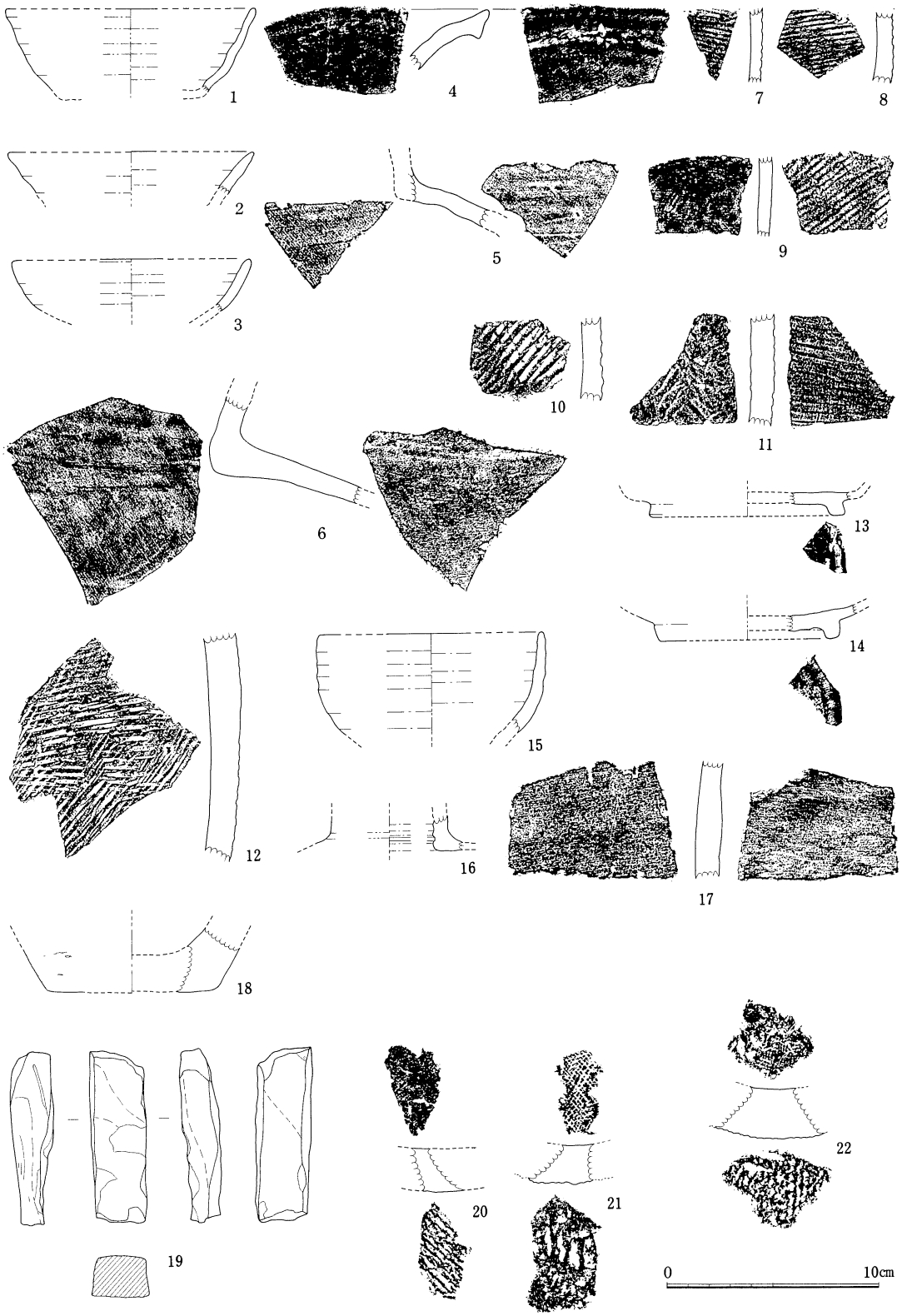
第２号溝状遺構土層セクション説明(Ａ－Ａ′)

1．表土。
2．暗褐色土。全体に砂質、白色粘土ブロックを含む。やや褐色。ややしまりが悪い。
3．宝永の火山灰。
4．暗褐色土。全体にやや砂質。しまりやや悪い。
5．暗褐色土。全体にやや砂質。ローム粒、白色粘土粒をわずかながら一様に含む。
6．暗褐色土。概して挟物少ない。
7．暗褐色土。ややしまり有り。ローム粒をわずかに含む。
8．暗褐色土。ローム微粒を多く含み、硬質。
9．暗褐色土。ローム微粒を一様に含む。ややしまり有り。
10．暗褐色土。非常に硬い。
11．暗褐色土。ローム粒をわずかに含む。
12．暗褐色土。ローム粒とロームブロックをわずかに含む。
13．暗褐色土。ローム土を含む。しまり有り。
14．暗褐色土。黒色が強い。
15．暗褐色土。17に似る。
16．暗褐色土。非常に硬い。やや粘性有り。挟雑物は、概して少ない。
17．暗褐色土。ローム粒をわずかに含む。
18．暗褐色土。ローム粒を多く含む。ややしまりが悪い。やや褐色ぎみ。
19．暗褐色土。ローム粒を一様に含む。
20．暗褐色土。ローム粒をわずかながら一様に含む。
21．暗褐色土。ローム粒とロームブロックを含む。
22．21と似る。
23．ロームブロックに暗褐色土を含む。
24．暗褐色土。全体に挟雑物は少なく、ややしまり有り。
25．ローム土に暗褐色土を含む。しまり有り。
26．暗褐色土。挟雑物は少なく、非常に硬い。
27．暗褐色土にロームを含む。非常に硬い。
28．暗褐色土。ローム粒をわずかに含む。しまり有り。やや粘性有り。
29．ローム土と暗褐色土の混合土。
30．ロームに暗褐色土を含む。
31．暗褐色土。ローム粒をわずかながら一様に含む。
32．暗褐色土。ロームを少し多く含む。
33．ローム土。わずかに暗褐色土を含む。
34．暗褐色土。ロームを一様に含む。32に似る。
35．ローム土と暗褐色土の混合土。上部が非常に硬い。
36．暗褐色土。ロームを少量含む。
37．ローム土と暗褐色土の混合土。しまり有り。
38．暗褐色土とロームの混合土。しまりは非常に良好。
39．暗褐色土。ローム粒を一様に含み、しまりは良い。
40．暗黄褐色土。ローム土を主に含む。
41．黒褐色土。
42．暗黄褐色土。ローム土を主に含み、わずかに黒褐色土が入り、しまり有り。
43．黒褐色土。ローム粒を一様に含む。しまりは良くない。
44．暗褐色土。ロームブロックを多く含む。
45．暗褐色土とローム粒の混合土。ややボロボロしている。
46．暗褐色土。ローム粒を一様に含み、ややしまり有り。

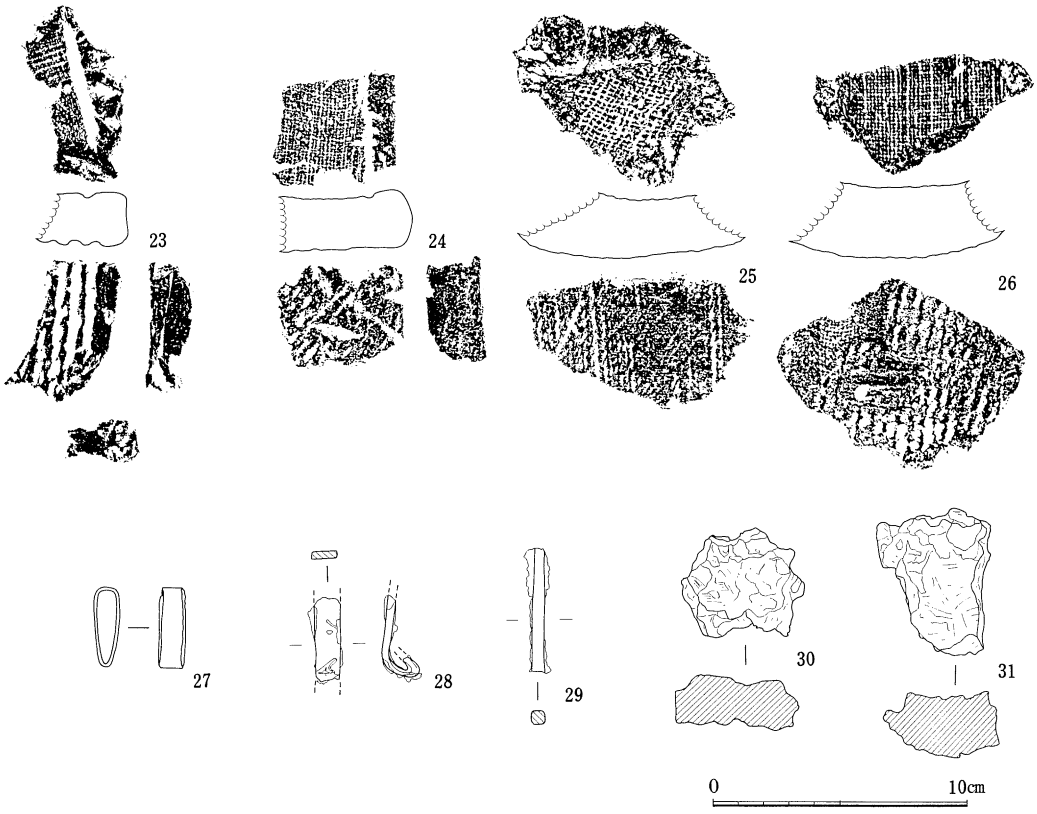
第２号溝状遺構土層セクション説明(Ｂ－Ｂ′)

1．暗褐色土。全体にやや砂質。白色粘土粒をわずかに含む。
2．暗褐色土。砂質は弱く、わずかに白色粘土粒を含む。
3．暗褐色土。概して挟雑物が少ない。
4．暗褐色土。わずかに白色粘土粒を含む。
5．暗褐色土。ロームを含む。しまり有り。
6．暗褐色土。ローム粒をわずかに含む。
7．暗褐色土。ローム粒をわずかながら一様に含む。
8．暗褐色土。しまり有り。挟雑物は少ない。
9．黒褐色土。ローム粒を一様に含む。
10．暗褐色土。挟雑物は少なく、やや硬質。
11．暗褐色土。硬質の暗褐色土のブロックを主に含む。
12．暗褐色土。挟雑物は少ない。しまり有り。黒色が強い。
13．暗褐色土。ロームをわずかに含む。やや黄色である。
14．暗褐色土。ローム粒を一様に含み、しまり有り。
15．黒褐色土。わずかにローム粒を含む。
16．暗褐色土。わずかにローム粒を含む。褐色がやや強い。
17．暗褐色土。わずかにローム粒を含む。
18．ローム粒と暗褐色土の混合土。非常に硬い。
19．暗褐色土。しまり有り。わずかにローム粒、ロームブロックを含む。
20．ローム粒と暗褐色土の混合土。
21．暗褐色土。やや粘性有り。
22．暗褐色土。ローム土を多く含む。
23．ローム粒に黒褐色土を含む。しまり良い。
24．暗褐色土。ローム粒を含む。黒色やや強い。
25．暗黄褐色土。ローム土が主で、暗褐色土をわずかに含む。しまり有り。
26．黒褐色土。ローム粒とロームブロックを一様に含み、しまりは悪い。
27．暗褐色土。ローム粒をわずかに含む。
28．暗褐色土。ロームブロックを多く含む。
29．ローム土が主で、暗褐色土を含む。
30．ソフトロームに暗褐色土を含む。
31．暗褐色土。わずかにロームと焼土粒を含む。

・10・12は、外面に平行タタキ目、９・11は外面が平行タタキ目、内面が青海波文のアテ目痕が残る。６は、須恵器甕の頸部付近の破片である。13・14は、須恵器坏底部片と考えられ、断面方形の高台を付す。底径は、13が9.3cm、14が8.6cmと推定される。15～18は、陶器片で、15は素焼きの埦の口縁部片、推定口径10.6cm、16は瓶の頸部片、頸部径5.5cm、17は甕胴部片、18は甕底部片で、茶褐色の釉がかかる。底径7.8cm。19は、砥石片、20～26は布目瓦片である。すべて女瓦とみられ、凹面に布目痕、凸面に縄目痕が認められる。21・23・24・26は、凸面が荒い縄目である。また、23・24・25は、凹面に布の合わせ目痕が認められる。27～31は、不明鉄片(27～29)と鉄滓片である。



第340図　第１号溝状遺構出土遺物実測図（１）



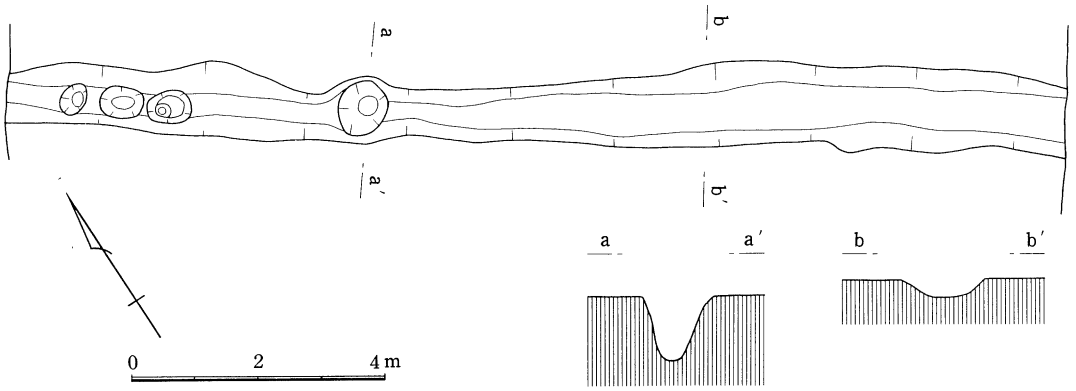
第341図　第１号溝状遺構出土遺物実測図（２）

（2）第２号溝状遺構

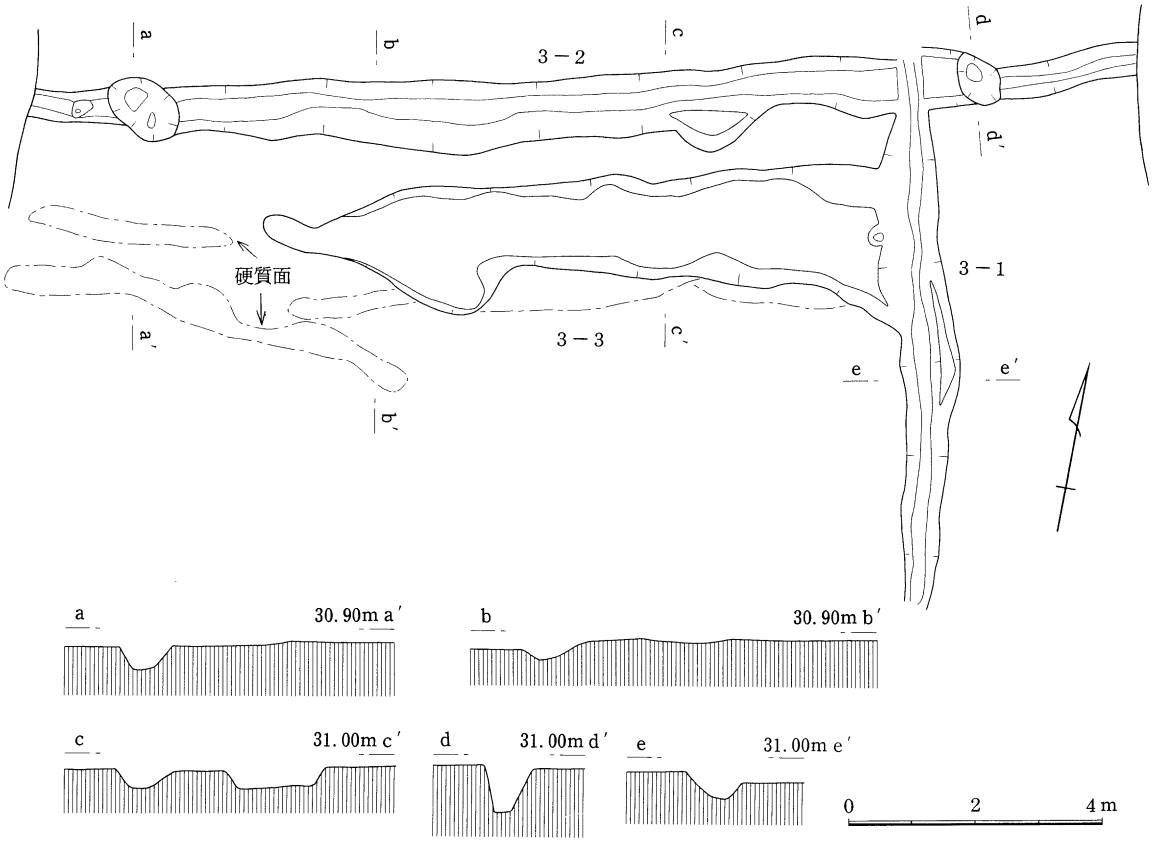
第２次調査地区の北側に位置する細い溝で、南東～北西方向（主軸方位Ｗ－35°　－Ｎ）に走る。底部にピットも存在する。断面逆台形。幅は、最大1.35ｍ、深さは28㎝。

（3）第３号溝状遺構

第１号溝の南側に隣接する。東西方向に走る２本の溝（主軸方向Ｅ－13°　－Ｎ前後、南側の１本は、西側で途切れる）と、南北に走り、第１号溝と重複して、不明となる１本（溝主軸方向Ｎ－12°　－Ｗ）、及び硬質面とで構成されている。南北に走る溝は、東西に走る溝とは別個の溝と考えられる。東西に走る２本の溝のうち、北側の溝は細く、幅23～69㎝（上端）、部分的にピットが存在する。南側の溝は幅がやや広く、上端幅最大で130㎝を測り、西側の溝の途切れた部分には、硬質面が線状に認められる。出土遺物は無し。当遺構は、東西に走る南側の部分は道路と考えられる。



第342図　第２号溝状遺構実測図



第343図　第３号溝状遺構実測図

第VI章　東千草山遺跡の住居内貝塚から検出された動物遺体

早稲田大学考古学研究室　金子　浩昌

東千草山遺跡で発掘された第6号住居内には、この住居の廃棄後に投棄された貝殻によって貝塚が形成されていた。この貝塚は径2.4m×1.1m、厚さ30cmに達するもので、良好な保存状態であった(第315図)。この貝塚の時期は、弥生文化期(久ヶ原式期)に所属し、この地域ではもちろん東京湾をめぐる地域をみても類例は少なく、この貝塚の形成について大きな関心がもたれたのであった。以下にその調査分析の結果を述べたい。なお、陸産貝種について千葉県中央博物館の黒住耐二氏の御教示いただいた。御礼を申上げる次第である。

動物遺体の概要

〔動物遺体の種名表〕

軟体動物門　Phylum MOLLUSCA
- 腹足綱　Order GASTROPODA
  - 前さい亜綱　Suborder PROSOBRANCHIA
    - 原始腹足目　Class ARCHAEOGASTROPODA
      - ユキノカサ科　Family Acmaidae
        - ツボミガイ　*Patelloidae(Chiazacmea) lampanicola*
      - ニシキウズ科　Family Trochidae
        - イボキサゴ　*Umbonium(Suchium) moniliferum*
    - 中腹足目　Class MESOGASTROPODA
      - カワザンショウガイ科　Familly Assimineidae
        - カワザンショウガイ　*Assiminea lutea japonica*
      - タニシ科　Familly Viviparidae
        - マルタニシ　*Cipangopaludina japonica*
      - カワニナ科　Familly Pleuroceridae
        - カワニナ　*Semisulcospira beusoni*
      - ウミニナ科　Familly Potamididae
        - ウミニナ　*Batillaria multiformis*
      - タマガイ科　Familly Naticidae
        - ツメタガイ　*Neverita(Clossaulax) didlyma*

新腹足目　Class NEOGASTROPODA

アクキガイ科　Familly Muricidae

アカニシ　*Rapana thomasiana*

タモトガイ科　Familly Pyrenidae

ムギガイ　*Mitrella bicincta*

オリレイヨウバイ科　Familly Nassariidae

アラムシロガイ　*Hinia festiva*

後さい亜綱　Suborder OPISTHOBRANCHIA

頭楯目　Class CEPHALASPIDEA

トウガタガイ科　Familly Pyramidellidae

ヒメゴウナ　*Actaeopyramis eximia*

有はい亜綱　Suborder PULMONATA

柄眼目　Class STYLOMMATOPHORA

中輸尿管亜目　Subclass MESURETHRA

キセルガイ科　Familly Clausiliidae

チュウゼンジギル　*Mundiphaedusa sericina*

屈曲輸尿管亜目　Subclass Sigmurethera

ヒメギセル　*Vitriphaedusa micropeas*

ナミギセル　*Stereophaedusa japonica*

オカチョウジガイ科　Familly Subulinidae

ホソオカチョウジガイ　*Allopeas pyrgula*

おの足綱　Order PELECYPODA

いとえら(糸鰓)亜綱　Suborder FILIBRANCHIA

真多歯目　Class FUTAXODONTA

イタボガキ科　Familly Ostreidae

マガキ　*Crassostrea gigas*

ほんこう(弁鰓)亜綱　Suborder FULAMELLIBRANCHIA

異歯目　Class HETERODONTA

マルスダレガイ科　Familly Veneridae

アサリ　*Tapes(Amygdala) pyilippinarum*

カガミガイ　*Dosinorbis(Phaosoma) japonica*

ハマグリ　*Meretrix lusoria*

バカガイ科　Familly Mactridae

バカガイ　*Mactra chinensis*

シオフキガイ　*Mactra veneriformis*

マテガイ科　Familly Solenidae

マテガイ　*Soleu strictus*

節足動物門　Phylum ARTHROPODA

甲殻綱　Class Crustacea

曼脚亜綱　Subclass Cirripedia

完胸目　Order Thoracica

フジツボ科　Familly Blanidae

フジツボ類　Balanus sp.

脊椎動物門　Phylum VERTEBRATA

硬骨魚綱　Class Osteichthyes

ニシン目　Order Clupeiformes

ニシン科　Familly Clupeiformes

マイワシ　*Sardinops melanostictus*

スズキ目　Order Periciformes

タイ科　Familly sparidae

属・種不明　Ge.et sp.indet.

哺乳綱　Class Mammalia

偶蹄目　Order Artiodactyla

科・属不明　Fam.et Ge.indet.

軟体動物

貝塚を形成する貝種は、貝層下・貝層・貝層上部と分けて埋存率を調査したが、イボキサゴが主体を占めていた(第124表・第344図)。腹足綱ではこの他にアラムシロ・ウミニナなどが目立っていたが、おそらくこれらの小型の貝はイボキサゴを採る際に一緒にはいったものと思われる。またツメタガイも比較的多い。二枚貝ではシオフキの目立ったことが注目された。殻長45～55㎜のものが多く、貝塚産のシオフキとしてはやや大型である。次位がハマグリであったが、その量はシオフキに比べて半分以下の量であった。ハマグリの殻の大部分は殻長40.0㎜であるから、小型の殻であるが、50.0㎜の中型の殻あるいはそれ以上になる殻もあり、比較的大

型になる殻を意識的に集めようともしていたようである(第345図)。

脊椎動物

脊椎動物の遺骸は非常に少なかった(第125表)。

魚　類

マイワシ

腹椎：1　(貝層下)

火を受けて白く石灰化した標本である。椎体長2.11、同横径2.49㎜

タイ類

臼歯状の歯を検出している。火を受けて黒く炭化する。径2.9×2.45㎜の大きさである。

スズキ目

腹椎：1

火を受けて白く石灰化し、また完全ではない。椎体径2.29、椎体長2.58㎜であるから小さい椎体である。スズキに似ている部分がある。

哺乳綱

現長20㎜、厚さ4.0㎜程の三角形の骨片。この骨も火を受けて灰白色を呈する。シカあるいはイノシシ位の大きさの獣の骨片である。

ま と め

貝　類

イボキサゴを主体とする貝類相は縄文期の特徴をそのまま伝えており、弥生期において手近に採れる貝種とその生育条件に大きな変化がなかったことを示している。ただ、子細にみると若干の相違がみられ、例えばシオフキがハマグリよりも目立っていることは縄文期では一般的でなく、またハマグリの殻長が、縄文期の場合よりも大きい殻の数が増えているらしい点も注意されよう。貝採集の選択性に変化のみられること、この時代の貝塚自体が大変珍しいことを考え併せ、貝に対する依存性が変わって来ていることを認めざるを得ない。

なお比較的珍しい貝種としてヒメゴウナがある。市川市曽谷貝塚の発掘資料から検出しているが、今回は殻高21㎜になる成貝と、7.5㎜の幼貝が採集されている。ヒメゴウナは房総以南の細砂底に棲息する。

陸産微小貝ではホソオカチョウジガイが多く、それにヒメギセルとチュウゼンジギセルが確認されている(第125表)。共に現在では千葉県では生息が確認されていない種類である。ヒメギセルは上述した曽谷貝塚その他で縄文中・後期の検出例が幾つか知られてきたが、まだごく少ない。ヒメギセルは東北～関東、長野・新潟に分布する山地のキセルガイで稀産種である。チュウゼンジギセルも関東の山地帯に分布する。弥生期におけるこうした貝種の平野地帯までの分布することに少なからぬ興味をいだくのである。

脊椎動物

貝類を除いた骨類の出土は上述のように極めて少なかった。こうした状況は、千葉・東京などで幾つか知られている貝塚のすべてに共通するようである。貝塚の規模が小さくなり、骨類の廃棄の場所とずれが生じた結果ではないかということも考えてみたが、やはり疑問がのこる。今は、今回検出された僅かな骨からであるが、マイワシやタイ漁、そしてイノシシ、シカなどの狩猟がおこなわれていたことを実証し得るとのべるに止めておく。しかし、マイワシは東京湾内に侵入、回遊する小型魚の代表魚の一つであり、タイ類特にクロダイは中型魚のなかで最も親しまれていた魚である。この他に今回は実証できなかったが、これらの魚とともにマアジ、スズキ、コチなどが漁獲されていたことは想像に難しくない。一方狩猟も弥生文化期の農耕の浸透はあったものの、イノシシやシカに対する魅力が失われたことは到底考えられない。そして魚骨を含めて、今回検出した骨がすべて火を受けていたことに注目されるのである。一般の縄文期の貝塚中の骨の多くは焼けていない。ところが縄文晩期には、しばしば骨を焼く行為がある。今これについて詳述する余裕がないが、この点にも何か縄文期からのつながりが考えられるのである。今後こうした資料の集積とこれに対する今回のようなていねいな扱いが望まれるのである。

参考文献

1　鎮西清高　1979「向ヶ岡貝塚の貝類遺物」『向ヶ岡貝塚』 東京大学考古学研究編東京大学文学部

この貝塚の貝については筆者も調査する機会があったので、いずれ発表したいと考えている。

2　金子浩昌　1980 『弥生時代の貝塚と動物遺存体』 学生社　東京

市原市の例として祇園原貝塚での縄文期と弥生期(宮ノ台期)の貝類の違いを指摘した。

3　市原市小田部向原遺跡の18号遺構より弥生期の貝ブロックが検出されている。貝組成は東千草山例とよく似る。

貝製品

貝層中よりオオツタノハガイ製の貝輪が1点検出された(第346図)。外径5.7cm、内径3.7cm、半欠品である。表面の放射肋は軽く研磨されるが、多少の起伏を残している。保存状態は良好で一部に貝本来のもつ淡いピンク色を残している。

オオツタノハガイ製の貝輪は縄文時代には現東京湾の東岸域から利根川流域の貝塚でその出土が知られている。オオツタノハガイの産するのは現在では伊豆諸島八丈島、九州の奄美諸島以南とされている。奄美諸島以南ではこの貝を使った貝製品が多い。関東地方もこの貝の製品の比較的多い地方で、それらは伊豆諸島方面から運ばれたのに違いない。東京湾岸域、現利根川沿岸域には縄文時代の貝塚が多いので、貝輪などに加工されたものの分布をよくみてとることが出来る。縄文時代の分布は現東京湾東岸の比較的奥部から利根川中流域である。前期から中・後期にみられる。その後の時代の貝塚が少なくなることもあって、オオツタノハガイ製の貝輪はむしろ関東内陸部に知られる弥生時代の洞窟遺跡で知られて来た。群馬県利根郡月夜野町にある八束脛洞窟で確認されたのはその一例である。海岸地方の出土例としては早く赤星直忠氏が神奈川県三浦市「また」洞窟からこの貝の貝輪を検出している(註)。この遺物の時期については弥生期のものかどうか問題ものこされているようだ。今回の東千草山遺跡の例は東京湾沿岸部でのはじめての出土例で、この貝製品が弥生期にもなお使われていることを示す貴重な資料となった。

本文を草するに当り三浦方面の資料について剱持輝久氏の教示を得た。御礼申し上げたい。

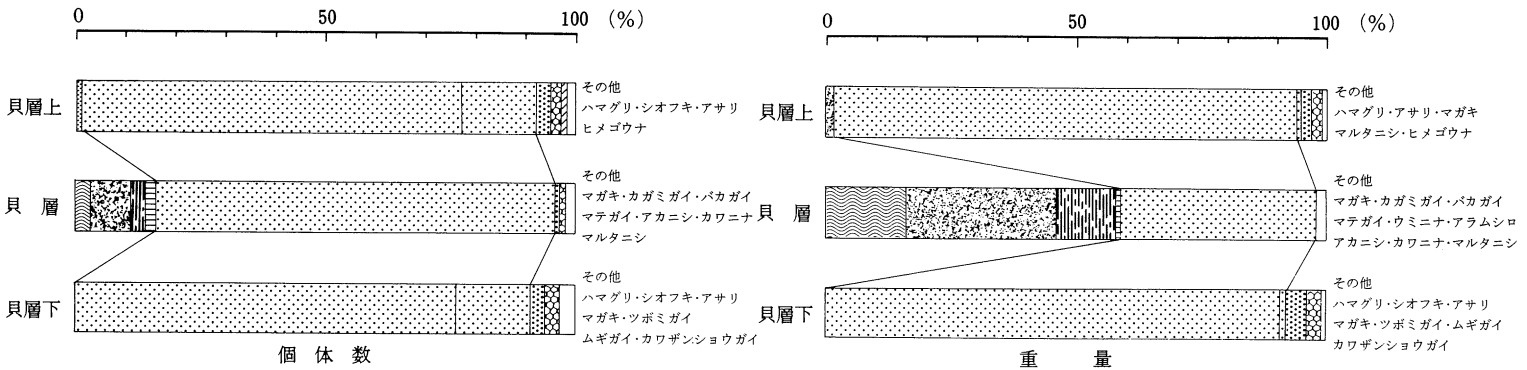
(註)赤星直忠「金石併用時代の漁業」『漁民と対馬』P77　昭和27.11

第124表　東千草山遺跡 貝類組成

層位 / 貝種	貝層上		貝層		貝層下	
二枚貝	個体数(個)	重量(g)	個体数(個)	重量(g)	個体数(個)	重量(g)
ハマグリ	1	0.6	1,218	10,528	3	0.1
シオフキ	7	5.2	3,158	19,767	14	3
アサリ	2	1.9	1,368	8,140	2	0.2
マガキ	14	0.9	12	41	18	0.8
カガミガイ	0	0	2	28	0	0
バカガイ	0	0	1	6	0	0
マテガイ	0	0	7	3	0	0
原足綱						
ツメタガイ	0	0	664	755.7	0	0
イボキサゴ	1,052	322.3	31,959	25,822	1,739	344.4
イボキサゴ(幼貝)	211	3.4	62	1.2	347	5.5
ウミニナ	41	7.7	514	383	84	14.9
アラムシロ	32	6.4	514	161	70	11.6
アカニシ	0	0	13	77.9	0	0
カワザンショウガイ	0	0	0	0	2	0
カワニナ	0	0	36	16	0	0
マルタニシ	0	0	25	16.6	0	0
マルタニシ(幼貝)	18	—	4	—	0	0
ツボミガイ	0	0	0	0	8	0.1
ヒメゴウナ	3	—	0	0	0	0
ムギガイ	0	0	0	0	1	—
計	1,381	348.4	39,557	65,746.4	2,288	380.6

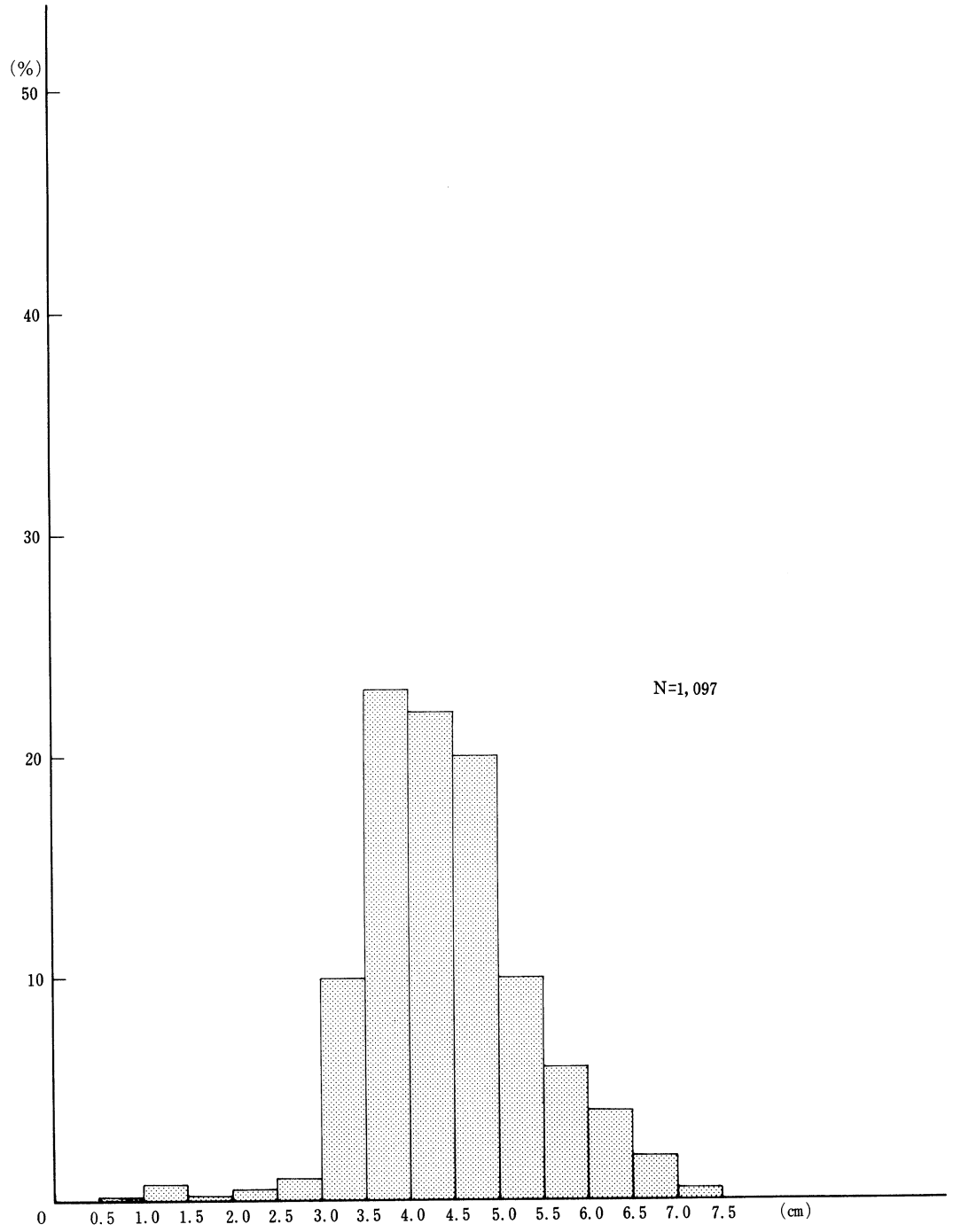
第125表　東千草山遺跡 その他の自然遺物

種類＼層位	貝層上	貝層	貝層下
甲殻網			
フジツボ	4	1	1
陸産貝			
マイマイ	4	0	5
ホソオカチョウジガイ	63	1	26
チュウゼンジギセル	8	0	0
ヒメギセル	5	0	0
貝製品			
オオツタノハ(貝輪)	0	1	0
硬骨魚網・哺乳網			
タイ科歯	2	1	3
マイワシ椎骨	0	0	1
スズキ? 椎骨	1	0	0
獣骨片	0	1	0

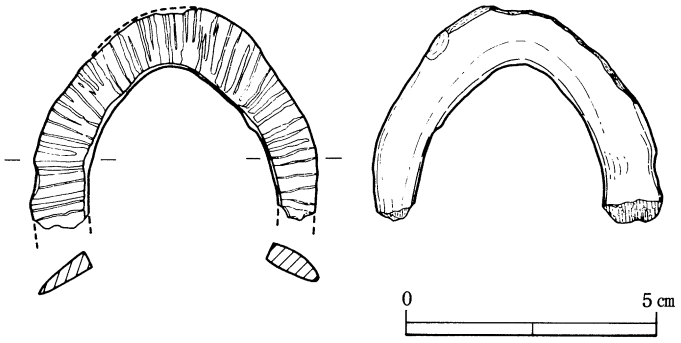


第344図　東千草山遺跡住居跡内貝層の貝類組成

ハマグリ
シオフキ
アサリ
マガキ
ツメタガイ
イボキサゴ
ウミニナ
アラムシロ
マルタニシ
その他



第345図　東千草山遺跡における住居跡内貝層中ハマグリの殻高分布



第346図　東千草山遺跡出土オオツタノハガイ製貝輪

第Ⅶ章　まとめ（東千草山遺跡）

1．竪穴住居跡等

東千草山遺跡より検出された竪穴住居跡は、14軒である。また、第1号遺構は、遺物のみの検出であるが、竪穴住居跡の可能性も否定できない。第1号住居跡は、竪穴の形体が長円形を呈し、出土遺物は少量であるが、複合口縁をもつ壺口縁部片で複合部には、斜縄文や羽状縄文、複合端部には押捺がなされ、また、複合部に円形浮文も存在する。弥生時代後期の久ヶ原式期と考えられる。第2号住居跡は、竪穴が北西側で浅い竪穴と深い竪穴が切り合っている様な状況であるが、2軒の重複かは不明である。また、それとは一致しないが、深い竪穴の覆土が、上層と下層に大きく分けられ、深い竪穴を廃棄した後、窪地状態で使用された可能性がみられる。出土遺物も、深い竪穴内に伴なう遺物は、長頸で、胴上部にS字状結節文や羽状縄文が施される壺。いずれも小片であるが、脚上位に、縄文原体の刻目がなされ、他は全面に赤彩とヘラミガキがなされる高坏。複合口縁で複合部に斜縄文や羽状縄文、刻目がなされる壺片などである。また、覆土上部に伴う遺物は、くの字状の口縁部をもち、外面全体が刷毛目調整される壺で、底部は欠損している。さらに、鉄滓片を1片検出しており、伴うとすれば、特殊遺構の可能性も考えられる。したがって、竪穴住居跡は、久ヶ原式期、竪穴覆土上部の遺構は、古墳時代前期とみられる。第3号住居跡は、胴張りの隅円方形と推定され、遺物は、口縁部が短く外側に開く浅い鉢や、外面全体に刷毛目調整がなされ、口縁部は直立ぎみで、体部は球状を呈する鉢、外面は縦方向のていねいなヘラミガキがなされ、3ヶ所の穿孔のみられる高坏脚部片、口縁部は、くの字状を呈し、胴部は大きな球状を呈し、外面はヘラナデとヘラミガキ、内面は、ヘラミガキやユビナデなどがなされる壺などが検出されており、古墳時代前期である。第4号住居跡は、小型で不整長円形を呈し、出土遺物は多く、頸部が長く、頸部から胴上部にかけて、羽状縄文やS字状結節文、連続菱形文、さらに、連続菱形文などを配する壺や、粘土紐接合痕を数段有する甕、全面に丁寧なヘラミガキがなされる大きく開いた坏部をもつ高坏などから、弥生時代後期前半とみられる。第5号住居跡は、一部分の調査であるが、刷毛目をもつ甕片や細く、くびれた小さな底部をもつ壺底部片などから、古墳時代前期の可能性がある。第6号住居跡は不整長円形を呈し、出土遺物は、斜縄文や羽状縄文、そして端部に押捺がなされる複合口縁の壺片や壺胴部片、沈線と斜縄文で構成され、大きく開く口縁部をもつ鉢や、頸部は細く、縄紐による刻目や山形文などを胴上部に有し、胴部は、球状を呈する壺などから、弥生時代後期後葉の所産と考えられる。第7号住居跡は、胴張りの隅円方形を呈し、第6号と同様な鉢や壺などが検出されていることから、第6号にちかい時期と推定される。第8号住居跡は、部分的な調査であり、出土遺物も小片であるが、両面に刷毛目調整をもつ、くの字状を呈すると推

測される壺片や、刷毛目調整痕をもつ壺?片や台付甕片などから、古墳時代前期とみられる。第9号住居跡も、部分的な調整で、出土遺物も少量である。確定はできないが、ヘラミガキやヘラケズリが丁寧になされる壺や波状口縁をもつ甕片、山形文やS字状結節文などをもつ壺胴上部片などから弥生後期頃の所産と推測される。第10号住居跡は、プランの約半分の調査とみられるが、長円形を呈すると考えられている。出土遺物も少量であるが、複合口縁をもち口唇部、複合部、胴部までS字状結節文を横位に配し、複合端部には、押捺がなされる壺口縁部片や同じく複合口縁で、複合部に斜縄文や端部に押捺される壺片、また羽状縄文やS字状結節文を胴上部に施される壺片などが検出されており、弥生時代後期と考えられる。第11号住居跡は、胴張りの隅円方形と推測され、出土遺物は、複合口縁で、端部に刻目がなされ、斜縄文などを配する壺口縁部や粘土紐接合痕を残し、その端部に押捺される甕、羽状縄文や押捺がなされる複合口縁の鉢などから弥生時代後期と考えられる。第12号住居跡は、不整円形を呈し、出土遺物は、少ない。短い複合口縁の壺片や部分的にヘラミガキされた手づくね土器から、弥生時代後期の所産とみられる。第13号住居跡も、胴張りの隅円方形で、出土遺物は少量で、粘土紐接合痕を数段残し、波状口縁を呈する甕や羽状縄文、S字状結節文、網目状撚糸文を胴部に施す壺片などから、弥生時代後期とみられる。第14号住居跡も、部分的な調査であり、遺物は波状口縁を呈する甕口縁部片で、弥生後期と推定される。第1号遺構は、複合口縁をもつ壺片や胴上部に粘土紐接合痕を残し、その端部に縄文原体を押捺する甕などから、弥生時代後期の所産と考えられる。このうち、5が五領式期の壺胴下位部片とみられるが、後の混入と考えている。以上より、各遺構は、第1・2・4・6・7・9・10・11・12・13・14号の11軒が弥生後期、第3・5・8号の3軒が古墳前期と推測され、2時期に大きく分けられるが、各時期にはさらに時期差が幾分考えられる。また、第一号遺構は弥生後期とみられ、住居跡とすれば1軒追加される。竪穴住居跡のうち、焼土や炭化物が検出された住居は覆土中も含め、第1・4・7・10・13号である。また、第2号の竪穴覆土上部からは、五領式期の土器を伴って、焼土も検出されている。さらに、第6号住居跡内から、貝の堆積が検出されている(別頁 第VI章 金子氏論文参照)。

2．土坑

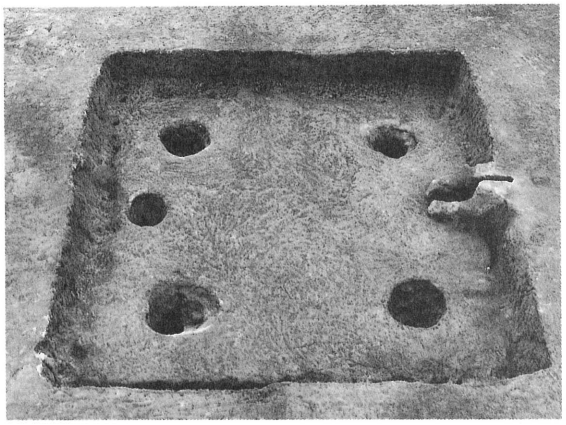
2基の土坑が検出されている。第1号土坑は、全掘されていないが、土層観察や少量の出土遺物から、弥生後期の所産とみられる。第2号土坑は出土遺物が無く、また、やや浅いが、形態から縄文時代の陥穴と推測される。

3．溝状遺構

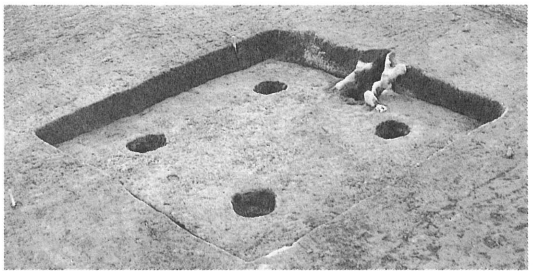
第1～4号までを検出している。いずれも、南側の第2次調査区に所在する。第2と3の北側の溝(3－2)及び第3の南北方向に走る溝(3－1)は、細く浅い。耕作用の地割りか廃水用の溝か。第4号は、部分的ではっきりしないが、道の可能性もある。第3の南側の溝は、硬

質の面がみられることなどから、道路と考えられる。第1号溝は、4条以上の同じ方向の溝が重複している。当溝の所在する位置は、稲荷台遺跡から、当遺跡を通って山田橋表通遺跡に至る古代道路状遺構の通過地点にあたる。しかし、それに該当するような遺構の状況ではなかった。土層観察から、宝永の火山灰より1層以前に掘り込まれた最も新しい面は確認しているが、それ以前は、3条以上の溝によって深く掘り込まれており、仮に古代(奈良～平安期頃)の6m前後の道路幅で両側に側溝をもつ道路状遺構が存在していたとすれば、すでにそれ以降のこれら数条の重複する溝によって切られてしまった可能性が大きい。しかし、出土遺物の中では、平安期の坏や瓦片などが検出されており、これらの遺物が、その道路状遺構に伴っていたことも考えられる(3－2も側溝の一部と考えられないこともない)。また、3条以上の深い溝は土層観察や底部が硬質な点などより、後世の道路として使用され、またこれらが使用時に、さらに、自然の排水作用などにより、結果的に深く削られた形となったと推測される。第4号溝は、広く浅いが、わずかな調査のため詳細は不明である。

さいごに、第5号住居跡内より出土した貝類や動物遺体について、忍澤成視氏の御協力を得て早稲田大学考古学研究室の金子浩昌教授に玉稿をいただいた。記して感謝いたします。



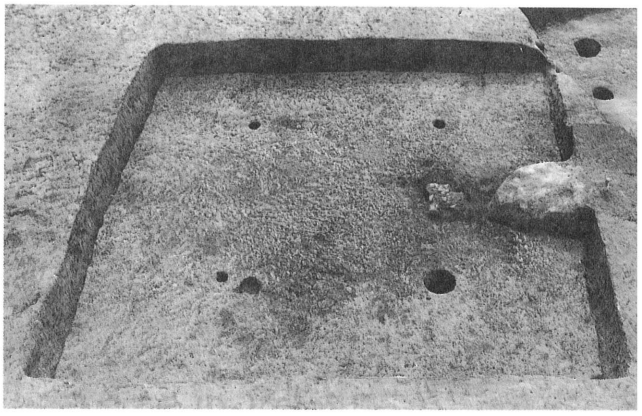
121号住居跡全景



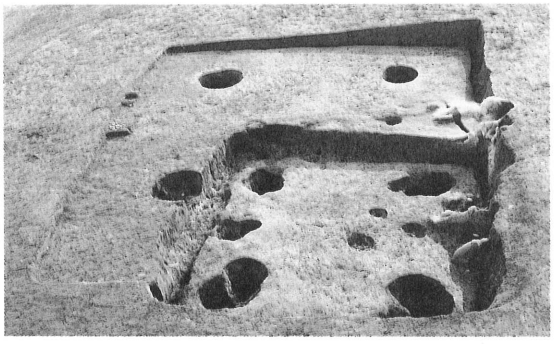
124号住居跡全景



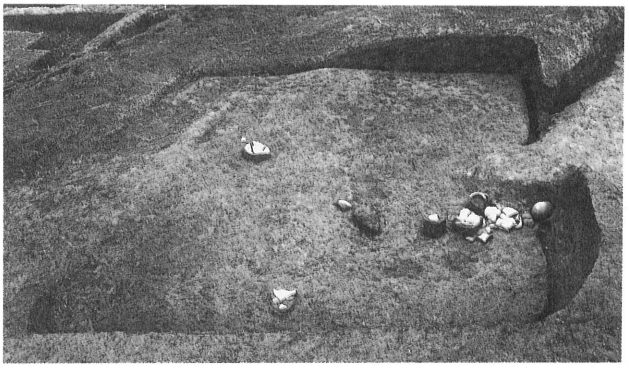
123号住居跡全景　遺物･炭化物の出土状況



123号住居跡全景



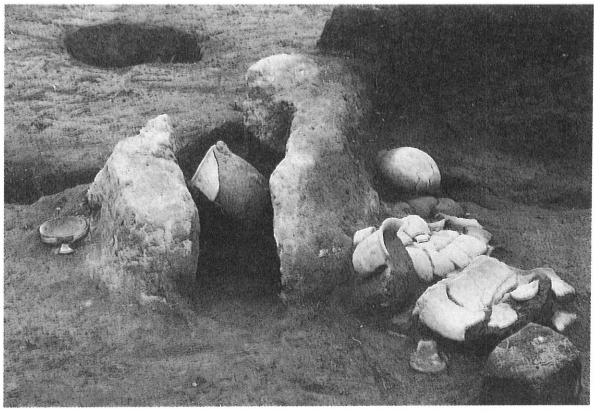
125 a・b 号住居跡全景



127号住居跡全景

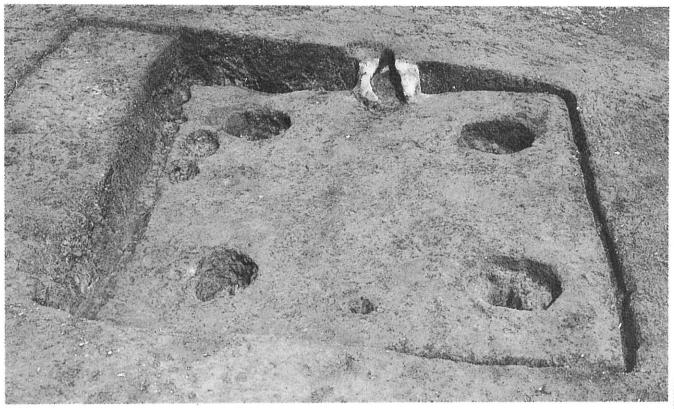


126号住居跡全景



127号住居跡カマド

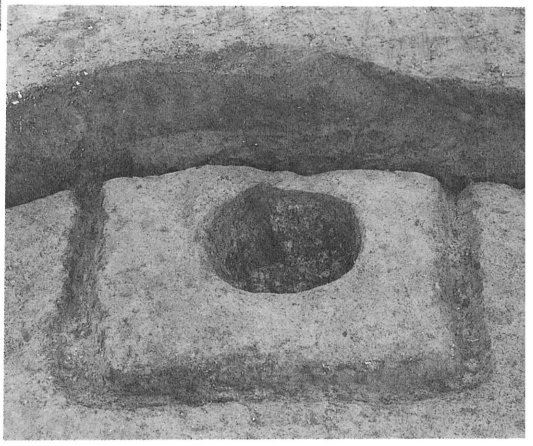
〈図版 5〉



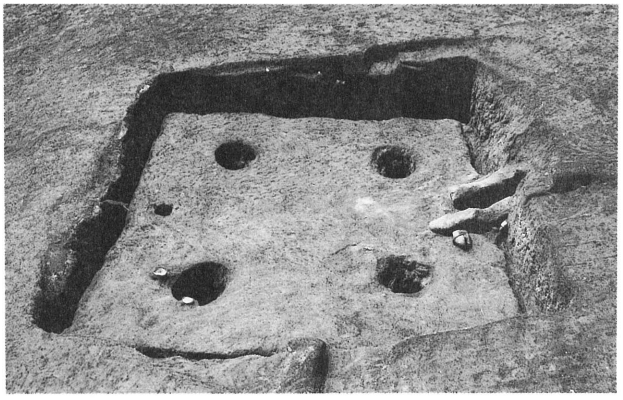
128号住居跡全景



133 a・b 号住居跡全景



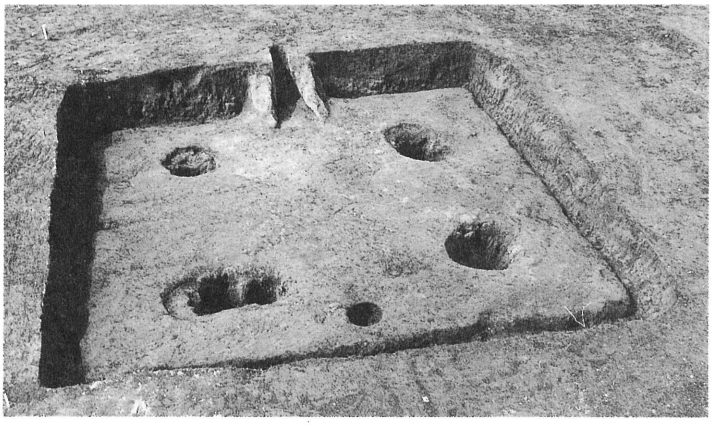
131号住居跡



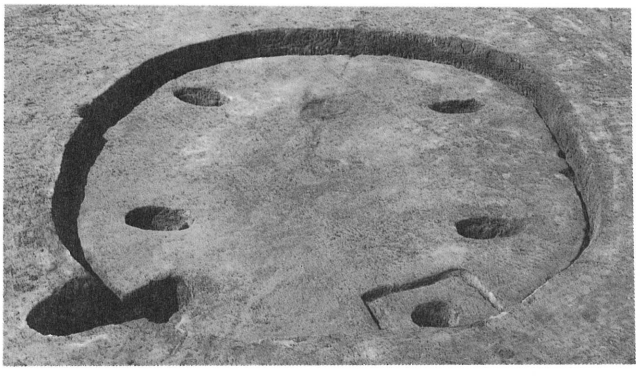
129号住居跡全景

133号住居跡（土坑）

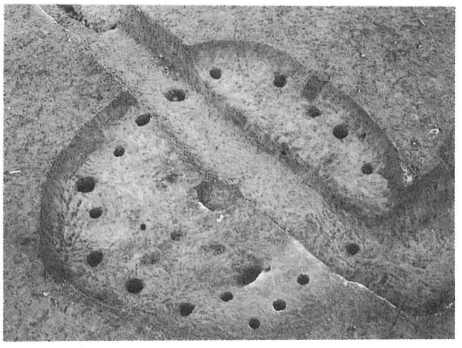




130号住居跡全景

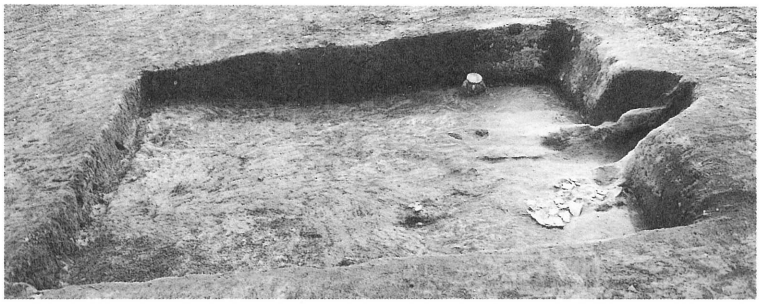


131号住居跡全景

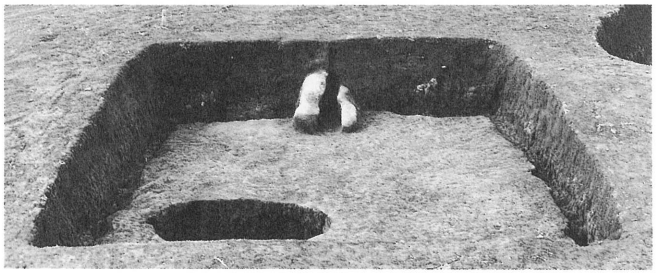


142号住居跡全景

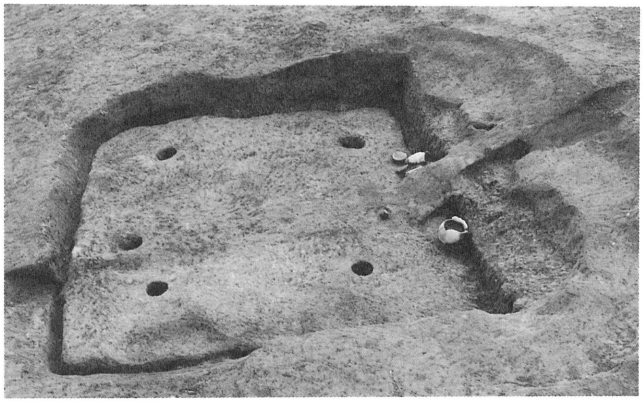
〈図版 6〉



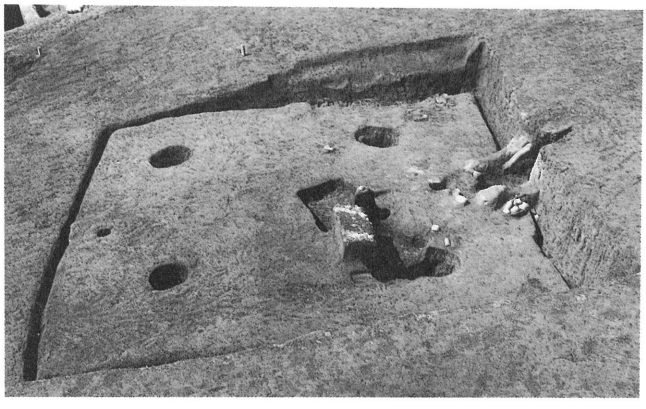
132号住居跡全景



134号住居跡全景



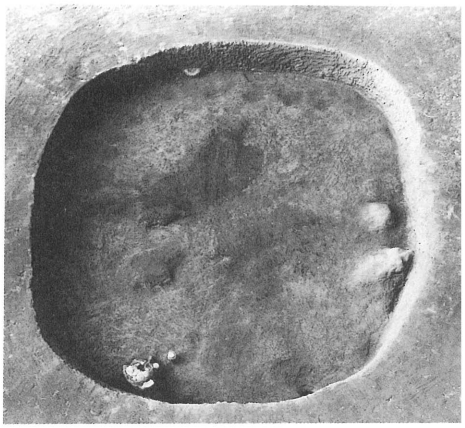
135号住居跡全景



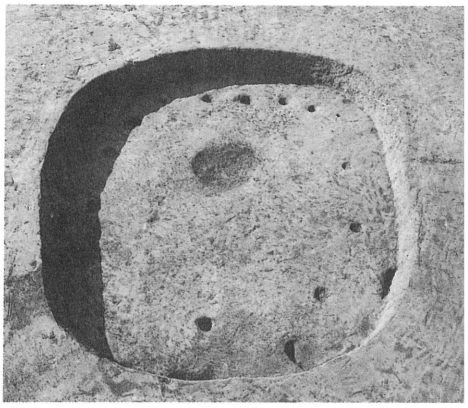
137号住居跡全景



138号住居跡全景



136号住居跡全景(遺物等出土状況)



136号住居跡全景



139号住居跡全景

〈図版 7〉



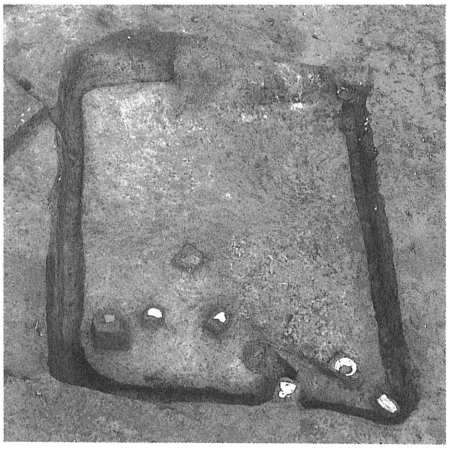
139号住居跡 遺物出土状況



141号住居跡全景



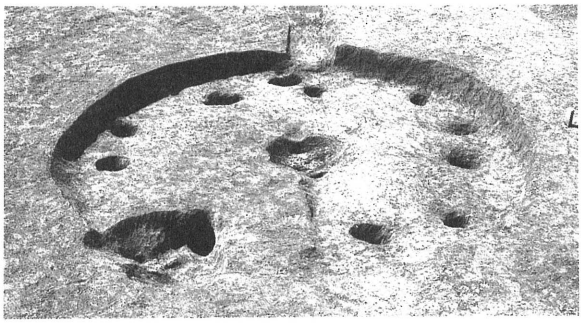
144号住居跡全景



140号住居跡全景



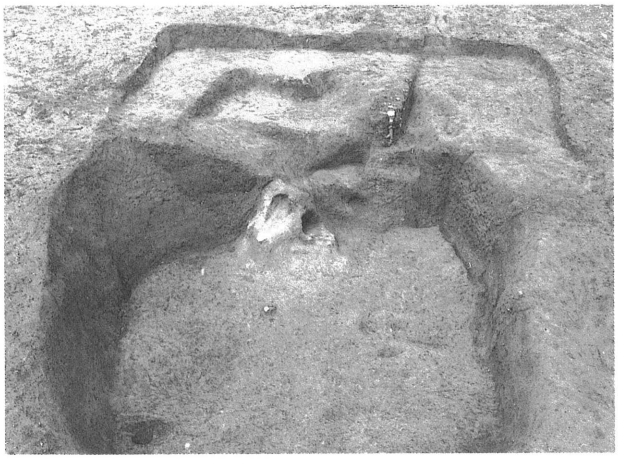
144号住居跡 遺物出土状況



143号住居跡全景

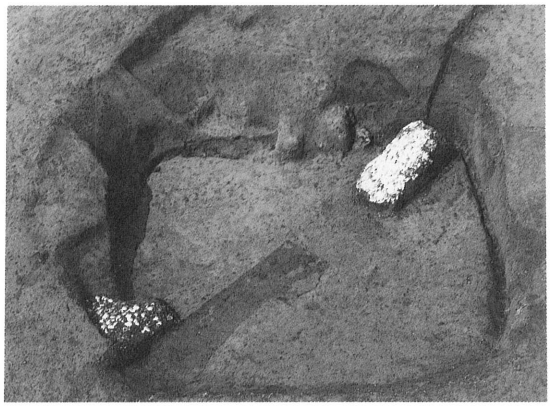


144号住居跡カマド

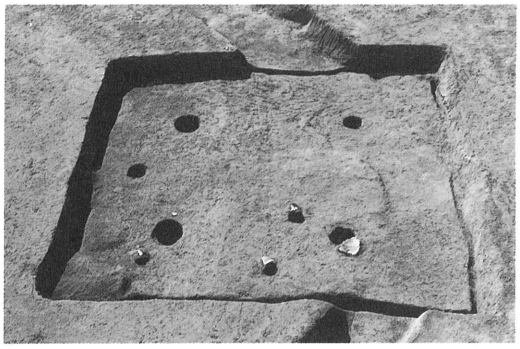


145 a・b 号住居跡(手前が9号)

〈図版 8〉

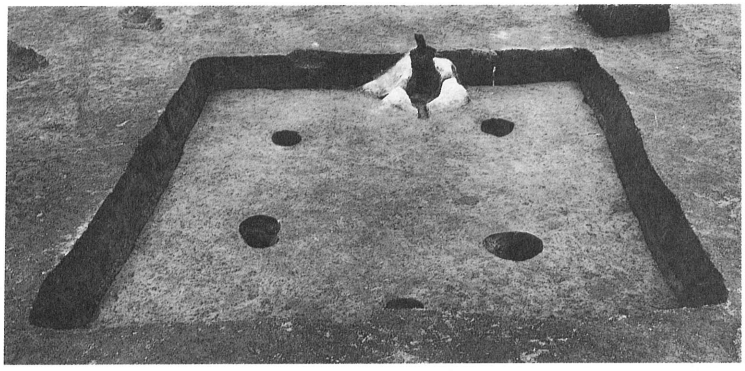


146号住居跡全景



147号住居跡全景

149号住居跡全景

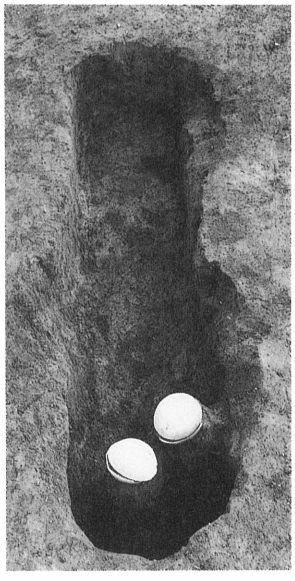




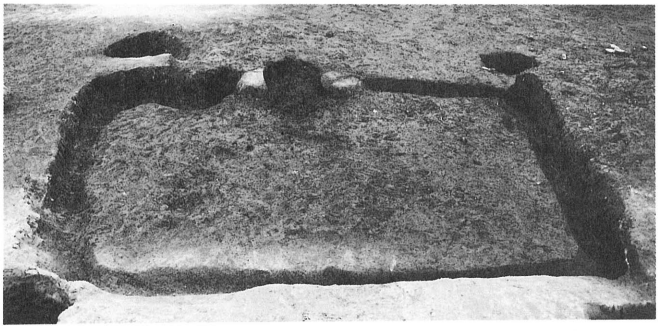
第102号土坑



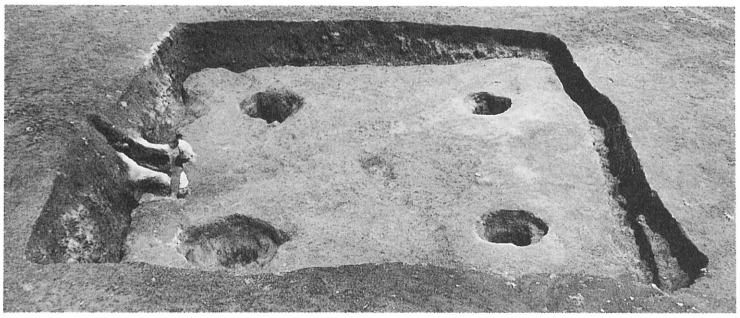
150 a・b 号住居跡全景



第103 a・b 号土坑

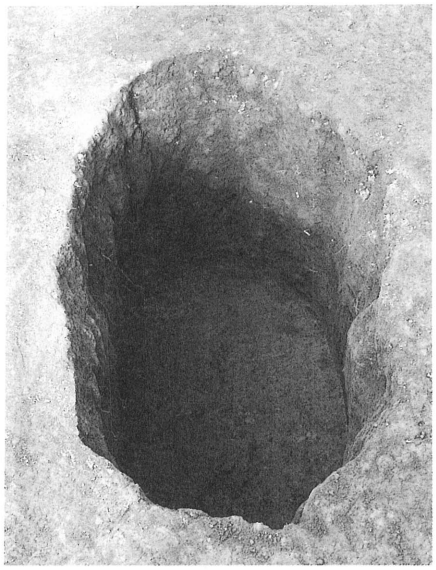


150 a 号住居跡全景



151号住居跡全景

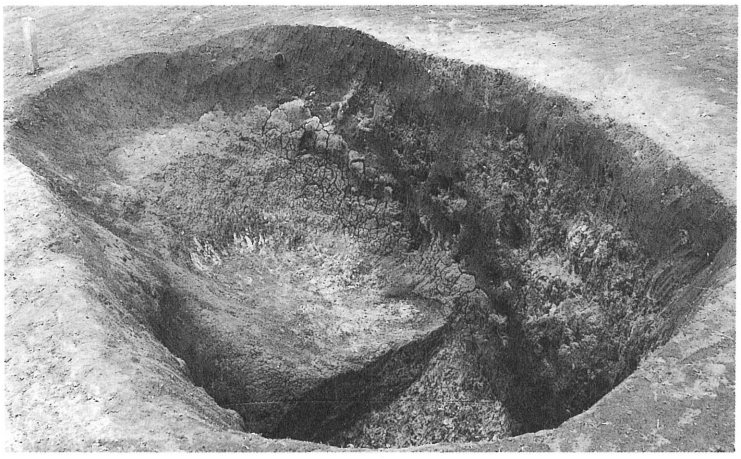
〈図版 9〉



第104号土坑(134住内)



第107号土坑



第106号土坑



第108号土坑

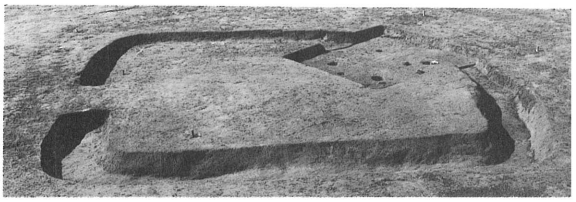


第108号土坑

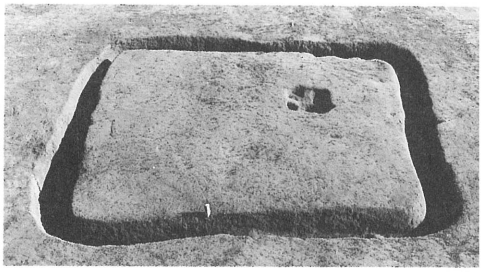
〈図版10〉



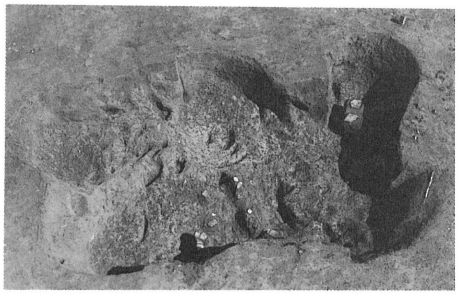
第101号炉穴



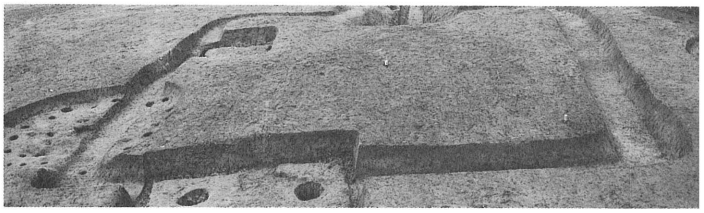
第101号方形周溝状遺構



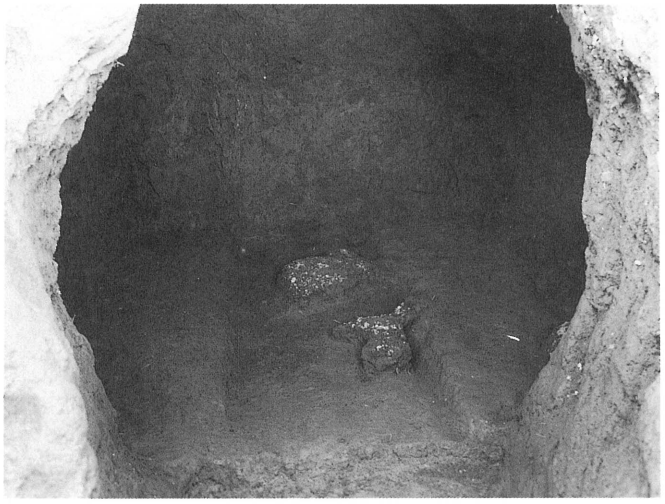
第102号方形周溝状遺構

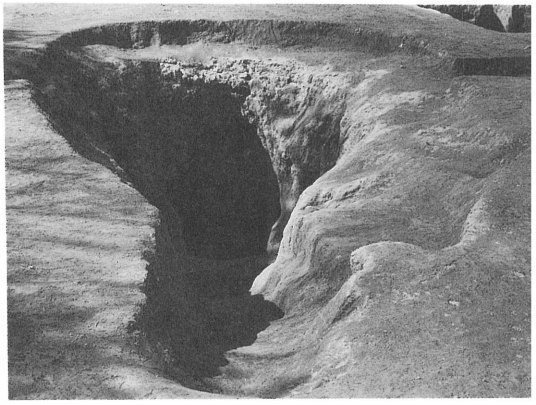


第102号炉穴

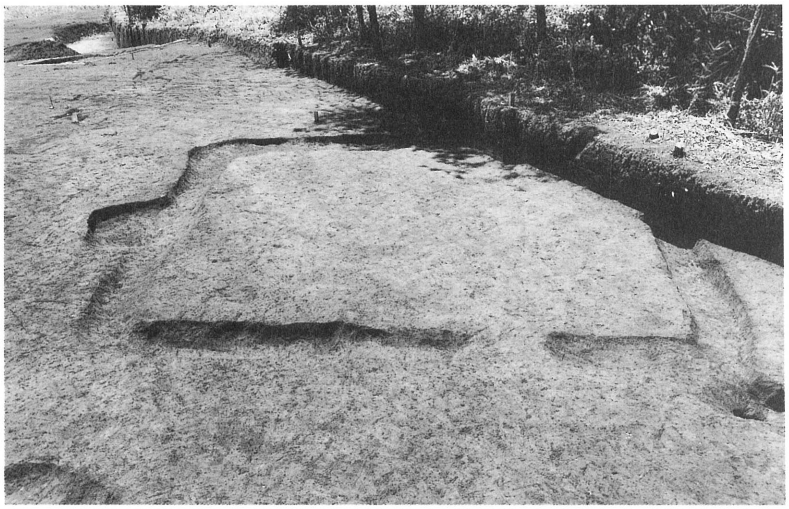


第103号方形周溝状遺構





第103号方形周溝状遺構 地下式横穴墓入口
(左)第103号方形周溝状遺構 地下式横穴墓内

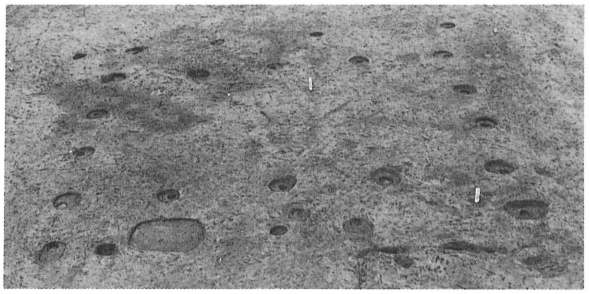


第104号方形周溝状遺構

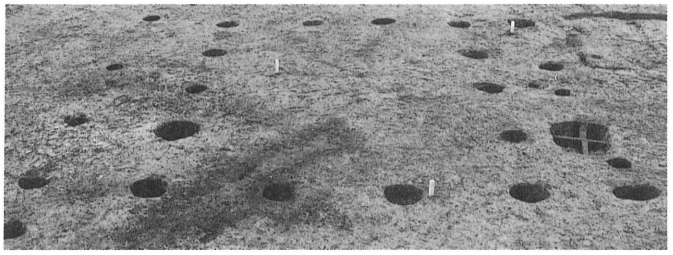
〈図版11〉



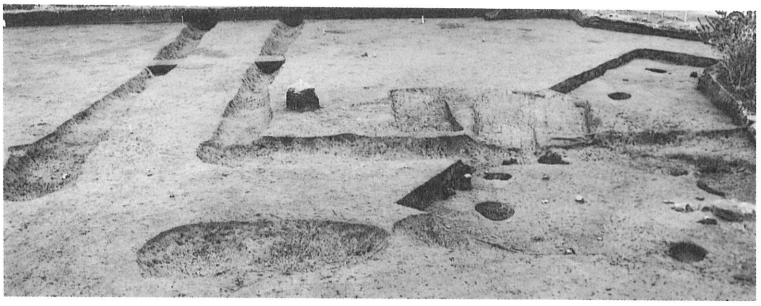
第104号溝状遺構



第102号掘立柱建物跡



第102号掘立柱建物跡 完掘後



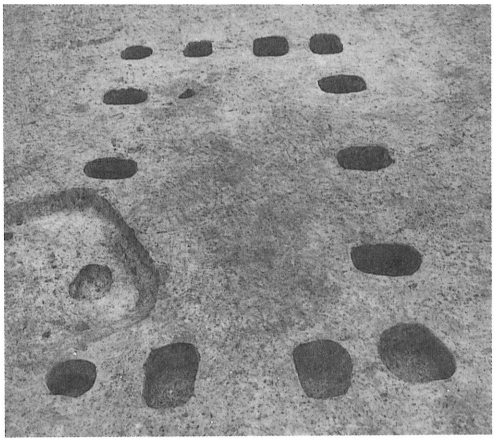
第101.102.103号溝状遺構



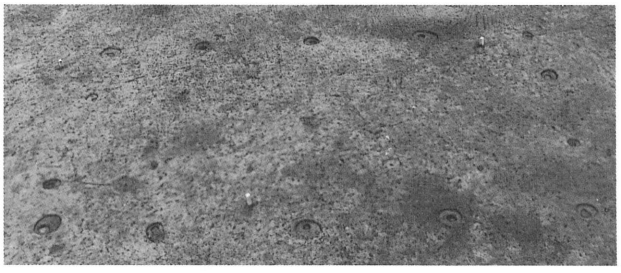
第103号掘立柱建物跡



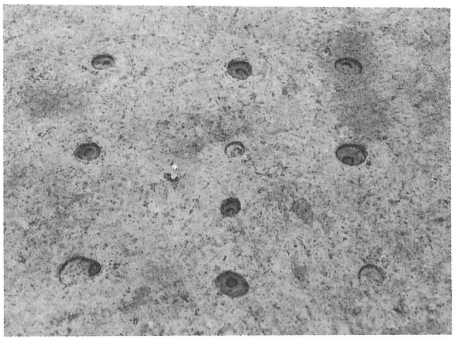
第103号溝状遺構遺物出土状況



第103号掘立柱建物跡 完掘後



第101号掘立柱建物跡



第104号掘立柱建物跡

〈図版12〉

写真図版Ⅱ

東千草山遺跡

《遺構》

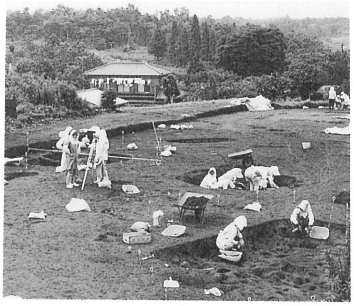
図版13～19



調査風景(南側より)第１次調査区



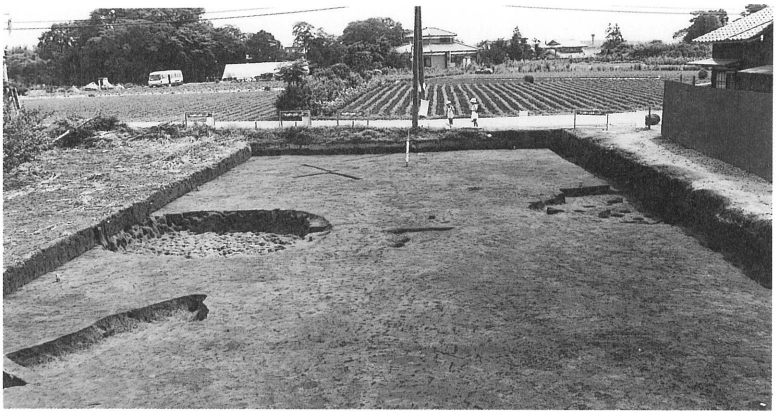
調査前の状況



調査風景（１）



遺跡近景　北東側より



遺跡近景　北東側より



調査風景（２）

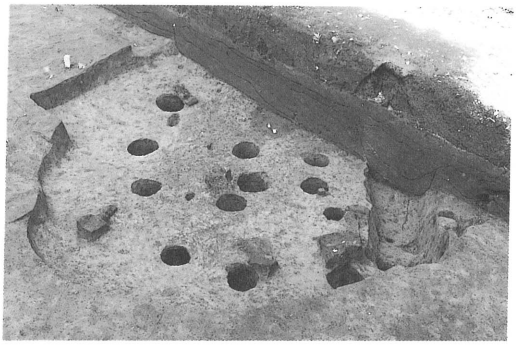


遺跡近景　南西側より

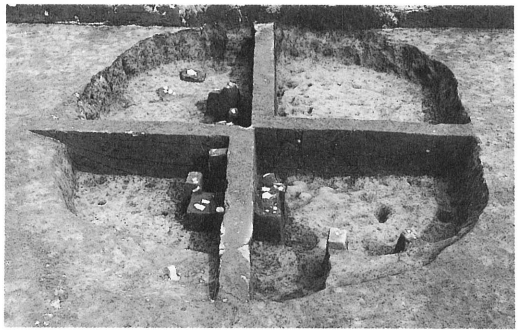
〈図版13〉



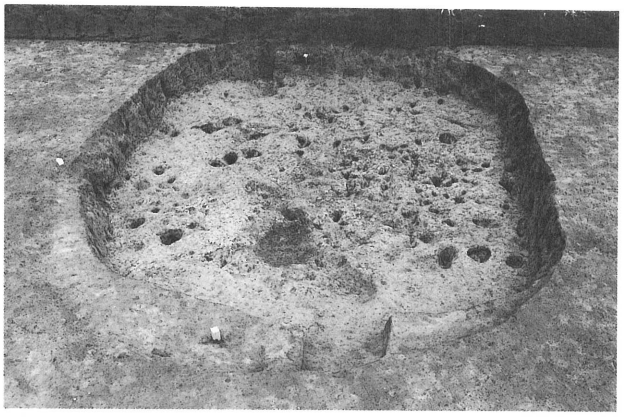
1 号住居跡 南西側より



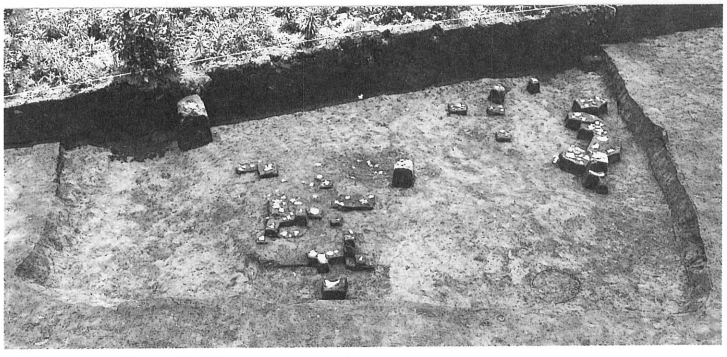
1 号住居跡全景 東側より



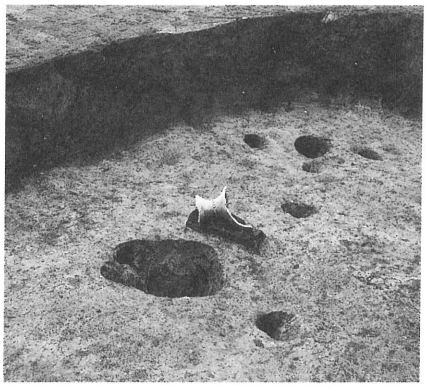
2 号住居跡 北西側より



2 号住居跡全景 北西側より



3 号住居跡全景 北西側より



4 号住居跡 遺物出土状況

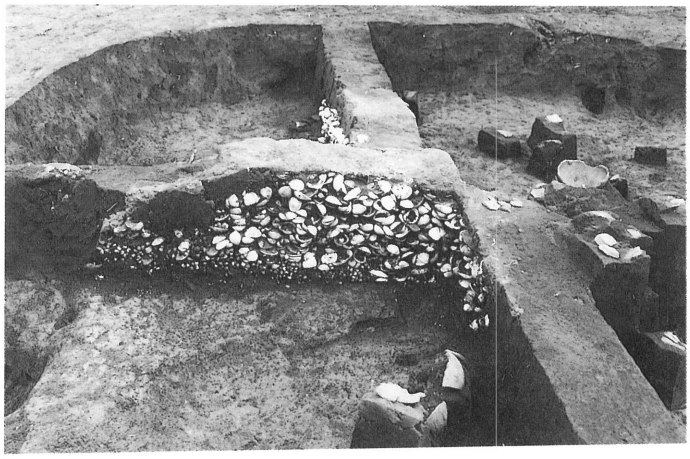


3 号住居跡全景 北東側より



4 号住居跡全景 北西側より

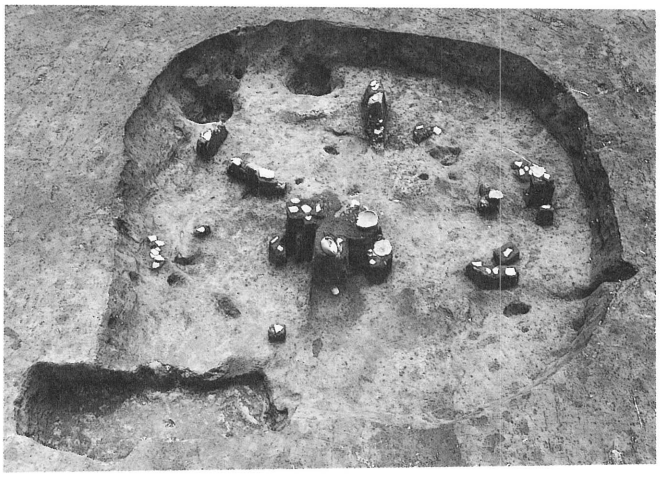
〈図版14〉



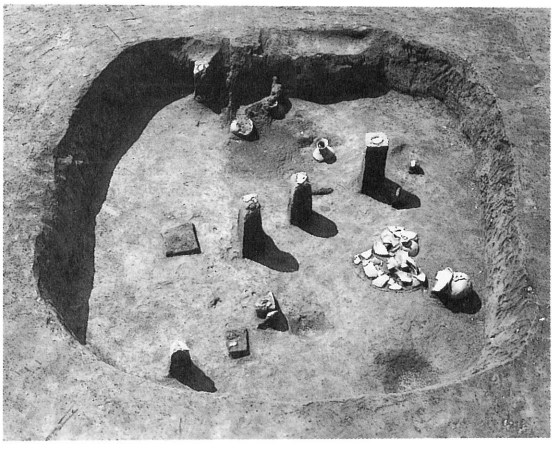
6 号住居跡 遺物出土状況



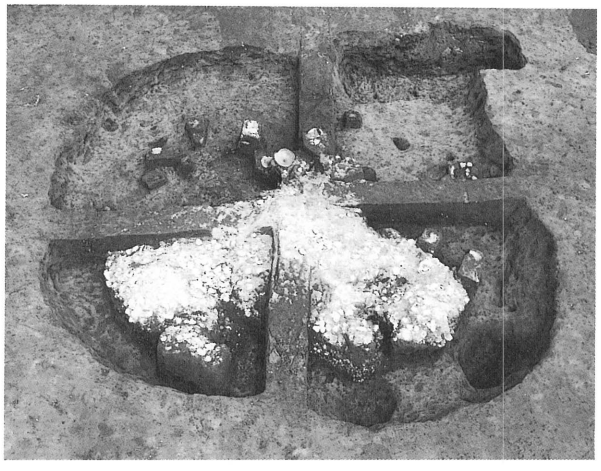
6 号住居跡 遺物出土状況



6 号住居跡全景 北西側より

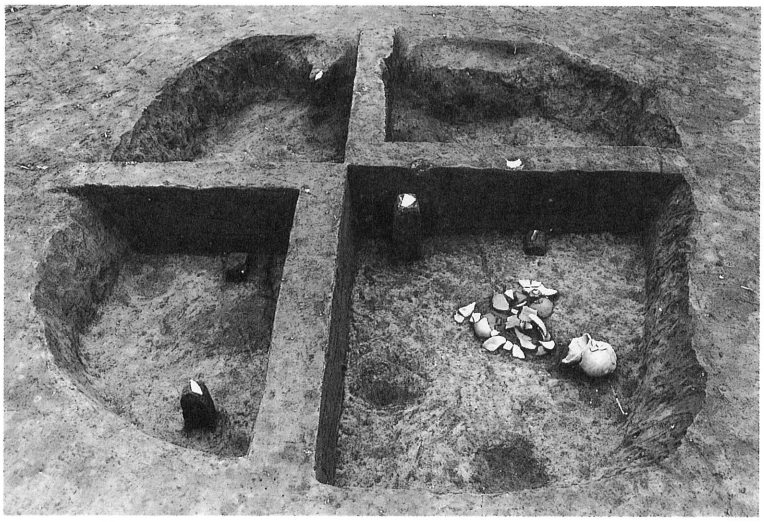


4 号住居跡全景 南東側より



6 号住居跡 南東側より

〈図版15〉



4 号住居跡 南東側より



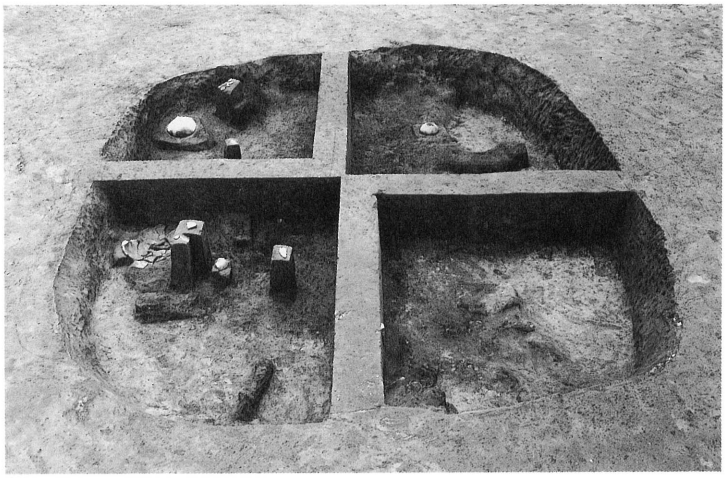
4 号住居跡 遺物出土状況



4 号住居跡 遺物出土状況



8 号住居跡全景 北東側より



7 号住居跡 南側より

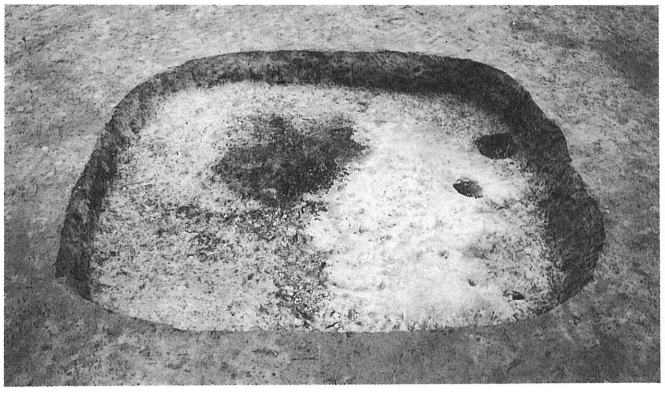
〈図版16〉



7 号住居跡 南側より



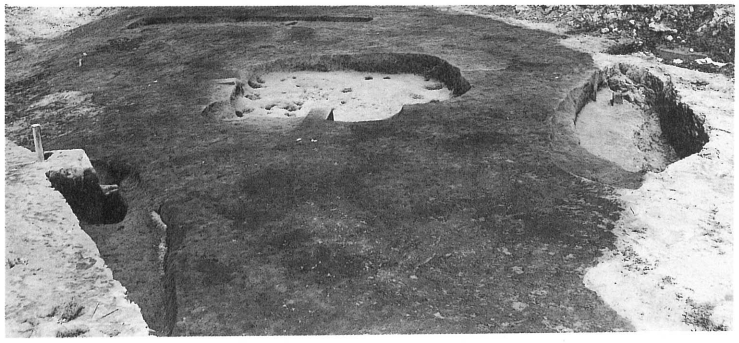
7 号住居跡 遺物出土状況



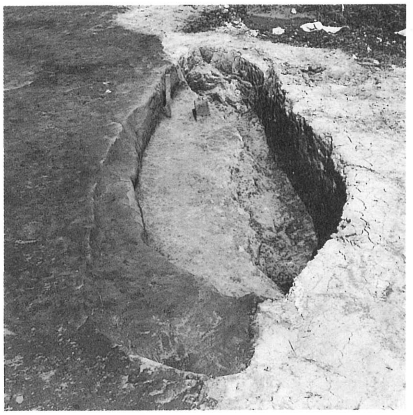
7 号住居跡全景 南側より



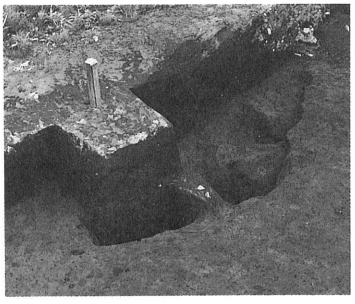
7 号住居跡 遺物出土状況



8 号、7 号、9 号(左より)、住居跡近景北東側より



9 号住居跡 北東側より

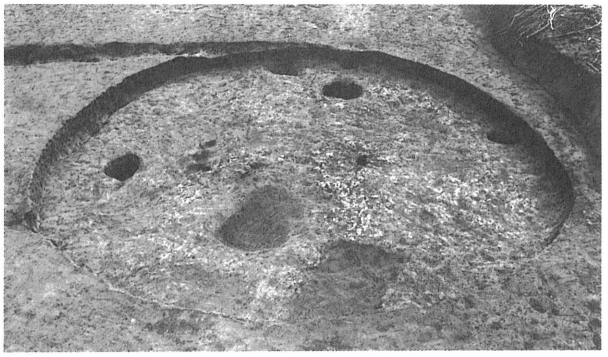


5 号住居跡
北側より

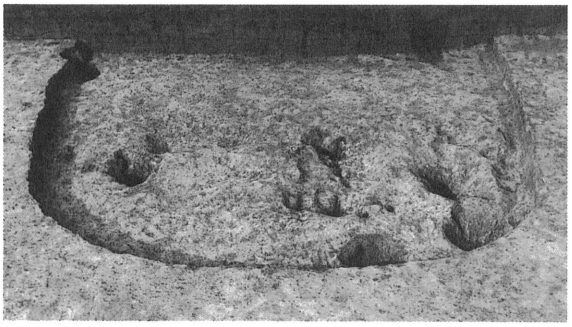
〈図版17〉



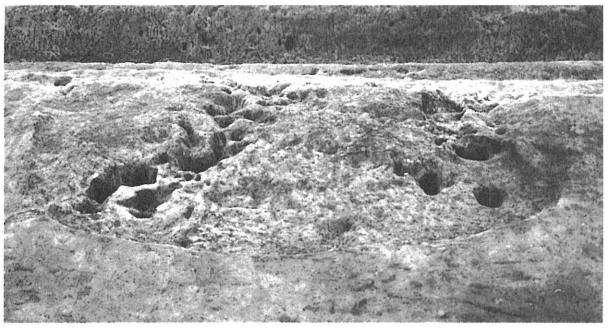
10号住居跡全景　西側より



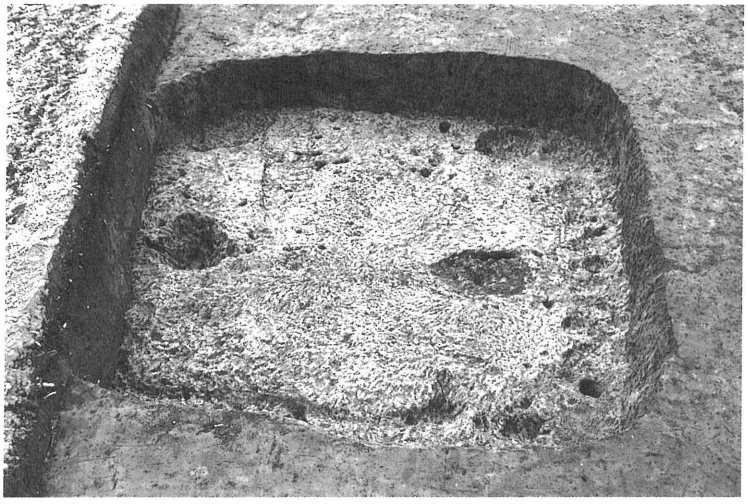
13号住居跡全景　北西側より



11号住居跡全景　南東側より



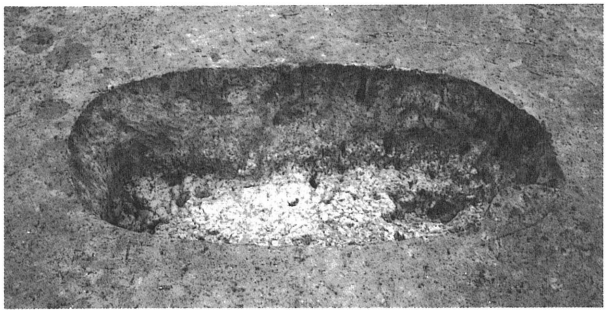
14号住居跡全景　北東側より



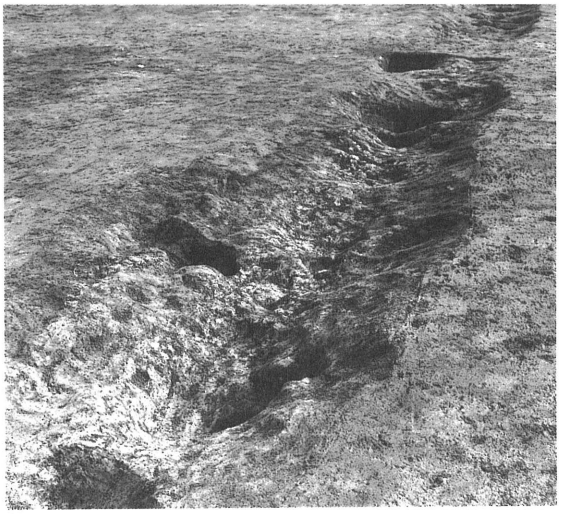
12号住居跡全景　北東側より



第１号土坑　東側より

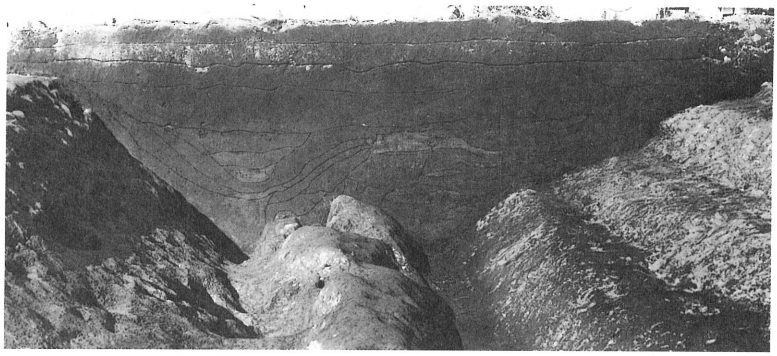


第２号土坑　南側より

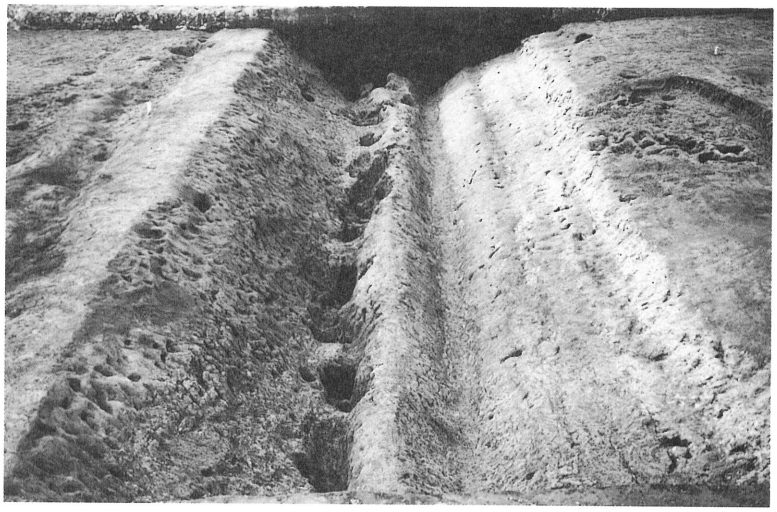


第２号溝　北西側より

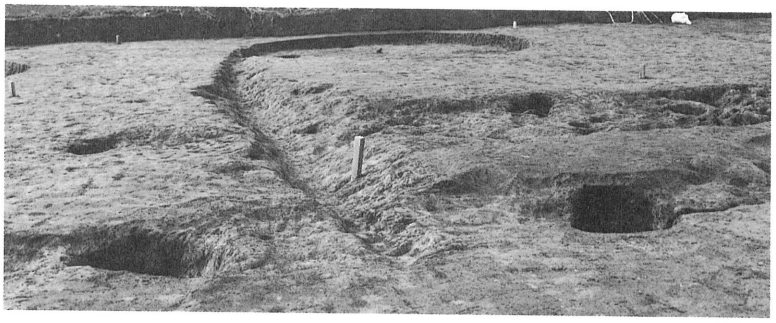
〈図版18〉



第１号溝
北西側土層セクション



第１号溝全景
南東側より



第３号溝付近
南東側より



第３号溝付近
北西側より
手前は硬質面

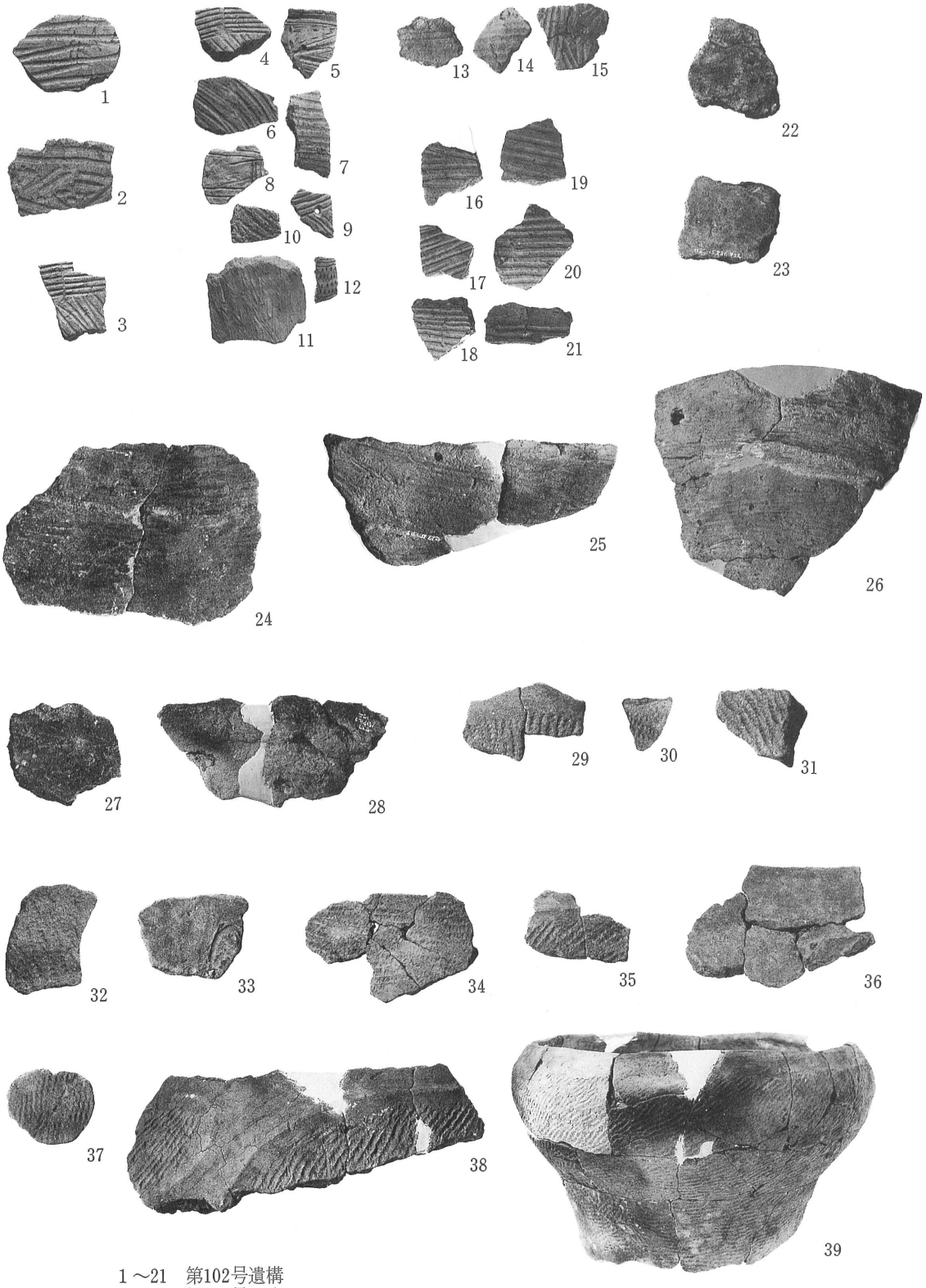
〈図版19〉

写真図版 Ⅲ

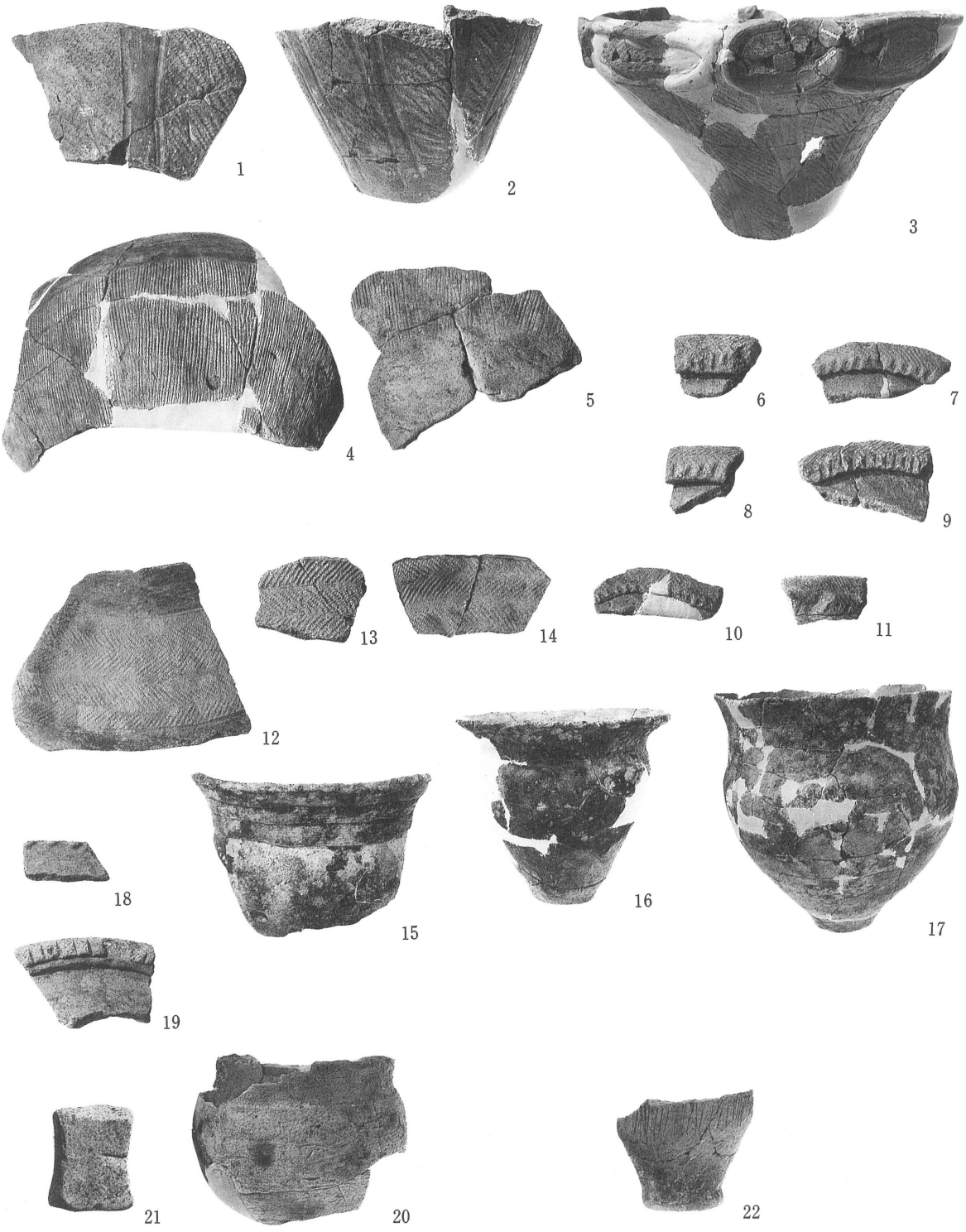
千草山遺跡・東千草山遺跡

《遺物》

図版20～45

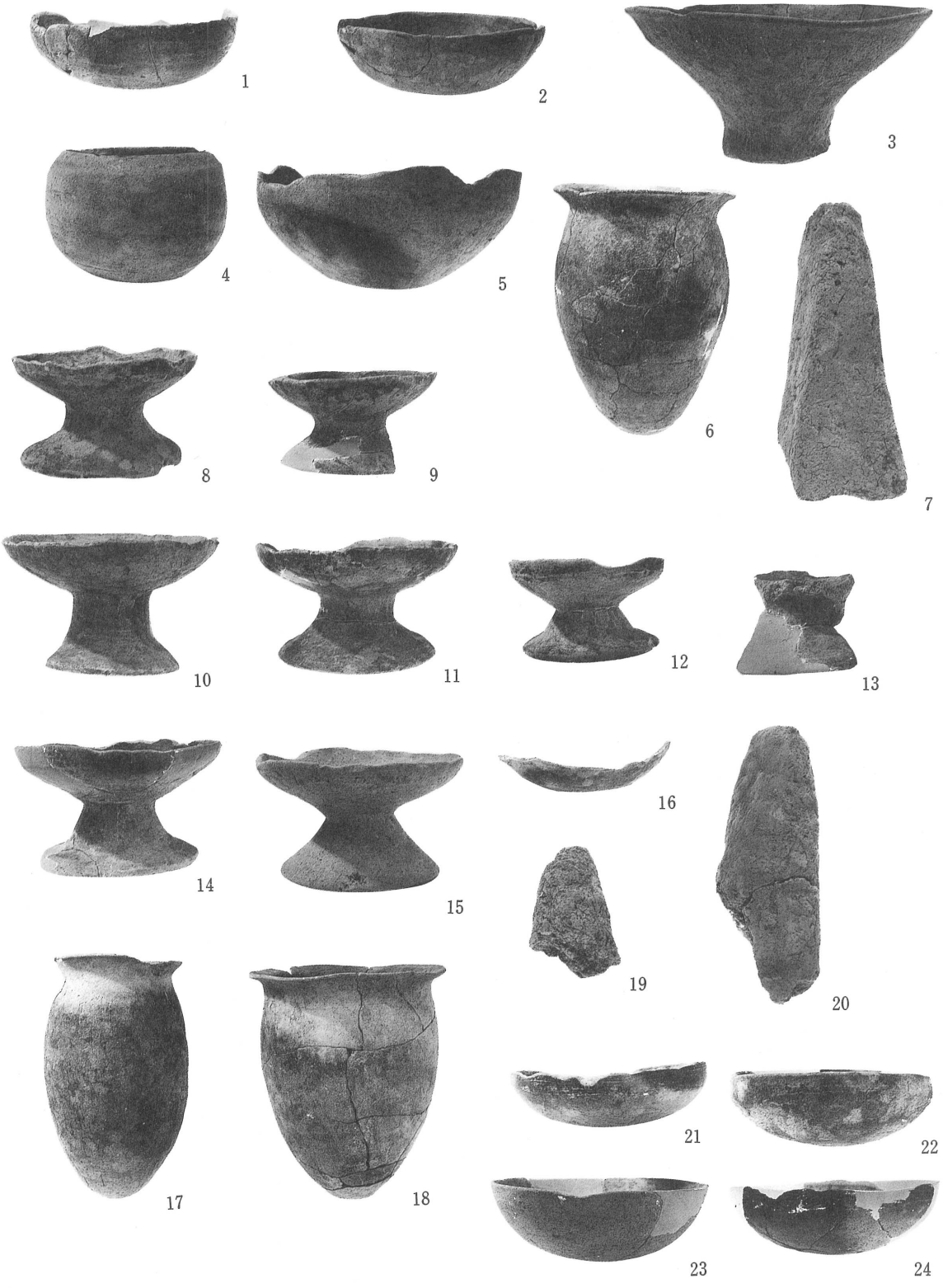


1～21　第102号遺構
22～26　第102号炉穴
27～28　第103号炉穴
29～39　142号住居跡

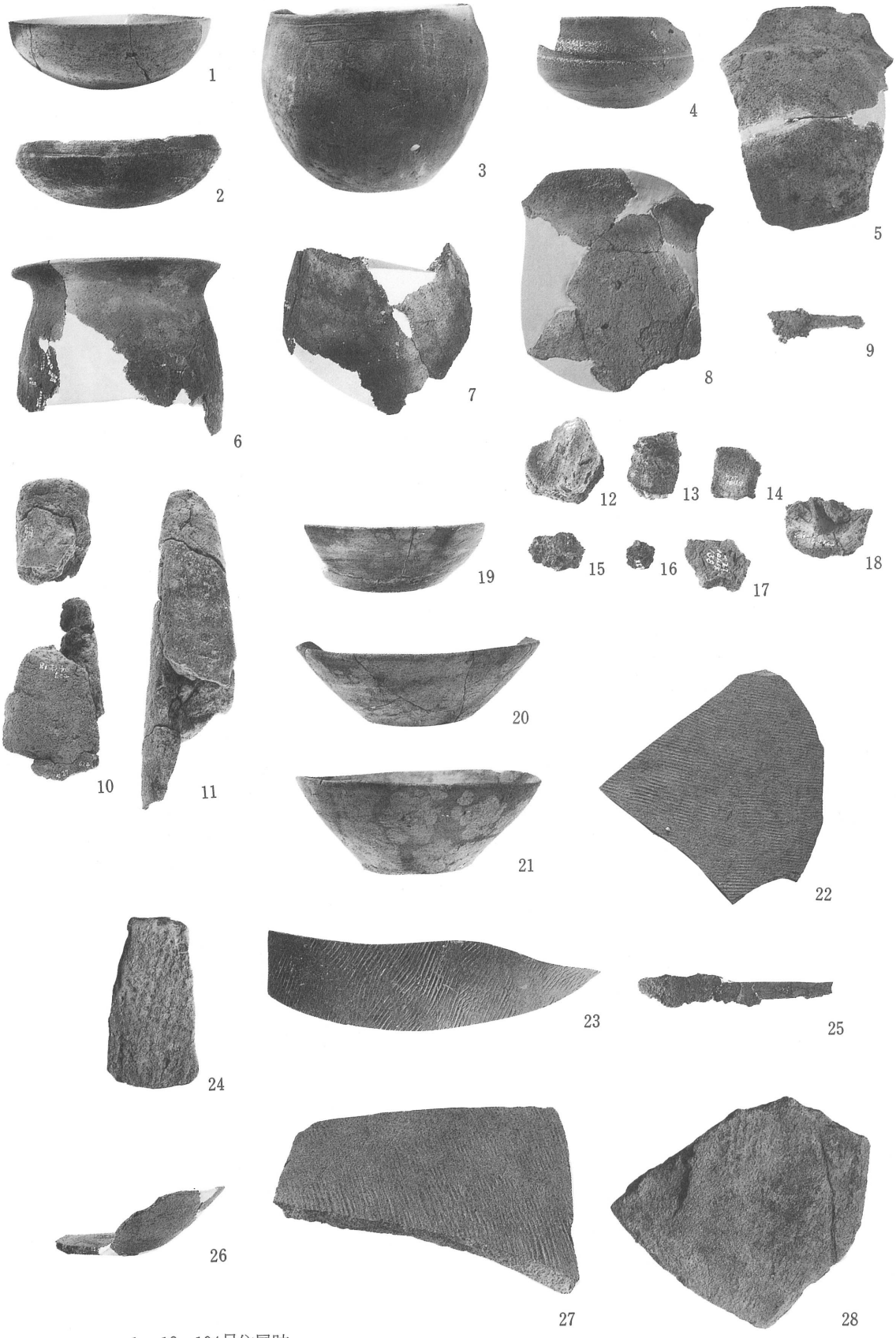


1～5　143号住居跡
6～17　131号住居跡
18～21　136号住居跡
22　133b号住居跡

《遺物》　千草山遺跡　〈図版21〉

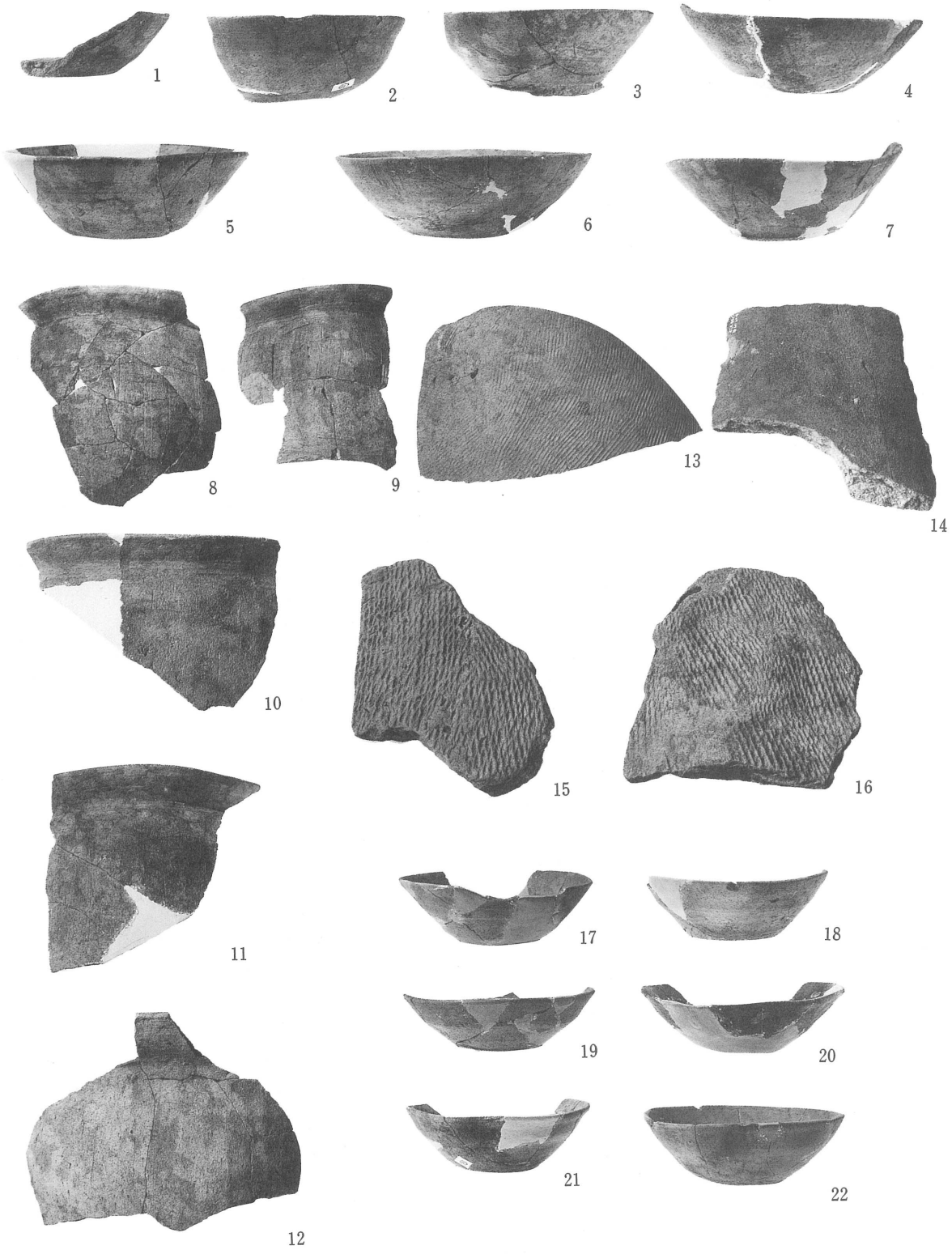


1～7　101号住居跡
8～20　102号住居跡
21～24　104号住居跡

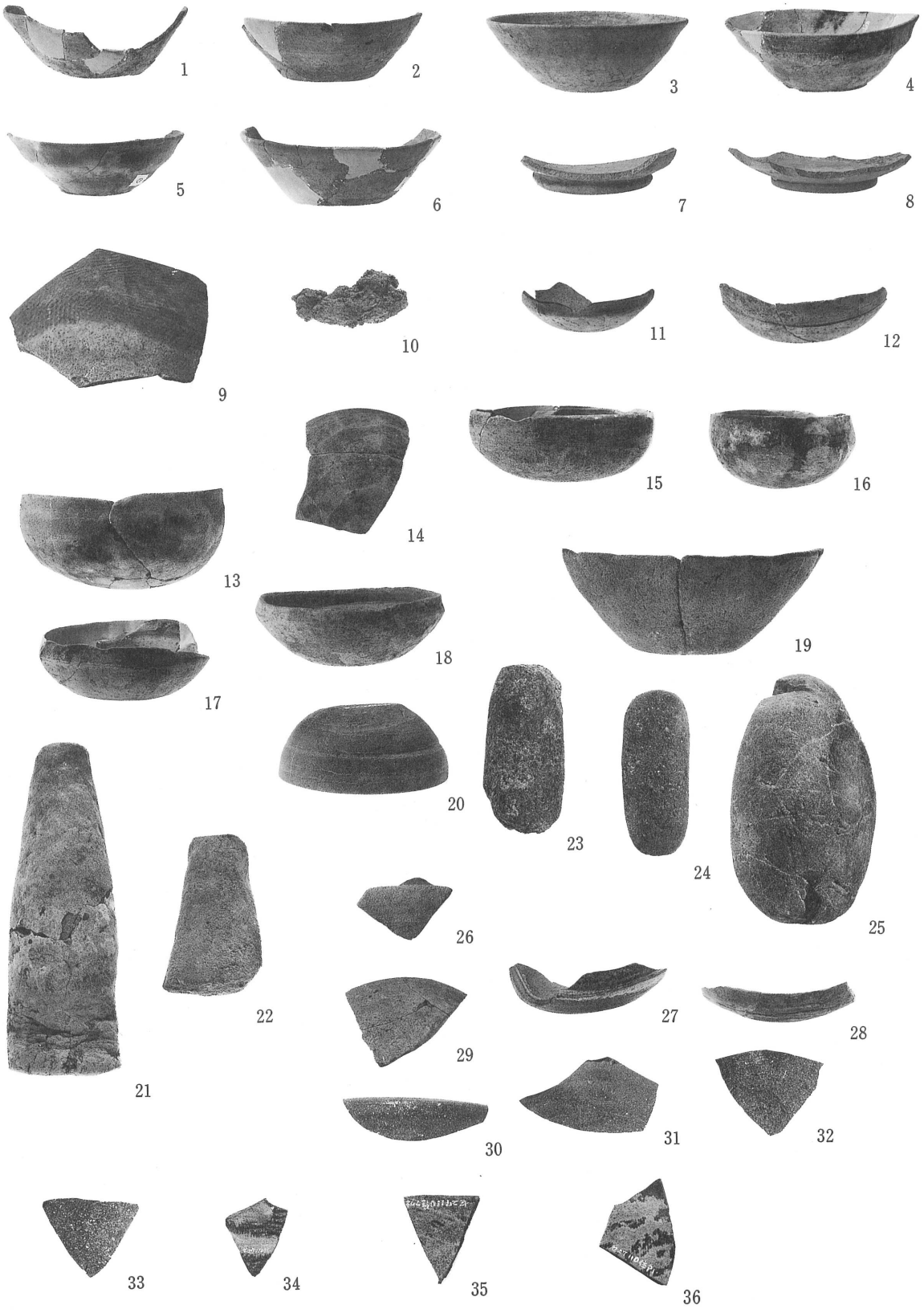


1～18　104号住居跡
19～25　105号住居跡
26～28　106号住居跡

《遺物》　千草山遺跡　〈図版23〉

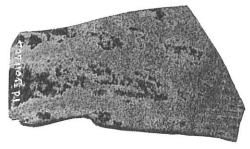


1～16　107号住居跡
17～22　108号住居跡



1～10　108号住居跡
11～25　109号住居跡
26～36　110号住居跡

《遺物》　千草山遺跡　〈図版25〉


1


2

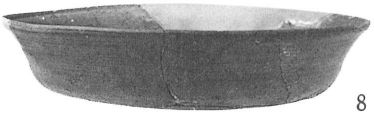

5

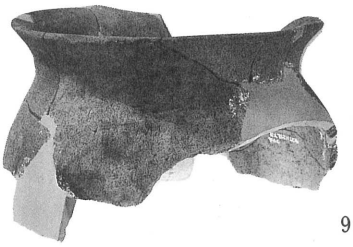

6


3

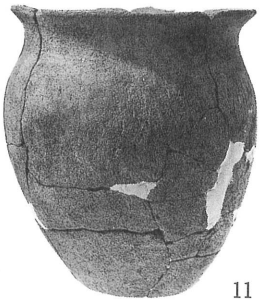

4


7


8


9


10


11


12


13


14


15


16


17


18


19

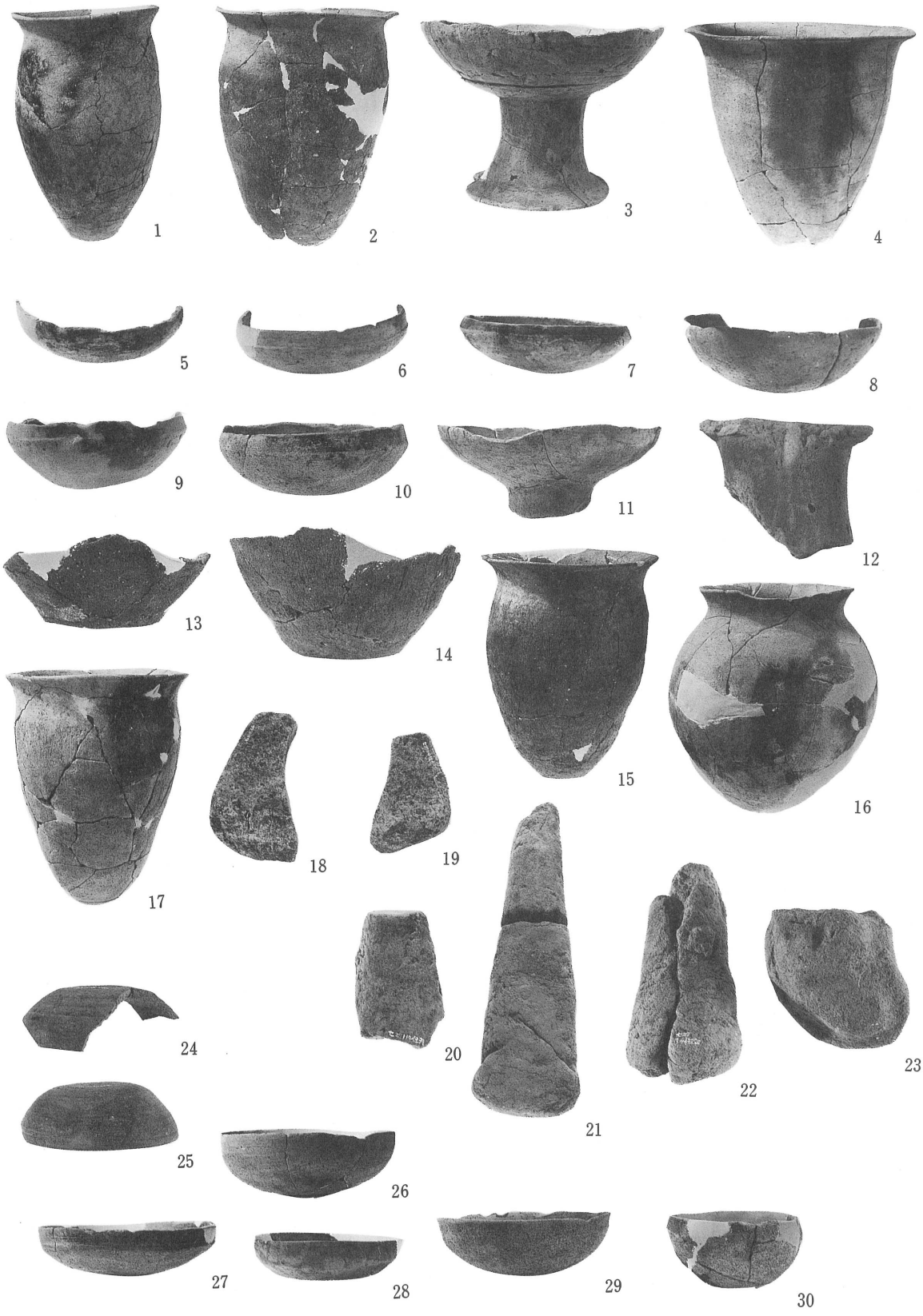

20


21


22

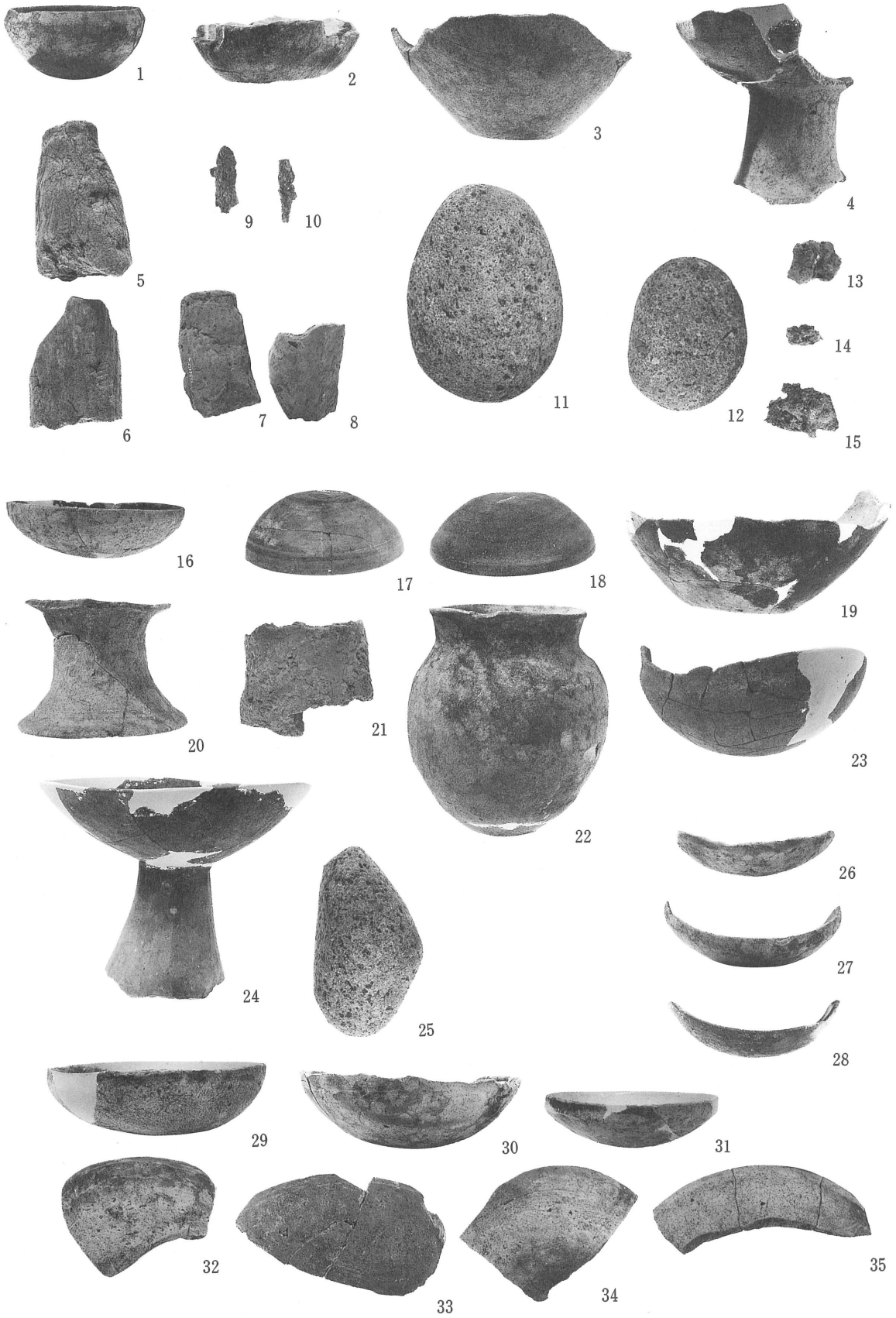

23

1～4　110号住居跡
5～11　112号住居跡
12～23　113号住居跡



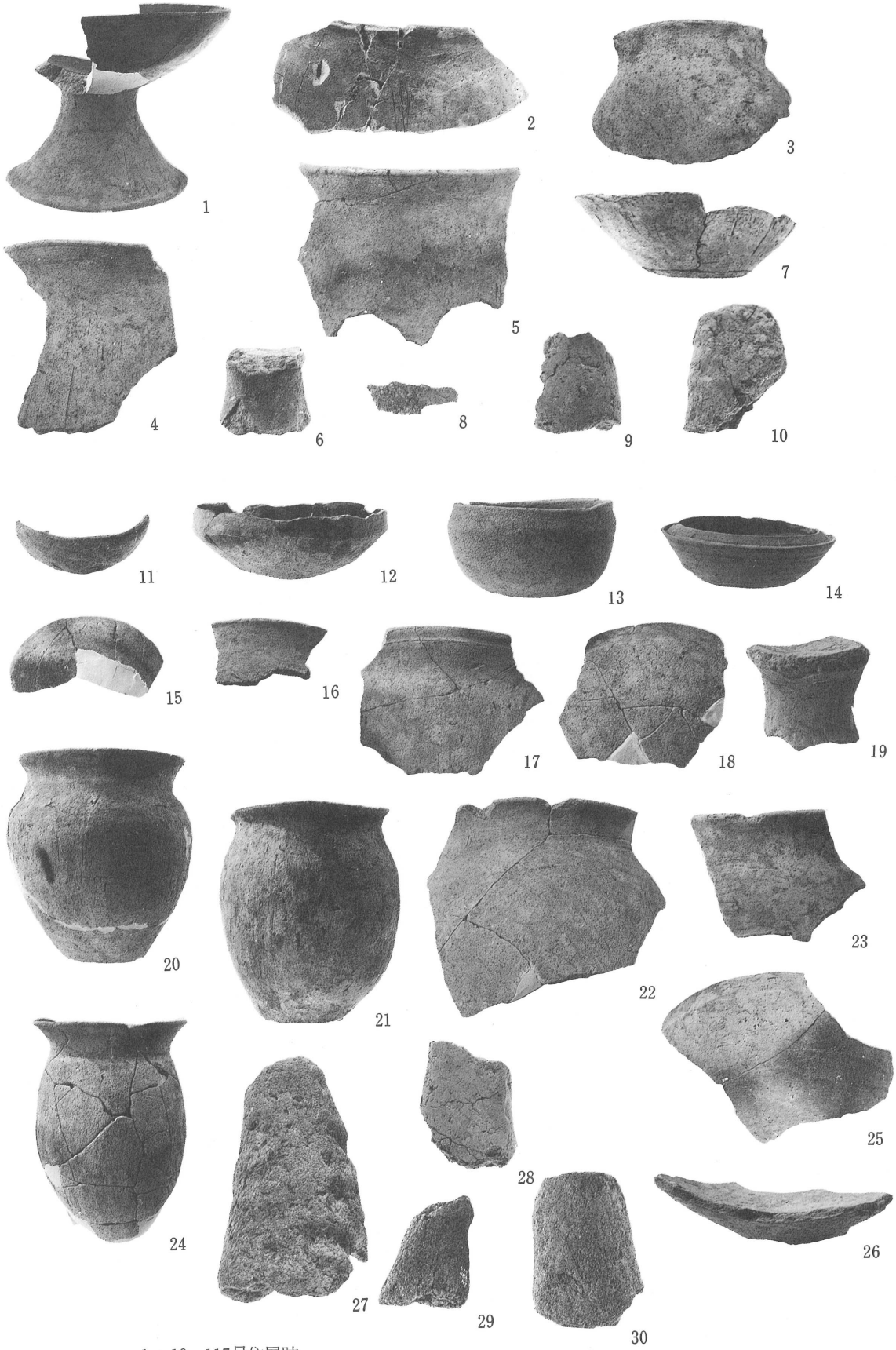
1～4　113号住居跡
5～23　114号住居跡
24～30　115号住居跡

《遺物》　千草山遺跡　〈図版27〉



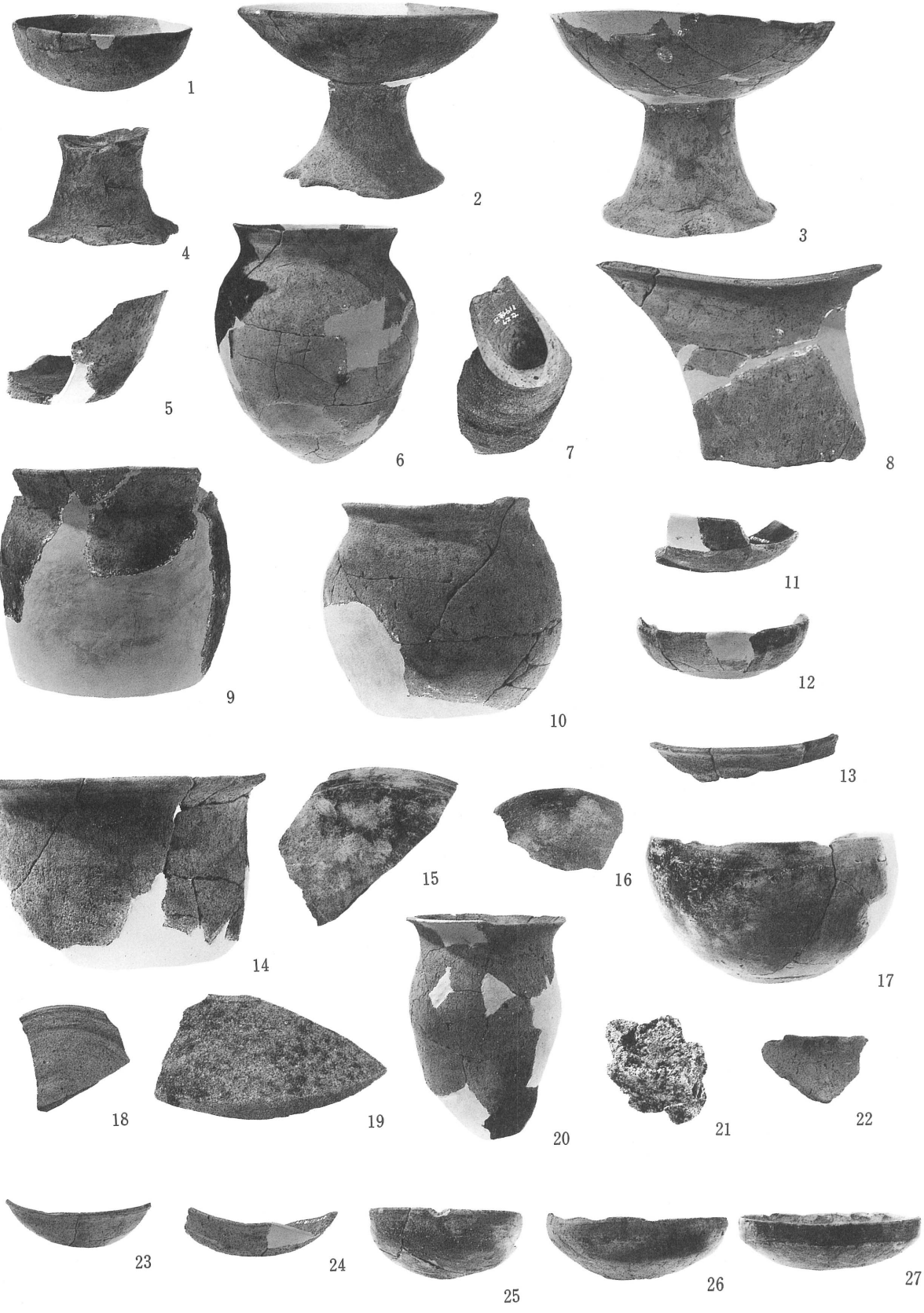
1 ～15　115号住居跡
16～25　116号住居跡
26～35　117号住居跡

《遺物》　千草山遺跡　〈図版28〉



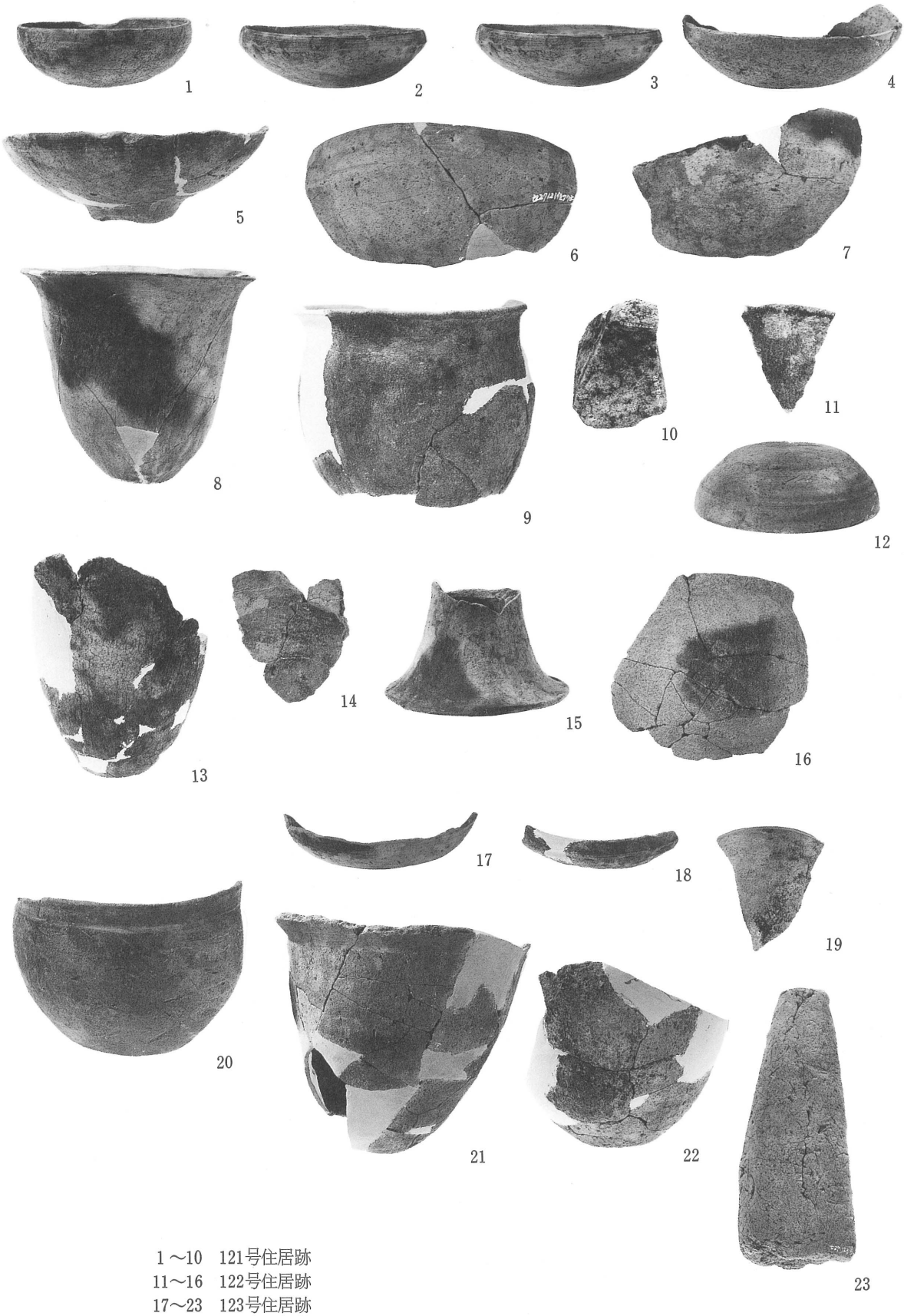
1～10　117号住居跡
11～30　118号住居跡

《遺物》　千草山遺跡　〈図版29〉



1～9　119a号住居跡
10　119b号住居跡
11～22　120号住居跡
23～27　121号住居跡

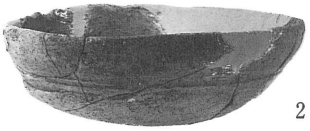
《遺物》　千草山遺跡　〈図版30〉

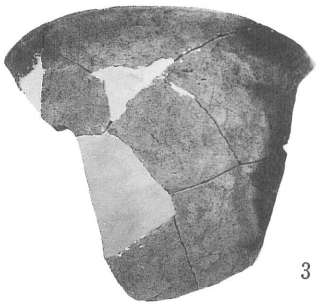


1～10　121号住居跡
11～16　122号住居跡
17～23　123号住居跡

《遺物》　千草山遺跡　〈図版31〉

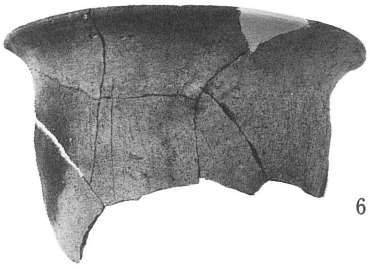

1


2


3

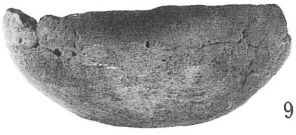

4

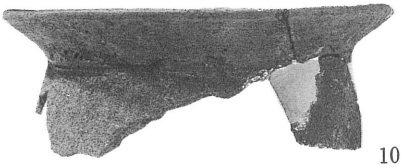

5

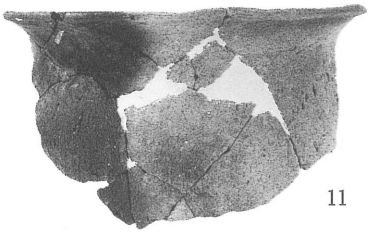

6

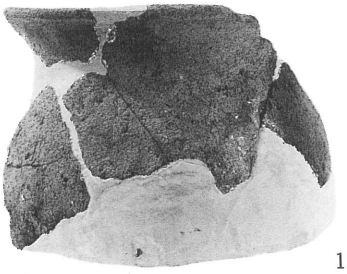

7


8


9

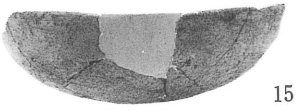

10


11

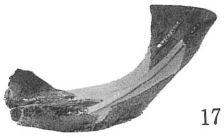

12


13


14


15


16


17


18


19


20


21


22


23

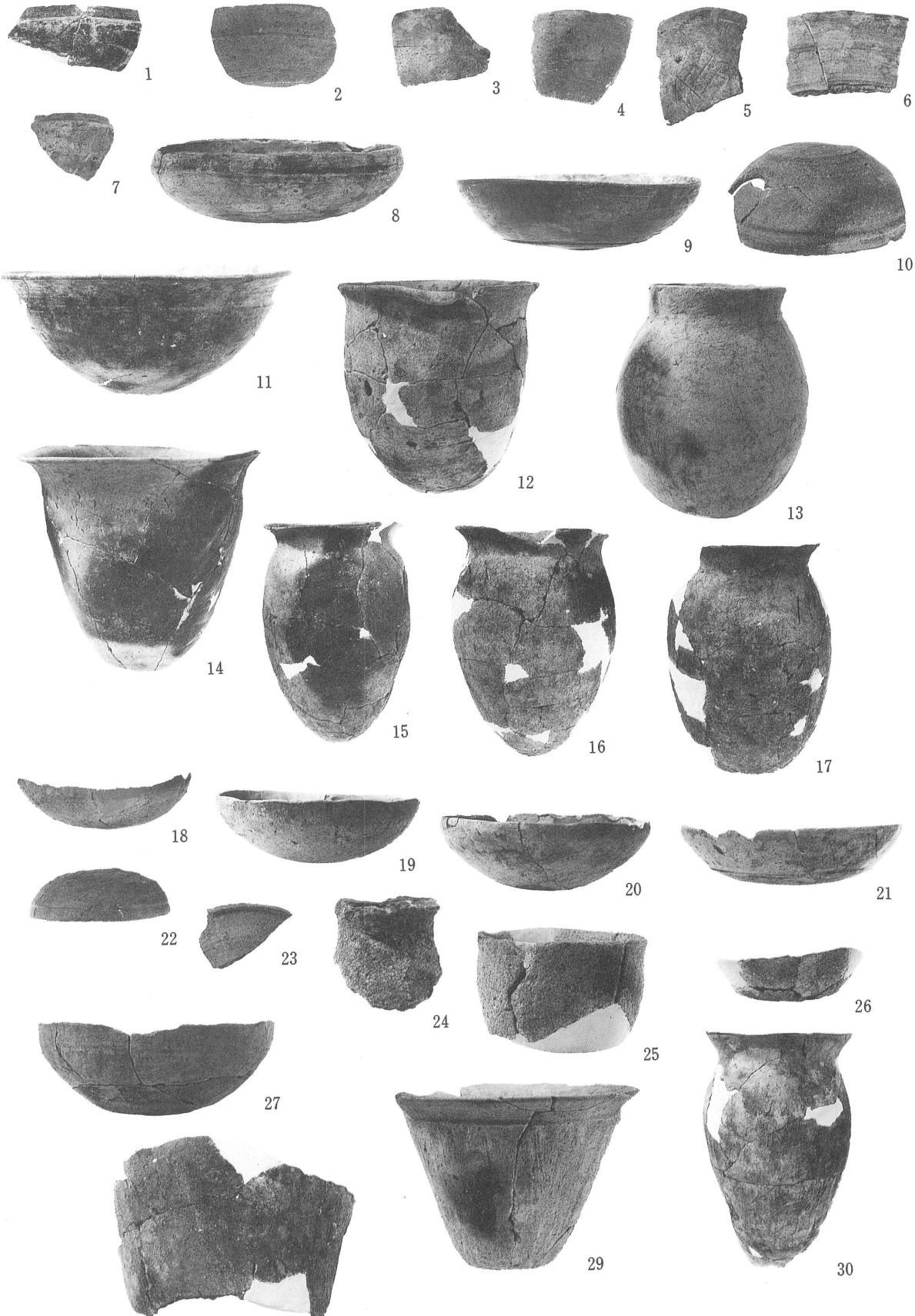

24


25


26

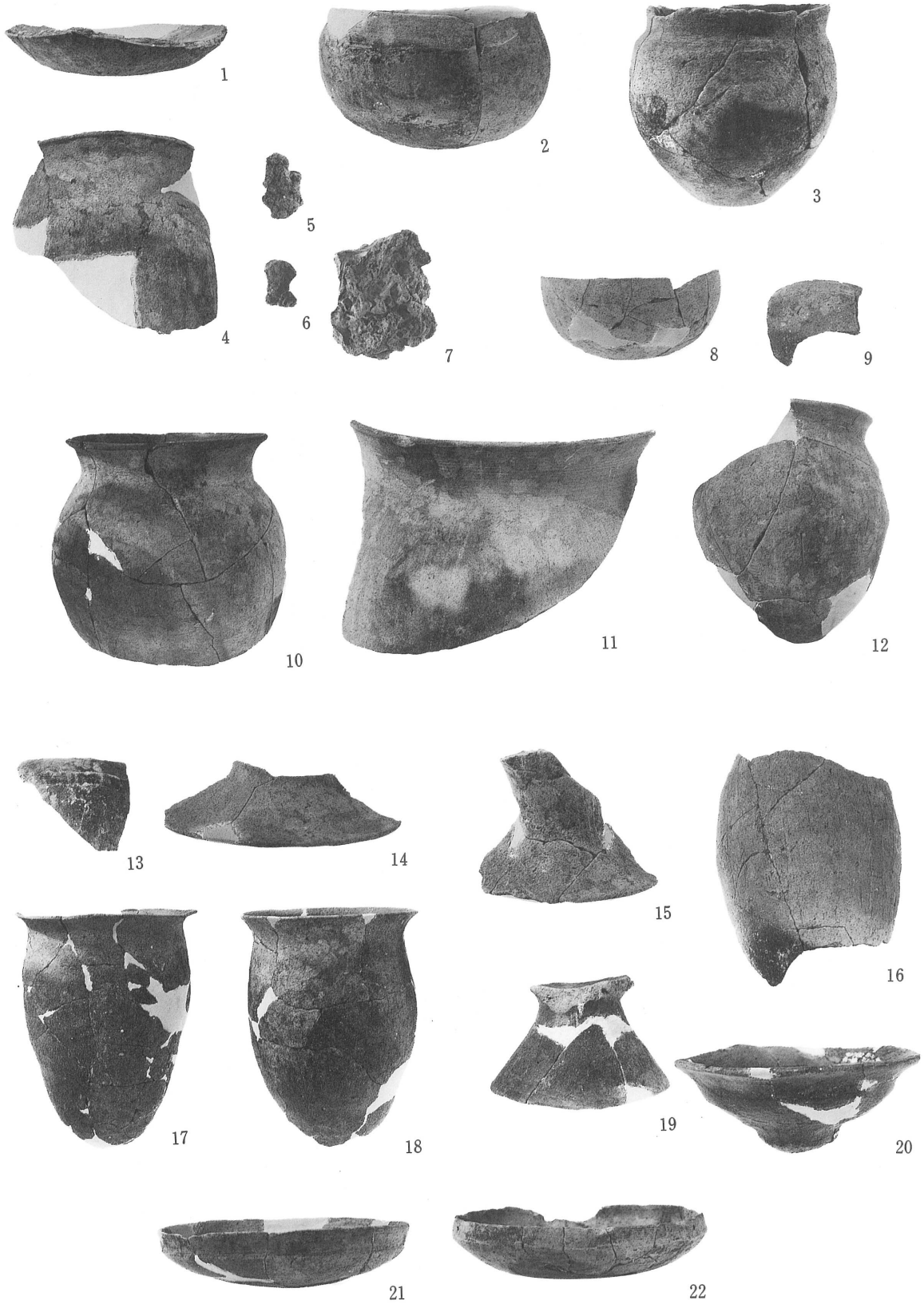
1～7　124号住居跡
8～14　125a号住居跡
15・16　125b号住居跡
17～25　第103号遺構
26　126号住居跡

《遺物》　千草山遺跡　〈図版32〉



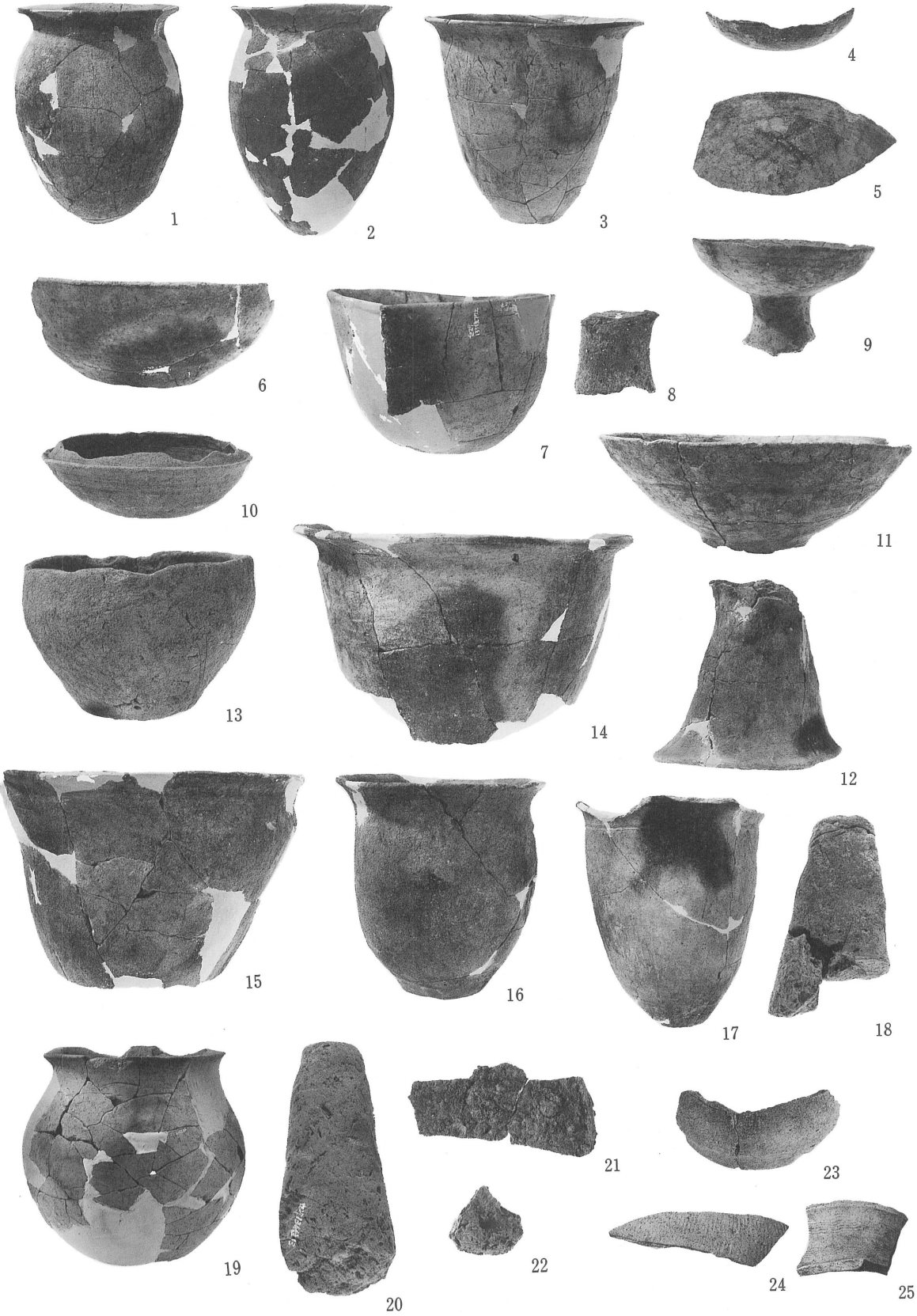
1～17　127号住居跡
18～30　128号住居跡

《遺物》　千草山遺跡　〈図版33〉



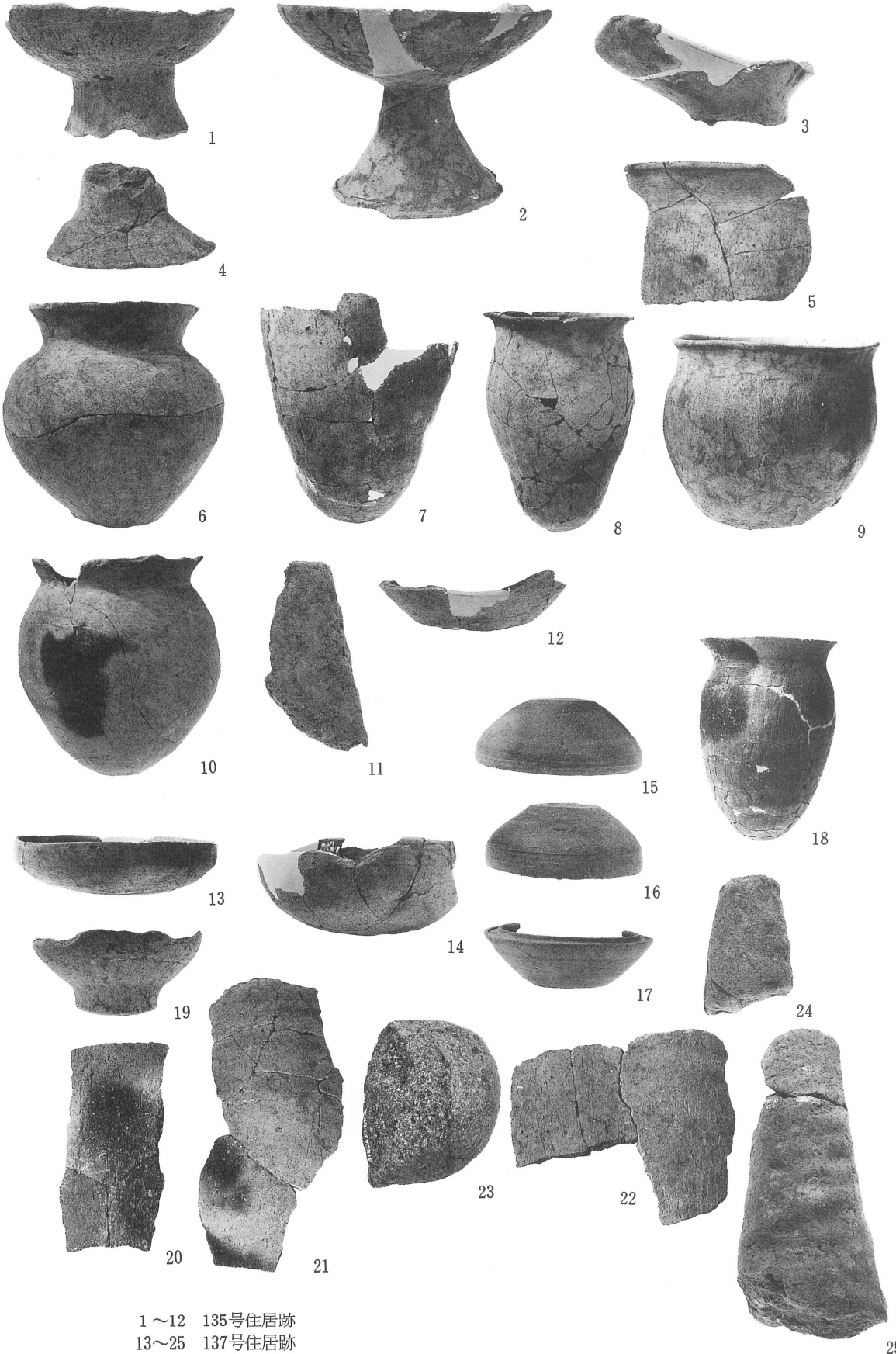
1～7　128号住居跡
8～12　129号住居跡
13～18　130号住居跡
19～22　132号住居跡

《遺物》　千草山遺跡　〈図版34〉



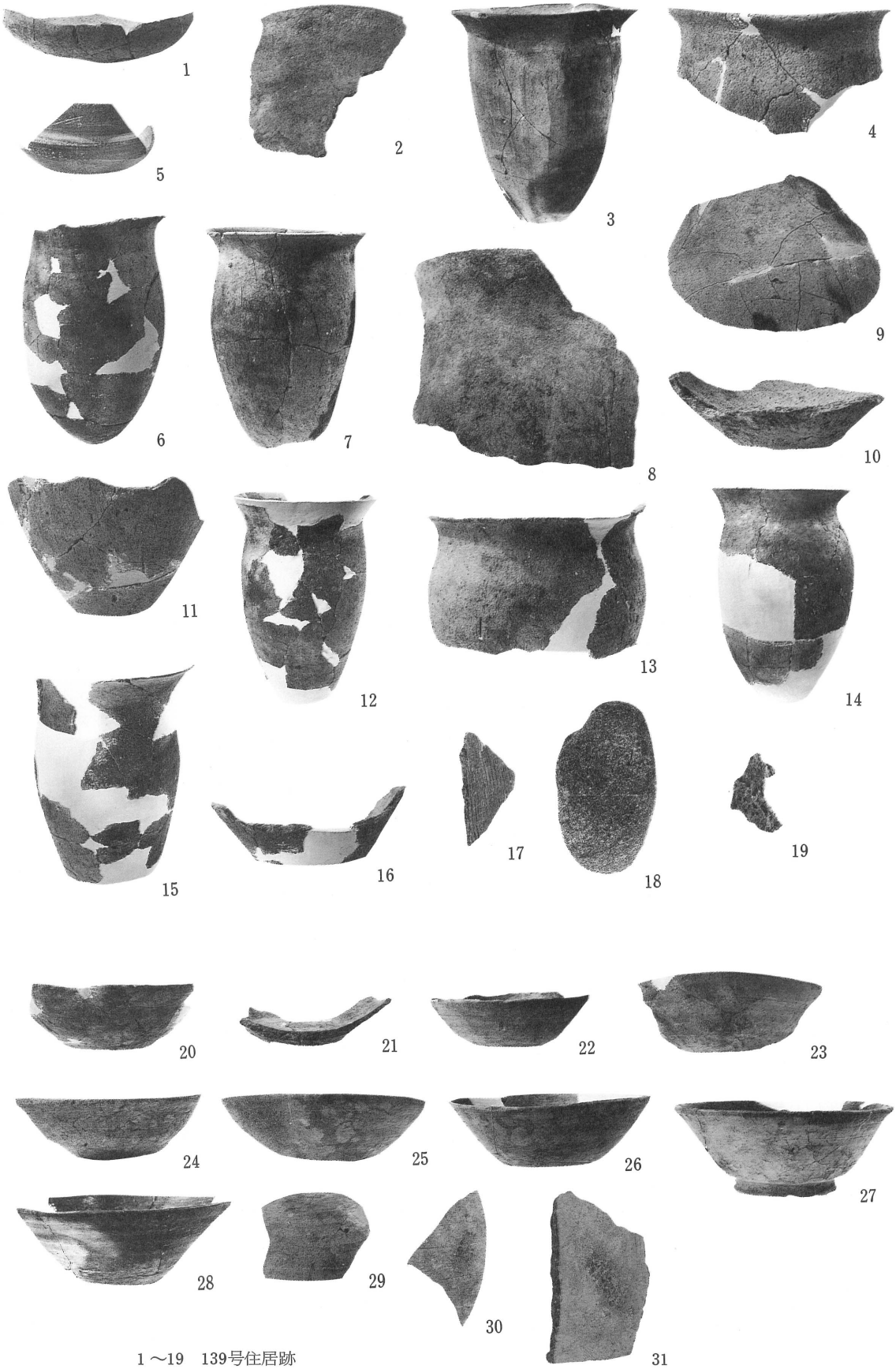
1～3　132号住居跡
4～18　133a号住居跡
19～22　134号住居跡
23～25　138号住居跡

《遺物》　千草山遺跡　〈図版35〉



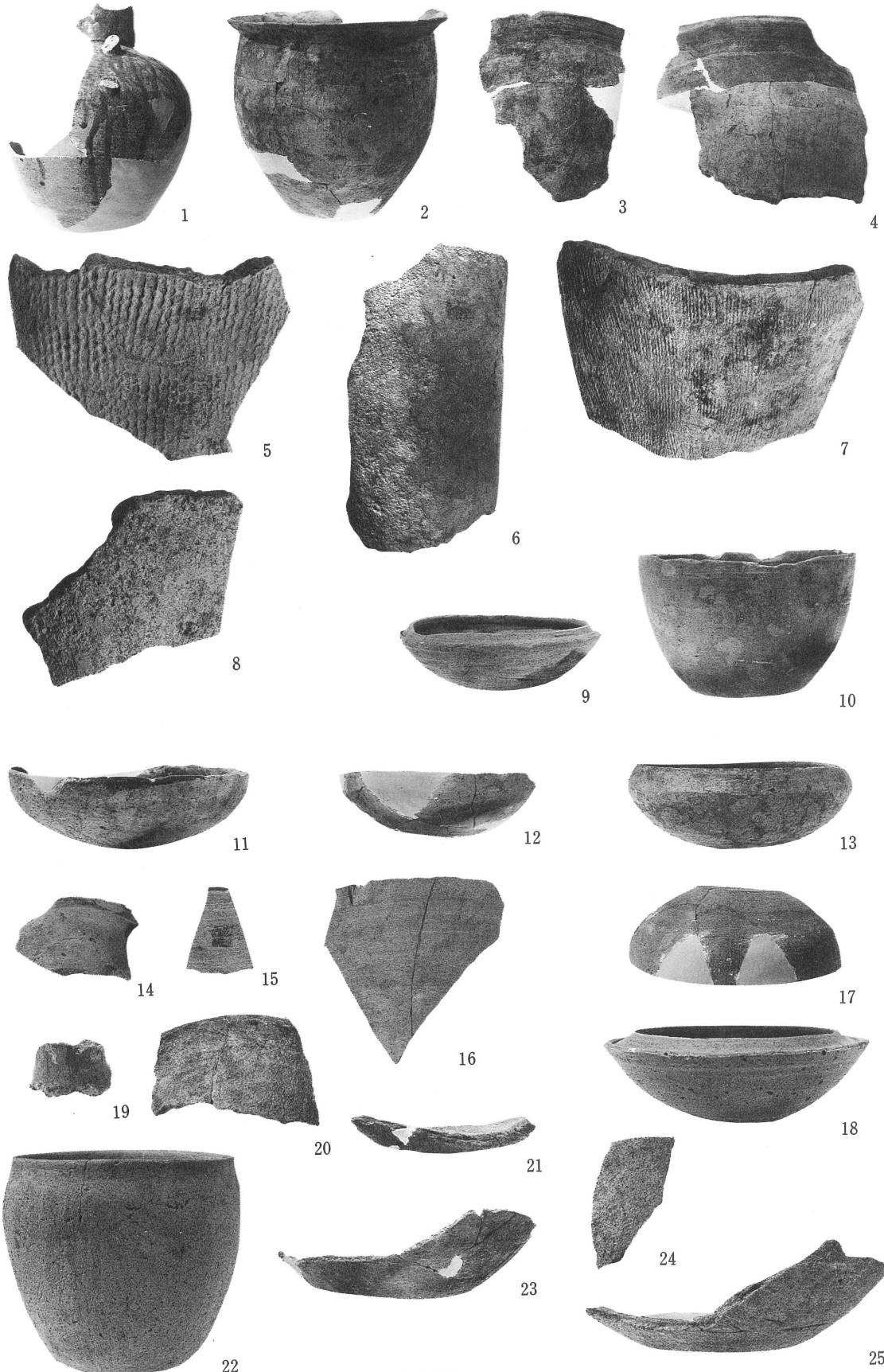
1～12　135号住居跡
13～25　137号住居跡

《遺物》　千草山遺跡　〈図版36〉



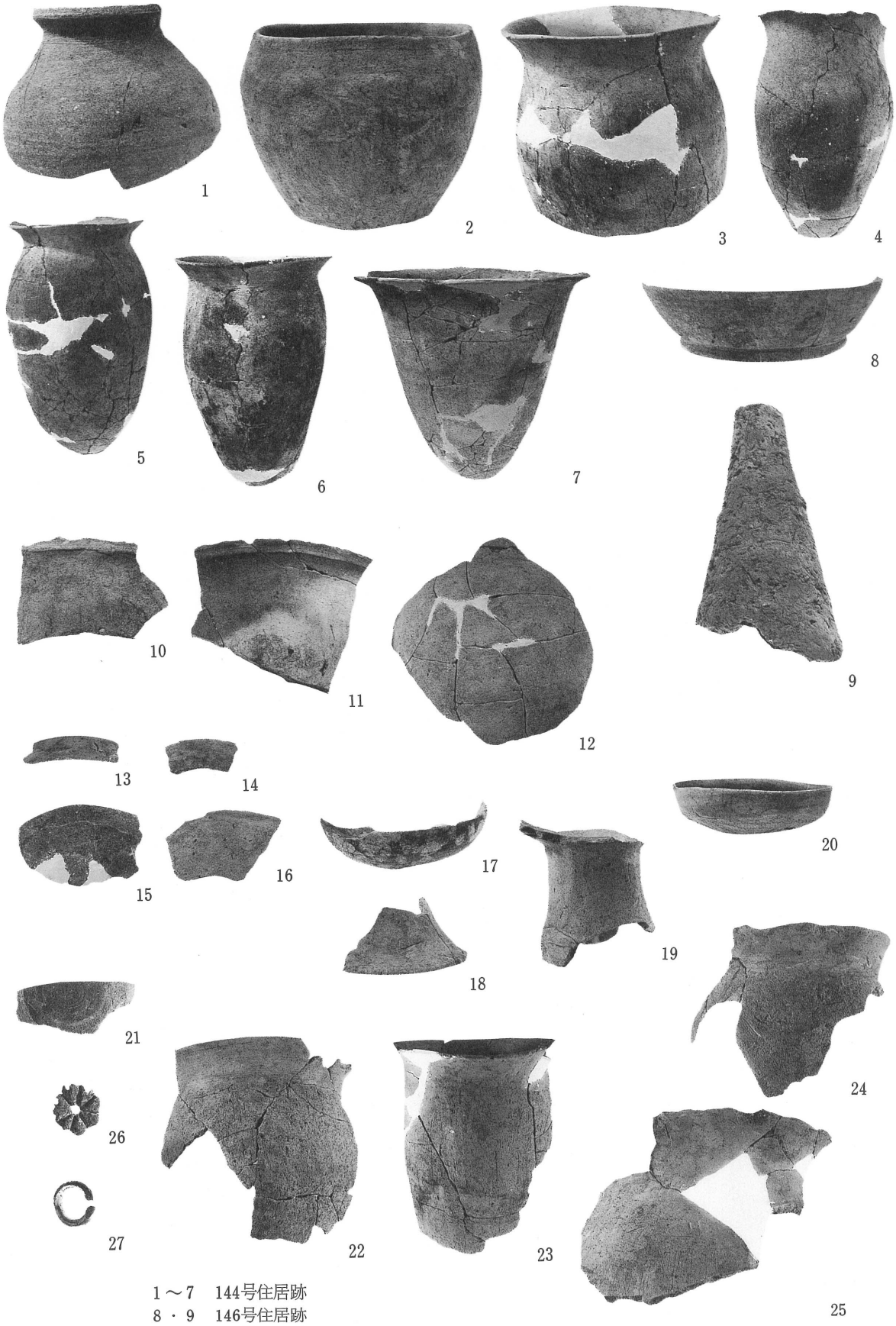
1～19　139号住居跡
20～31　140号住居跡

《遺物》　千草山遺跡　〈図版37〉



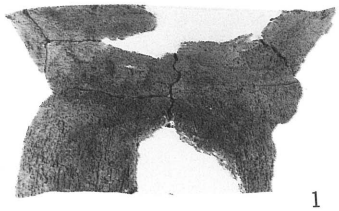
1～8　140号住居跡
9・10　141号住居跡
11～25　144号住居跡

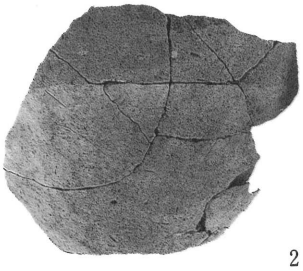
《遺物》　千草山遺跡　〈図版38〉



1～7　144号住居跡
8・9　146号住居跡
10～12　147号住居跡
13～20　148号住居跡
21～27　149号住居跡

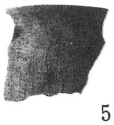
《遺物》　千草山遺跡　〈図版39〉


1


2


3


4


5


6

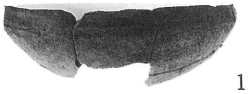

7


8


9


10


11


12

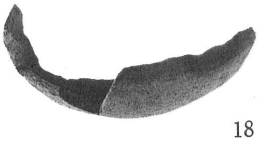

13

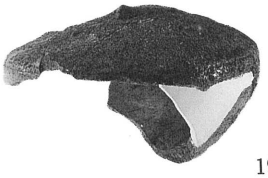

14


15

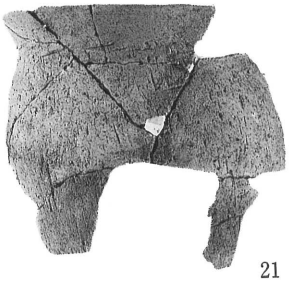

16


17


18


19


20


21


22


23


24


25


26


27


28


29


30

1・2　149号住居跡　　11～24　151号住居跡
3～7　150a号住居跡　　25・26　第102号方形周溝状遺構
8～10　150b号住居跡　　27～30　第103号　〃

《遺物》　千草山遺跡　〈図版40〉


1


2


3


4


5

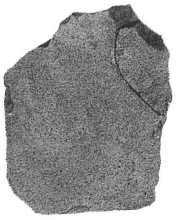

6


7


8


9

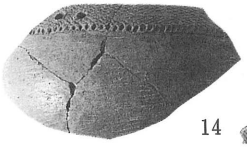

10


11


12

1・2　103号方形周溝状遺構
3～6　103a号土坑
7～12　101～103号溝状遺構
（千草山遺跡）


13


14


15

16


17


18


22


19

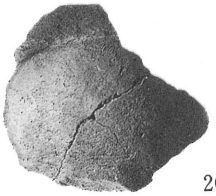

20

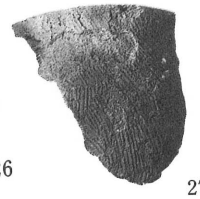

21


23

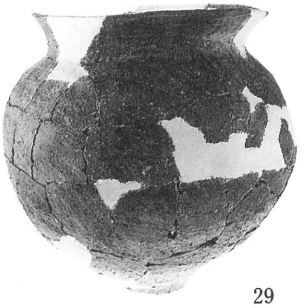

24


25


26

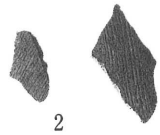

27


28


29

13　1号住居跡
14～22　2号住居跡
23～29　3号住居跡　（東千草山遺跡）


1


2 3


4

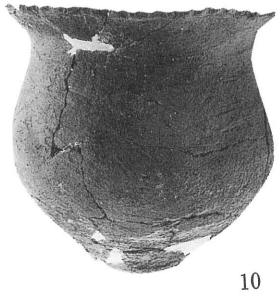

5

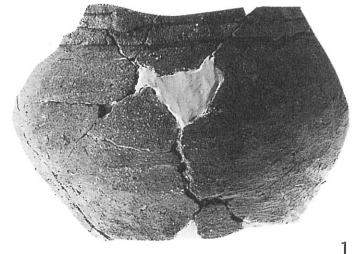

6


7


8


9


10


11


12

1～12　4号住居跡

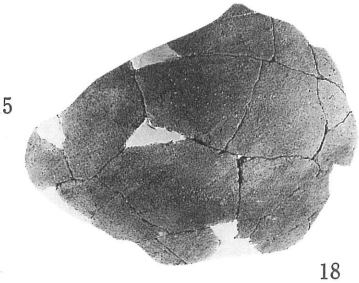

13


14


15


16


17

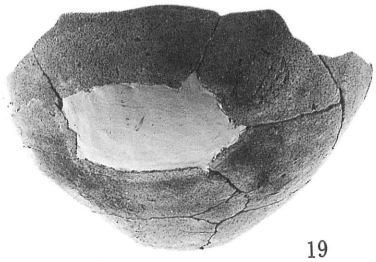

18

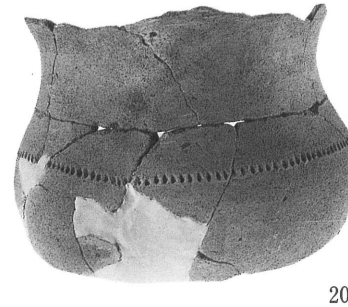

21


22


23

21～23　8号住居跡


19


20

13～20　1号遺構

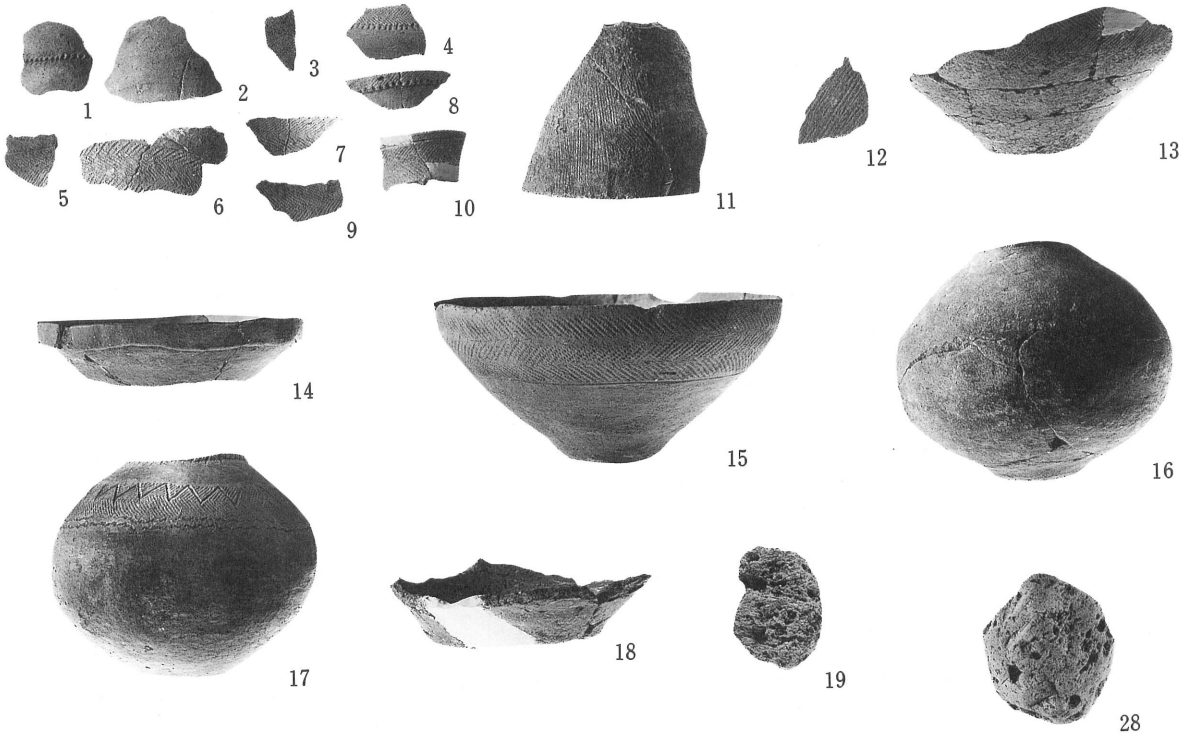

24


25


26

24～26　9号住居跡

《遺物》　東千草山遺跡　〈図版42〉

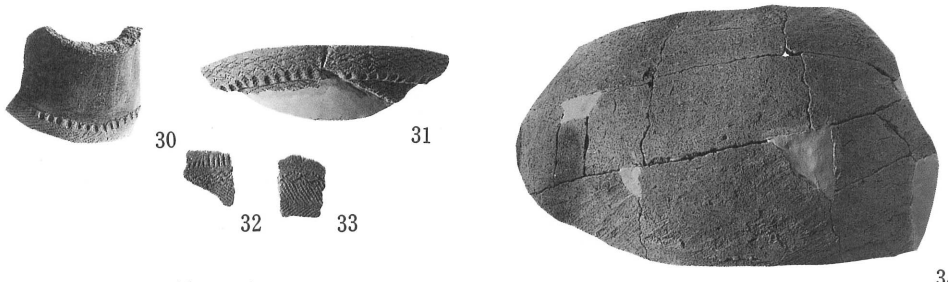


1～19　6号住居跡



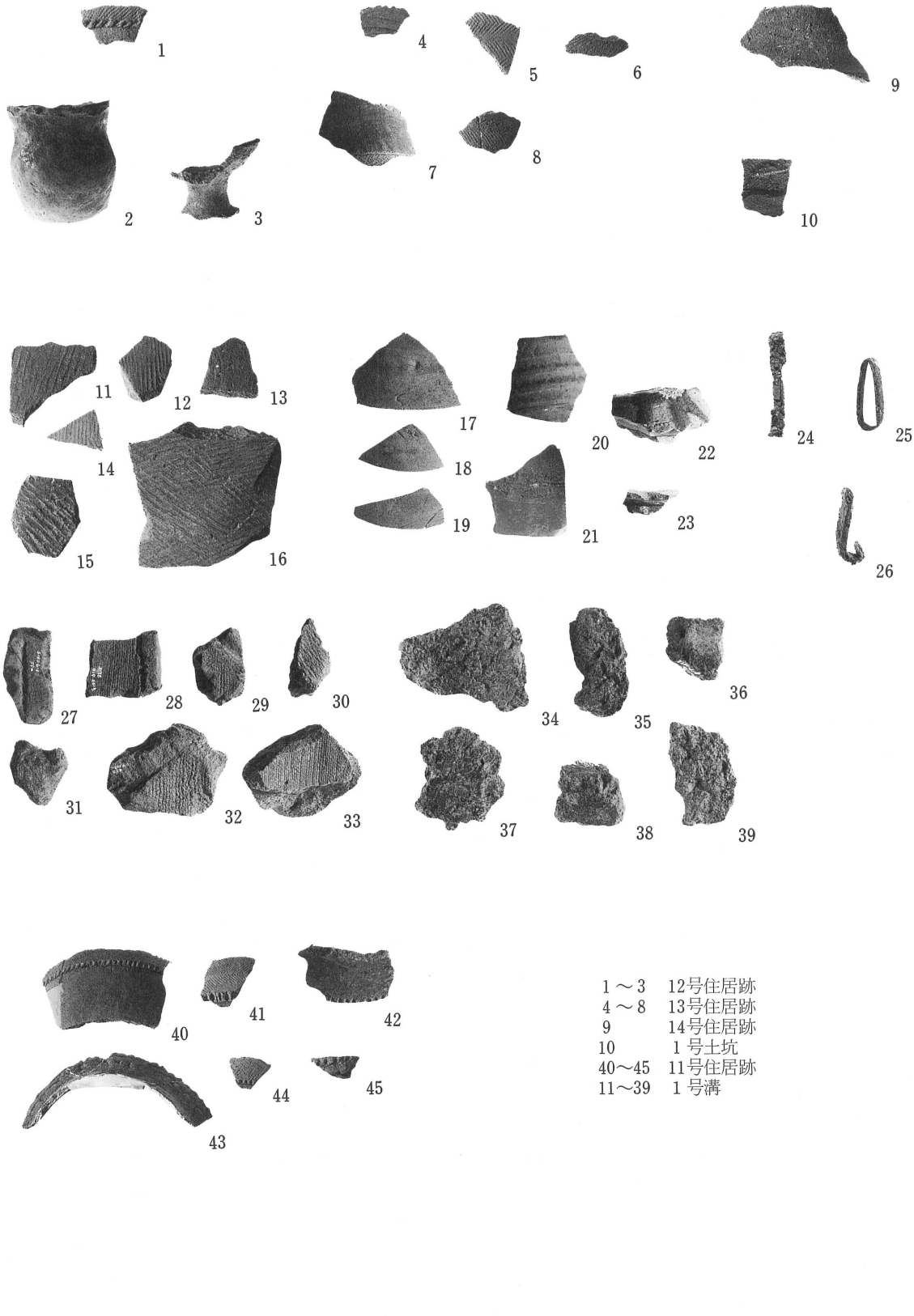


20～29　7号住居跡



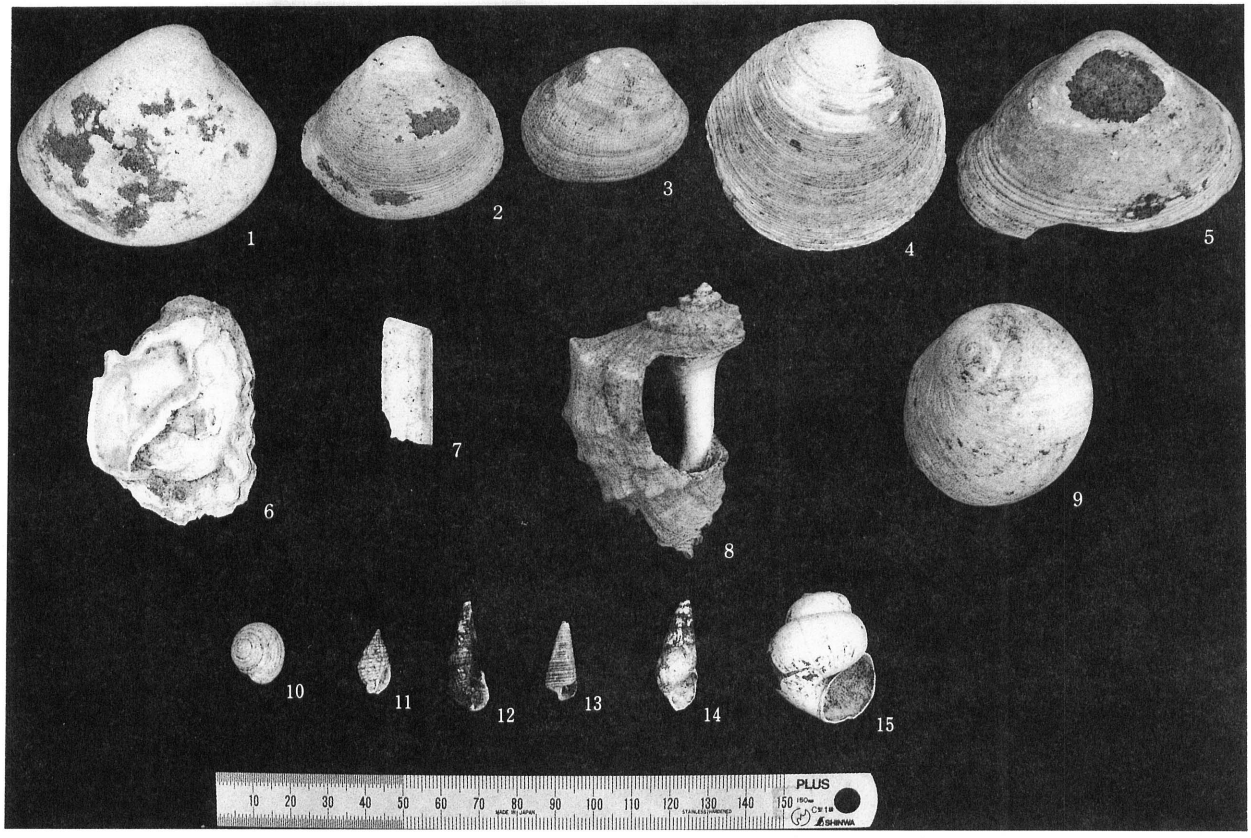
34　11号住居跡

30～33　10号住居跡

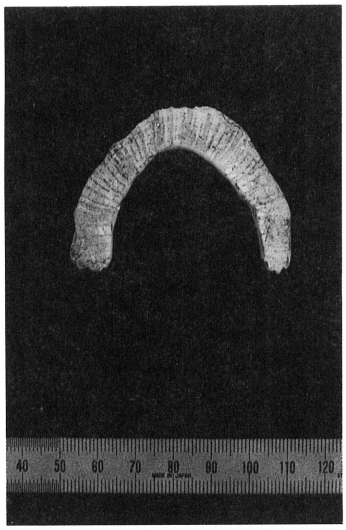


1 ～ 3　12号住居跡
4 ～ 8　13号住居跡
9　14号住居跡
10　1 号土坑
40～45　11号住居跡
11～39　1 号溝

《遺物》　東千草山遺跡　〈図版44〉



貝　類　1　ハマグリ　2　シオフキ　3　アサリ　4　カガミガイ　5　バカガイ
6　マガキ　7　マテガイ　8　アカニシ　9　ツメタガイ　10　イボキサゴ
11　アラムシロ　12　ウミニナ　13　カワアイ　14　カワニナ　15　マルタニシ　（1/2）



オオツタノハガイ製貝輪（1/2）



貝　類　1・2　カワザンショウガイ　3・4　ヒメゴウナ
5・6　チュウゼンジギセル　7　ナミギセル or ハコネギセル
9・10　ヒメギセル　（1/1）

《遺物》　東千草山遺跡　〈図版45〉

—— 千葉県市原市 ——

千草山遺跡・東千草山遺跡

平成元年３月20日　印刷
平成元年３月26日　発行

編　集　　財団法人　市原市文化財センター

発　行　　市原市
　　財団法人　市原市文化財センター
　　千葉県市原市馬立817番地

印　刷　　三　陽　工　業　株　式　会　社
　　千葉県市原市五井5510の１
　　TEL　0436(22)4348